明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十二年十一月一日發行
毎月一回一日發行

女學世界



第九巻
第拾四號

博文館發行


美顔水
びがんすゐ
桃谷順天館製
定價
中瓶 拾五錢
大瓶 廿五錢

女學世界 第九卷第拾四號 目次

聖壽万歳の曲を奏でん



御料たつたの効を稱えん

東京京橋南傳馬町

電話本局三十三百三千番 ⊕ 振替口座九二九三番

寶玉入指輪 大西白牡丹

(1)



十八金
ハート形
眞珠三個入
金拾圓

(2)



十八金
サフハヤ及
眞珠入
金拾五圓

(3)



十八金花形
金剛石ルビ
ー眞珠入
金壹百圓

(4)



十八金櫻形
眞珠入
金拾参圓

(5)



十八金
金剛石五個
ルビー四個
金七拾五圓

(6)



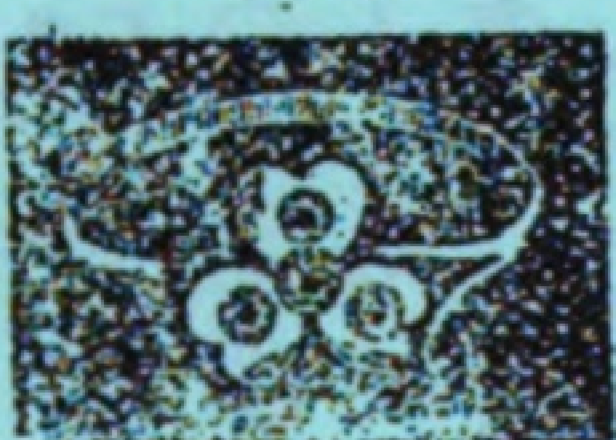
十八金花形
金剛石及
小眞珠入
金八拾圓

(7)



十八金
エメラルド
及ルビー入
金拾八圓

(8)



十八金
金剛石
四個入
金五拾圓

(9)



十八金水の
透し眞珠入
金拾八圓

(10)



十八金
眞珠五個入
金拾五圓

(11)



十八金
金剛石
大小四個入
金壹百圓

(12)



十八金女夫
櫻金剛石及
ルビー入
金貳拾圓

女いの二

會員募集

壹ケ年修了

優待會員の製作品は審査の上賞品を與ふ

女子手藝講義錄

一日一刻も早く入會あれ

此の講義錄は家庭の都合其の他の故障で通學の便のない方並に在學中の方の參考用として共立女子職業學校の各專門の方々が學校の科目に依り多年の實驗上から丁寧親切に素人にも分るやう説明されたものであります

手藝は婦人一代の生命なり

如何に本講義錄の豐富を見よ

(課目)

- 裁縫科(和洋各種)
- 編物科(各種)
- 組糸科(各種)
- 刺繍科(各種)
- 造花科(花卉果實各種)
- 袋物科(各種)
- 割烹科(和洋各種)
- 細工物科(摘細工縮緬細工紙細工押繪接物細工)
- 手藝用圖書科(各種)
- 手藝教授法(各種)
- 其他課外講義數種

毎月一回 第一二號發行 五日發行

發行申込所
東京市日本橋角
電話本局四一四番
振替口座二一三八番
大倉書店

共立女子職業學校內櫻友會 手藝普及會編

入會規定 内容見本進呈


日本醤油
フジニホン
日本醤油は香味醇良にして價格低廉なるのみならず其製法頗る清潔なるがゆへに經濟上幷よ衛生上無二の良品あり
賣捌所は市內各地の重なる酒醤油店にあり何卒御最寄にて御買上を乞ふ

暮ゆく秋



●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來癪に苦み常に不妊を嘆つ病婦の到る處に見るが其最も多き病狀は下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顔色蒼白にて從前の病歷を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程でも皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である曩に痳病の病原發見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅黴藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（内地遞送無料）

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉**（振替貯金東京口座千五百番）

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を露して販賣する嶋箸品の比に非らず、左れば普通に醫師の處方する完審丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず、是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ヘツボー、キリキズ味の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●●●●●●●●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市本郷六丁目赤門前	瓜生藥局
麹町區紀尾井町三	齋藤藥局
日本橋檜物町十八	龜田藥局
京橋區八官町八	野田藥局
神田淡路町二の四	森田藥局
芝田町四の一二	加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二	岩本支店
赤坂田町四の一	竹内藥局
同青山北町五	西井藥局
本所吉岡町廿五	小島藥局
四ッ谷大傳馬町二	永野藥局
高松市片原町	新明藥局
堺市大寺南門東入	一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角	福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り	安江洋反物店
大阪市平野町二	丹平商會
丸龜市本町	櫻井藥局
名古屋京町三丁目	飯田藤七
同同同	荒川長太郎
同鐵砲町三丁目	谷田藥局
神戸元町一丁目	西村關吏局
廣島市橋本町	萬代藥堂
神奈川青木七軒町	水崎藥店
仙臺市新傳馬町	櫻井藥局
岡山市橋本町	加藤藥店
弘前市下土手町角	菊地藥店
大津市菱屋町	磯崎藥局

(三〇一)

女(ろの二)


純白 浮き スワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個入（壹箱） 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
特約大販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助


千代田白粉 香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶卅五錢 小瓶二十錢 水製 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花二七九三

袖のかゞやき



太田三郎筆

此券添付注文の方
特に一割引
十一月女學

本品は宮内省御買上の光榮を辱す

東京 須原啓三郎製

美顏料日ノ出クリーム

色白クナルオレンジ水

○美顏料日ノ出クリーム、白色劑オレンジ水、日ノ出煉、椿、香油ヲ使用アレ必ズ美人トナルベシ、美ハ愉快ヲ覺エ、精神ヲ爽快トス美ハ實ニ自他共ニ一生ノ幸福ナリ

美人トナル秘密?

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の奇麗な程快きものはなし此皮膚を奇麗にすると云ふことは平常の食物と衛生に依るとは云へ彼の欧米人が艶の美はしく皺の少なきは日の出クリームを缺くべからざる化粧品として使用しつゝある所以にして日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他各位の實驗上明かであります色を白くしキメを細かに美麗ならしむることは勿論日ノ出クリームは電氣乳劑なれば皮膚を摩擦する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故老年に至るも皺の寄ることなく如何に其花の如き姿を永く保ち得るでしようか又皮膚のあれ性の方は必ず朝夕御使用あれひゞしもやけ等にかゝることなく又全治する特効を有す彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐは無論日本流の濃化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく。又つき悪き眞の無鉛毒の白粉を使用前日ノ出クリームを用ゆれば極めて美くしくつき眞正の美人となることは獨逸國醫學博士エエボーン氏の證明する所さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか「初め微温湯を浸したるタホルの切れにて面部を數分間温蒸しめ自然と顏の毛孔に吸取られたる塵と垢を發出さし其後日ノ出クリームの極少量を指先きに付け充分(マッサージ)擦り込たる後はハンカチーフ或は紙にてふき取らるべし」尚化粧を望まるゝ方は前記の如く化粧後無鉛の粉白粉を用ゐらるゝ時は衛生上有効なるのみならず櫻花の滿開せし如く實に美麗を極むべし白色劑オレンジ化粧水本品が色を白くする等は既に學理上明にして說明を要せず乞ふ如何に効果顯著なるを御試用あらんことを

美顏トナル日ノ出クリーム

定價表

美顏料日ノ出クリーム 特二圓、一圓、五十錢、廿五錢
白色劑オレンジ化粧水 大一圓、中三十錢、小十五錢
日ノ出煉香油クリーム 八十五錢 二十五錢
日ノ出椿香油 特大一圓廿錢、七十錢廿五錢

此際發賣紀念として直接御注文一千名を限り美顏ポウダー粉白粉一個を添呈す

送料八錢二個以上無料

本舖 東京 須原日ノ出園
東京日本橋區馬喰町三丁目十五番地

發賣元
化粧品問屋 酒井豐吉商店

特約店
大阪南久太郎町高野永盛堂
東京白牡丹各店其他信用ある化粧品販賣店にあり

日ノ出煉椿香油

女(はの一)

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最稱實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止り月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞贊良藥

改良

女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

●肥滿病新藥

（米國新輸入）

諸嬢姉の福音

美人となる



やせる藥

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと／＼ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き人は輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顏窈窕たる肥白となり賢て美人となる事を保證す肥滿性の人は試みよ

藥價一劑一圓五十錢　二劑二圓九十錢　三劑四圓卅錢　四劑五圓半　送料十錢

發賣元　東京々橋中橋和泉町　振替第壹〇六七七番

小宮愛生堂



衛生美顏術

（一回施術料金五拾錢）



美顏術實驗有効

御化粧水 ライラック水（一瓶半錢 送料八錢）

にきび知らず 理容水（大五十錢 小三十錢 送料八錢）

芳香無鉛 理容白粉（一瓶半錢 送料八錢）

東京市京橋區竹川町十二番地

理容館本部

電話新橋三八〇四番

女（はの二）

枯野



平福百穗筆

小春



加藤南山筆


造果用品
天野卯兵衛商店
電信略號（アマウ）
振替口座東京（四九七〇）

婦人界最良の指導者なり

婦人世界

十一月一日發行　三十號　價一冊　拾五錢　郵税一錢五厘　一年分郵税共二圓五錢

◎雙生子の姉妹が檢定試驗に及第した實話……檜垣たけの子 檜垣うめの子

◎大洪水に遭つて船にて逃げ出したる實驗……尾島菊子

▼大酒家の私を禁酒させた我妻の苦心……安藤太郎

▼男裝して會津城に入りし當時の大苦心……新島八重子

▼女囚監を訪ねて婦人犯罪者の生活を見る……（婦人記者）

◎教育に苦心した實驗……片山龜子

◎女中より清國教師となる……渡邊くめ子

◎家庭寄宿曉星寮を訪ふ……一記者

◎歷史講談間かの……風谷

▼離婚と再婚の可否を論ず……（村井弦齋）

◎美しき形を募る……菅原敎造

◎弦齋夫人料理談……

◎名流婦人の逸話……奇聞百出

◎古今文藝談（霜）……白水

▼生れてから一週間の小兒養育上の注意……加藤照麿

▼結婚媒介所を訪うて縁結びの話を聞く記……一記者

▼掛聲一つで萬病を癒す不思議の女醫……婦人記者

◎外國を旅行して最も驚きたる事は何か……荻原たけ子

◎日本の婦人界は斯くの如く侮辱されたり……西田敬止

東京　實業之日本社　（郵便振替口座三二六番）

女（この三）



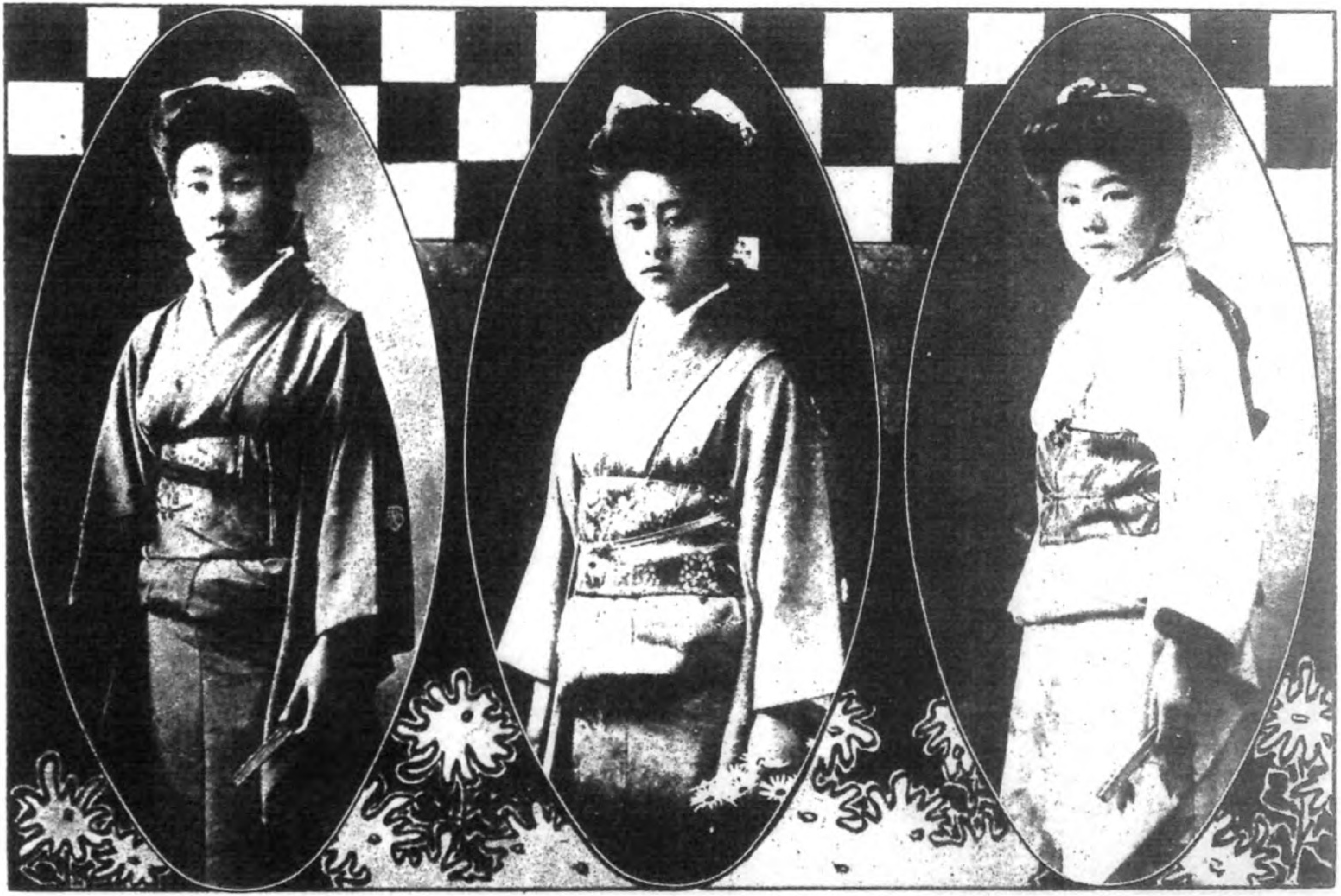
(にの四)

梨本宮妃殿下



右 第一女王方子殿下　左 第二女王規子殿下

名家の令嬢



右　芳川伯爵第二令孃鐵子　中央　鍋島侯爵第四令孃尚子
左　木内重四郎氏令孃美[illegible]子

過去百年間に於て世に現れたる書籍の王

神の新證者なる大寶典

和譯刊行

モルモン經

婦人のしるべ　婦人のひかり

モルモン經は小説に非ざれども、小説以上の趣味あるなり。

モルモン經は虚構の物語に非ず。載する所は悉く皆正史の事實にして專門學者の好資料たり。

モルモン經は何人の私見をも挾まず、徹頭徹尾神の直接なる天啓に成る

モルモン經は神の福音を錄する不朽の聖典なり。凡そ人心を感化誘導する力に於て之に勝れるものなからん。

モルモン經の敎訓は、平易にして又簡明なれば學の有無を問はず男女老若の別なく、何人にも一讀直ちに理解し得らるべし

モルモン經に親むことを得る者は幸なり。

人は此無上の寶典を備へて後始めて其書齋の完全を誇るを得む。家庭に在りて重き責任を負へる婦人よ、堅き母良き妻とならん爲に「モルモン經」を讀め。死後の幸福を希ふ老いたる婦人よ、其やがて往くべき所を知り得て心を安ぜん爲に「モルモン經」を讀め。

尙ほ幼き婦人よ、淸らかに美しく生ひ立たん爲に「モルモン經」を讀め。愛國婦風等の事業に係れる婦人よ、更に其眼界を廣くし、更に其道念を高くせん爲に「モルモン經」を讀め。富める婦人よ、其富めるに因て德に反かざらん爲に、貧しき婦人よ、其貧しきに因て道を棄てざらん爲に「モルモン經」を讀め。身と心に病める婦人よ、惱める婦人よ、其祈るべき神を知らん爲に、慰籍と救濟とを受けん爲に「モルモン經」を讀め。

婦人のたより　婦人のかゞみ

四六版全一冊總振假名附

紙數一千頁・總クロース上製

代價金壹圓・郵稅金八錢

（前金の事）

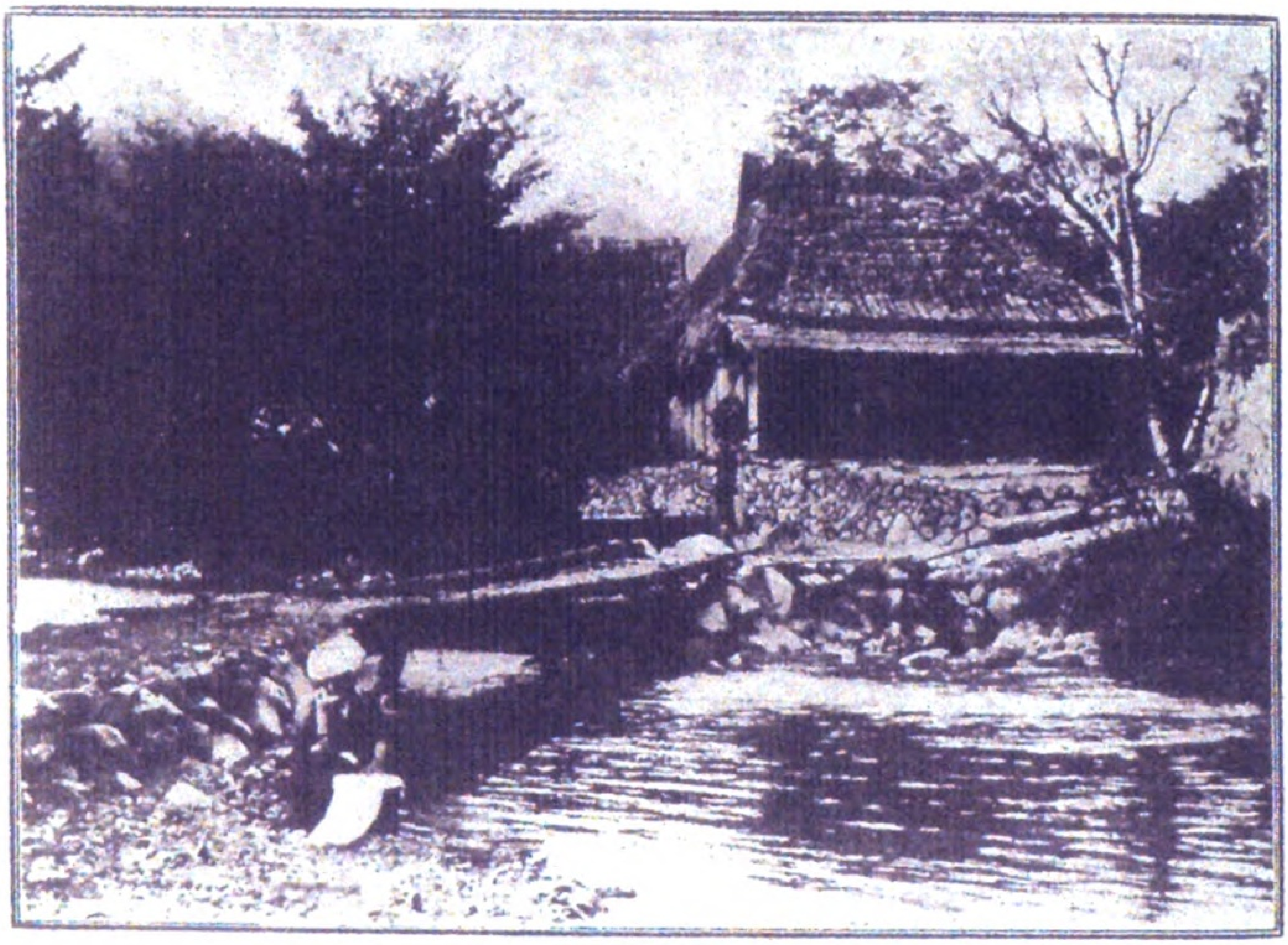
發行所　東京市牛込區藥王寺前町七十一　日本傳道部

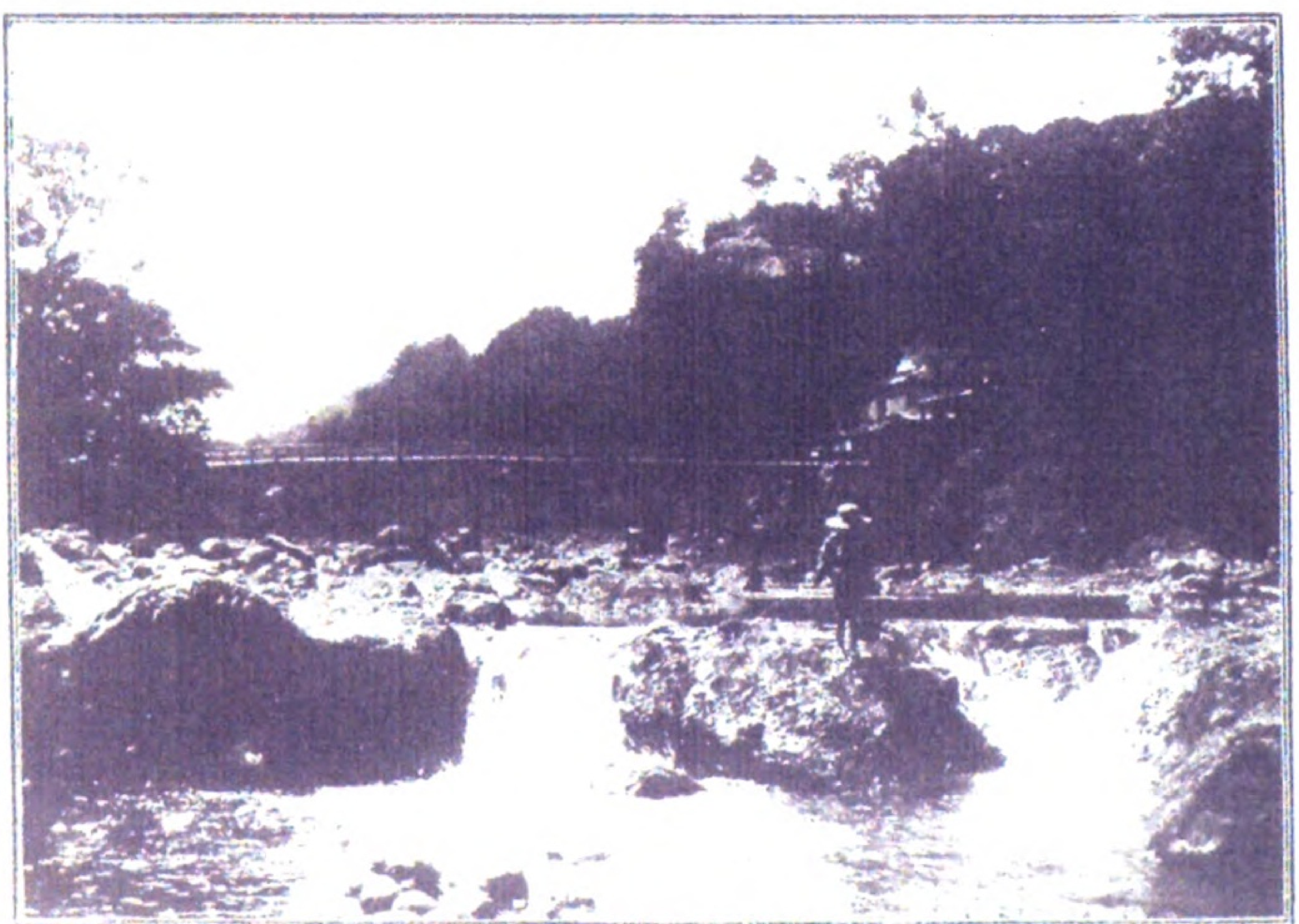
女（にの二）

女（その三）


REX
SOAP FLOATS
英國製實用浮
レックス石鹼
佛國製
ケーバ
石鹼
香水
CHIKUMA
REX
REX FLO
REX
MNIUM

八瀬の砧うち

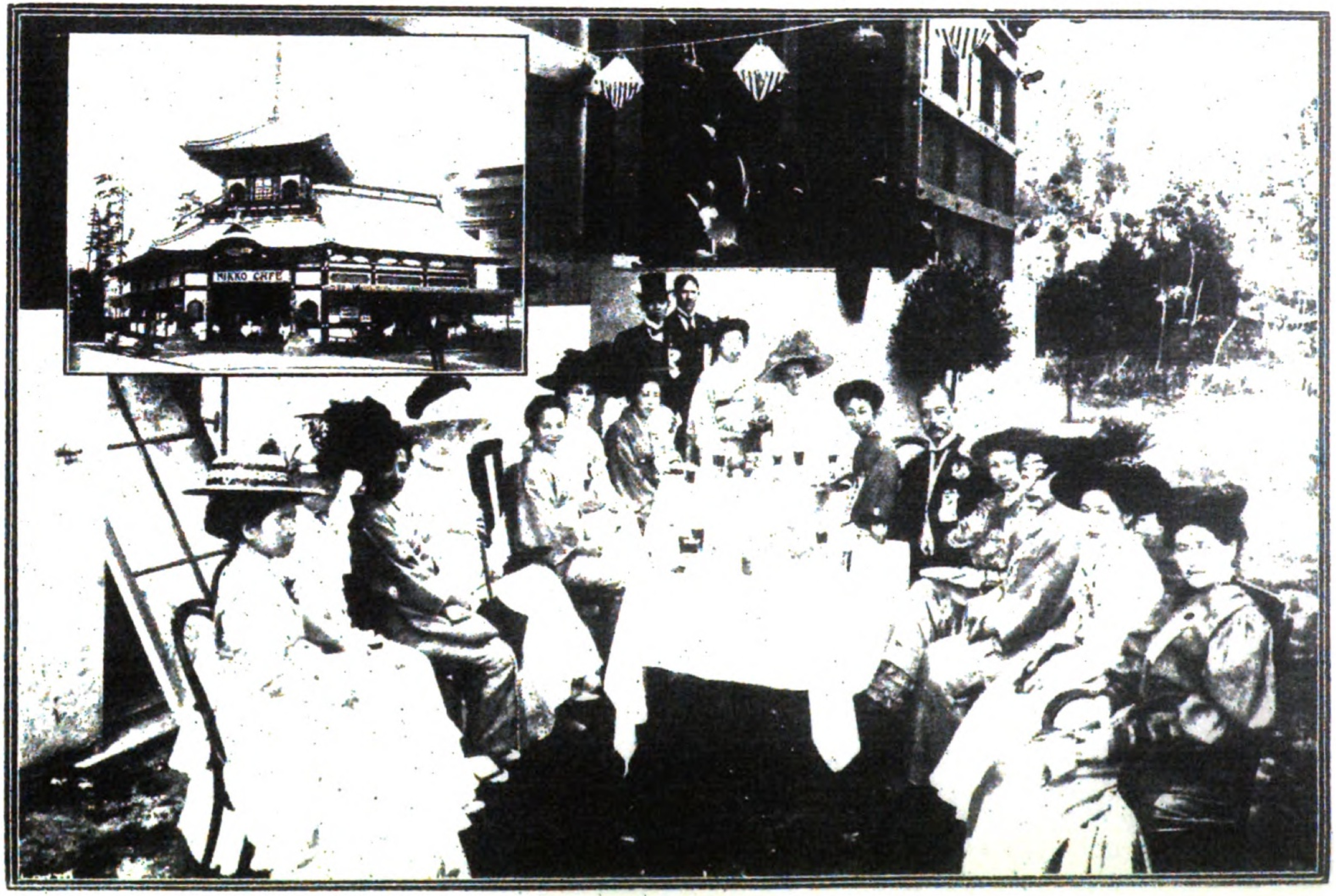




京都黒川翠山寄贈

鞍馬渓の秋色

渡米實業團貴婦人の集會



渡米實業團の到着に際し沙市博覽會は一大園遊會を催ふし、この珍客を招請しこゝに貴婦人の小集を見る。(場所は同博覽會日光ホテルの庭園也)


菊の露
おしろい
白粉中の女王
卓絶せる『菊の露』おしろいの特長は無鉛、無菌、防腐豫防、細粉にして附着好く芳香高く日本人の肌に調和するものなり、と答へ得る人は『菊の露』おしろいを用ひたる人より他に知るものなし、この利を知る人は眞に化粧を解する婦人なり
煉香油パール本舗
東京 横山町
平尾商店

婦人技藝材料

營業目録

袋物、造花、刺繍
摘ミ細工、果實、瓶細工
編物、器具并に材料

東京市本郷區弓町二丁目
倉持商店
電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す
（女學世界拾壹月號）

出版界

空前の歌曲集出づ

小松玉巖先生編
名曲新集
全一冊

下田歌子女史作歌
澤田孝一先生作曲
晩秋
全一冊

本書は西歐十五大家傑作の名曲に本邦名家の譯歌を附したる空前の歌曲集にて裝釘善美を盡したる眞に机上の珍なり
定價九十五錢　小包料八錢

本書は秋高く月冴ゆる晩秋の敍情詩と婉麗なる作曲せられたるものにて秋期唱歌資料として絶好の名曲なり
定價十五錢　郵税二錢

發行所
東京銀座 松本樂器 合資會社

賣捌 大倉書店 東京堂 大阪盛文館

女(への二)

●趣味と實益ニ完備せるは我が●

婦人画報

十二月一日

十一月卷 廿五錢

郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八十八錢

畫報

▼晩秋（三宅克己筆彩色石版畫）

▼郊外の一日

▼天長節の夜會……

▼活劇と活人畫……

▼今様嫁入支度……

▼新任愛國婦人會長と副會長

▼五閣秀畫家の席上揮毫……

▼米國に於ける成功者と食堂

▼夜會服を着る跡見玉枝女史

▼北白川宮妃殿下最近の御眞影

▼伏見若宮妃殿下御渡歐の光景

▼閑院宮妃殿下婦人教育會に御台臨…

▼小説に筆を染つゝある物集博士令孃……

▼如花諸名家の令孃鑑

▼團子坂の菊

▼會式

▼野外料理

▼東伏見宮妃殿下の御運動……

▼令孃と日曜

▼鯵料理法の寫眞説明……

▼馬車上の同盟國兩陛下……

▼日向輝武氏夫人及其家庭……

▼珍野菜

▼菊花展覧

▼胡蝶の舞

▼ピアニスト

▼ダリア

其他

讀物

●我校卒業生の女優志願者　三輪田眞佐子

●女優と女學生……　澤柳政太郎

●危險極る女優志願……　中島徳藏

●清き婦人　大町桂月

●床しき婦人實例　跡見花蹊

●躾を誤まりし母親　岸邊福雄

●袈裟御前……　遠山稻子

●鯵一式の料理

●結婚前の婦人　山脇房子

●女學生の氣質色々……　西田敬止

●伊澤乙女孃訪問記　婦人記者

●我婦人と似非なる獨逸婦人

●東西看護婦相違……　萩原竹子

●惡き娘を持つ母親の苦

●寄宿舍の窓より觀たる世間

●娘に書かせる小説　物集博士

●米國人歡待振　瓜生夫人

●和洋服兼用の子供前垂れ……

●育兒……　鷲山女史

●コートショール

●小取廻の日向家臺所

●惡感化せし女學生を實例　跡見李子

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九

女（への三）

米井濱子孃



田島雪子孃



女へとの一)

女(との二)

らい病

此のらい病薬は數種の有名なる癩病治療薬を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新薬を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新薬なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二薬を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣薬に非ず

ザノサール　一ヶ月分　貳圓
複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

●醫師は癩病者を診せば届出る規則なれど薬劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舗　醫科大學卒業薬劑士 従七位勳六等　三河國碧海郡刈谷町益世館薬局主　中島龜之丞鑑製

●新案特許 一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣●

・丸髷 十五錢より七十五錢迄・島田髷 三十錢より壹圓五拾錢迄・銀杏髷 廿錢より六十錢迄・送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップを装置せるにより舊式のもの、如く硬からず膚ざわり軟かなり 二 皮膚を摩擦すること少なきゆゑ頭のはげなし 三 頭痛癖ある婦人に用ひて爽快なるを覺えしむ 四 二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髪の傳染病を媒介するの憂なし

●諸かもじ製造販賣　東京市神田區豊島町十七番地（振替口座東京一八一八八番）田中金三郎

特約　京橋大西白牡丹、本郷兼康、淺草駒形百助、淺草駒形紅勘、神田須田町三井屋、日本橋通二柳屋　外到處の小間物化粧品店に有り

太陽散　引風一切　速治妙薬

藥價（桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢。送料各二錢、各地有名藥店に有り若最寄藥店に無き時は直接注文を乞ふ即送す）

人常に此の、風邪早治しの最新良薬なる（太陽散）を家庭に備へ置き、殊に旅行の折は必ず携へ機に臨み服用し以て後難を遁れ給へよ

東京日本橋本町三丁目　藥種問屋　博愛堂

西川ドクトル編著

美容新療法

定價金五拾錢　郵送料金八錢

本書は著者多年研究の上實驗せる最新有効の治療法及特効薬等を詳細記述せしものなれば病者一讀して天のなせる麗質に復せられんことを希望す

本書掲載治療法目次 ▲縮れ髪▲赤髪▲白髪（染髪薬）▲薄き髪▲脱毛症（毛生薬）▲多毛症（脱毛薬）▲痩せる法▲面皰▲痣▲雀斑▲顔の斑點▲入墨▲田蟲▲疣贅▲癜風▲赤鼻▲凍傷▲以上大要

（特典）本書購讀者に限り美容に關する質問に無料應答す……（著者）

發行所　東京小石川區原町八六番地　治療通信社

女と(の三)


醫師に問へ
斯の如きクラブの原料は皮膚に如何なる効果あるか貴女の信頼せる醫師に問へ
クラブ洗粉は皮膚の滋養品なり
クラブ洗粉
最近の主要
原料
一、ミルク、フレーク（米國製）
一、タリモラ（米國製）
一、マスク（佛國製）
一、ボルネオール（獨乙國製）
一、ボリシツク、エシツド（日本藥局方）
一、精製せるソープパウダー（英國製）
一、藥用ソープ、パウダー（日本藥局方）
一、精製スカーチ（米國製）
一、特製のスターチ（日本特產品）
一、ボラツクス（日本藥局方）
此の外に猶
特種の香料と美身的藥劑を配合し常に製品の改善に熱中しつゝあり

（その四）

黄菊白菊



森戸葉子（紳商森戸貞太郎氏令嬢）

丸山てる子

大口ちか子（書家大口鯛二氏令嬢）

ネッスル、コンデンス、ミルク

育兒に必要なる



最良滋養品

ネッスル、ミルク、フード

婦人月經時の大福音

正七位勳五等藥學士藤川次郎先生發明
産科婦人科專門醫學諸大家稱讃

商標　特許八一九一六

婦人衛生 安全帶

SANITARY TOWEL　東京市神田區淡路町壹ノ壹

製造發賣元 安全堂

九洲一手販賣　長崎市西山四〇　安全堂

婦人病の大原因は重に月經時の處置法の如何にありとは專門大家の證する處、然に紙布脱脂綿等を用ゆれば、經行を停滯せしむる大害と、其片や纖緯の殘留に依り重患を釀す事往々あり。發明者之を憂ひ多年苦心の上、嶄新なる本品を案出し其原料は最良の脱脂消毒法を施しある故、衛生上無害安全、且御使用上座臥進退極て輕快なり、然れば世の御婦人方月經時及産後白血長血等の際御身體を大切にし業務を樂にせられんには是非共御使用あらん事を希ふ

正價　壹ダース金參拾錢半ダース金拾六錢大低の御婦人が毎月半ダースにて充分なり
附屬帶壹筋金貳拾錢（但し帶は壹筋にて二三年は使へます）

◉普通小包料及荷造賃

貳ダース帶貳筋迄金拾貳錢	拾ダース帶拾筋迄金四拾四錢	拾六ダース帶拾六筋金六拾八錢
六ダース帶六筋迄金廿八錢	拾四ダース帶拾四筋迄金六拾錢	此外は鐵道小荷物及通運便に依る

取次販賣希望者は郵券封入申込あれ　東京市内は御一報次第御届可申候

根治確証 わきが 新治療薬ラビヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ
両價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にて毛をはやしたき人は早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髪増生す◉頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製 ハンドコロン溶液 色の白くなる

皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製五拾錢送料拾六錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば皮膚は次第に依り新陳代謝をなし十分の力主性

最良 月ざらゐ メソルピン

メソルピン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る血の道を全治し古血を一掃す子宮病特別製貳圓卅錢價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢送料拾錢

專賣 東京神田區小川町 オリエンタル藥舗

女（ちの二）

●圖書目録

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時送呈仕候

東京本町 博文館

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舖

村井弦齋先生御證明

最良髪油

●僞物あり商標とみやけ堂本舗製に御注意

●販賣所は全國信用ある化粧品、小間物、藥店等にあり

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本●東京市下谷區上根岸町

衛生書院

にきび吹出そばかす

を絶對に全治し皮膚を艶麗ならしむる最新奇藥發見す

醫藥其効なき困難者は申込あれ詳細の療法書を送呈す

東京下谷區初音町日本女子美術學校前

長田

●本法は

女髪結師安部歌子女史

二大奇方劑

ちゞれ毛くせ毛

毛はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

●東京市麹町區三番町六十七

濟世園

●小兒五かん驚風●蟲おさへ

登録商標 八

本方 小兒虫一切妙薬

奇應丸

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢（遠國送料金貳錢）

發賣本舖 東京市京橋區銀座三丁目 八 松澤商店

賣捌は全國諸々藥舗賣藥店に特約あり（電新五三四）

佛國土産の最新白色新劑



色黒き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して敎ゆ

東京大森停車場上山王

愛隣藥院

女(ちの三)

於發明品博覽會 名譽賞牌受領

目下習字の好時期なりとて入會最も盛なり

（其の四）

習字速成 通信教授

本會獨特の特許速成法は如何なる惡筆にても最短日の練習にて頗る上達せしむ

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生 及 玉木愛石先生

○書者女子部 小野鵞堂先生 外 講師大家數拾名

見本 詳細會則 無代進呈

東京本郷森川町壹
電話下谷參〇壹壹

帝國習字速成學會

秋草



右　伊太利大使杉男爵令孃ゝみ子



左　海軍機關中將宮原男爵令孃梓枝子


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
最上醬油之元祖
開業貳百六拾五年
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

三省堂編＝創業三十年記念

世界地圖

全壹軸　縱五尺八寸 橫五尺六寸　絹緞子紋織地美裝　附錄索引　四六二倍百五十餘頁

●實用と裝飾とを兼ねたり

本圖は弊堂**創業三十周年**の好機に際し紀念出版として提供したるものなれば**營業の觀念利益の打算を**外にし特に最低廉なる價格寧ろ實費を以て販賣す而して本圖が、**政客、學者、實業家、宗教家、及教育家必須の掛圖たり家庭に於ても、學校に於ても、會社、官公衙、將た、娛樂の集會所に於ても、**普く歡迎せらるべき實用上の良圖たるのみならず、**家庭の趣味と裝飾とに對する斬新なる提供たり**

●印刷の精巧

本圖は、美術上の理法を應用して彩色を施し、二十遍摺を以て、圖面の鮮明彩麗を期し、且、各彩色にはインキ艶を施し、汚點附着の時は、濕布を以て容易に拂拭し得べき樣にせり。故に、之を一見するときは、**恰も名匠の手に成れる高尙優美なる模樣畵を展開せる觀あり**

●表裝の善美

殊に軸製表裝に多大の注意を拂ひ、其天地に貼附せる緞子織の如きは、特別に地質・色合・及模樣を選擇し信を斯業に博しつゝある機業家に命じ織製せしめたるものなり。其の從來坊間に有りふれたる軸製地圖の表裝と霄壤の差あること、固より論なし。故に、本圖は如何なる家庭の壁間に揭げらるゝも、優に裝飾と趣味とを助くる逸品として、**山水花鳥の名畵に相對するの眞價あるべし**

定價金八圓 **特價金參圓八十錢** 荷造實費拾貳錢 送料別に申受く

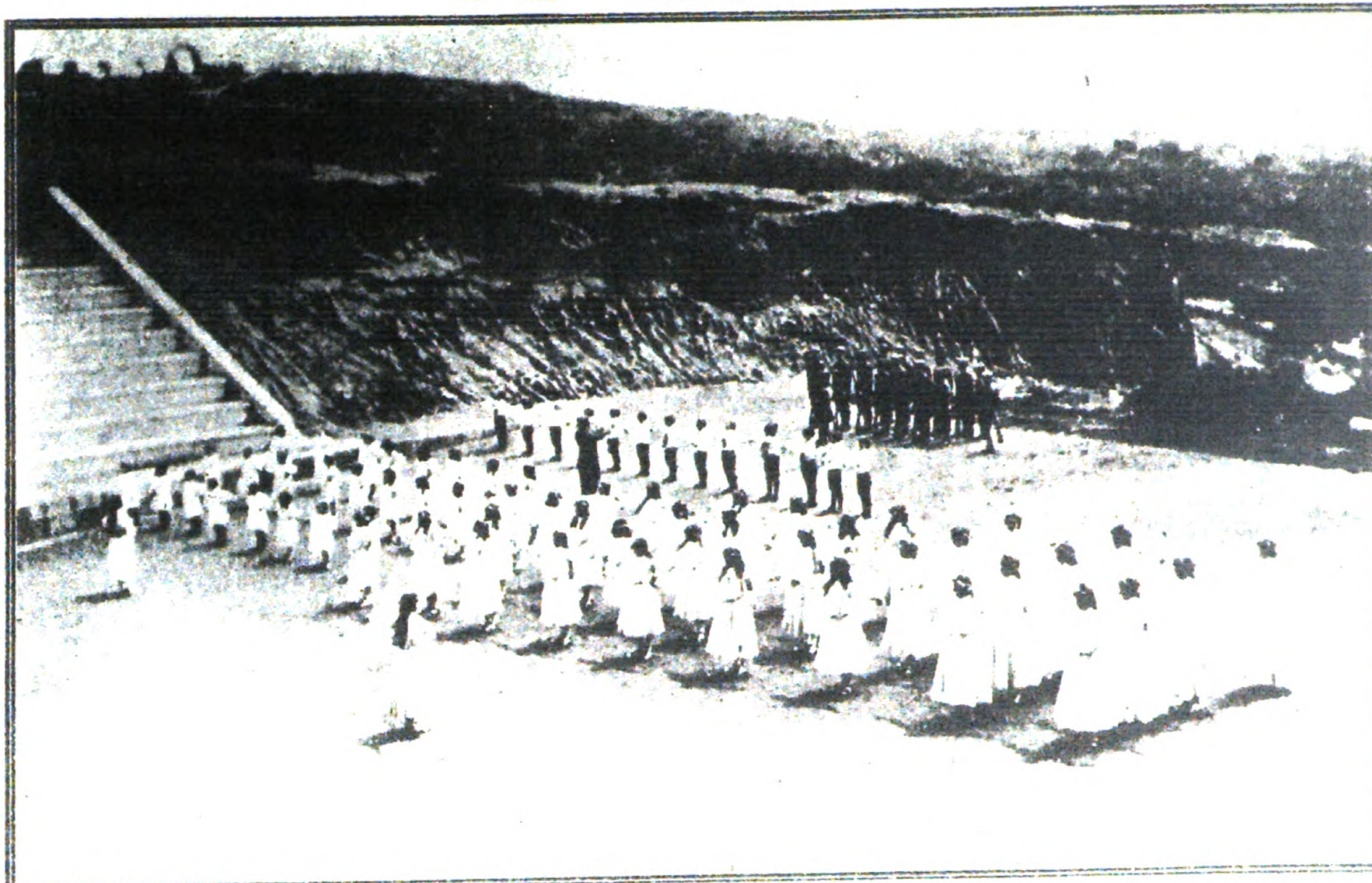
編成說明書呈上

發行所　東京神田　三省堂書店　振替貯金東京一五九七

女(りの二)

女(りの三)

米國女學生の體操



北米カリフオルニヤ州ポイントローマにある世界同胞會學校生徒の體操


シンガーミシン
秋冷正に親しむべきは
家庭のミシン
月賦販賣ト
裁縫書進呈
シンガー會社
横濱市山下町六十一番館
▲明細書御申越次第無代送呈す▼

第二回新學期

女子大學講義

會員募集

十月開講

入會好機

講義課目

實踐論理（成瀨校長）敎育學（石田講師）心理學（福來博士）應用兒童研究（高島敎授）家庭物理（後藤敎授）生物學（渡瀨博士）生理學（大澤博士）衞生學（三宅博士）經濟學（中院學士）法制（奧田博士）應用社會學（浮田博士）農藝（佐々木學士）文學（鹽井學士）童話研究（芳賀博士）英文學（松浦敎授）家庭、料理、裁縫、和歌其他

坐らにして高等學術と實用智識を學び、僅か二ヶ年間にして日本女子大學校の卒業證書を得られるのは本講義のみです。

見本會則無代進呈

電話又は郵便葉書にて御申込あれば即時に送呈いたします、これによりてよく詳細を知り一日も早く入會して幸福なる校外生となられんことを希望致升

編輯所　日本女子大學校内　女子大學通信敎育會

發行兼申込所　東京市小石川久堅町一〇八　精美堂　電話番町九三三

●子を持つ親 病人ある家人は必ず讀め

定價 乳兒用九拾五錢 中人用壹圓貳拾錢 大人用壹圓九拾五錢 特別製品各貳拾錢上り

ね小便袋

男女の區別あれば御注文の節乞注意

衞生最良徳用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人小兒病人の最も必要にして



ね、おき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長

●つきやく世話いらず **子宮帶**

有名醫學士の説明に因り考案したる品にして月經當時又は産後用として内外國人に信用ある婦人用品なり

定價 特製壹圓參拾錢 並製九拾錢●送料各拾錢引替廿五錢

注文切手代用必ず一割增

振替口座大阪八三壹〇番 大阪市東區南水谷西町 **和泉屋商店**

極めて低廉に圖書を供給する割引法を掲載せり

讀書界唯一の燈臺なり

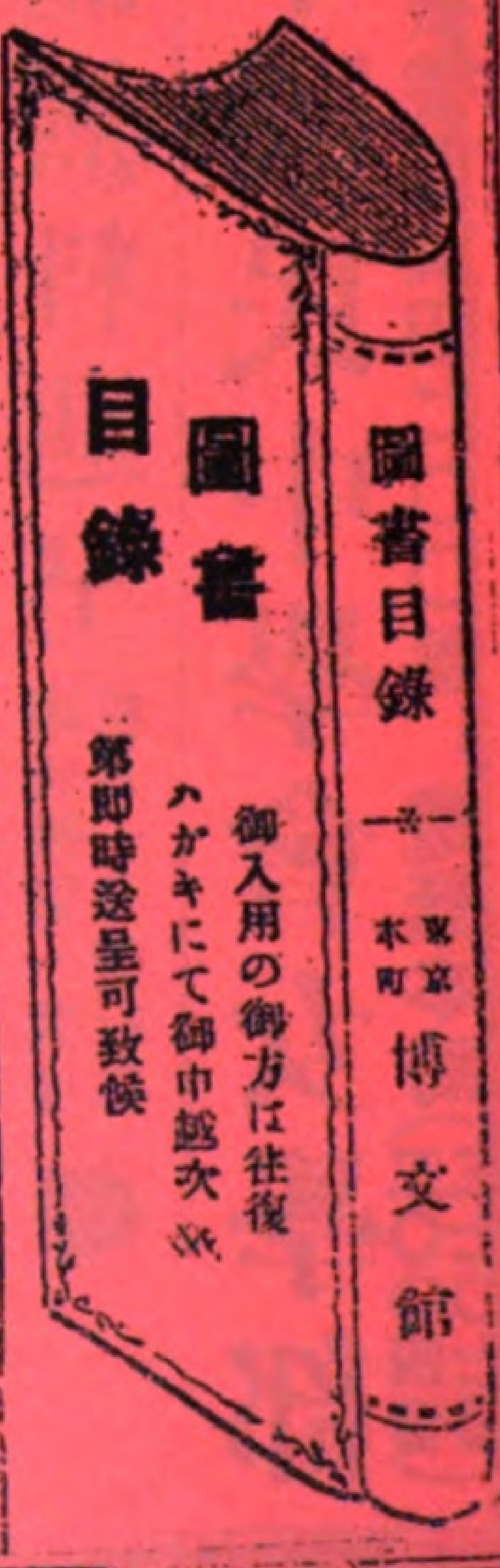


弊店爰に讀書家の爲め分類圖書總目錄二萬部を提供せしに忽ち豫定部數を超過し其後の申込は一々謝絶せしも今回更に五萬部を印刷し送料を負擔し實費金四拾錢を以て讀書に應す全國數百萬の好書家に對し五萬部は甚だ少數なり豫定以上は定價に復す御希望の方は至急御申込あれ

東京日本橋大通今川橋際 書籍雜誌大賣捌所 **大洋堂書店**
振替口座東京一二五七番

僅かに四拾錢を惜みて讀書の撰擇を誤り賜ふな

圖書撰擇は讀書家の最大要件なり



にきびとり化粧水

本品は有名なる獨逸專門大家の調配にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢(但郵便切手に一割增)

化粧水バビロン發賣元 東京市本所區緑町三の二九 **小林榮進堂**

●肥滿病の人に告ぐ

多血症●脂肪過多●中氣●酒ぶとり●便秘凡てふとりすぎて御困りの方 **やせて中肉** 美容となる奇藥二錢切手送れば詳報す

●東京市小石川區第六天町十七番地 池田製藥部

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶偶一奇法發明の爲め全治せり故に世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府大森入新井 川名勇次郎

女(ぬの三)

第三回新學期開始

●入會の最好機は今日也

此際入會者は入會金免除の特典あり●

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長 尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師 斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織 高女課程以外家政技藝等を加へ實用的なり
▲講義 言文一致書入り假名付きにて誰にも判る
▲質問 不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌 會員には講義錄の外機關雜誌を每月進呈

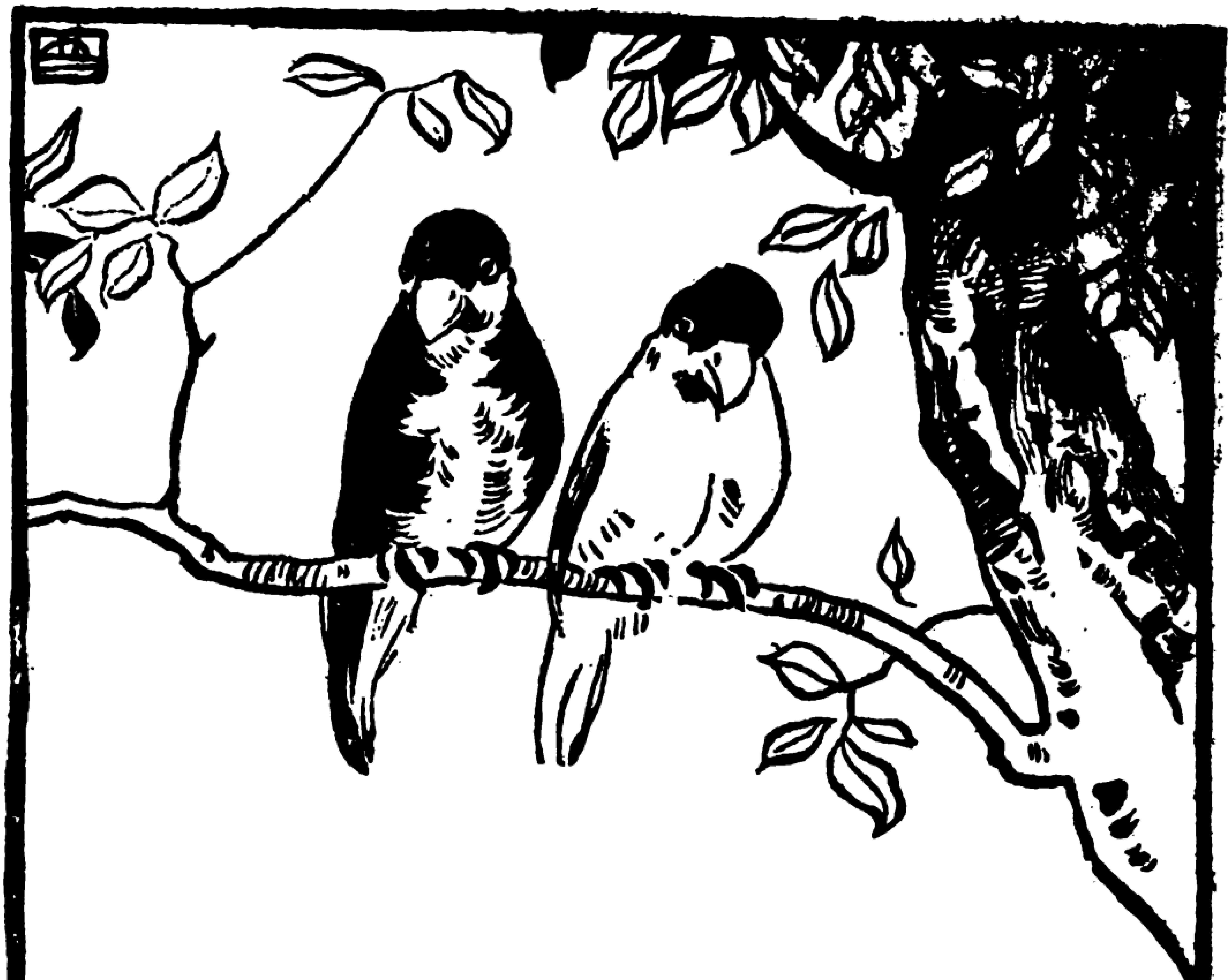
實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費 全學期の會費は都會半月の學費にて足る
▲入會 何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票 會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典 此際至急入會者には入會金を免除すべし

●見本きつ規則書 申込次第 無料進呈 講義錄第一號は拾月一日發行也●

東京神田區駿河臺
大日本國民中學會女學部
振替東京四二〇〇番 電話本局(三三〇〇四番 三七〇〇七番)



女學世界

十一月號

修養談

確かりした婦人になる道筋

三輪田眞佐子

△目的の立て方は如何

婦德を修養して立派な人格の人とならうとするには必ず先づ明確な目的を立てることが肝要でございます其目的は虚飾に耽り、私情を達し、個人の生慾を果すといふのではなくして、良妻となり、賢母となり國家の隆昌を圖り、人類の幸福を希ふものでなければなりません。この目的に向つてずつと進んで往つたならば自然と品性の高い幸福な婦人となり、十分男子を助け能く子供を育てゝ家を齊へ、國に報い、世界を益する婦人となれます。若し之に反して、何事も自分を中心とし、氣儘強情にして、金錢を貪り、名譽を欲することを目的としたならば、如何に學問があり、技藝があり、知識あり、勇氣あり、辯舌は流水の如く、文筆は花の如くで、才藻の絢爛たるものがあるにしても、畢竟自分をも利せず、他人をも益せず、有害無益の者に終るのであります。

△善き人に私淑する効能

此の立派な婦人となるには如何したらよいかと申しますと、それには、知識を錬り、學藝を修め、身體を强健にする事など、孰れも其の方便ではありますが、是等は何方かといへば間接の方法で、直接の効能のあるものではございません。此の目的を達するには、孟子の申されたやうに、古人に私淑するのが一番でございます。私淑とは、優れた古人の言行を聞いて之を模範とし、之を敬慕し、己れもその通りになりたいと思ひながら日夜言行を磨くことであります。

△何んな人に見習ふがよいか

私淑すべき人は日本にも、支那にも、西洋にもあります。又上世にも、中世にも、近世にもあり、今日もあります。我が國で私淑すべき婦人といへば、先づ紫式部で御座いませう。それは學問もあり、德行もあり、才識もあつて圓滿な人格だからで御座います。その他楠正成の母の如き、菅原道眞の母の如き、山内一豐の妻の如き、形名の妻の如き、孰れも師表とすべき人でありませう。之を西洋に求めましたならば、かの英國のビクトリヤ女皇の如き、普國のルイザー皇后の如き、皆理想として好い人物でございます。殊にルイザー皇后は、人類の平和を希ふて非常に悲慘を極めた奈翁の戰爭を停めた人であります。其他色々人物がありませうが、何うか斯の様な人を理想としたいと思ひます。

紫式部の事蹟は、今日は詳細な事は分りませんが、大體のことは、かの紫式部日記なり、源氏物語なりに現はれて居ますし、又近頃の書物では、女流文學史などを見れば、凡そ人と爲りが分ります。

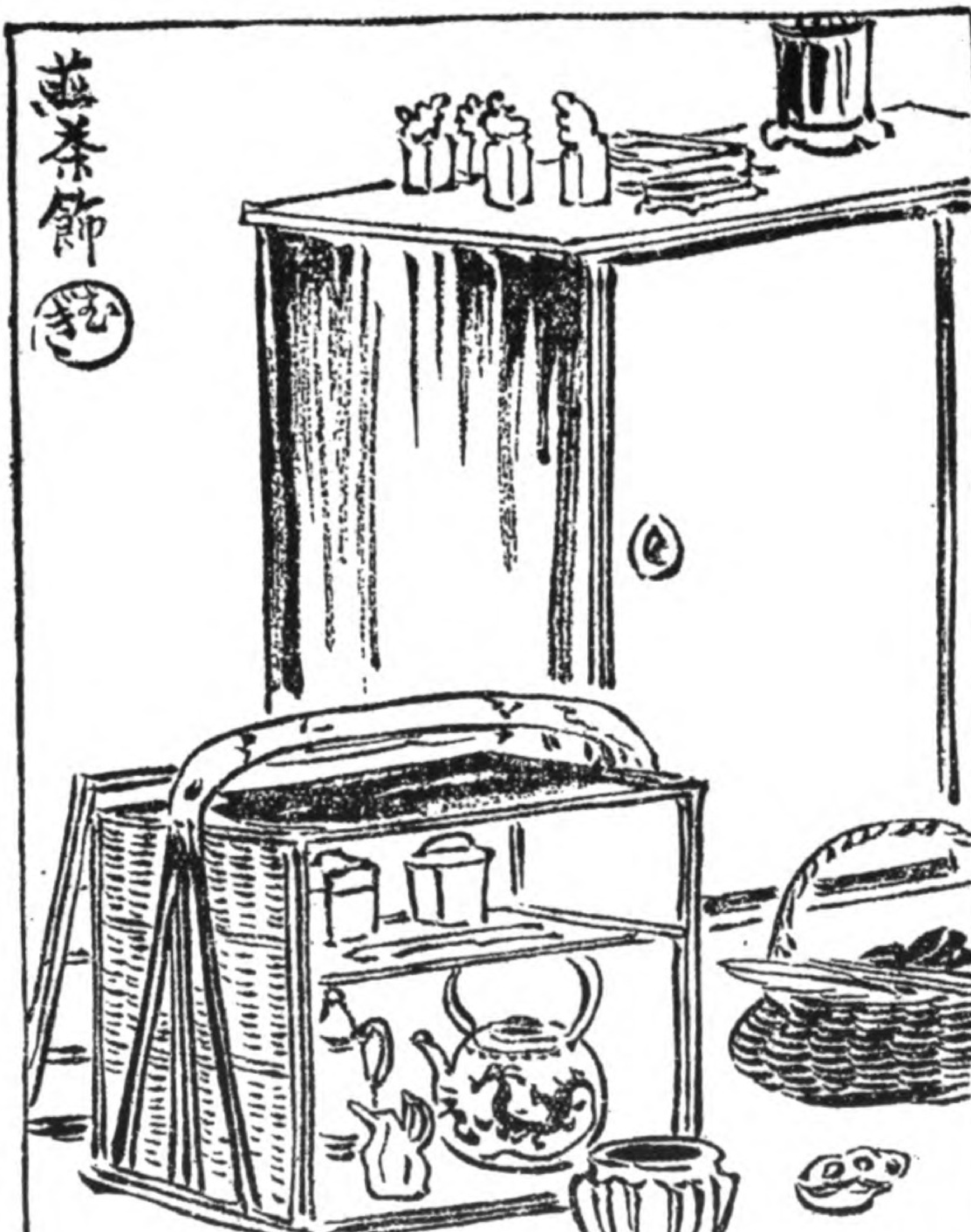
△讀んで益になる書物

人物に私淑するには、まのあたり賢者に感化されることが、最も好い方法でございますが、賢者は容易に現代に見ることは出來ません。又あつた處で一般の人がそれに親近するのは一寸むづかしい事ですから、私共は、努めて古人に私淑するやうにいたさねばなりません。然し古人には、直接に接することが出來ませんから、これは其の著した經典を通して接するのでございます。

經典は、矢張東洋にも西洋にもあるのですが、先づ論語、孟子、大學中庸の如き、孝經小學の如き、又は女四書、女孝經、女大學の如き、或は有大家の女訓の如きものがいゝでせう。

△書き物に書いてある事柄

經典は何れも天然自然の大道を書いたものでございます。一に一を足して二となるといふやうに、是非共さうでなければならぬ大道を示したものでございます。即ち天は高く地は低く、夏は熱く冬は寒く、花は紅に柳は緑なる自然を書いたものであります。人は已に自然の中の一部ですから、能く自然を知つて之に同化するやうにしたなら決して間違はないのです。經典は古人が此の自然を經驗し、其の理に通じて、之を書に筆したものですから皆様が之に依つて言行をお磨きになるならば、必ず人世の目的に一致する事が出來るのでございます。完全な人といひ、圓滿な人といふのは、つまりこの自然に同化して、無理のない人物を指したので御座います。



△自分で自分を害してゐる人

自然は右申すやうに、天地の公道、人類の大道でありまして、自ら生活の眞理、人生の當然を示すものでございますが、世には自然を誤解して、私欲を行ひ、私情を溺すことを以て、自然として居る人がございます。人の正當なる欲望は、又自然の一部でありませうが、我儘勝手の欲望は社會を損ひ、自身を害ふて却つて自然を害するのでございます。其んな考で、何うして神聖にして高大無邊な此の自然と同化することが出來ませう。私の申す自然は其の様な淺薄なものではなくして、無限なる空間と時間に瀰つて毫も變ることのない天道人道であるのでございます。



△美しい德操の婦人

此の如く古人に私淑し、經典を尊び、自然に同化して行つたならば、自ら堅實なる信仰を得て、富貴に淫せず、貧賤に移らず、威武に屈せぬ正しい美しい德操を得ることが出來ます。如何に學識に秀で、才識一世に傑出しても、この信仰、この德操がなかつたならば、到底一人前の健全な人とは申されません。皆様の修養も何うかこゝまで到つて戴きたいもので御座います。これ以上は、その人の天稟により、才能により、自ら應用の巧拙、人物の大小を生じませうが、要するに、人は、この門より入るべきものであります。



貴婦人の世間話

中村鈴子

久しく關西地方へ出張致して居りましたので奥樣方へ大層御無沙汰を致しましたが、今回歸京いたしまして見ますと、三四年の間に世間の樣子がすつかり變つて仕舞ひましたやうで、そして一部の婦人社會では何だかあの自由競爭といつた樣な傾る壯快な形勢となつたのを見まして一方ならず驚いてしまひました。これから又ぼつ〳〵奥樣方に御伺ひをしていろ〳〵と上つ方の御話を頂戴する事にいたしましたから幾重にもお引立被下事を御願いたして置きます。

趣味に富まるゝ
天野の奥樣

天野博士夫人はシツトリしたお方で、大きな聲ではお笑ひも成さらぬ位で居らつしやるが、經驗あり、常識あり、批評眼あり、文學趣味あり、教育思想あり、何事に就てお話しになつても、氣乘りがして警句が湧いて來て、聽者は手の舞ひ足の踏むを知らぬ程になるのです。處が夫人は姿勢も崩し給はずホヽと微かに打ち笑まるゝ床しさ。記者は幾度お目に懸つても、夫人の上品な態度[illegible]しめるやうな深味ある御話とに引き付けられて、お邪魔と存じつゝ長座致すのでございます。秋も早や小萩こぼるゝ折柄、懷かしき夫人を飯田町のお邸宅にお尋ね申し上げ、取次の方に御客間へ導かれますと、

▲黑塗の御歌机

がお客間の中央に置かれ、料紙硯と短册箱とが其上に

載せてございました。後には金屏風が圍らされ、けんどんの座蒲團がズラリと並べられて、室隅の卓上に數々の詠草が積まれてあり、申す迄もなくお歌筵のお用意と見えたのです。『早速有り難う』と夫人の聲が聞えたのは奥の縁側らしく、庭で申し譯らしい挨拶して居たのは植木屋らしく想はれました。恰度植木屋が三人ばかり入つて居た折柄でしたから。

▲今日の歌筵

軈て入り來られました夫人は、何時も變らぬ優雅な調子で斯う話し初められました。『會と申す程のものではございませんが、毎



月一回、中島（歌子先生）さんへ上りました頃の古いお友達だけにお出でを願ひますのでございます。一家を持ちますと、漸々家事に追はれまして歌を考へる餘裕もなく爲り、折角御丹精下すつた舊師の御恩も知らず／＼忘れるやうになつて了ひますので、切めて月に一回づゝでも皆樣に御目に懸りたいと存じて明治三十七年から此集りを始めたのでございます。會日は大抵第二の水曜の午後と定めてございますが、暑中はお休みに致し、九月もまだお暑いので此月だけは下旬に催す事に致して御座います。お集りの方々は皆奥樣盛りで御多用の方で居らつしや

いますが、定日には缺かさず御出席下さいますので誠に有り難い事と存じて居ります。會日には兼題で詠みましたのを持ち寄り、又當座を詠み、古今の和歌に就ての批評も致し、宗師の逸事などを語り合ひますので、お互様に其折柄の無邪氣な御交際を思ひ出し語り出して日の暮れるのも知らぬくらゐ楽むのでございます。和歌や宗師のお話で持切つて居りますから、人様のお噂なぞ申し上げる事もなく、清い楽しい集りの間に自然皆様の御近況も判り交情も益々親密になるのでございまして、私なぞは毎月此日を指折り數へて待つて居るのでございます。ヘイ中島さんが萩廼舎と仰しやいましたので、これに因み小萩會と名けて居ります。

▲學校教育を受けぬ身

私は記憶の悪い性質でございますから、幼い折の事はトント覺えが御座いませんが、唯だ兄が兩刀を差して撃劍の稽古に參つた事や、私の入學致した番町小學校が草茫々としてゐた事なぞは覺えて居ります。番町小學校は火消屋敷の跡を其儘學校に致しましたので、圍ひ内は一面に草が生ひ茂り、火の見櫓のある古古しい大屋敷の玄關から生徒が昇降致し、上級生ほど奥の方の狭い室に入れられたのでした。私は何より讀書が好きでしたから、小學校卒業後、何所か學校へ通はして貰ひたいと父にせがみましたけれども、修業盛りの男兄弟がある中でしたから、女の子は大抵で宜いと申して宅で漢籍を敎へて呉れる位の事でございました。私は如何しても思ひ止る事が出來ませんで度々哀願した末、其頃赤坂に在りました同人社の分黌へ通はせて貰ふ事になりました處、運悪く私が參つてから直に閉校になつて了ひました。それで他の女學校と申しては、櫻井女學校か明治女學校位のものでしたが、父は大の佛敎信者でしたから基督敎の學校へ遣る事は好みませず、私もよく〳〵新敎育を受ける果報のない身の上と諦めを付けまして、切て兼々好な和歌でもと存じ、父の許しを得まして中島さんへ入門致しましたのは、確か十六歳の時だつたと存じます。

▲意味も解らずに作つた戀歌

歌集の中に在る良い和歌を見る毎に自分も如何かして眞似事でもして見たいと思ひ、彼是と種々空想に耽つて居ましたが、さて改まつて師に就て見ますと、如何して一首纏めて宜いか別らなくなりました。何でも最初の内ば和歌類題集とでも申すやうな本の中から引き出しては拵へたのでございます。而して戀歌を澤山詠むのが可いと申す事で、隨分出鱈目に作りました。まだ戀が何やら譯も解らぬ者が詠むのですから、別れが惜しいとか、袖を濡すとか、涙が河になつたとか云ふ言葉を無茶苦茶に並べ立てたので實に滑稽な次第でございました。中島さんは教授が熱心で講義なぞ實に深切でございましたので、毎土曜の稽古日を待ち兼ねる位面白く、其日は日が暮れても歸るのが惜しい程でございました。其頃盛に御學びになつたのは、三宅花圃さん・島田さんの先の奥さんなぞで、一時は私と三人で中島先生を占領して居つたやうなものでした。稽古中の歌を今から考へますと、紋切形の文句をベラ〳〵と並べて詰らぬものばかりでは御座いましたが、兎に角時に應じて容易く浮びましたので、ちよつと木の葉が散つても石が轉んでもヒヨイヒヨイと出來たものでございます。併し師を離れ家を持



ちましてからは、一首詠んで見るのが却々容易でなく爲り、如何して彼の時分は彼様に容易く纏つたのであらうと不思議に存ずるのでございます。

▲義經に同情

私は年の行かぬ内から歴史が好きでございましたが、歴史上の人物の中で一番義經が好きでございました。好きと申すよりは同情したのでございます。義經があれだけ偉い人物でありながら、兄の爲めに苦められ終に邊境にまで逐はれたと云ふのが、誠にいたはしく思はれたのでした。別の御話でございますが、演義軍談と三國誌が大好きで幾度も讀み返しました故ですか、彼の時分の支那人を崇拜する傾きがございました。

▲孔孟の敎

私は家庭と讀物との感化によつて、忠義や孝行の觀念のない者を痛く擯斥して居りました。而して縦令實行は出來ずとも口頭だけでも忠孝を重んずるのが一の虚榮のやうになつて居りました。孔孟の敎は不自然な點もありませうが、私は今日まで種々様々な煩悶と戰ひました際、毎時一種の安心を得ましたのを、全く此敎のお蔭と感謝して居ります。近頃高等の敎育を受けられた若い方々のお話しを伺ひますと、忠孝なぞと云ふ古臭い事は度外に置いて居られるやうに思はれます。尤も初めて姙娠した際、人に見られるのを恥かしがつた私共の若い時代とは全然違ふので、孔孟の敎なぞは無論時代後れに相違ありませんが、利己心ばかりで固められてゐる若い方々には、お藥にならうと存じます。

▲虚僞多き家庭

嚴父慈母と申して、父の嚴なのは、子供の取締に宜しいに相違ありませんが、これも度が過ぎますと恐ろしい弊害が起るやうでございます。私共の主人は極寛容な上に滑稽ばかり申して子供を笑はせて居りますので、私は據なく眞面目で居る位でございます。それ

ですから子供は大層父を慕ひまして、父の前で虚偽を申しません。此點は誠に好都合でございます。私共が牛込に住つて居ました頃、お隣りのお住居の御主人は非常に厳酷な方でお子さんを叱つてばかり居らしつたので、お子さん方はお父様の御在宅の時には御飯もコツ〳〵と召しあがる位に恐れて居るので、水を打つたやうに静粛でしたが、お父様がお留守になると一時に賑かになつて亂暴に遊び狂ひ、女のお子までも屋根へ上ると云ふ騒ぎが始まるのでした。お父様が別荘へ泊りにお出掛けなさると、お子さん方は宛然鬼の首でも取つたやうに関の聲を揚げて喜んで居られました。お母様は口うるさく小言を仰しやいましたが、御主人がお子さん方の前で奥さんを叱り飛されるので、お母様の威厳と云ふものが少しもございませんでした。而して皆さんがお父様の前で嘘ばかり言つて平氣で居らつしやるのが、伺つて居ても情けないと存ぜられました。私は斯ういふ御家庭を見まして、父母の手加減の難かしい事を熟々感じて居ました。





古今の和歌にあらはれたる

菊の花

金子薫園

秋が深くなつて、咲き誇つた千草の花に凋落の色が見えて來た時、白い菊の花が冷たい香りを放ち出すのは、見てすが〳〵しく又心強い感じを起させるものである。大輪のは堂々として立派であるが、此花の本當の持ち前から言ふと、野山などに恣まに咲いて居るものゝ方に、趣が多いのである。山菊の白いのは、花は小さく單瓣ではあるが、犯しがたい氣品が備はつて居る。あながち山菊ばかりてなく、その一もとを手折つて、小瓶に挿して、歌をおもふ人、又讀書に倦んだ眼をそれに移す人が、皆様の中に多からうと想ふ。特に明後日は天長節に當るので、皆様が此花をかざして、君が代は千代に八千代にことほぎ奉る聲は、いかばかり高く小春の空に響くことであらう。前例に依つて左に古今の和歌俳句の中から此花を詠じたものを拔いて見ることにする。

○　在原業平

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

例の業平朝臣の作である。伊勢物語にも古今集にも出てゐて、聞えた作である。斯く移し植ゑて置いたら、秋のない時は咲かないかも知れぬが、然う云ふ譯はない故、毎年秋になる毎に咲かない事はあるまい。色は散つても、根は枯れることがないと云ふ意で、希望の心持を含めたものである。調子の强い、しつかりした歌ひぶりである。强い、生命のある此花の心持を言ひあらはしたもの。

○　菅原道眞

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか波のよするか

「吹上」は吹上の濱を指したので、之れは和歌の浦の北にある名所である。で秋風の吹く吹上の濱に咲いて居る白菊は、花のやうでもあり、又波のよするやうでもあつて、見わけがつかぬと云ふ意。白菊を飽くまでも清い美くしい花に観たまゝの景色を飾りけなく素直に歌つた所に、此歌のおもしろみがある。幼稚だとか、曲がないとか言つて、此歌を評する人があつたら、それは大なる誤りである。斯う云ふ飾りけの無い所に、歌の本當の味があるのだ。

○

心あてにをらばや折らむはつ霜のおきまどはせる白菊の花　凡河内躬恒

これは百人一首に出て、「おきまど」と略して呼ばれる有名な歌である。おき窓とは何ういふ窓かと不審がつた人があつたと云ふ笑話が殘されてある。で、一首の歌の意は、當て推量に折らうと思へば折られるが、初霜が白菊の花に置いて、いづれが花か霜か分らぬことであると云ふのである。これも此花の清い純なさまを霜によそへて詠んだもので、比喩に厭味がない。無邪氣な歌であらう。たゞ「折らばや折らむ」と云ふ小細工のあるのが難である。これさへ無ければ文句はない。しかし作者は、こゝに力を入れて居るので、此時代の歌を通じての惡癖である。勝れた歌なところである。

○

ぬれて折る袖の月影ふけにけり籬の菊の花の上の露　源實朝

月の夜、そゞろの興に庭におり立つて、垣根の菊の咲いてゐるあたりに歩みを運んだ。花の上には夜露がしとゝ置いて、さやけき月の光りを受けて居る。その露に袖をぬらして一枝手折る時、ぬれた袖にふけた月影の映つてゐるのをふと見て、詠歎したのである。その月夜の籬のあたりの光景、作者のたゝずんで居る樣子、すべてが月の前に描かれてゐる。しつとりした、あはれの深い作である。調子がゆたかに、おつとりとして、餘情鬱さがたき妙がある。これは此作者として、さまですぐれた方では無いが、なほ此妙味を有つて居るところを味はゝればならぬ。

○

夜を殘すまがきの月のうす霧にしめりてにほふ庭の白菊　小澤蘆庵

前の作に趣が似て、彼は夜ふけ、此れは曉と、時間が隔いて居るのも妙である。夜が全く明けはなれないで、籬の菊の咲いてゐるあたりに、月が殘つてうす霧にほうつとして居る。その霧にしめつて、菊の花が冷たい香りを放つて居ると云ふのである。「うす霧にしめりてにほふ」と云ふ

のが、風情なつかしい所である。たゞやゝ飽らないのは、道具立が少し多過ぎて、ごたごたした嫌があることだ。第四句の「庭の白菊」の庭は前にまがきとあるのに重複する。「白菊の花」で可いと思ふ。斯うすると道具立ても減つてよいやうに思ふ。

○　加藤千蔭

たそがれの妹が垣根の菊の花われを待つらむ袖かとぞ見る

たそがれのたどたどしい頃に、そゞろあるいて、戀人などの住んで居る家の近邊まで來ると、垣根が先づ見えて、そこに咲いて居る菊の花が見える。然うしてそれが自然を待つとて門に出て居る戀人の袖などのやうに偲ばれると云ふのである。優しい、ゆかしい所はあるが、「袖かとぞ見る」は形容し過ぎて、強ひて作つたあとが見えはすまいか。しかし薄暗い夕方の事であるから、然う見えたかも知れぬ。

○　熊谷直好

白菊に黄菊をりそへ玉だれの小瓶にさして見ればあかぬかも

「玉だれの」は、「をがめ」の「を」と言はむための枕詞であるが、一面叉花瓶を形容すべき形容に適つてもあらう。花瓶に黄白の菊を挿して見れば、飽くことを知らないと云ふ意である。白菊だけでは少しあつけないので、黄菊を折つて添へたと云ふところに一層の面白味がある。然うしてこれが結句の「見ればあかぬかも」によく響くのである。些つとした趣を捉へたもので、可憐の作である。かう云ふ眼前の光景をそのまゝ詠じたやうな歌ひぶりは、皆様の中の初ひ學びの方にお勧めする。

○　井上文雄

月清み澤邊の茅原踏みてたゝずむ袖にかをる菊かな

此作者は明治の初年に歿なつた人だ、景色を歌ふに妙を得て居つた。此歌もその特色を發揮したものである。景色の觀方がいかにも細かく、餘程今日の新しい詠みぶりに似て居る。歌を始めて詠まうと云ふ人は、此作者の歌など熟讀するが可い。で、此歌の意は、此夜、月の清く澄みわたれるまゝに、澤邊の茅の茂つてゐる邊りに、露にぬれて、月を仰いで居ると、自分の袖が匂ふので、偶と見れば、足もとに菊の花が咲いて居たといふので、意外の喜びに打たれたのである。茅原の中の白菊、一もとと咲き誇つて居るさまが、言ふばかりなく、ゆかしく感ぜられる。描けるやうな景色で、作者がいかに自然に多くの趣味を有つてゐたかゞ分る。古人の眞似ばかりしてゐる時代に、作者のやうな新人の出たのは寧ろ不思議である。

○　松尾芭蕉

菊の露落ちて拾へばぬかごかな

菊の花に置いた露が、こぼれたので、拾はうとした蟲が、露は砕けて了つて、そのこぼれ落ちた辺りに、ゐかごがあつたと云ふのである、即興であるゐかごはむかごとも云つて零餘子と書く、山の芋の子である。

○

村百戸菊なき門も見えぬかな　　與謝蕪村

一村は百戸あまり戸數あつて其家々の門口に菊の花の見えない所はないと云ふのである。旅たま〳〵此村に入つて、此光景を目睹したと云ふままである。見たまゝの巧を弄せぬところ、やがて手腕の大なる所以だ。

○

菊時は菊を賣るなり小百姓　　正岡子規

取入れの手傳ひの済んだ後の小百姓は、大百姓のやうにふところ手をして暮されもせず、菊を賣つて生計を立てると云ふのである。貧しい中に何處かノンキなところがあつて、俳味の面白さを傳へて居る。

○

かたらひししるしにとりし小ゆるぎの磯の石にも似てさく菊よ　　與謝野晶子

小ゆるぎの磯は、相模にある、昔から歌枕に引かれて居る所だ。おもふ人など、戀を語りあつた紀念に取つた磯の白い石に似て、此菊の花の美くしくなつかしいことであるよと云ふ意。四句までが菊の形容になつて居るのである。穏かな、女らしい、しつとりとした作。

○

靜けさや君が裁縫の手をとめて菊見るさまをふとおもふ時　　若山牧水

小春のひと日、緣の柱などに倚つて、うつら〳〵して居た時、ふと自分の思ふ人が裁縫をしてゐる手を一寸とめて、うつとりと庭前の菊の花に目を移してゐるさまを想ひ浮べて、一層の靜けさを覺えたと云ふのである。何もないやうであるが、その時の作者の氣持がよく一首にあらはれて、淡い情趣を掬し得るのである。

皆様は前の井上文雄氏の作をよく讀み味はれると共に、此作のやうな、優しい、流れる如くに氣持のあらはされたのを、よく〳〵味はつて貰ひたい。

○

山菊のうすむらさきにほの〳〵と花畑の夜は明けて行くかな　　金子薫園

自分の歌を出すのは、烏滸がましいが、餘り今の歌人に菊を詠じたものが見當らぬので、末に一首を添へた所以である。花畑にうす紫の山菊が咲き簇つて居る。そのうす紫の花からほうつと夜が明けはなれて行くと云ふのである。今日では舊作となつたが、此時分は無暗に色彩美にあこがれて居つたものだ。

次回には「歳暮」の歌を紹介する。



美顔術に行つて見た記

令孃に扮せし　覆面記者

まあ艶子さんは、どうして此節あんなにきは立つて綺麗におなりになつたかしら？

本からきめの細かい色白な方であつたけれども先日伺がつた時に、殊更に感じられたが、

あの方とは小學校以來のお友達で、申さば筒井筒振分髪の大仲よし、神田橋時代に荒い矢絣のお揃を拵らへて戴だいて、得意になつた事も十年の一昔。

あの方が近藤學士と結婚遊ばす時にだつて、何もかも打あけて、お持參のお仕立あれよこれよとの品定めまるで生みの姉妹でも、あれ程には、と母樣が仰しやつたつけが、

暫く京都にいつて御出になる內、旦那樣は文部省から選拔されて御洋行、氣の小さい艶子さんは、洋々たる未來の希望を擔つて、御出立を御送りになつてから芝の實家に御一緒になつて御出になる、でも月日の立つのは早いもの、もう二年の春秋を迎へて、御主人も近々に御歸朝、ほんとに同級生中での、仕合せ者はあの方であらう、で先日御會ひ申した節私が、

艶子さん失禮ですけれど、大變お美しうお成り遊ばしてよ、いゝえ全くでございますよ、あのクリームとかを御使ひ遊ばすのでせう、何だかあたり前に、御化粧を遊ばしたのとは違うのですものいつもよりお顔がはつきりして眞から、つや／＼して御出ですよ。

近き將來の御希望の光りが、反射したのかもしれませんわね。……

お化粧には、一種特意の考へを持つて御出でなさる

あなたですから、御研究になつた秘傳をどうぞ、特別の御詮議により、束脩免除で敎しへて頂戴な、といつたけれ共、

いやな富子さんね、氣味の惡い事ばつかし仰つしやる事

クリームも使つて見ますけれ共、どうせへんてこな生れ付ですもの致し方がございませんわ、いくら磨てもこすつても駄目、今からお化粧に身をやつしてお嫁の口を探す野心もなし、艶は依然として近藤艶ぢやございませんか、でもね一昨日顔を剃つて貰ひましたのよ、と、何氣なく紛らして御出になる。



まあ雑誌でも御覧遊ばせな、ずゐ分面白いのね名家の令孃方のは、お召物だつてなか〱でせうね、藁人形も衣裳柄つて申ますけれども、ほんとに美しい事、今年の流行地色の事が出て居ませう一寸拜見、

納戸色の流行は、其跡を絶たんとし、藍氣のもの漸次衰へて、吾妻鼠、銀鼠、港鼠等流行の兆あり、以上二十四五歳の年増向、

おゝいやだ、私なんぞ自分はまだ若い氣で居ますけれど、世間並には、年増の部に入るんですね、と大笑ひ、

近藤樣はいつ御歸り遊ばすの、御心盡しのお土産が

どつさりおあり遊ばすでせう。

いゝえ富子さん良人はね、飾りやかましくも無い代りに、全く無とんちやくですから、自分の研究用の器械以外に、ピン一本持つて歸りませんよ、指輪なんてもう〳〵思ひも寄せて居ませんわ、と例の無邪氣な訴へる樣な、美しい眼を見はつて、辯解していらつしやる。

自分は頁を操つて居ると廣告欄に、

と云ふのを見て、艶子さんあなたに喜びの福音がありますよ、一寸御覽遊ばせ。

士は己れを知る人の爲に死し、女は己れを愛する人の爲に粧ふ可しでせうね、あなた御主人樣の御待受けに、美顔の施術をお受け遊ばせな、鏡の上に花の色彩美しう、結構ぢやありませんか、と常からのお心安さに面白半分な事を云ふと下ばかり向て御出になつた艶子さんは、もう堪へ切れなくて、オホヽヽまあ苦しい事とて腹を抱へて大笑ひ。

リンゴを持て來た女中の春迄が、何もしらぬのに貰ひ笑ひをして引下る。

私はあつけに取られましたよ、どう遊ばしたの、思ひ出し笑つて、罪ですつてね、お敎へて頂戴、漸く笑ひを止めた艶子さんは、きまり惡るうに實はねもう五度ばかり美顔術に行きましたのよ、誰にもいはないでね、バイオリンの先生の許へ上る序に、寄りましたの私初めつからわざとをかしいのを忍んで居たのですもの、ほんとに苦しい事オホヽヽ。

まあお人が惡く御成り遊ばした事。

私どうも不思議だと思つてましたわ、まあそんなに効能があるんですつて、私も行つて見ようかしら、と

つひ口をすべらした。

えゝ行らつしやいましな、少しもきまりが悪くもありませんよ、名前を告げる必要もなし手軽でね、施術者が皆若い婦人ばつかりですの。

△行く人の種類

さうですね、まだよく存じませんが、だまつて行つてお金を出して、左様ならつて帰るんですもの、奥様方は勿論、華族様の夫人、令嬢、藝者などはどうしても美しいのが大切ですから、参る様です、それはね其人の服装でこちらが察しるのです、殿方でも、ずゐ分施術を受けに來らるゝさうですよ、外國などでは高等理髪所へ行けば、理髪後美顔術を施すのは、普通ださうですよ。

おしやれといふ皮肉な言葉は別にして、男でも女でも出來るだけ、美しくするのは私禮儀の一だと思ひますよ、

と真面目になつていらつしやる、今度は私がをかしくなつた。

△いよ〳〵決心してこつそりと

どうも親から戴だいた身體、とは云ひながら毎朝鏡を見てもをかしくなる私の顔形ち、でも眼が三つでないだけが申譯さ。

と父様が御酒召上ると笑ひながら仰しやる、行つて見ようか、でもこんな顔を引提げて美顔術もすさまじい、と後へ退ても見たり、一種の好奇心は私を驅つて是非一度研究的に行つて御覧なさい〳〵と促し立てる。

まるで梅雨が復活して來た様に降り續く雨の晴間はいつやら分からぬ、例の？を思ひ立つて着物を換へて居ると、從妹の清さんが、

お姉さんどちらへ？まさか美顔術にとも云へず私ね、何か面白い本でもないか、神田邊迄散歩かた〴〵出かけて來ますわ。

まあ雨中の散歩、蚊弟子の御方は格別だわと、なかなか清さん此頃は隅に於けぬ、警語を吐く、

お天氣になつてからならば、松屋の陳列を見がてら半衿も一つ欲しいから、御供してもいゝんですけれどね、さう遊ばせよ、と留められる。

まづ平〳〵、御令嬢に御伴して呉服屋などに行つたら大變、其儀は平に願ひ下げます、天機漏す可からず、虎の巻はこれからなのですもの。

「竹川町下りの方」と

呼ばれて下りたもの丶、艶子さんによく伺つて置けばよかつたのに、人に問ふのも變だし、まあ博品館迄行つて見よう、と左右を注意しながら歩いたけれども、それと思ふ家は見當らぬ。

後へ戻つて、左り側の四辻に客待して居る車夫の内で、一番年寄で氣のよさゝうなのが、お孃さん、お安くお供は？と來たのを幸ひ、竹川町の十二番地はどちら、

と小聲で聞たのに、車夫先生大きな聲で、理容館はね、つい此先きを左に曲ると、二三軒目でさあ、表に看板が出て居りやすから、直ぐ分ります、と敎へて呉れた。

▲行きつ戻りつ君が門

元祿の昔し芝居でする忠臣藏で、山科の里に閑居して居る大星家の息力彌の元へおしかけ嫁入の小浪孃が駕から滿艦飾の振り袖で出ると直ぐ、甘つたれお調子で、力彌さんのお邸はもう茲かへ、私しや恥しい、と扇で顏を被ふところがあるが、どうも何だかきまりがよくない、向ふから雛妓を連れた藝者が來る、あの人が通り過ぎたらと思つて居ると、

一寸姐さんまあきれいだわね、と雛妓が造花や化粧の陳列してある硝子戸に立寄る。

おや今度は男の人が來た、どうも仕方がないと其機の來たらん事を、待ち焦れて居るのであるのに、どうも工合が惡い。

御用有之暫時禁通行。の制札を立てる譯にも行かぬ、やがて天の助け、

間髪を入れざるの機を得て、どうやら身體だけ扉の

内に入れた。

どうぞ二階へと美しい女の人が、叮嚀に御辭儀をする、登つて左つ側が手術室らしい、右側には婦人が二人ばかり待合して居られる。私は突當りの西洋間左様六疊敷位でしたらう、卓上には婦人の雜誌が二三種、寫眞・書報などが重ねてある。



壁には金縁の油繪が掲げられて、後ろに大きな姿見其下の棚にも雜誌の様な冊子が澤山に積んであつた、全體に狹くはあるが小ざつぱりとして氣持がよい、扉の隙目から白い手術衣を着た人がちらちら今満員らしいので、手當り次第に口書などを拾ひ見して居ると、あのどうぞこちらへ、御入り遊ばして……、

三つ窓のある明るい室で、何れも雪白のカーテンがかゝつて居る、左手の方に色々な器機が並べられて、湯沸しからは蒸氣がぷつ〳〵と立つて居る、手術臺は丁度歯科醫のと同じ樣なのが、三臺光線の射入する方向に据ゑられて、壁も天井も美しい紙張りで、此室に適當したような水彩畫の額面がかゝつて居る。

一番左の臺には四十位の男子の方、中央には洗髪の粋な人で、私しは右の端、さあなたどうかこれに御掛け遊ばして、といはれたが、何とも云へぬ化粧品の香は、鼻をうつ。

▲いよ〳〵美顔術の序幕

腰を下すと、施術者の便利な角度に顔を仰向にして半仰臥の位置になりますと、前は毛布ですつかりくるんで、肉タオルを後から廻して着物の衿を十分に包みました。

最初に西洋手拭の二つ折にしたのを熱い湯で蒸したのを顔の方からかぶせて額から顔迄被ふて鼻の頭丈が出て居る樣でした。

即ち中央三角形の孔から、やがて隆鼻術の御厄介になる顔る非常に低い鼻が、顔をちよこなんと出して居るのだと思ふとをかしくなりました。

鮎子さんもすまして此通りな事をなすつたのかしらなど〻色々な事を考へて居ると、何だかぽつと氣持がよくつて、眠さうになつて來た、たしか二度取り換へて、蒸した樣でした。

今の樣に致すと皮膚が軟かくなつて、毛孔が開かれるのだと、施術者は、說明して與れる。

次には白い色した香のものをぺた〳〵と塗る、そしてよく〳〵なする樣にする、默つて居ればよいのに、それは何です？と口を出す。

これはハイゼニツクマツサージクリーム、と申て皮膚の温いので溶けて、毛孔に流れ込み今迄籠つて居た塵埃や有機物と一緒になつて溜まつて居るのを、カツピユグカツプス、といつて、スポイトの樣なゴム製の物を顔に當て〻、スポン〳〵と音をさせながらまぶた

だの頬だの鼻の兩側だの、全體から今の溶けて居る不潔物を吸ひ上るのです。

御覽遊ばしませといはれて見ましたが、なる程鼠色のどろどろしたものが、一杯になつて居ました、まああんな汚ない物があつたのかしらと思ふ位でした。

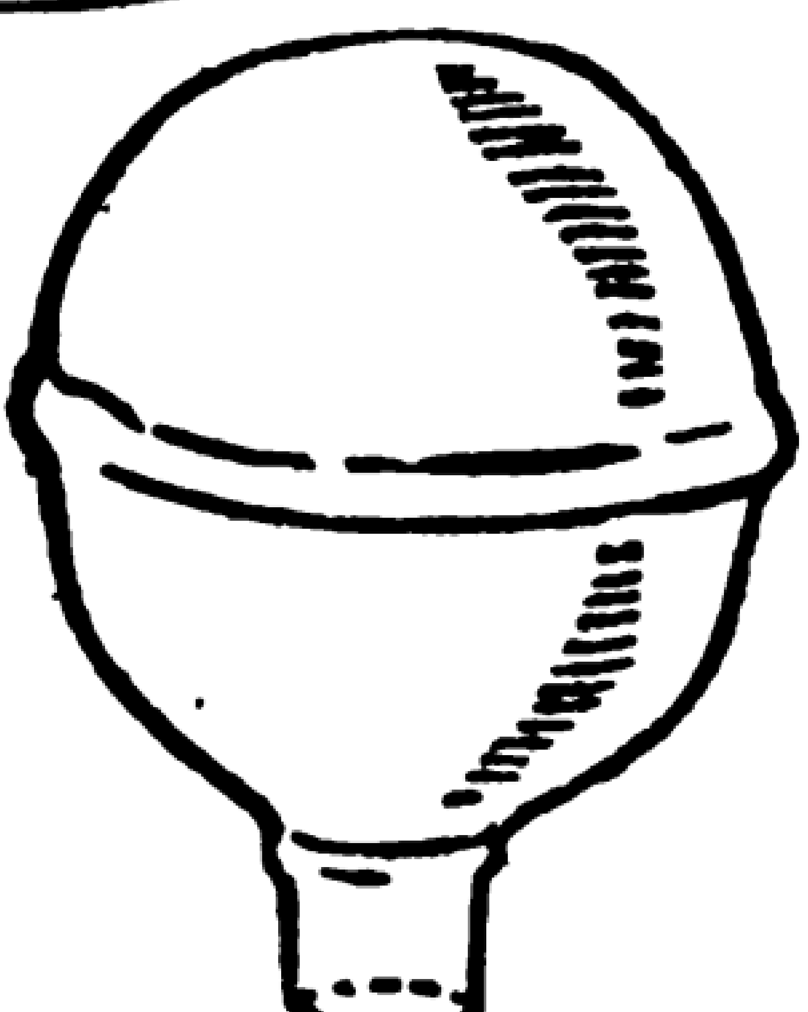
私何だか初めは、もう極りが惡くて夢中でしたけれども施術者が眞面目で無駄口一つ利かずに、熱心にやつて居る段々面白くなつて來ましたの次にはマッサージソープで以てフヘーシアルブラシ、で叮嚀に顔を洗つて、其時も寢て居てよろしいのです、もう赤



コンプレクシヨンバルブ



マツサージローラ



カツピングカツプス

ちやんになつてれば、ちやんとよくなるのですから。

施術者は此頃爪磨きも始めましたので、お顔の方をさせながら、お爪の掃除をおさせになる方もございますよ、と話して居ましたが。

重寶なものぢやありませんか、そして隣室でバイオリンでもやつて貰つたら、それこそ仙境、今度はマッサージローラと云つて、一面に章魚の疣の様な物の付て居るもので、全體を摩擦します、これは血液の循環を促がす爲であるが、殊に一寸した粥目石の顔などは、朝夕これで摩擦して居

ると皮膚が平面になるさうです。

母樣のお話しに、昔は天然痘を患らつても、嗜みのよい方は、朝晩糠ですりみがきをしたものだ、と伺つてますが、と大笑ひをしたけれども、或はさうかもしれぬ、靜岡の伯母樣に送つて上たら、さぞ御よろこびになるでせう。

それが終ると、コムプレクションバルブと云ふもので、顏の皺のばしを致しますの、これはたしかに効能があるさうです。

隣りの方は濟んだと見えて、左樣ならと歸つて行くかういつた有樣ですから、他人と顏を合せないでもすむんです。

それから熱い手拭で顏を拭いて桃色のボンビヤンマッサージクリーム、と云ふのを一面に塗つて、指先きでよくさすります、そして後、今度は冷たいタオルで二度ざつと拭きますの。

これは今迄膨張して居た皮膚を、收縮させる者なのである、これからが愈〻の仕上で、受術者の顏がそれぞれ異る如くに、皮膚の性質も十人十色であるから、施術者の技倆と熟練は、此仕上にあるのださうです。

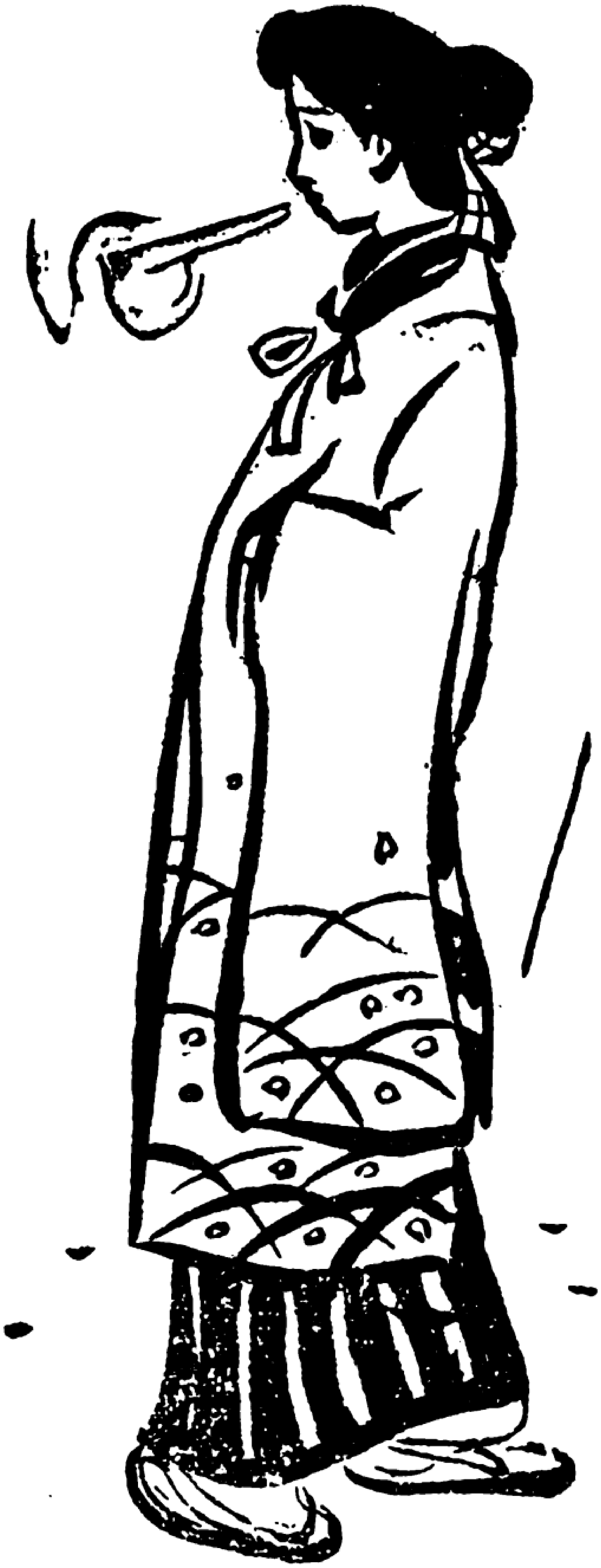
どうも暖めたり冷したり、揉んだり撫でたりで、なかなか變化が多いのですよ。

私の顏は脂肪が多いので、理容水を付けて更に肉色のライラック水を塗つて其上にスキン、フード、かコールドクリームをぬつて、あとをざつと拭つて、打白粉をはいて濕氣を乾かしてから、化粧皮でむらの無い樣に撫でゝ、終りて化粧油を眉や額際へつけて、これで施術の全部が終つたわけなのでありますが、白粉でも顏の赤い人には肉色とか、淡黃色とか申樣に色々あるのださうです。

さどうぞ御含嗽を遊ばして、と促されて臺を下りましたが、丁度四十分程かゝつた樣でした、大概四十分ですけれ共、ニキビの吹き出た方などのは、どうしても手がかゝりますので、一時間位もかゝる事があると申して居ました。

休息所に歸つて鏡を見た私は？

おでこが引込みも致しません、鼻が高くもなりませんけれども、すべ〳〵してはつきりとよい氣持になりました、文明の化粧法はなる程と心にうなづきました
いえ全くでございますよ。



毎日來なければいけませんか、と問いましたら、丁度顏を剃るのと同じであるから、一週間つめて施術をするよりも、一週間毎とか、或は一月に二度とか云ふ様にした方が、却つてよろしいとの事でした。

つひ先日の朝日新聞にも、掲載されて居た様に、どうもかういふ事は、秘密にしたいものと見えて、歸り近所お誘ひ合し、どし〳〵と御來車、なんと云ふ譯には參らないので、何れも様御しのびの御様子で、御姉様は妹に、妹は姉に隱して琴の稽古の歸り途、神ならぬ身の知る由もなく、二階の下り口でぱつたり、おやおやと大笑ひをする事もある事でありませう。

そつと來てそつと御歸りになるので、又御姓名もお聞き申しも致しもせず、藝者衆は其風姿でこちらが推量するばかりなので、自用車で御出の夫人方でも、車の紋で何某様の奥様だらうと想像する位で、よし分つて居ても、德義上他に告げる様な事は致さない方針だとの話し。

まあそれ位でなければいけないのでせう、こちら

から招きに應じては、出張もするそうで遠藤と云ふ館長の方は、多く上流へ上られるさうで、宮様へも御化粧を御召しの榮を、蒙むつて居る向もあるさうでございます。

▲美顔術の起り

この術の起りは獨逸であるさうです、原名をハイゼニツクフヘーシアルカルチユア Hygienic facial culture と云つて、當今文明の歐米各國では、盛に行なはれて居る、最も進歩した衞生的化粧法で、苟しくも交際社會に出入する、紳士貴女は勿論の事、自分の容貌を整へて天眞の美質を損せぬ樣に、と心がけの厚い人は、折々此施術を受けるのはもう普通で、歯科醫に歯の掃除をして貰つたりするのと同樣、何も恥かしい事も、極りの惡い事も無いのだ、と某夫人は仰せられました。

これは獨逸の某博士が多年苦心の上、生理衞生上から、考案されたのが、理髮師の手に渡つて、更に米國に輸入されたのだが、何にが扨、所謂米國流にあらゆる器械と、及ぶ丈の技術を應用して、つまり今日のものとなつたのを、長く米國に居られた方が持つて歸られたけれども、此方は別に立派な、專門の職業がある處から、其の館主の遠藤波津子氏が受得していよ〱三十九年の七月に始めて、衞生美顔術なる看板を掲げて世に公にしたのださうです、今日では京都大阪から廣島九州の熊本に迄、出張所を設けて居らるゝさうです。

▲美顔術の効能

どうも最初は自分ながら、驚く程綺麗になつたと思ひましたけれ共、すぐ曇りが出て參りますよ、と云はれる方もあります、けれども吾々の生活機能がある間は、絶へず分泌液があるので而かも、顔は四六時中空氣中に晒されて居るんですから、自然に塵や埃が溜りますから、一度で永久の效を得る事は出來ますまいと存じます、他の物を倹約して行く事の出來る、餘裕のある方や、人生の大禮の御嫁入前の嬢樣方は、まあ一

度いつて御覧遊ばせ、と申上るのであります、序に申ますが歐米では、美顔の施術は理髪師の兼業になつて居るので、爪を磨きながら受術するすこぶるぜいたくな、仕掛だとの事であります、此内から髪洗ひも茲で致すさうですが、皆樣お髪をお梳し遊ばす時は御心付で居らつしやいませうが、毛の先が二つに割れて居りますでせう、あれはあの所から折れて切れるのださうです、それで一通り洗つた後、電氣か何かで、燒いで多少髪のくせも直す事が出來るのでせう、私はまだ試みませんけれ共、其内いつて見ようと存じて居りますの。

えゝ私は何でも隠すのは、大きらひなのでございますから何もかも申上て、御參考に供しますわ。

今の内にせつせと通つて、お友達を驚ろかせてあげようと存じて居りますの、おしやれだと御笑ひ遊ばしてもよろしうございますとも。

化粧箱（トイレットボックス）

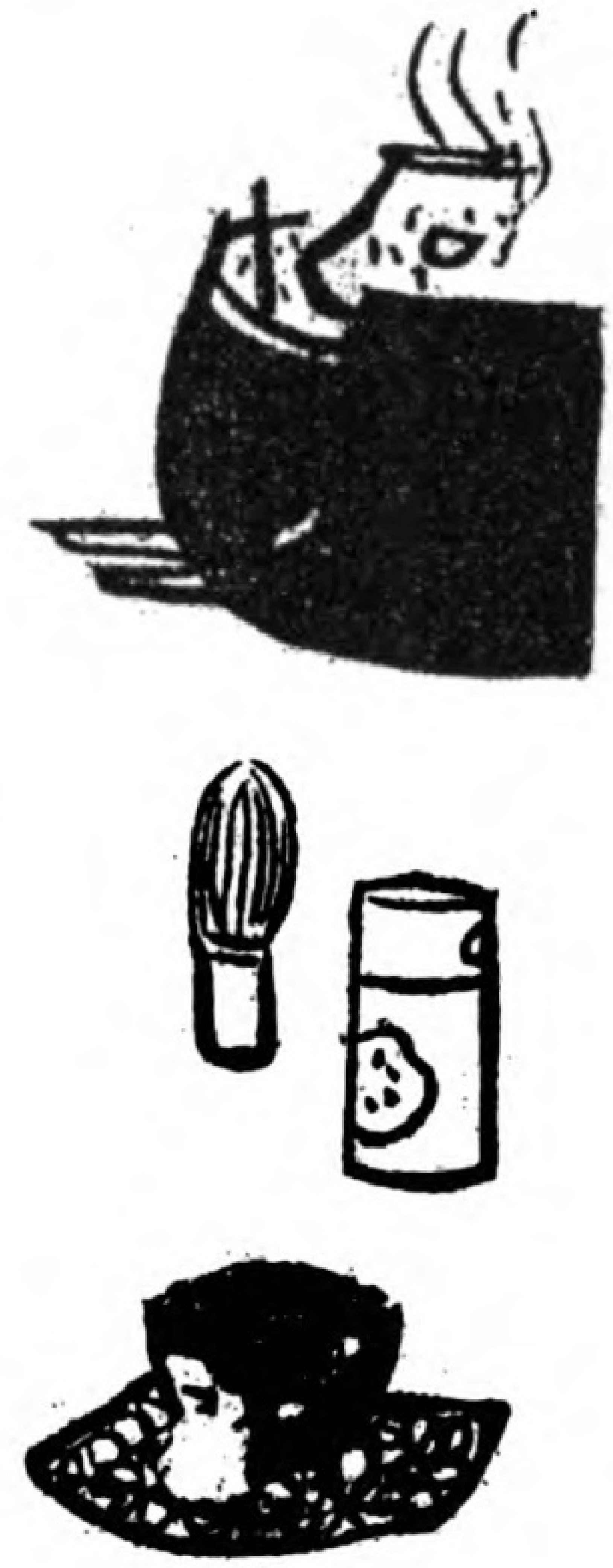
美しい箱が目に付きましたから、あれは何ですと聞て見ましたら、

遠方や又家庭の御都合で、直接に施術の出來ぬ方の爲めに、美顔術用の化粧品、化粧具一式取揃へて入れてあるので、中身は相當の代價で詰め代へて貰ふ事が出來ますさうですから、私はもし其先方によつたら、御結婚の贈り物として面白いであらうと存じます。

價は八圓から、二十圓意匠次第でもつと、高價なもの出來るさうです。

それを求めますと一回だけ無料で施術を致しますと申て居ましたが、小さいカード帳の樣な物が添へてありましたが、多分使用の法が書てあるのでありませう、艶子さんの知人で只今ある男爵にお嫁に入らしつた方などは、大變な美顔術の信仰家でいらつしやるさうです。男子でも俳優藝人は別と致して、某大學の學生なども受術して、あまつさへ化粧水、白粉迄買ふ世の中ですもの餘裕のある方は殊に結婚後の申さば下り坂の奥樣などは、物は試し一度試みて御覧遊ばせ。

おや〱どうも自分が感心の餘り、まるで廣告屋の樣な事を申ましたね御免遊ばせ。



初對面錄

(一) 金子子爵令孃

婦人記者

一番町の金子さん樞密顧問官の御孃樣のやうに御美しくつて御利發で、何でも能くお出來遊ばしますし、お氣立てがおやさしくつて御孝心深い方はほんとにお珍らしい程で、御兩親の御可愛さも嘸かしと、人の噂を聞き込みまして、一度御目にかゝり度いと存じて居りましたが、或土曜日の午後一番町の御邸へ參上致して、十五六の袴をはいた書生さんに取次を願ひました、

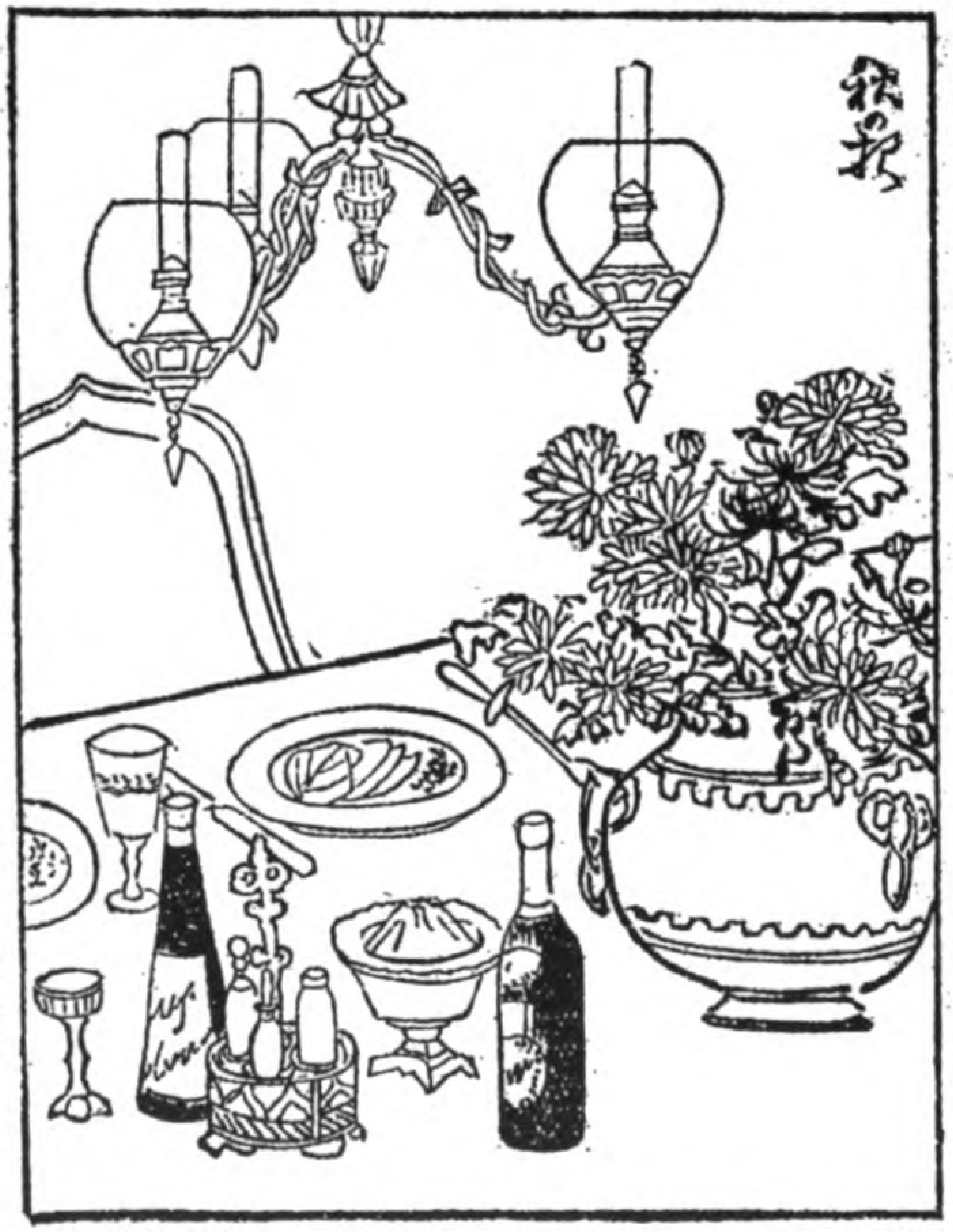
『今日奥樣は御病氣でございますし、お孃樣は御外出で、只今お仕度中ですが、御待下されば、折角ですから御目にかゝりませう』とのお挨拶、御臺廊下を通りまして、突當りの應接の間へ導かれました、愛嬌のよいお女中さんが、お茶、お菓子を運ばれまして『どうぞ御自由に遊ばして、』と會釋して引下る、

壁上には高貴の御眞影、それに對して某宮樣の『富貴如浮雲』の御染筆の額が掲げられてある、紫檀の卓二脚は、配置よく左手に長椅子が置てある、壁には東照公の畫像の軸物、

御床には青銅の獅子の置物、石膏美人と調和面白く、棕梠竹の盆栽、小さい卓上にある盆景、何れも高尚優美な御飾付で、まづは令孃の氣品の程もしのばれる、御庭には綠の松霧島つゝじ五月の頃の詠めは又一しほであらうと、うつとりとして見て居ますと、

『あのね殿樣と清子樣は、一時半の御出ましですよ』とお奥の方から玄關へ達しに來た、お女中の聲、時計はもう十五分、飛んだ失禮をしたと心の內で答へて居

ると、衣摺れの音しとやかに、「どうも大層失禮致しました」と玉を轉がす様な御聲「母も御目にかゝる筈ですけれ共、風邪でふせつて居りますので、失禮致します、今日は神田の青年會館で有名な、西洋の音樂家の演奏があるさうですから父とまゐりますので、折角御出下さいましたのに、ゆつくりと御話しも出來ませんでございますが、どうぞ又御暇の時に、御出遊ばしていたゞきませう、其時には母も御話を伺ひますでせうから、」と御初の御面會でございますのに、至つて快活に人をそらさぬ叮嚀な御挨拶、



「もう出かける迄何も用事はございませんですからさどうぞ御掛け下さいまし、」と椅子を與へられました

△御髪は高髷

島の濡羽の様な眞黒なおぐしを品のいゝ、高髷に遊ばして、さつぱりとしたお髪飾り、すつきりとお丈の高い中肉の御身體に、薄色の御紋服　美しう御化粧遊ばしたのに、白衿のうつりも氣高く、おみ帶は糸錦でせうか、竹の模様のあるのをお大鼓に御締めになつて、頸からかけられた時計御指を飾る幾種かの寶石、たゞもうお美しい御方と、申より外はございませんでした。

△御同胞はお三方

△學校は華族女學校

「姉がございますけれ共、もう他へ嫁いで居ますし、只今では私と弟ばかしでございます、卒業は三十九年ですから、丁度華族女學校最終の卒業で、私共が出てから學習院となつたのでございます、專修科に殘り度いとも存じましたが、母が病身なのと、やつぱり女は實際に家の事も致さねばならぬと申されまして、只今では仕事の達者な者を置きまして、裁縫の稽古を致したり、母の代理を致す事もございますし。致して居りますので、」と何でも伺ふまゝに、隔てなしに御話し下さいましたのは、ほんとに天眞爛熳なお方と御見上申しました、

△なか／＼の御多忙

「其外でございますか、盆石が好きでございますので、それも致したり、いろ／＼好な事を致して居ります、語學ですか、西洋人を家へ招きまして、英語を致して居ります、始も日本語を少々………」

音樂はピヤノを遊ばすか、と存じたら、生田流の御琴を遊ばすとの御話し、西洋風のハイカラなのよりも閑雅な日本の粋を御好み遊ばすのだ、と記者は一人でうなづきました、

「まあ種々と遊ばしますのは、お大抵ではいらつしやいません事で、」と申しますと、「いゝえ少しも出來ないのでございますよ、」と御謙遜な、其内もう御出かけの時刻が參りましたので、御暇致さうと存じて居りますと、

父君子爵が御見えになりましたので、御邪魔を致した御挨拶を申上て、何か女子の心得になる事を、とあつかましく御願ひ申ますと、

「さうですね、どこ／＼迄も科學の進歩した歐米の文明を吸收するといふ事は、大切な事である、が然し、女の尊ぶ可き淑德といふ事を忘れてはいけないので、今日物質的研究の盛んな歐米の女子教育者でも、此事は皆論及して居るのだから、殊に日本の女子教育でも賢母良妻を眞に作るといふ方針が大切である、現今既に其方針であらうけれ共、いくら文明の國が出來ても

女子は女子らしい婦德といふ事を外にしてはいけないのであらうと思ふ、然し決して卑屈な考へをして、引こみ思案といふ事はよろしくないので、時勢に應じ場合によつては、外出する事もあるであらうが、若い娘などが、一人で行くといふ樣な事は、考へある家庭では決してさせないので、私方などでも私か家内か連れて行かねば、同窓の友人の會などにも、めつたに一人で出すといふ事はしないのです」との御話し、

賢母良妻主義で敎育されて、それを實行せねばならぬ、歐米の文明を飽く迄吸收して、日本特有の婦德と相俟つて婦人の人格を修養せねばならぬ、との御話しは誠に適切な御敎へと存じました、

御玄關ではお乘物の用意が出來た樣子、誠にいろ〳〵と難有く、御禮を申上で下りますと、お二方とも御出になりますので、どうぞ御入り遊ばしてと、御挨拶申ましたが、どうせ行くのだからと仰しやつて下さいました、

玄關の敷石には子爵のお靴が淸子樣のお草履と並て、記者の鼻緒のゆるんだ粗末な下駄が置てあるのみか、袴をはいた家職の方が、色のあせた傘を叮嚀に渡して下さつたのには、もう〳〵恐縮でございました、御門を出ると後から出た二輛の車は神田の方へ、……廣告屋が活版にしたものを配つて居ます、一番町邊は邸町で實にひつそりしたものと存じました、

（二）神戸絢子女史

種々の世評のあつた幸田女史の後をうけて新進の妙手と稱されて御出になる神戸絢子樣を御訪ね致すために兼ねて西紅梅町と存じて居ましたので、お茶の水橋前で電車を下りて駿河臺は薩摩家の前を通り過ぎますともう高く澄み切つた、秋日和の空氣を破つて、床しい洋琴の音が聞えました、突然ではあるけれども、御門を入つて玄關に音づれますと、女中が出まして、來意をきゝとり、暫くお待ち下さいと奥に入りました、

するとピヤノの音ははたと止みました、

どうぞ御上り下さい、と叮嚀に導かれる儘に、二疊の御玄關を右に、お部屋を一つ通り越して、廊下傳ひに硝子障子から氣持のよい日光の入る八疊の御座敷に入りました、

お床には優にやさしい、土佐繪の軸物が掛けられて、葵と揚羽蝶の金紋の付た黒塗の箱が置てある、硝子の箱に入つた、可愛らしい西洋のお人形は、御留守を遊ばした、愛娘のおみやげか、など一人美しう飾られたお部屋を、見廻して居りました、ピヤノの上ににえぞ菊の盛花、西洋人のらしい數葉の寫眞は、定めし音樂名家のであらう、

小形の卓を中央にして、置かれた椅子二脚、壁の方に寄せられた長椅子に、腰を下して居ますと、後ろの襖が開かれて、

「どうも失禮いたしました、」とにこやかに出て來られた女史は、フラネルのお單の裾長く、菊の模様あるおみ召、江戸紫の紋羽二重の御羽織を召して、肉付ゆたかに、くつきりとお色の白いのに、漆黒のおぐしの前髪をちぢらせ思ひきり、廂に遊ばした御容子、音樂家としては大切な白魚を並べた樣なお手をお組みになつて椅子に寄られました、

「どうぞ音樂に就きまして御土産話を頂戴致したう」と申上ましたところ、

「私共が只今音樂に就てなど〻、意見がましい事は申上られません、」と大そう御謙遜あそばして居らつしやる。

音樂學校へは毎日御出勤ださうですが「今日は午後から學友會がありますので、珍らしく朝の内在宅致しますが、どうも忙がしうございますから」と、控へ目がちな御話し振り、

それで記者はとりとめもなく、頭に浮び出した事を伺ひました、

△佛國滯在中

「一昨年の三月に出立致して、本年の六月に歸りました、歸途伯林の方へも立寄りましたが、何を申ても僅かの年月でございますので、自分の勉強以外に、他の

事を見聞致す暇がございません位でした。」

△音樂會などは

『もう毎晩の樣にありましてね、オペラなどですと皆樣もうずゐ分美しう粧つて御出かけになりますけれ共專門家の集會だけならば、決して綺羅を飾などゝ、申樣な事はありませんです、」

△巴里の奥樣や女生徒

『なんでも只巴里と申ますと花々しい都で、流行の中心點と思はれますが、なか〳〵眞面目でよくお働きになります事そして衣類などでも取合せはなか〳〵お上手ですけれ共、質素なもので修業中の女生徒などは、平常と外出と晴着との三枚の着換へがあれば、よいと申位なのです、そして奥樣方で中以上の方が、籠を持つて一週に一度、或は二度立つ市へ日用品の買ひ出しに御出になりますのは、普通になつて居るんでございます、」



記者がとりとめもない質問にもお迷惑な顏を遊ばさずにお答へ下さいました、以前の女中がお茶を運んで參りましたので、一寸話しが途切れました、で

△氣候

『まあよく日本に似て居りますですよ、然し冬が少々長いかも知れませんが、あれは家の建築が違ひますし、車でも馬車でも冬向きは、皆湯タンポの設けがありますから、外出致す時でもそんなに苦しくはございませんし、夏などは却つて凌ぎ易い樣に存じました、」

△語學の研究は

以前から少しづゝ佛語を致して居りましたから、旅行中も左程不都合も感じませんでしたが、別に語學の研究は致しませんです、はい、健康は御蔭樣で、二年の間風一つ引きませんでした」との御話し、ほんとに御結構な事です、

△お床にある箱には何

私の所から見ますと、ヴイオリンの箱の樣に見えますかと、遠慮なく申しますと、につこり遊ばして「あれは刀箱でございますよ、父が骨董が大好きなものですから」と、仰しやいました、

長く御邪魔を致すのもと存じて、御挨拶を申ますと、「折角御出下さつたのに、何も申上る事もなくて、却つて失禮致しました」と、わざ／＼玄關迄送つて下さいました、

御門を出ると、雲突く樣な清國留學生が早稲田の服を着て、チンプンカンとさつぱり分らぬ支那語で打興じつゝ通り過ぎました、


WE HAVE
FINE TIME
AT
NIKKO.

私の見合（懺悔）

薄雲

私が斯うして女優になる目的で勉强してる譯ですか？………私だつて何も始めつからこんな者にならうなんかつて思つて居たのぢやアないんですよ、親達にしろ行末我子が舞臺に現はれやうなどゝは夢にも知らなかつた事でせう、言はゞまあ捨鉢つて譯なんで せうかね、思へば果敢ない身の上ですわ

私は今でこそこんな阿婆摺になつちまつた樣なものゝこれでもズーッと以前は矢張りをとなしい御嬢樣で御乳母日傘で育つたものですよ、何の？御嬢樣がどうして女優の玉子とまで成り下つたかを早く言へつておつしやるの？まあ〳〵おせき遊ばさずに、只今ゆつくり御話しますわ。

一體私の父と云ふのは 某 會社を經營し臺灣其他にも鑛山を二ッ三ッ持つて一時は仲間にも巾を利かし、隆隆羽振つたものなんです。それで生活の方なども派手好きの母が一切きりもりですから隨分贅澤のありだけを盡し弟の利雄は芝慶應義塾に私は麹町の 某 女學校に通學して不足も知らで成長ちました、

其頃の我家は實に景氣が好かつたんですよ、旭の昇る勢と言はふか、龍の天上といつたらよいか相場がドシドシ當りましてね、鑛山の方も都合が好いし、宏大な邸を新築するやら鎌倉に地所を買込むやら今思つてもゾク〳〵しますわ。

そして始終俳優や力士、藝妓などが立ちかはり入替り御機嫌伺ひにやつて來ましてね、まあ御世辭半分私みたいな者をつかまへて御きりやうが好いとか姿が何とか一にも御嬢さん二にも御嬢さんとう〳〵寄つてたかつて、おだて上げつちまつたんですね、御友達仲間ではまた私がお金錢をパッパとつかひますし、學校の成績も惡い方では無かつたので、これも八重子さん八重

子さん、木佛でも金佛でもない矢っ張り普通の少女だつた私は周圍のお蔭ですつかり思ひ上つた誇と虚榮心のかたまりみたいな者に作り上げられちやつたんです。

母は私を出來得る限り派手に美々しく裝はせて日曜每に芝居へ連れてまはるのを、何よりも何よりもの自慢にして居ました、私も芝居は其頃から三度の食事より好きでしたけれどまさか將來觀られる側に立たうなんかとはねえ……。

一番最初の緣談はたしか十六の、でした。それは日本橋の藥種問屋で八代續いた老舖の若旦那といふのでしたが無論、ピーンとはねつけてしまひました。引續いて彼方からも此方からも相應な家から望まれたのは幾回か知れませんけれども思ひ上つた私の眼にこれはと止る程なのは一件もなくて其中に女學校も三十餘人の中六番の成績で卒業證書を握りました。



其後一年餘りも踊や音樂や外國語等の稽古で忙しく暮すうち母がまづ「あまり年の老けないうちに相當な所に片付けなければ人目がわるくて……」と斯う云ひだしましたの、私も今更らしくまはりを見ますと學校時代のクラスメートは半數以上姓が變つて金物屋の娘さんが醫學士夫人と呼ばれゝば陸軍中佐のお孃さんが男爵夫人と出世したりで隨分世間はちがつて居した、そこで今までは結婚に就いては見返りもしなかつた私

も急に考へが變つて來ましたから始めて見合といふものをしました。

先方は父の懇意な梅林さんといふ人の遠縁に當る法學士前以て諸方へきゝ合せて見ますと何所でも大分評判が好いので兩親も私も大乗氣でその當日は大したさわぎをいたしました天長節に間もない頃で庭の菊が盛りでした。丁度前晩から秋雨が降つて生憎だとは思ひましたが母は早朝から女中を指揮して何度土藏へ通つたでせう、ズラリと並べた箪笥の前に陣をかまへて衣服や帶やを出したり入れたりそれにまるで夢中なんです髪結が來て私の桃割が久し振りで島田に直されますと休む暇もなく御風呂に引張られ、ヤレ御化粧ソレ御召替、漸くのことで盛裝した身體を手俥に乘せて母と二人家の玄關を離れた時にはホッと息を吐かずには居られませんでした。

樂しい想ひを乘せて走つた俥の梶棒が威勢よく梅林家の玄關先に下ろされて廣いタヽキの靴ぬぎに立た時、私の兩眼はフト或る物を見出して泣きたい樣な氣がしました、大きな男の靴なんです（言ふまでもなく先着の學士のだとは知られました）穢せたオヴアーシユーズの先の方にも踵のあたりにも泥のかたまりが一ぱいでどうしても雨ふりの街路をこの靴でこねまはしたものだとは一目でわかります、そればかりぢやない色のあせた毛繻子の洋傘、雨のしづくでしとゞに濡れたそれを見た時はたとへがたなき一種の不快が胸にあふれました。

やがて應接室に導かれてマンテルピースに背を向けた一人の若紳士に紹介された時は流石に心もをどりましたけれどあゝそれも瞬間……忽ち私の眼に浮んで來るのは泥の靴、毛繻子の洋傘………。この雨の中を――まして華やかなる可き見合といふのに――俥にも乘らすシヨボ／＼歩いて來たかと思へば侮蔑の念がつて、最初つから馬鹿にしてかゝつたので恥しいとか何とかいふ樣なことは少しもありした。

利を話しかけられても私がヽヽロクに返辭もしないので梅

林の奥さんと媒とかが大變氣を揉むのが、そりやもう實にをかしいんですの、私は此の人を拒絶する口實にはあの毛繻子の洋傘で充分だけれどその上にも何か見出してやりませうと思つてヌッカリにらんで置きましたが黒い打紐を結んだニッケルの時計、流行におくれた質實なオキタイ、虚榮に充ちた私の心がどうしてどうしてこれで滿足できるものですか、我家に歸り着くや否や、



「母さんはあんまりだわ、あんな素寒貧なんぞに私をやらうと思ふなんて……」と思ふさま恨みを云ひましたの、母も餘り進まないと見えて直ぐに梅林の方へ断りますと早速奥さんがかけ付けてねえ、將來に出世する人だから惜しい〳〵つてすゝめるんでせう、だから猶更私の方では「嫁に來人がないからあんなに強いてといふのだらう」ぐらゐ

でとり合ひませんでしたらね、驚くぢやありませんかその素寒貧殿が其後間もなく英佛獨へ三ケ年の留學此の春歸京すると直ぐに學位を授かつて現今ぢや少壯博士のパリ／＼でねえ、エ？御姓名ですか？今迄かつぎ出されちや彼の方の御迷惑、まあ明白には申上げないところが花でせうよ、これだから毛繻子の洋傘だつてなか／＼馬鹿にはなりませんわね、奥さんには先頃○○博士の令嬢をお貰ひになつたんですつて、私新聞で知りました、お茶の水の出身ださうで御寫眞も一寸出て居りましたがほんとに美しいかたですよ。

次にまた梅林さんの世話で見合をしたのは三井物產の支店員、高等商業の出身でね、さすがマーキユリーの制帽姿で幾多の女學生連をヤンヤと云はせた人ほど有つて瀟洒とした身の服裝から靜かに落ついた言語動作一分のスキなく垢拔けのしたところが何よりうれしいと思ひました。

「ハア茂本ですかなか／＼ハーモニカは達者な樣です白馬會へは御いでになりましたか、パレット倶樂部も盛んですねえ、」一寸まあ斯んな樣な輕い調子で繪畫にも音樂にも淺からぬ趣味のほどはうかゞはれますし梅林の奥さんや母などには歌舞伎の狂言はどうとか斯うとか人をそらさぬ應待振りはなか／＼世なれたものでした、

今度こそはと母も私も心をきめて猶よく調べますとどうでせう、月俸實に六十圓、あゝなさけないと思ひましたわどうしてそれで流行の衣服をまとふ事なぞ夢にもできるものですか、胸に浮ぶは彼の眼、彼の聲……けれど思ひ切つてこれも亦美事に斷つてしまひましたの、私の頭が如何程熟した場合でも決して其身の損得といふことを忘れたことはありませんから。我利々々亡者の親玉ですわね、父は男の事ですから、

「なアに、食へる位は持たして遣るさ、人物さへ氣に入つたらサッサと極めたら宜いだらう」と申しましたけれど

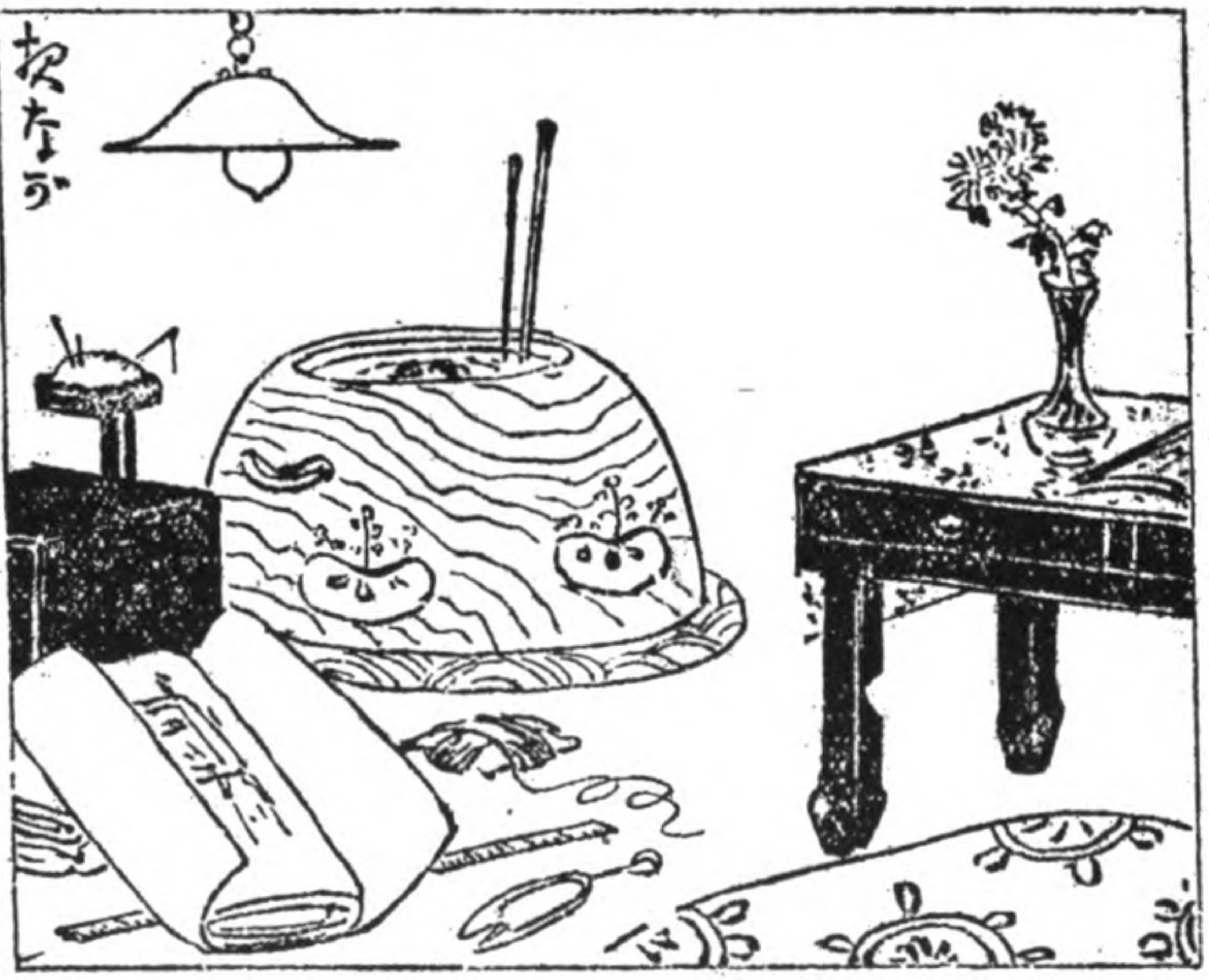
「他に望み人がないではないのに六十圓ばかりの人に遣るのは八重が可愛想です」と拜金宗の母は私の心持

をよく酌んでくれました、

先方で非常に殘念がつたと聞いた時には私の心は將に動かうとしましたけれども、私の出世、出世と心に叫んできれいに此の方もあきらめたので御座いました。

君江——宮——何の　私だつて……現在でもこれ程の地位なのだものどうして此のまゝ……と。ホヽヽどなたにしたつてお若い時分は斯うでせう？、まして私は極端な虛榮心にとらはれた人間ですものこれが心の眞の聲です。

其後も申込は降る程ありましたけれど私の眼からはいづれもコンマ以下で迚も相手にはなる氣がしません、其の翌年の春は大學の助教授をして居る醫學士から強いてと望まれましたけれど財産が少いのと妹が有るので斷つたんです、此の方も現今では〇〇病院の副院長でなか〳〵素晴らしい評判ですよ。



友達からはよくこんなことを云はれましたの

「八重子さん大層高くとまつてらつしやるのね、あんまり人ぢらし遊ばさずにどなたかとシエーキハンドなすつたら如何？」

「いつかの男爵を振つちやつて更にベターザンを求めてらつしやるんですねえ男殺し!!!」

斯う猛烈にきめつけられちやア意地にもつまらない人間なんぞとマリエヂする事はできない譯ぢやありませんか。

親友の△子さんの從弟に當る歩兵大尉の人つてのもね

えゝ、隨分しつこく言つて參りましたの。けれどもこれもい、ひぢ鐵砲で撃退しました、カーキー色の軍服つけて北海道は旭川の聯隊詰なんか横つから振はないぢやありませんか、ランドセル背負つて長靴はいて、かけ足なんぞしてる野むつくるしい恰好は振へるほどに嫌ひなんです。

それを知つてる△子さんが…………と思つた時には痛切に烈しい侮辱を感じて

「私やよその賣殘りなんぞとひとつに見られちや困りますよ」とひそかに獨りで叫びました。

池の睡蓮は白く咲いて例年の通り樂しい夏は來ましたけれど私の一家には其頃から拂ふことのできぬ、暗い雲がかゝりました。鑛山が外れたんです、會社の事業も思ふ樣に捗ひません、試掘であけた穴はだん〳〵太くなる樣子で前からねだつてあつたダイヤの指輪もつゞれの丸帯もあとやアしない別莊行も見合せで、あの母さへも

「歌舞伎が開場いたつてねえ」とまでは云つても出かける程の勇氣はないんでした、それでも父に秘密だと云つて其頃金のべの煙管を丸喜にあつらへたり何かして居ました。

腰がないて萩がこぼれて秋もやう〳〵更ける頃に父は病院へ入りました。あれや是れやの心配が凝つて四十度の高熱です。弟は惡友にそゝのかされて此の中だといふのに三千餘圓を持ち出して行衛知れず、母は身につく貴重品などを殘らずまとめて信州の生家へ歸つたんです、あゝ。勝氣な私も此時ばかりは泣き伏さずには居られませんでした。

父が永久の眠りに就いたのは家に憎い〳〵惡鬼が來てからの話にのみ聞いて居た財產差押といふことを執行し去つたその夕でした、げにその夕でした。

寒露が襲つたとの報知に驚かされて氣もそゞろ走せつけた時には最早父の呼吸は止つて居ました。雨催ひの雲は低く空をかくして、桐のわくら葉ハラ〳〵と、雪と白いベツトに横はつた父の遺骸は氷よりも冷えてその面には深く〳〵ほり付けられた樣な苦痛のいろ………

悲哀のかげ………。

夕暗せまる病院の一室で私は冷い父にとりすがつて聲を惜しまず泣きました、

孤獨、孤獨、何といふ悲しい淋しい言葉でせう、僅か數ケ月前までは我が世は永久に春と信じ父のなさけ、母の愛にも限りなく浴し得らるゝものと思つてましたのに………、我家の窮狀がこれほど迫つて居やうとは更に知るよしも御座いませんでした。

不貞の母は家を捨て夫を捨て子を捨てゝ去り弟も亦瀕死の父を顧みで遠くいづれにか走りました。



私はむしろ今この塵の世からのがれ去つた父を幸福だと思つて强いて淚をぬぐひました。さうして僅かに我れと我が心の駒にむち打つのみです

一時にして父母を失ひ弟を失くした私の身はよるべなきさの捨小舟、淵瀨さだめぬ飛鳥川の彼岸にたゞよひ此岸に浮ぶも先の世からの運命であらうとあきらめて、めゝしい淚はこぼしますまい。

漸う家の始末も附いて私は伯母にかゝりうどの、昨日にかはる果敢ない境遇、けれども此時の私は

もはや、それをいつまでも歎き得るほどのしほらしい女ではありませんでした、たゞ新に胸をついて起るのは自分の前途を如何にすべきかといふ問題です。

亡父の百ケ日がすぎて三日目の夕暮には、またも見合に引出されました、別にいなみもしませんで伯母のいふまゝに裝ひこしらへて。

會つて見て驚きましたわ、何てなさけない人なんでせう、東北特有のズー／＼辯、朝鮮皇帝そのまゝの美髯(ひげ)を勿體らしくひねくりながら、ロンドンのエッフエル塔やパリーのハイドパークなんて知つたか振りをやり出された時には實際なぐりつけてやりたいと思ひました。

「多額納税者、町會議員、それがどうして難有いんでせう」と云ひましたらば、伯母は

「八重さんは以前に我儘を云つた罰で、人並はづれて目が肥えてるから誰れを見せたつて迚も氣に入ることはありますまい、けれども今はもう氣儘の云へる身分ではありませんよ、親の地位、名譽があればこそ人は爭つてあなたを得やうとあせつたでせうが、どうして今の人は怜悧ですからねえ、裸一貫の女なんぞ、どんなに容色がよくつたつて目をつけてくれる人はありますまいよ、後悔おしでない!!」

斯うでした、伯母の口から聞かされたのは唯これだけの言葉でした。けれど私はこれで悟りました、伯母の言葉は眞理です。此時限り私はもう結婚に因つて榮華の夢を將來に實現させたいと願ふ心はスッカリ捨てゝしまひました。

けれど……けれど……矢つ張り未練といふのでせうかたとへ此の身を八ッ裂にせらるゝまでも、ズー／＼辯の田紳なんぞにかぢり付いて、東北の山間にまつりこめられるには忍びません、それを強いるのはあまりにむごい姿の心だとどんなに恨んだか知れません。

走馬燈の如く頭の中をグル／＼めぐるそのかげは、自働車——馬車——ダイヤモンド——金の腕輪——。獨立、獨立と絶叫して私は女優を思ひ立つたのです、左樣です女優——華やかなるべき獨立生活といへば女

僥倖外に果して何を見出すことが出來ませうか、親しい友からは續々と絶交狀を送られて居ります、なつかしき舊師の一人からは涙ながらに思ひ返せと切に勸告せられました。

けれど私の心は金鐵ですどうして此の石よりも固い決心を今更ひるがへすことができるものですか、

「萬難を排して志す所に猛進し、必らず成功して御目にかけます」とは亡父の墓前にも誓つて來ました。

とは申すものゝ私も弱い女です。小雨しぐるゝ秋の永夜、たよりない身の行末に思ひ到れば小さな胸はかき亂されて「あの時、親のいふまゝに結婚して居たならこんな悲しい思ひもすまいに……」と人しれぬ涙の袖をしぼられるので御座います。



あゝ……これも返らぬくり言です、いざさらばみじかき過去の半生に於て幾多の男子のハートに深く失戀の征矢を射込んだことをせめてもの誇りとして此の後はひたすら藝術に命を捧げませう、さらば皆樣、永い目でどうぞ御覽下さいませ……。

慈善事業を企て給ふ方々へ御忠告

△獨逸に於ける貴婦人の慈善事業

一時は都も田舍も婦人の會合には必ず頭に付けられた此慈善の二字。

曰く慈善音樂會、曰く慈善市、曰く慈善演劇會と來はあらぬ噂さ迄惹起した樣でしたが、

此慈善と申事の意味は、一般にどう解釋されて居るでありませうか。

今日先づ衣食にこさら無い方々が、色々と御世話下さつて、集まつた其金品を貧民弱者に惠與して、其身心を慰安してやる、なる程これも誠に結構な事でございます。

けれども一體今迄の私共のごく僅かなせまい經驗によつて考へて見ますと、彼等は依賴心が增長して居るの下は無いか、と思はれる事も度々ございます。

決して一口にさうと斷言は出來ません、内々は全く病氣の爲めに、四肢の自由を失なつて勞働に從事する事も出來ない、眞に憐れな狀態にある者もありますけれども、

殊更に同情を得て、配分される金錢物品の少しでも多からん事を希ふ餘りに、人數を多く申出たり、なにかする者もある樣に存じた事もございますのです、俗に乞食を三日するとどうも其無責任な放浪生活の味が忘れられ無い、と申ますが男にあれ女にあれ、今日一生懸命に稼ぎますれば、決して食物に不自由な事はないのであります、それを少しでも人を賴み同情に訴へて安逸を欲すると云ふ、其一片卑劣な根生には同意する譯には參りません。

つまり慈善は其人の心にも、何物か刺戟を與へる事が必要であると存じます。

それで、獨逸から御歸りになつた方にあちらで行なはれて居る慈善事業の有樣を伺がつて大變に感心致しましたと申のは、

△模範的なる獨逸の慈善事業

彼地の都會で先づ東京の樣々區々分れて居りますと其區内の貴婦人方は、交代で以て特に設けられて居る所に出張される、それは一區に一箇所學生なり勞働者なりに食事をさせる建物ださうでございます。

其番に當られた奧樣孃樣は、各々仕事を分擔されて材料の買ひ出し、割烹、切符賣、給仕などそれ〴〵の役目を御務めになるのであります。

そこで買ひ整へられた材料はライスカレー或はシチユーなど同情の赤誠のこもつた食料となつて卓上に並べられる。

でも決して無代で與へる事はないので、極々安直な實費を計算して切符を賣る、群集して居る勞働者や學生高價な借間住居の獨身者などは女と云はず、男を論せず、愛情あり禮儀ある婦人の手から切符を求めて入場するのであります。

これは決して料理屋でありませんから、食卓や食器は美しくはありません、けれども清潔である、場内はまことに整頓して居る。

それで彼等は知らず〴〵の内に、禮節を辨へる樣になる、勤儉自から持して、愛あり敬ある同情者に對して感謝の外は無いのでありますから、皆行儀よく、靜かに愉快に、食事を終る頃には、彼等がめつたに聞く事の出來ぬ、高尚優美な音樂に、陶然として耳を樂しましめるのであります。

之は何れも貴婦人方の心盡しのもてなしである、大學に苦學數年の學生で卒業する迄此所で食事をした者もあるさうでございます。

引くらべて我國の有樣はいかゞでありませう。

△だらしなき日本の慈善事業

何事にも一得一失は、脫れる事の出來にくいものですけれ共、御召物の御都合で出席に遲速があつたり、いつでもあの方々ばつかりが羽振を利かして御出になるから、いやだなどゝ、つまらぬ暗鬪に頭を惱ました

り遊ばして、慈善を行ふ爲めに、自分が不愉快であると申事は、ほんとに恥かしい事ではございませんか。

とかくの評の立てられ安い藝人達と近づきになる處から、つい妙な噂の種子蒔をする樣な事にもなるのでありませうけれども、ともかくも今日爲ず可き事は澤山あつて只もう其人を待つて居るのでありますから見榮とか、名譽とか、申ような雜念をすつかり取除けて我國でも外國へ對して誇りとする事の出來る樣な、そして消えたり現はれたり、變幻常ないものでなく趣意あり精神あり、そして眞の慈善をしたら婦人方によつて、何物か始められる樣に、否々今後生存競爭が激しくなればなるだけ、必ず其必要が起つてまゐります

御覽なさい一日汗水流して働いた勞金も、夕方くゞるなはのれんの、濁酒に代へられるではありませんか東京市中に東し西する男女幾多の學生が、食事の爲めに思はず入るそばや、すしや、更に度を超えては牛肉屋、遂には料理屋と、終りには墮落の淵に沈む人もないではございません、慈善の必要はこゝにもあります。

日米婦人の比較

○思ひ切つた我儘　最近十年間に、米國の社會に起つた一大變革は、婦人の發展です。今日の米國は、婦人は其主君で、男子は其奴僕であるといふ有樣です。斯樣に實際に於て、女權萬能といふ境遇にあるにも拘はらず、尙は其上に政治權をも獲取せんと努めて居る。政治權のない今日に於てすら隨分、思切つたる我儘を働いて居る米國婦人が、一朝、投票權を握つて、婦人內閣でも作る樣になつたら、米國男子は、如何になるでせうか。然し案ずるよりは產むが易し、其參政權獲得の曉は、案外正平な政治が行はるゝかも知れんが、反之、日本では女子の政治運動は大の禁物である。日本の女子の職分は昔よりチヤンと極まつて居る。日本婦人は、家を守り、夫を助け、子供を育てるを以て最上の樂として、外に別段の野心がないが、米國婦人は、却々左樣でない。政治界に出でゝ國政を論じても見たい、社交界に巾を利かしても見たい、裁判官にもなつて見たい、何んでも遣つて見たいといふ方である。

○世界中何所にもない現象　世界何國に行つても米國婦人の樣に奢侈な生活をして居るものは先づあるまい。金銀寶石に包まれて居る富豪の妻女は、勿論の事、多少の日給にて働いて居る、傭女の末に至るまで、分外の贅澤をして居るやうだ。紐育婦人で一本の

女(その二)

乳兒食物の新發見
「アレンバリーフード」に就て

嬰兒の哺育品は母乳に優るものはないとは醫學上の定說なれども母乳を用ふることの出來ない場合も尠なくない斯かる場合に生牛乳若くは「コンデンスミルク」の如き者を消化力の乏しき嬰兒に與へて間々大害を釀せることは嬰兒生理學上明瞭なるのみならず又實例に乏しくないにも拘はらず今日まで之れに代るべき哺育品のないのは育兒上の遺憾のみならず亦以て二十世紀の現代に於ける一大缺點ではあるまいか然るに最近英國より輸入し來れる「アレンバリー」小兒食は母乳と全く同一なる營養と消化性とを有し絕對的に完全なる乳兒の營養食物なるのみならず又大人の病後快復期に於ける食物として最も適當の滋養品である故に生母又は乳母の病に罹りたる時と母の健康容色を保たせしめんが爲め哺乳を欲せざる人及び一般衞生家は「アレンバリー」小兒食を用ひよ「アレンバリー」小兒食には左の三種あり

即ち第一號は生後三ヶ月間、第二號は四ヶ月より六ヶ月迄の嬰兒に適せる樣滋養成分の割合は人乳と同一になし、第三號は六ヶ月以後の兒用として麥芽精を調和せるものなり

尙詳細なる說明書は本品御購求の節添附せると雖御要求に依り進呈す

定價

一號 二號 各一罐に付 壹圓貳拾錢
三號 一罐に付 七拾五錢

一手販賣店 東京市日本橋區本町四丁目 **田邊元三郎**
電話本局二八七三番 振替口座一六六六三番

最上醬油

キハク印

釀造元
茂木七郎右衞門
千葉縣野田町
電信略號ハク又キハク

東京支店
中野長兵衞
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

女子作文の一大寶典

女學生方の作文參考書は　何が最適良なるか？

お嬢樣のは？　奥樣のは？

本書 収むる所普通文あり談話體文あり短文ありて 現代 名媛才女 の妙篇佳作 無慮數千百章 婦人必須の文題網羅 して殘すなし出版以來益々 世の歡迎 を高め多大の註文の爲暫く品切の處今回全部再版出來左の特價發賣をなす時機失ひ易し神速御註文あれ！

阪、大町、尾上、鹽井、下田、森田、諸大家選評

明治才媛文集

特價發賣

定價 第一編 自第一集至第十三集 各 金廿五錢郵税四錢 全 十三冊金參圓廿五錢重量六百五十目 第二編 第一集金廿五錢郵税六錢

●五萬部限特價 各冊 金貳拾錢 郵券代用一割増●郵税實費申受く●百冊以上一纒御註文は遞送料本社持ち

第一編

○第一集 十二版 ○第二集 十二版 ○第三集 十版 ○第四集 九版

○第五集 九版 ○第六集 九版 ○第七集 八版 ○第八集 七版 ○

第九集 五版 ○第十集 五版 ○第十一集 四版 ○第十二集 四版

○第十三集 三版 ●●●●●●●●●●●●●● ○第二編第一集 再版

發行所 東京神田南乘物町十二 合資會社 東洋社 電話本局二七二一 振替口座五一四一

女（るの四）

近衞公爵御母堂貞子閣下題歌　伊東元帥令夫人美津子閣下序文
前文部大臣 [illegible] 男爵牧野伸顯閣下題字　貴族院議員 帝國教育會長 男爵辻新次閣下序文

家庭之栞　婦人文庫

女子一生を時代別に研究せる精巧美術書廿數葉とは本書の特色也

箱入全一冊
菊判壹千七百九拾六頁
アートクロース
洋裝頗美本
定價參圓八拾錢
特價貳圓八拾錢

本書分擔執筆の大家と科目

家庭の巻　帝大學文科教授文學博士　井上哲次郎君
讀の巻　前學習院女學部教授　安井哲子女史
結婚の巻　市衞生試驗所長醫學博士　遠山椿吉君
主婦の巻　日本女子大學校教師　松浦政泰君
妊婦の巻　產科婦人科病院醫學博士　吾妻勝剛君
育兒の巻　小兒科病院長醫學博士　瀬川昌耆君
教育の巻　日本女子大學校長　成瀬仁藏君
禮法の巻　實踐女學校長　下田歌子女史
道德の巻　東女高師範學校文學博士　遠藤隆吉君
姻の巻　三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子刀自

文章の巻　女子大學校教師文學博士　鹽井正男君
裁縫（和服）　東京裁縫女學校長　渡邊滋君
裁縫（洋服）　女子美術學校教師　伊澤みね子女史
茶の湯の巻　貴族院議員子爵　松平直敬君
生花の巻　學習院女學部講師　山下寅吉君
音樂の巻　前東京音樂學校教授　天谷秀君
料理の巻　大日本割烹學會長　石井泰次郎君
手藝（刺繡）　共立女子職業學校教師　平木平八君
手藝（編物）　共立女子職業學校教師　豐原繁尾子女史
手藝（造花）　共立女子職業學校教師　金子支江子女史

發行所　東京市本所區緑澤町壹丁目　大日本家政學會
電話浪花七百九十六番
振替口座東京一六二五八番

女(ろの五)

耳鼻咽喉病

美形隆鼻術
（はなをたかくうつくしくするはう）

手術 午前 夜間

本術は注射法に依り低き鼻を隆くし鼻の恰好を整備へ美形ならしむるを目的とする者にして身體に害を及ぼさゞる安全の文明的手術なることを保證す

九段下御獄教會裏通
神田今川小路二丁目十一番地

和田耳鼻咽喉醫院

和田昌訓

ちゞれ毛（くせげ）婦人の新福音



並に（赤毛を黒くし白毛を防ぎフケを去る奇劑）

▲ちゞれ毛・くせ毛は全治せぬものか？
▲赤毛は必ず黒くならぬものか？
▲白毛は果して豫防できぬものか？
▲フケは如何にして取れぬものか？

前記の問題は久しく醫學藥學界の疑問として一時は不治のものとまで斷言されしも斯道に熱心なる藥學大家は遂に一新奇劑を發見されたり其實驗に依ば百試百驗確全治を保證す該劑を望む方は速に郵券二錢送れば説明書呈す〇東京神田三崎町一の二 北澤定子

▶最新刊◀

都新聞記者 伊原青々園序
都新聞記者 平山武者所著

表紙 黒崎修齋畫伯意匠

洋行みやげ 艶艸紙

大好評 全壹册

定價金廿五錢 郵税金四錢

都新聞で評判を取つた「舶來艶物語」と米國廓細見ともいふべき「亞米利加たより」と赤毛布一人も隨分際どい色の失策を書いた「哈爾賓色めぐり」と三つを合した面白い讀物

東京市神田區美土代町二丁目一番地　**博文書院發行**　賣捌は各地の書店

女（ろの六）

日本唯一の演藝專門大畫報

第參年 **演藝画報** 十一月號

十一月一日發行　一冊參拾錢　郵稅貮錢五厘　三ヶ月分郵稅共九拾四錢　六ヶ月壹圓八拾錢　壹ヶ年參圓半

● 三都十月狂言寫眞　卅貮頁數十種　アート紙印刷

◎ 口畫　名優似顏畫（鳥居淸忠）十種香（佐藤忠郎）　◎ 漫畫　演藝諷刺（樂天、淸忠）滑稽演藝模樣（森靑山）

◎ 脚本『何も言へぬ』　バアナード、ショー作梗概（佐藤紅綠）

◎ 芝居見たまゝ　經島娘生贄（孔雀船）封印切（妖星子）四谷怪談（巴之助）仁左衛門の大石（公孫樹）等

◎ 通俗演劇の必要　島村抱月　識者に望む　伊井蓉峯

● 名家眞相錄　（東京）市川鬼丸（寫眞記事）（大阪）中村梅玉父子（同上）

◎ 歌舞伎座新作狂言 經嶋娘生贄に就て　（作者）榎本破笠（意匠）村田丹陵

◎ 一役一言　盛綱と忠兵衛（雁次郎）四谷怪談お岩（梅幸）　樂屋見た儘　雁次郎仁左衛門

◎ 役者の顏　猿之助秀調團子の研究　新派俳優評　河合武雄と喜多村綠郎

◎ 芝居寫生畫　歐米畫報（金僊）歌舞伎座東京座（林綠水）　◎ 鳥居家代々の暫　數畫（淸忠）

● 十月狂言選擇撮影　歌舞伎座東京座舞臺面多數

東京京橋南佐柄木町　演藝畫報社　郵便爲替貯金口座六〇〇貮番　電話新橋五〇五七番

完全なる常識の人たらむと欲せば此書を見よ

加藤咄堂先生
大住舜先生 共著

常識之基礎

十一月十七日限
斷然正價に復す

好評嘖々頻々として重版！

（萬朝報）は本書を許して『今日の時勢是あらざるべからずして未だあらざりし書也…現代の人として必ず有するを要する智識を總じて供給したる也全書を宇宙篇、地球篇、生物篇、人類篇、社會篇の五篇に分ち……誰人の讀物としても適し重寶此上無し』と云ひ（國民新聞）は『專ら近世學術の通論を紹介し先も丁寧親切を極む各階級の人には處世上緊要なる常識を養成する上に於て頗る補益あるを疑はず鉛釘も亦新案を以てし美麗也』と賞し（東京朝日新聞）は『先づ其著眼が面白し次に其排列が面白し更に又讀者の心理を巧に應用して倦怠なく讀了せしめんとしたる用意が面白し…且つ巻尾に索引を附して百般の疑問を此書中より繰り出すに供したるは殊に親切也』と賞し（讀賣新聞）は『一般の人士として是れだけを咀嚼するを得ば實際生活に於て先づ以て不足なかるべし網ばい一種の形式を備へたる百科辭書とも稱すべき者ならん歟』と評し（報知新聞）は『親く所懇切を極む』と辭讃せり、以て本書の眞價を知れ。

△石井柏亭氏畫最新案進化對照密圖五葉挿入

▲總クロース菊判美装。六百五十頁索引完備

○正價貳圓 郵税（內地）十二錢（臺清韓）卅五錢

●壹萬部限り（但し殘數壹千部）

◉特別減價壹圓五拾錢 外要郵税

見本 往復郵便にて申込まるれば直に贈呈

加藤咄堂先生立案 修養會編纂

修養日記

明治四十三年用

◉十一月十日發賣

世に理論の方面より人格の養成、品性の修養を説ける書は乏しからず、されど實行の方面より適切なる方法を設け、善人をして歩一歩、向上の道程を進ましむるものは未だ嘗て之れあらず、この日記は、如上の缺陥を補はしむるが爲、加藤咄堂先生の立案に成れるもの、從來坊間に散在せる普通の日記類の具備する能はざる各種の特色を有する而已ならず、更に附するに『功過格』『月課豫定表』『風起表』『收支整理表』『先哲年表』等本誌獨特の諸表を以てし、使用者をして剛健なる意志と、堅忍なる克己力とを養成せしむるの偉効あり。請ふ一本を購ふて其言の誇張ならざるを試み給はむことを。

◉縦五寸、横三寸五分 總クロース美本 正價四拾錢 郵税八錢

發行所 東京本郷壹丁目 振替東京壹七壹 東亞堂書房

取次大販賣
全國有名書店

女（ろの八）

毎に數十萬圓の指環を箝めて居るものは餘り珍らしくはない。金滿家の夫人でも、日本では當節の奥方でも、決して左樣な無茶な事はしない。

○疲れて心配さうな顔付　米國の男子は其の妻女の奢侈の料を作る爲め、年が年中營々と苦しんで居るのは實に氣の毒である。故に其の女子の甲斐々々しく美しいのに反して、男子は疲れて心配な顔付をして居る。年々觀光の爲めとて日本に渡る米國人の多數は、婦人である。これは日本にばかりでなく、歐羅巴に旅行する米國人の大部分も、矢張女子である。けれ共日本の婦人は滅多に一人で外國に旅行するといふ事はない。自分一人の快樂の爲めに家庭を犠牲にするといふ氣になれないのである。

○結婚の目的の相違　米國に獨身者の多いのは、其女子の結婚に對しての希望が甚だ多くて、尋常の收入では家庭を作る事はできないからであるが、日本の男女の結婚に就ての希望は單純で唯成るべく早く身の落着を極めやうといふ事にある。日本の結婚は先づ其父母其上等適當な監督を得て成立するが、米國のは先づ自由に戀愛し、後で其關係者の承諾を得る事になつてゐる。（紐育ヴオールド）

おしめ洗濯の注意

脂肪下痢＝素人の診斷法

脂肪下痢は哺乳兒が母乳又は牛乳の脂肪を消化する力の不充分なる際に起るものにて、私は近年特に此下痢に注意して自著「小兒救急母の手引」の中にも記載して世の注意を促しておいた次第であります。

此下痢は割合に全身症狀の起ることが緩慢であつて、初めには左程熱發なきこともあり、食慾もかなり有つて、氣分も下痢が強いほどには強く侵されずして、段々痩せて大便は全く水樣の下痢便で水分が多く臭氣は高く、醫師に診察を願つて居るに拘はらず、脂肪下痢と云ふ診斷が付いて適當の治療法を施さなければ、如何程下痢止を用ゐても全快六ケ敷ものであります、其診斷に就ては醫師の方では大便を顯微鏡で見て脂肪の有無に由て確診致します。

私は此下痢に就て多くの實驗を重ね、就中素人の脂肪下痢診斷法に就て必要なる事實を發見しました、ソレは襁褓を洗濯するときの注意で若し小兒が此下痢に罹つて居つたならば水に「ギヤン」が浮びます、其「ギヤン」は消化されずに出た脂肪であります、私は此下痢の際に毎回此事實を尋ねて診斷の一助として居りますが必ず的中致します。

然し世間では襁褓の洗濯は大概女中任せにして少しも注意して居らぬ故私の問ひに對して直ちに返答の出來る人は稀であります、偶々

襁褓洗濯の女中が居合せて居て初めて分る位にて襁褓洗ひは全く母親達からは度外視されて居ります、近頃八ヶ月の乳兒が下痢症に罹つて醫治を受けて居つたけれども治癒しないで私の許にまゐりました、私は脂肪下痢と豫診し襁褓洗濯時「ギン」の有無を尋ねましたけれども母親は全く不案内でありました、幸ひ其傍に居た女中が其係であつた爲め要領を得ました、即ち小兒が下痢を起して一兩日後から洗濯盤に「ギン」が浮ぶことに氣付いて居たと答へました。

それから顯微鏡的檢査をなして脂肪下痢と確診し、夫れに對する治療法を施して全治致しました適例があります、猶此外にも此種の實例が澤山あります、全體育兒法は極卑近なることに注意することが最も必要であります、前述の如く今迄は襁褓の洗濯に注意する母親達は一人もあるまいと思ひますが、かゝる卑近な事柄にも大切なる脂肪消化の有無を鑑別する事實が潜んで居る次第故今後充分の注意を促したいものであります。（大阪、柳瀬醫學博士）

流行の指環

夏は念入りの盛裝も濃艶せるは寧ろ見劣りのせらるゝ故か、何事も簡略に瀟洒なるが好まるれど、漸に紅葉に立田姫の裝ひ日に艶になり行けば、流石に人も昨日の姿物足らずなりて新らしき裝ひに心を碎く。

▲ダイヤ入指環　なべての夫人令孃は十指の何所にかそを光めかさでは肩身の狹き世なり。握手にて優雅なる物は純白の小ダイヤを集めて車の葉の型としたるか、又は九曜型、ハート型なれど、眞にダイヤの價値の認めらるゝは、絲の如き十八金の細環に一カラツト二分の一のダイヤを嵌めたる物にて、白き指に一點白露の輝ける如き、これぞ所謂粹を拔ける指環なりとぞ。此種の環は白金を用ゐても面白かるべし。

▲約婚用の指環　此指環は新郎新婦の君の左手の一指に嵌されて、永久に變らぬ契の紀念たる爲め、純金の繼目なき物に定まれり。左れどこは歐米の風習を移したるにて、型も外國其儘の物多かりしかど、近來は稀に新婚の意匠になれる優美なる物ありといふ。普通は二個にて二匁三四分の細ふ指環にて、裏面には夫妻の姓名若しくは簡單なる文字を彫めるもあり、又十八金製にて夫妻の名の頭字を接ぎ合せしもあり。寶石入もオパールの他は大抵差支へなしとて用ゐらるゝとぞ。

▲地方趣味と東京趣味　東京人とて強ちに東京趣味を有するものに非ず。されば必ずしも地方人の趣味を云々するにては無けれど、衣服、裝容、持物の何に限らず總て地方趣味と云へる物は美なりとも野暮なる傾あり。指環も亦地方趣味なる人は高價なるダイヤ入を購ふにも十八金にて彫刻などある物に石を嵌めたる華々しき物を喜ぶよし。

▲石入と彫刻　彫刻は近き頃より若き婦人には餘り喜ばれず。されど十八金にて瑪瑙を透し彫刻となし、白金の滿月を配したる色結物抔は三十歳以上の婦人には中々に見榮えすべし。寶石はダイヤ、眞珠、ルビー、エメラルド、サファイヤと云ふ順序にして、花やかなる妙齡の令孃にはルビーとエメラルドの小さき石を三ッ四ッよせたる細環のリングこそ美しかるべく、友禪或は淡色の派手なる服裝の折は金剛石にも勝て引立つは是等なるべし。


かくて曲は閉ぢぬ

社會生活

當世妻君小言（一）

黒頭巾

(1) 陸軍大尉の妻

さうですねもう五年になりますよ、思つて見れば此三年は全く泣て暮して居ると申ても、よいでせう、時々さう思はれますよ、人の命といふものはなかなか容易で果てるものぢやないかしらと、いゝえほんとうでございますよ。

父は高崎の聯隊に居まして、左樣日露戰爭の終つた時ですから、ずゐ分軍人の鼻は高うございましたの、其時は中佐でありましたが、もう軍人氣質の淡白な人でしたけれ共、母は餘り敎育があるでもなく申さば昔風の氣の小さい人で、恥を申す樣ですけれ共、左程に考への深い方でもなかつたのでした、私が十七の春、まだ高等女學校の四年がすんだばかりで、ほんの子供上りのなんにも分りません時分に、何の事はなく、當家へ嫁につかはされたのですよ。

良人ですか、其時は中尉でした、なかなか見込のある青年士官で、陸軍大學に入學する抱負をもつて居るのが頼母しい、と父が第一氣に入つてしまつたのでせう、母はもう父の申なり次第で、女に學問させたからつて、それが役に立つて外に勤める樣なのは、却つて不幸なのだから、それに東京へ轉任になるのだし、あちらへいつて何でも習ふ事も出來るから、と申ますの。

私も東京に行くといふ事が、何よりうれしくつて、今から考へると丸木橋とかを、危うく渡つたのでございますわね。

結婚は高崎で致しましたけれ共、間もなく東京に參りましたが、其當時は誠にやさしくて親切な人でございました、それに私がまるで赤ん坊なのですから、面

白がつてよく他愛もなく、一緒に遊んだり致して自分が週番に當りました時などに、赤い縞の襷をかけて歩いて居ますでせう、其時に玄關に靴の音が致しますから、お客様かと思つて出て見ると、

まあ良人なんですよ、何か甘い菓子でも無いか、一寸徴發に來た、などゝ申て栗饅頭などを掴み出しては、オイ「副官貴様もやれ」なんて申ますのよ、私の事を副官などゝ申て、大笑ひしては出て行きますの、こんな様子で兩親が側に居るでなし、ほんとに樂園なんでしたから、時々同期生の方などが御出になると。



「我軍の分捕品を見せようか、これは高崎附近で捕獲したのだよ、」などゝもう外の方が御聞きになつたら、氣味の惡い様な言葉を遣つて紹介致したり又或時などは、散歩がてら、「丸岡の家を夜襲してやらうぢやないか、」などゝ申て暢氣千萬な、だしぬけに他家様を伺がつたり、致して外出などでもめつたに一人で致しませんから、四辻の客待の車夫などが、鴛鴦の夫婦だなどゝ、申て居たさうでした。

まあ變な事を申様ですけれども、一年二年は波も風も立ちませず「早く第二軍が生れるといゝな、大砲でも軍艦でもかまはない、」などゝ申てもう子供でもあれば、とば

つかり思つて居りましたのです。

ところで良人は一昨年大學の入學試驗を受けましたところが、不幸にして不合格であつたので、其時の力の落し樣は、日頃快活であるだけにもう傍でも、はらはら致す程氣の毒で慰さめ樣のない程でしたが、時々こんな事を申しましてね。

「何軍人はどうせ命は國家に捧げてあるんだ、貯金なんて抑ふ間違つて居る、」などゝ申しまして、自暴に御酒を戴く樣になりましたのですよ、段々と妙に氣むづかしく成りまして、お茶に好みが出る樣になる、一寸した事で以前なら、手を拍つて面白がつた、私の粗忽でもあると、眼に角を立てゝ叱るんでございますよ、さうして二度目には、貴樣なんぞに用はない、出て行けつと申ますので、もうまるで前々の人でないようになりました、隊から歸つた時に玄關に迎へるのが遲いといつては、口汚なく罵りますしね、食事の時だつてこんな物で飯が食へるか、馬鹿奴、と申しでは膳部を足にかける事は、もう幾度だかしれません、是も私が不調法ですから、御赦し下さい、と詫を致すと、何處迄づう〱しい奴だ、と申てはね、私を打たり、蹴たり致すんでございますよ、……さう申ちや何ですけれ共もう此頃は宅へ御出になる御友達でも、以前とはお人が違ひましてね、類を以て集まるのでせう、

「オイコラッ居るかッ」

て表口からどなり込んで御出になる、さあもう其時には酒を出せ。ときまつて居りますので、有合せの水菓子か何かで手早く出して置て、不味物でも二品三品こしらへて出しますとね、さお酌をしろ、手つきが野暮だ、と仰しやつて、「我輩の嚊は君、一緒に神樂坂へ行くよ、此頃は大に感化されて、酒もやる、端唄の一つ位うなる樣になつたよ、やつぱり女だつて、暢氣なのが面白いのだよ、君許のはどうだい、今度引張て來給へ」と熟柿嗅ひ息を吹ていらつしやると、

「駄目だよ此馬鹿は、出て行けつて命令しても動かない樣な骨無しさ、まるで以て泥龜だ、一寸手を出すと頭も手も引こめて、ちつとも張る意地も無いんだ、軍

人の嫁たる資格がゼロだよ、」
なんでいくら何でも餘りだ、とつひ涙が溢れましたのですよ、それを良人は意地惡く見付けて、コラッ「何を泣くんだ、縁喜の惡い、友人の前で無禮だッ、」と申て怒り出しましたの、私はもう熱湯を飲まされる樣な苦しさを、わざと忍んで、いゝえ泣たのぢやございませんと、つい申譯をしますと、よし貴樣はうそを吐たな、と血相代へて立上りますと、友人の方が、君止せ止せそれより又一杯やらうぢやないか、と千鳥足で二人とも出て行きました、やつぱり神樂坂なんでせう。
下女は勝手ではらく致して居ますでせう、其手前も面目ない、主婦としての立場がどこにありますでせう、もうく唇の切れる程に嚙みしめて、そこらを片付まして、お前は早くお休みと申付て、一人つくづく世のはかなさを、考へて見れば見る程、もう涙もない程悲しくていつそ、子供の無いうちに離縁を乞ふて、裁縫でもみつしりと修業して、獨立の出來る身になりたい、ほんとに無意味に、たゞ面白く暮した二年の月日が、いまは恨めしく思はれて、行末の事も後悔、里へ歸ると致しても、父はもう此世の人でなし、病身がちの母が、きまり切つた恩給で、妹や弟達を世話致して居るのに、こんな事を申たら氣の弱い母がどんなに思ひつめるかもしれぬ、とあれやこれやを思ひ合すと、進みも退きも出來ませず、其内十二時過ぎになつて、用心が惡うございますから、戸閉りを致したところへ、醉潰れた良人が歸つてまゐりましてね、
「戸の開け樣が遲い、此家は己れの家だ、」
一家の主人を閉出す法律がどこにある、と申てまた折檻を致しますの、けれ共自分が激しく醉つて居ますから、ぐづく申ながらそこへ淺猿しくも寢ころんでもう高いびき。
それを見ると、實に氣の毒でたまりませんのですよ前途有望の士官と云はれた人が、此有樣はと存じて、あゝもうどんな事があつても、死ぬる迄も出來るだけの事をせう、前後の辨へも無い程でも、我家なればこそ歸つても居らつしやる、今萬一私が此家を去つた

ならば、誰が朝夕のお世話をするであらう、とやつぱり女は未練でせう、もう今迄は、多少他家の奥様方の手前もあり、下女を使つて居ましたけれども、來月から暇を取らせう、もう自分の身體が粉になる迄も、盡して見ようと決心を致しまして、なる可く氣に反かぬ樣にと致して居るのでございますよ。

此節ですが、少しはよくなつたかも知れませんけれ共、遊びはなか／＼激しいんですよ、それで眼に見えぬお金が消えてしまいますし。

持つて參つた、私の身に着ける物なども、派手になつたのを云ひ革にして、賣却致したのも少なくはございませんの、私は香の物ばかり戴いても、良人には氣に入る物を備へる樣に致して居るんでございますが。

それでも御覽下さい、肩や足に生傷の絶えた事はございませんですよ、私などは何にも世間の事を知らないで、嫁にまゐつて苦勞を致しますが、どうかして里の妹などは廿歳過てからでなければ、形付ない樣にと申てやりますのですよ、そして願ふのではありませんけれ共、世の中がさうなのですから、女でも一通りまさかの時に困らぬ程の資格なり、技藝なりを仕込んで貰ふ方が、つまり仕合せでございますよ。

いつ迄も若くては居ませんから、嫁入の時に新調した餘計な物は、派手になるのみならず、流行遲れで賣る時の値は、誠に馬鹿／＼しいのですよ、出過た事を申樣ですが。

私共は早婚の失敗を見た者と、申すんでございませうね。

ほんとに殿方の心は、秋の雲と申ますがどうしてあんなに氣が變つたのでせう、ですから嫁に參る時に人物がたしかだ、腕がある人だと申ても、數年の後迄もそれで續くかどうか分りませんし、良人のなどは神經質であつたのかもしれませんが、軍人の方で謹厳な方はまあ少ないと申すんでせうかね。

今迄よく御出になつては、遊びにお誘ひ出しになつた〇〇大尉は軍隊の金を費消したとかで、目下休職におなりですが、驚きましたよ、あなた其奥樣は間もな

く離縁をお取りになつて、或る金物屋へ御再婚になつて、平氣で御出でになるさうです、私共にはとても出來ませんねそんな事は、……餘り人樣の事は申ますまい、どうしたつて女は結婚してしまへば夫が賴みなんですもの、……あゝもうよしませうよしませう

(2) 中等教員の妻

宅のは高師の出身なんですよ。

もと〳〵同鄕だつたものですから、日曜日にはよく遊びにまゐりましてね、弟達と一緒に、

音羽の森の朝風に桂かざゝんいや高く

なんて校歌を唱つて居たのを、よく存じて居ましたつけ。

私の兩親も先方の血統の正しいのと、財產として賴む程の物は無くつても、本人の職業が職業だから、まあ〳〵安心だと云はねばならぬ、などゝ申して居りました。

私は御覽の通り竹を割つた樣な氣性なんでせう、三十八年に高等女學校を出ましたけれども、人の妻なんぞになつて、家にばつかり引込んで



居るのが大きらひで、高等師範か、女子大學へ入學致したいと、存じていろ〳〵と兩親を困らせても見ましたけれども、功を奏せないで、母は結婚が大事であるいつ迄も桃から生れた桃太郎なんで、小さい子供と塵を爭ふつて居ちや、仕方の無い者になつてしまふのだまだお前に、先生をして貰はねばならぬ程、困却もして居ない。

孝は百行の本なり、親に孝行をしようと思へば、早く身をかためなくてはいけない、と申て決して許して與れさうでありません。

一寸買物にでも出ますと、同級の方が暢氣さうに袴帽のリボンをかけて、靴で砂を蹴てさつさと、歩いで居られるのと、出合ひますと、羨しさに堪へられないで夢中で家へ歸りましたよ。

どうして私の親は舊式なのかしら、頑固つたらありやしない、と恨みがましく思ひながら、母の助手を致して居りますうちに、一年の月日はずん〳〵過てまゐりまして、良人は某藥學業をするといふ頃なんでせう。

まあ用捨なく申さば、私は敎員なんか大嫌ひなので法學士か何かで、縣の事務官にでもなつて、行々は出世して、地方長官になるやうな人が理想で自分は其夫人として、充分に赤十字や愛國婦人會に盡力して、大に交際の手腕を振つて見たいと、申樣なのでつまり輕佻な世間しらずの我儘者で、一口に申さば見榮坊だつたのですから、じつと母の側で、家の用など、もういやで〳〵なりませんでした。

母はそれを見拔て居ますから、軍人とか、會社員の奥樣といへば、美しい着物を着て、出歩いて暢氣な樣だけれ共、内實は皆それ〳〵に苦しいもの、よしんば財産がなくつても、主人の人物がたしかであれば、もうそれが第一、殊に旅の事だからめつたに、人に勸められて、結婚でもしようものなら、先祖代々の血統に汚れが付かぬともいへぬ、そこへ來ると、教師は誠に温和である、職はづしがなくて安心だ、と切りに私の心をその方へ引く樣にと、いたしますのですよ。

けれ來ね、私もう學校の先生は其姿からしていやなのですよ、式の時にはいつも紙雛様の様に、古いフロックで、カフスや、カラーだつて、黄色くなつて、黒いネクタイの曲つたのに、補綴だらけの靴を重さうにがた〳〵さして居るんですもの、品のよい腰辨さんでせう。

軍人だつて、陸軍よりは海軍の方が、よつぽど好きだなどゝ、恰か孔雀の羽を飾る様に、虚榮心に支配されて居た私も、とう〳〵其年の夏休みに、結婚致して任地に來たのでせう、今迄男一人で居たのですから箸一つ餘分な物はありませんし、だん〳〵買整のへて行かうと存じて、居るうちにあなた。

四十圓やそこらの新世帯へ、國の妹がやつて來ましたのですよ、いやな妹ですの、田舎物の癖に一人前の小遣錢を出して、私のする事は何でも彼でも、國元へ通報するんでせう、全く電話娘なんです、主人に迄いろんな事を告口致しましてね、家では、しつけも出來かねますから、師範學校に入れましたところが、なかなかの費用なんですよ、また主人は、あれでなかなかの身びいき屋ですから、妹の申事は何でも信じましてね、少しはやさしくしてやらなくちやいけない、なんて、耳こすりを申すのですよ。此際も袷を一枚新調してやらうと申して私が參つて見合せて貰つて來ますとね、あなた難有たうとも何ともいはずに、こんな質朴なものと、申てふくれて居ますのでせう。

私ねもう存じませんから、兄さんと相談でよいやうになさい、と申てやりましたの、するとね、主人から少々貰つたのでせう、自分で行つてお猿が眼をむいた様なのを、見立てゝ參るぢやありませんか。

いつでもこんな風で、主人が甘いのですから、姉としての私しの示しが、少しも利きませんのでせう、腹が立つぢやありませんか、その上にね國の方で家に手入をするから十圓、親類に婚禮があるから反物一反といふ風でそれに家賃は東京より安いから五圓ですみますからよい様なものゝ、酒屋米屋魚屋と月々の計算

の時には、もう〳〵還暦を、にらめるばつかりなのです。

私の着物なんて駄目〳〵、思ひも寄りませんわ、まだ派手なのは、妹に呉れてやる位で居るんですもの、お話しになりませんわ。

教師なんて云ふものは、家に田地があつて、食べるのに、苦勞の無い人のする仕事ですわね、全くですよ其くせ氣が小さくてね、神經質で、煮えたのか、生なのか分らない樣な氣分なんでせう、私が此通りですから、もう時々ほん〳〵申てしまひますとね。お前は己れを何と思つて居る、と申しますの。

何とも思ひません、亭主だとだけ思ひますよ、と云ひますとね。

少しも亭主らしい、取扱ひをしないぢやないか、と變に當て付けた事を申ますから、私はもうこれより以上の事は、不可能なんですからと、申ますとね、其儘默つて口の内でぶつ〳〵申て居りますよ、ほんとにもういやになつちまいますわ、それでなか〳〵嫉妬深くてね。

火鉢に巻煙草の吸ひ殻でもあると、留守に誰が來たのだ、何の用事でなんて、痛くもないお腹をさぐる樣な事を申しますの。

ほんとに執念深い。さつぱりしない人ですから、殊に中學でせう、同盟休校などがあつたり、教員排斥問題などが持上りますと、いつでも槍玉に上げられるんですもの、どうせ長く此地に居るわけにも行きますまいよ。

一寸申て見ると、上役への進物ですね、先づ校長視學官、教頭なんていふ向へは、年末や中元には、それぞれの心付を致さねばなりません。

たまに生徒が遊び旁ゝ質問などにまゐりましても、私自分の學生時代の事を考へて、大福でも何でも出してやりますと。

歸つた後で申のに「あゝ云ふ事はよろしくない、教師の宅で生徒に物を喰せるなんか、師弟間の威厳に拘はる」なんて申ますの。

「校長だつて同じ職員だ、何もこちらから頭を下げて進物などしなくてもよろしい、抑ゝ教員なんてものは飽く迄も廉直でなくてはいけない、」と申て、默つてすればとにかく見付かつたらなか〳〵許可に相成りませんのですよ、ほんとに石に上下を着せて、石の橋を金の杖で叩いて渡る、といつた人物ですから、時代に沿ふて行く事が出來ませんわね。

私だつてそれが惡いとは存じません、理窟に二つはありませんけれ共、世の風潮ですから、共に流れるより外に致し方がありませんものね、こんな糠味噌嗅い世話女房になる迄には、ずゐ分困つたものでしたよ。



それに私が目下こんな身體ですから、營養の爲めに牛乳を飲んだり卵子を戴いたり致しますとね、もう月に二圓なり、三圓なり、支出が多くなつて來る勘定でせう、これで子供でも持つたらどうして行かうかと心配でなりませんの、都合よくお產でもして、まあ二週間は寢て居なくちやなりませんが、其間あの妹の世話になるのがほんとにいやで今から苦になつて居りますのですよ、そ

れかといつて看護婦でも雇入ようものなら、主人がきつとやかましく云ふに極つて居りますしね、もう泣き度くなつてしまいますよ。

主人の長所ですか。

まあ人樣の樣に深酒を飮んだり、夜遊びを致したり外の女に手を出すなんて、事は藥にしたくても無いのですから、そればつかりは保險付ですけれ共ね、神經質で身びいきで、氣の狹い決斷力の無い、けちん坊なのが缺點ですわね、けれどもこれはたゞ私の夫ばつかしの專賣特許でもありませんでせう。

然しね、發賣でお金をこしらへ樣とすると、敎科書事件の樣な事になつたり致しますから、大學の敎授の大博士で無い限りは、貧乏をしなくてはいけないのかもしれません。

ですから私はもう仕方が無いと、あきらめて居りますのよ、けれ共あなたの樣に、仰しやつて下さると、つく／＼小言も申たくなりますよ。

今頃主人は學校で、さぞくしやみでもして居るでせうよ。

(3) 車夫の妻

人樣は下等社會だつて仰しやいますけれどもね、お前さん、下等社會だつてまともな道さへ踏んで行けばおてんとう樣が見て居て下さいまさあね。

奧樣だの、御新さんなんてすまして居なすつても、亭主の面に泥を塗つたりする人があるんですもの餘り威張られたものでもありませんわ、新聞には華族の姬樣が、工女となつてると出て居たさうですね、だから下等社會だつて馬鹿にしたものぢやありませんやね。やどが申て居ましたつけ。

代議士といはれる旦那方が、砂糖をどうかしたつてので、大分黑紋付の羽織や袴で引つぱられたが、あれを見ると其日稼ぎの、己れ達の方がよつぽといゝやつてね。

七月頃迄下谷の方に居たんですがね。

子供がお前さん學校から歸つて來て、今日先生が實

さんのお家は何をしてるのつてきいた時に軍人だの醫師だの八百屋だの、いつたなかで、私しの家は車屋といつたら、皆んなが笑つた。もうあたい學校へいくのはいやだ、つて泣くんですもの、うちで歸つて其事を話しますとね、大そう腹をたてゝ、

車夫だつて何だつて、月謝出して居れば同じことだそんなに甲乙をつけられる樣な學校なら、下つてしまいつて、とう／＼さげちまつたのです、それに仕事も餘り思はしく無いものですから、先々月こちらへこしてきましたが。

いくら年を取つても、初めて來たところはいやなものである、早いお話しがさ、お前さん。

井戸端で、朝顏を合しても、お早うございと、こちらから頭を下げなくつちやならない。

米屋だつて新屋さんだつて、貧乏して居れば惡い事でもするかと思つて居る樣子なんでせう。

これでこんな世帶でも、張るとなると、なか／＼骨なんでございますよ。

やどは元巡査だつたのですけれど、一寸した落目から廢しまして、瓦斯會社へ出て居ましたけれども、飲める口ですから仕樣がないので、大家さん始め月々のお拂ひはおろか。

煮豆買ふおあしに困つた事もありましたつけ、たつた一枚宛の袷を曲げちまつたり、お前さんずゐ分苦勞をしましたよ。

丁度戰爭のあつた時でさあ、今の商賣がいゝてんで始めたのですが、追々子供も大きくなつて見れば、稼がずにも居られないと見えて此頃ではまあ毎日出はしますけれど不景氣ですから儲けはありませんよ。

私しは、お不動樣を念じて居りますので、其おかげですか、此頃では稼ぐに追付貧乏なしで、醬油の一升も、買溜が出來る樣になりました。

御覧の通り私が内職さへすりや、一貫五百や二貫の金は儲けますけれども、いつでもやどに申しませんですよ。

自分の女房がさ、夜の眼も寢ないで稼いだ、二貫や

そこらの金を當にするやうな、根生を出してお呉れでないつてね。

まあ小商賣が續きさへすれば、今に小さい表通りの家でもめつけてね、私が子供衆相手の駄菓子屋でもすれば、子供の着物位出來るであらうと樂しんで居ますまあ子供が一人きりで仕合せですよ、これで乳吞子でもあつたら、みじめなものですけれどね。

此頃はね、旦那衆でもなか〳〵お金を出しませんや抱人の車なんて、まあよつぽどの家でなくちや置きませんよ。

其代りうちに定紋の付た仕事着を拵らへて置て車夫が旦那を乘せる時だけ、それを着せて下さるんですよ

それでなか〳〵今時は、みえを張りますからねゴム輪の車でしたら、二十錢增しなんだけれども、宿車でもゴム輪がよく出來ますとさ。

まあ〳〵稼ぎ男にやりくり女で、精出してやらな〳〵ちやね。

樂しみですか、一人の子供が大きくなるのが、もう樂しみで、着物着るちやなし、せいたくな芝居見物するちやなし、でも昨晩おふくろと活動にでもいつて來なとやどが申たので、一寸行つて見ましたつけ寄席なんてずゐ分行つた事がありませんよ、まああなた、お上りなさいましよ、折角御出になつたのですもの、お茶でもいれませう。……

妻君小言の三つ巴へ、いづれもせち辛ひ世の中のこぼし文句のみ、比較的衣食住に足りる向は、又見る事の出來ぬごた〳〵あり、聞き得ておや〳〵とあきれるばかり、いふが最短か言はぬが花か、一年にも四季折々の時候あり、樹の葉は黄色く、遠里小野の小夜きぬた、哀れいやます秋の夜のあのまんまるなお月さんも、盈ちては缺くる世の習ひ人の事と空々しう、對岸の火事もどうかすると火玉の飛ぶ事あり、ころばぬ先の杖は、今の世とて無駄な物でもあるざるべし。

で次回は代議士、寄席藝人、醫師、辯護士の夫人を御紹介致します。

社會觀察

東京女の噂

女記者

△山の手の一方面

或人が東京の女に洗濯を一ヶ月禁じたら女の病人がぞく／＼出來るであらうと云つた位、東京女の長風呂と來たら實にもう山鳥の尾の長々しいのに驚くばかりだ。

私共も田舎から來立てには烏の行水線として居たので、こちらがきまりが惡くて用の無いのに出たり入つたり、家に歸つて氣分が惡くなつて、清心丹を飲んだ事もあつたが、今考へて見れば馬鹿々々しい。

先づ錢湯御持参の御道具調べと來て見ると、糠袋、石鹸、洗粉、垢すり、櫛、輕石、絲瓜、ホーの木炭に鋏に、髪剃まあざつと一打。洗粉はクラブ、白粉は御園、石鹸は、アイボリー勿論の事。

此湯へ御出になる御客様を皮肉な色眼鏡で見ると、先づ第一が職人の山の神、看護婦、女學生、商家の神さん及び娘、小官吏の奥様。

東京はだん／＼山手へ向つて膨脹しつゝあるのであるから、場末の方が比較的種類に富んで居る様に思はれる。

おや／＼人間をまるで物產の様に、種類に富んで居るとは申過しました、御免遊ばせ。

女が三人寄れば、姦しいものと相場が極まつて居るものを、まして況んや種々雜多な人の集り、人も我も三錢の洗濯代にさつと汗を流す人、其日の疲れを癒す人、玉の御肌に磨きをかけ給ふ御方など、其有様其話しを馬鹿が豆鐵砲を放した様に見たり聞たり語つたりするのである。

此内から教訓を得る事もあるであらう。

△孟母三遷の教

貧乏者の子澤山とはよく云つた物、不景氣の風は何處を吹くやら、ソマトーゼの年年も飲み續けた樣な其肥滿した身體に漲うたせて、三年醬油で煮〆上た手拭に、緣日物の肉桂臭い安石鹸、御供に鉄は某令嬢が、ちゞれつ毛に千手觀音が輕業の最中でございと云ひたい頭を、ぼり〳〵と掻きながらやつて來る。

白雲頭の二本棒の四歳位の小僧に御念の入つた赤子泣御持參になつて居る、男湯で歌が始まつた。

槍は錆ても名は錆びぬ、おや〳〵また例の槍錆だ、どんな人か知らぬがあれ一つ切り知らぬと見える。

熱い〳〵番頭さんうめてくんな。

糠味噌と湯はかきまはす程加減がようがすと口澤山な猫背の番頭がしやべる。

いやはやどうも騒々しい此お神さんは、

一寸松公、お母さんの背中こすつてくんな、と云ひながら何か一大事の發見でもあつた樣にどんぐり眼をむいで居たが、白雲令息の尻を平手でぴしやん「蚊の野郎ツ」と、これも親心か。

實に可愛さうなもので此親を親として育だつて行く子等の將來の運命は略ぼ定まて居るのである。

大形の浴衣に細衿の袢纏を着て髪は櫛巻の五十女、一寸流し、それから糠袋を頂戴なとと〳〵入つて來る。

おや徳さんとこのお神さん。

此頃一寸も見えませんねまあお久しいことゝさすがは女其挨拶はやさしげなり。

徳さんの神さん曰く、ホイもう暑い時にはうちにばつかり居ましたがね、でも一風呂浴びなくちや寢られませんから、かうして來ますです、私なんざ子供は多いし、おやぢは甲斐性無しあ、ほんとに風呂にだつてゆる〳〵來る事が出來ませんやと溢し初めるあの何ですか留ちやんはやつぱり芝のお邸に？

問はれて徳さんの神さん鼻うごめかして。

いゝえさ昨日も來ましたつけ、朝つぱらから車でね

それでいつてまさあね、あの子がさ。朝の電車は込み合ふからいやだつてね。お前さん、もう邸奉公なんてこり／＼だ年中かしこまつて居て、二兩か三兩着物が着られるぢやなしさ、年中頭の上りつこはありませんや。今居る家なんざあ全く一晩に上る御金はふとい物だ、お母さん氣樂でよつぽどいゝよつてね、來るたんびに一兩や二兩は煙草代におしつて



置て行つてくれるしね今度もお前さん湯上りにつてね浴衣を一反買つて呉れました。
全く子供を持つなら女の子に限りまさあ、昔から娘三百つてぢやありませんか。
それに煙草だつて一詰めるのは面倒だつて、巻煙草を吹かしてもう半分ばかしで火鉢に捨てるんでせう、側で見てゝ勿體ない様ですわ。
親として忍ぶ可からざる、云ふ可からざる事をしかも大聲で自慢

して居る。

山の神はさも感にたへぬ顏付で眼を細くして、ほんとにお神さんは全く仕合だ、羨やましいやね、松公も大きくなつて早くお留さんの樣になつて吳れなきやと令嬢の頸をごし〳〵。

白雲小僧何と思つたか

太郎作が自働電話の戸を開けて、廻すハンドル七廻し「何番へ」己らは國の土產にするんですから何番でもよいからつないでくんさいな、サノサ外の人はあつけに取られる。

山の神の得意思ふ可く、德さんの神さん曰くなかなかふし廻しが甘いや。

噫々意氣揚々と我娘の待合奉公を自慢する親、うらやましげに聞く女。

目下世界各國至る所に我國辱を與へつゝある醜業婦の絕えぬのも、其原因はかゝる親、これ等の家庭に人となる娘であるかもしれぬ。

△派出看護婦

番頭が汲む湯おそしとあたり桶はぬ溫湯の灘、淸潔衞生の本家だけあつて湯使ひが猛烈だ、揚卷さんに山本さん、珍名な揚卷さんは燈心にやすりをかけた樣な細腰の佳人とは申にくいが恐ろしく肥滿した山本さんとはソマトーゼの好廣告だ。

ほんとに派出から歸るとがつかりするわね、でも今度のところはよかつたでせうと揚卷さんが鼻の下を洗ひながら話し出す。

「可もなし不可もなしよ、でも丸持だけに材料がどし〳〵使へてよかつたわ、何しろ長い患いだつてんですもの、腹滿で病氣の水を取るのですからね、でも患者がなか〳〵揚氣で面白い方だつたからよかつたわ、一週間で謝禮が五圓と失禮だけれどとつて、絽ちりの單羽織を貰つて來たのよ、其奧樣つてのは京都の藝者だつたとかでそりやなか〳〵さばけて居ましたわ、然し會長があの通りでせう、私羽織だけ見せたけれどエム

の事は云は無いのよ、揚巻さんブリースだから、だまつて居て頂戴よ、何かおごるからね。」

「オーイエスですわ、會長の握り屋もいゝ加減なもんだわ、高い聲ぢやいへ無いけれども、派出先が華族か何かだとね、なか〳〵お世辭をいつて居ますよ、そればかりぢや無い二割の會費でもさ、一等看護婦が一圓二等八十錢、三等六十錢のところを派出多忙とか何とかいつて、二十錢位づゝ餘計に徴收して居る人ですもの、近々の内に藥種屋開業もすさまじいわ、つまり我我は過渡の時代の犠牲に供されて居るんですわよ。」

「だからもういゝ加減に脱會して産婆の試験でも受けて、田舎へ歸らうかとも思つて居ますわ、」と口も手も八丁、自分の屬して居る會の棚おろしが變じて述懐談でもさすがに女らしいところがある。

「もう上りませう、餘りこすつたら表皮がむけて眞皮が出さうになつたわ。」

揚巻さんは着物の袖を探して居たが、小さい筆記帖の紙を一枚取つて、顔やら頸やらなでゝ居る山本さんは、大きな聲で「アノ一寸紙おしろい？」

ギブミー、オンレーワン、と大得意、オーライトと揚巻さん御兩人共英學者だ。

いづれを見ても姥櫻、あれでも素顔自慢のうす化粧としやれ込んだつもりであらう。

一に看病、二に藥りの諺があるが、いくら技術に巧みでも、品性の餘りに感心しない市内の派出看護婦は私しが病氣になつても賴みたく無いとしみ〴〵思はれた。

△小學校の先生と裁縫學校の生徒

前者は隣家の煙草屋の二階を占領した女先生後者は向ふの繪草紙屋の看板娘。

「高木さんあなたいつ引こしなさるの、」と口を切る、

「まだ確定しませんがね何だか趣味が合はないんですからね、どうせ無教育な人達だと超然主義を持して居ますけれどもと、」あとは口の內。

「何だかお神さんが大變に燒餅屋ださうですね、先に

早稻田の學生が居た頃には、御亭主が追ん出したのだつて、うわさでしたが、此頃ぢやお神さんの評判が惡いことよ。」

「何それはかしぢや無いのですよ、あなたなんぞ御兩親の側に居らつしやるから結構ですがね、私しなんぞ八王子から遠くつて通はれやしないし、仕方が無いから居ますけれど、實際にいへば不經濟ですよ、終始子供に何か買つてやるとか、緣日に連れて行つてやるとか仕無くちや機嫌が惡いしね、日用品だつてちつとも油斷が出來ませんもの、」と多くは云はぬ。

國民敎育に從事して居る女先生達にもこんな境遇に居る人は少なくないであらうと陰ながら同情に堪へぬ

看板娘は指尖を洗ひながら

「私しの家の離れがあいてると御出になつてもよろしいんですけれど、あいにく塞つて居ますのでね。」

「どなたが御出になりますの？」

「あの早稻田の文科の方ですの、それは〳〵芝居好でね、有樂座へ先日おごつて貰ひましたのよ、空中飛行機てんですの、」と乘氣らしい。

「輕井澤の茶見世の前の井戸だの、溪流なんてほんとの水を流しますのよ、そしてね潸潤と云ふ發明家がお町と云ふ田舍娘と握手して、新生涯に入る處なんて、ずゐ分ですよ、人を泣かせるわ」と、劇評になる。

高木先生は少しも解せぬと見えて

「さうですか有樂座て模範的演藝場ださうですね、子供デーとかには是非一度行つて見て置く必要があるんですけどなか〳〵多忙でそれさへ出來ませんのですよ、あの私し急ぎますからお先に」

「さうですか私しも御一緒に上りますわと看板娘、濡袋を洗つて居る芝居の話しに興が乘らなくてお氣の毒樣だ。

然し師範出の女敎師は常識がないと一般の評はあるけれども、さすがに三年間の寄宿舍生活に官費生として仕込まれたゞけあつて、どこやら自己の職務を尊重して、飽く迄も其品位を落さゞらんとつとめて居る點は、我儘氣隨の繪草紙屋の看板娘、昔なら島田に赤

衿でお針の師匠に通ふところを、世が世なりやこそ、束髪に紫の袴はいてこれでも都下の女學生とすまして居る事が出來るのであらう。

昔から聞ふにおちずに語るにおちるといつて居るがほんとに其通り風呂屋で平氣に話し合つて居る有樣をだまつて聞て居ると、十人十色盲目でも大概其人柄とお里の見當が付くものを、ましていはんや社會觀察の眼と耳で立番をされた日にあ全く立場に困るであらう。



今度は男湯が大分騒々しい事だ。

「子供が大勢でやり切れない職工ばかりで仕方が無い、奉公に出る人少しも無い、桂庵がこぼすも無理は無い盲目が射的をひやかさない、やつても的つたためしが無い、啞に電話はかけられないいざりの競走見た事ない。」

これがアホダラと云ふのであらう、なか〳〵おもしろい事を云ふものだが掲げられてある處の入浴規則に

入浴中大聲を發し他人に迷惑をかけぬこと。

右の條々御承諾の上御入浴下され度候と書てあるのに人もとがめず怪しまず、盤臺に居る番頭迄が手拍子で面白がつて居る。

世の中は何事もかうしたものであらう、上は一國の法律、諸學校、會社の規則これ等が其揭示通りに實行が出來たらそれこそ大變、ならぬ内が進歩なのであらう。

△迷信の女

戸が開た今度はつい近頃こして來た官員さんの奥様此湯では上等向の御客様だ。

大きな大丸髷に赤い手柄御持參の道具も大分に多い様子、一々桶の上に並べて御出になるこの方でもお下げに裾短かな袴はいてラケット肩に秋の日に晒されて校庭をかけ廻つた事もあるであらう。

どうも人の妻になるとまるで一變してしまふのが不思議である、是等を總稱して軟化派と我々老孃派では云ふのである、おや〳〵お誂へ通り鏡の前に坐り込んで、そろ〳〵みがきが始まつた、先づ最初が油溶し、荒洗ひにみがき、清みがき、まさか塗物の膳ぢやあるまいし、人を馬鹿にしたと仰せになるかもしれませんが、此奥様入浴の時間は約一時間と四十五分。

おや〳〵靜かだ事ね、全體秋は風呂屋の霜枯れ時だけど、これぢや全くお氣の毒だわね。

私しなんざ三度のおまんま二度にしても御風呂に入り度い質なんだからこまつちまふ。

盤臺の側に母親に抱かれて居る汗もだらけの子供を見て、今日はどあやしながら、

おやまあ可哀さうにね、大變おあせもだお醫師にかけなすつて？

えゝ駄目ですよ、お醫師なんて汗もはなほしやしませんや。

少々遠いけれども新宿の追分の横町にね、大變よく

きくまじない者がありますから　そこへお前さんお連れなさいよ、私しのうちなんざあ、おできときたら醫師にちつとも見せないで、すぐそこで封じて貰ひますがね、奇妙によく利きますよ、あの青山五丁目の酒屋で聞て來たと仰しやればすぐして與れまさあね。

明日にもお天氣だつたら是非お連れなさい、全く可哀さうにね、それが眼の上にでも寄つたらそれこそ大變、納豆屋の娘の様に瞼ぶたにきずをしなくちやならない様だとね、お前さん年頃になつて親を恨みまさあ。



これだけしやべつてやうやく入つて來たが鏡の前に陣取り給ふ奥様を見て、まあいらつしやいまし、どれお湯を汲みましよう、どうぞあなた序でなんでございますよ。

大分とお涼しく成りましてございますよ。

暑い／＼と思つてる間にもう涼風で、あなた手前共では子供が多うございますので、今日は

朝から洗濯やら繕物やらでねえあなた
あの何でございますか、御宅様に御子供は？
おや／＼左様で、おや旦那様と御隠居様ぎりや／＼どうも御淋しくていらつしやいますでせう、あなた様方へ生れて來るのも手前共へ生れますのも前世の約束ごとなんでございますが、でも御運がなけりやね、あなた御氣の毒な様ですけれども、さうしたお後はお早いものでございますよ、まだどうしてお若うございますもの、これからでございますわねえあなた。

奥様は氣取つておつぼ口で御意遊ばすから、よく聞えぬがやつぱりお家の御自慢らしい。

酒屋のお神さんなか／＼如才がない。

まああなた手前の娘共も高等小學が終へましたら堅いお家へ見習ひに上たいと存じて居ますのですよ、其節にはどうぞまた何分御願ひ申上ますどうぞねえあなた様。

いゝえネ琴なぞ少しも習はせる段ぢやございません長唄を少々歌はせましたけれど、もう此せつにおさらへも何も致しませんで、お行儀も何もあなた野飼ひなんですから、あなた様などへ遊びになんて差上られませんが、あの御用の時には御用捨なく御使ひ下さいまし、お女中さんよりも此邊の勝手はよく存じて居ますから、はいもうあなた不作法者でございますけれ共、御得意様で大騒ぎをやつて下さるんでございますよ、小僧名代に使はせますがあれで十七でと神さんは子供の自慢。

やうやく磨きの手を休めた奥様は。

あのう六つ割りの樽があつたら持たしてよこして下さるやうにと御意あそばす。

はい／＼空樽を、あゝ糠味噌漬を遊ばすので左様でございますか、當節のお教育のある奥様方は何でも學問上から遊ばしますけれど私共の野蠻人見た様なものはあなた様。

今度は漬物論に風向が變つて來た、奥様は少々御迷惑の體である。

昔しから婦女子の心得に物された本も少なくない女

大學、今川を初めとして、新進の御代敎育の旺盛時代の今日では濱の眞砂のかず限り無き女の寶典となる可き書物は金さへ出せば今日只今でも表紙の色も美しう脊皮の金文字並んで御目にかける事も出來ますけれども書物ばかりが學問でもありますまい、妙な事を云ふけれ共自然と人生は間斷なく敎訓を與へて居る、修養の機會は眼前をかすめては去り、去りては又來て居るのです。

諺にも人の風見て吾風直せと、其心して居るならば含笑の内に敎訓を得、洗濯しつつ湯を浴びつゝ聞くに倦まず、見るに面白く、自然に心にとめて反省更に反省時間に限りのない授業料の入らぬ、そして華族様でも四足でも、乃至奥様・看護婦女學生、髮結、尼さんお神さんと社會の學校にしらずしらず入學して居る此生徒さん達の毎日々々の稽古振りを見てやがて此大きな學校を卒業してしまふ迄の勉強は並々大抵の事ではありません、要は自分の心の置きどころ次第と生意氣な事申上て左様なら。





遊覽地としての京都

花 實 女

京都の市街は南北二里十四町、東西一里三十四町で町數は千六百八十九、戸數七萬二千七百餘り、人口約四十萬と稱せられて市街を二區に分ちて三條通りより北部を上京といひ南部を下京と申ます、最も繁華の所は三條通り、四條通り、寺町通り、京極と申まして此所は劇場や寄席のあるところです。

△皇　居

京都人士の最もほこりとする所は皇居でございませう。皇居は上京區の御苑の中央にありまして東西は百三十八間南北二百四十六間あるさうで宮門は南面を建禮門、東面を建春門、西面を宜秋門、北面を判平門と申ます、これら諸門の內庭に又一重あるさうです、紫宸殿は中央に位して即ち大典を行はせ給ふところで有名な左近の櫻に右近の橘は殿の南階左右にございます御存じの通り大內は勳位の有る者ならでは拜觀いたす事は許されません、仙洞御所より皇居の東南にございます、德川幕府後水尾上皇の爲に造進して仙遊の所といたしたのださうで、此所は當地赤十字社支部の總會とか愛國婦人會の總會のございます時に特別會員にのみ拜觀ゆるされますが、誠に結構な御庭園でございます、御苑內より東は寺町西は烏丸まで南は丸太町北は今出川、四圍は石垣をもつてかこひ、その上に萩とか小でまりとかの木が植ゑてございます、苑內は一面に芝で縱橫の廣路を設け、梅、桃、櫻、柳の諸樹を植ゑ付て四時の眺望うるはしく、君が代祝ふ常磐木は千古かはらぬ翠の色をたゝえて居ります、皇居仙洞の外桂宮は皇居の北にありまして其東に「祐の井」が御座い

まず、舊中山邸で今上天皇御產湯の井戶であります、此の馬場が猿が辻と申しまして維新前姉小路公知樣の非業の御最期いたされましたところです、御車返しの櫻は中立賣御門にあります、何代かの陛下が今を盛りと咲きみだれてをりました時に此所を御通りあらせられまして、あまりのうるはしさに御車を返されましたのでかくは名付られたと申事でございます、なほこの外に洛西桂村には桂の離宮がありますし洛北一乘寺村には紅葉をもつて有名なる修學院の離宮がございます。

△風俗人情

前に「稲荷のない伏見町」とむらさめ樣がのべられましたのと同じですからこゝはざつと申ませう。中京邊は優美だと申ますとよくきこえますが何だかたよりのない氣のきかない古風なものです、と申ますのは數代連綿として續いた御大家のお揃ですから、從がつて商法もはでゝはなく、店員などもあまり學校へ行くなどは好みませんし、中流社會ではなま中學校へやつて生意氣な中途半端の者にするより嚴格なる商家へ小僧につかはして實業を見習はせる方がよいと申して、尋常高等を卒業すれば皆奉公いたさせますが、やはり小僧より上つた人の方が立派に年あけて獨立いたす樣に見受けますし、又女子でも矢はりむらさめ樣の仰有つた樣に奉公いたさせますが、女學校卒業なすつた方より圓滿に家庭ををさめて居りますのは事實でございます人情はどちらかと申せばうすい方です、私方の近所は一軒毎に國が違う樣でいつ御向に御子樣が御出來なすつたやら御隣のお嫁さんが御いでなすたのか、ちつとも知れません、ほんとに、三條室町はきいて極らく見て地ごくおかゆがくしの長のれん」とはよく出來た形容詞ですよ。

△物價

物價は何によらず場末は安價ですが、中京は二三割方高うございます、といふて安いところへ買だしにも參りません、日々の御惣菜なども八百屋なり魚屋が御

用きゝに參りますから求めますので、お直段の高い安いなぞ申しますとケチだといやしめられます、よく皆樣が京都人といへば野菜ばかりたべてゐるからあんなに顏いろがわるくなるんだなんて仰有いますが、どうしてどうして今ぢや反對ですよ、私など地方へ參りますと、あなたの御近邊は野さいなどは水だきで、たべさすとかきゝます、ほんとですかつていはれまして、大わらひいたしました、昔ならいざ知らず、今ぢやそんなことしたらつまはじきされますわ、家賃などは六、四年八疊位の二階建なれば十圓から十八圓位で、敷金は大てい二ッ位です、地價は近年上りまして坪百三十圓から百五十圓位です、南は松原から北は二條あた



りから、西に新町東より堺町あたりまでなので、それよりはなれますとずつと三分の一位になりますから、私方の附近中京などは見得ばかりよくて暮しにくい所ですが、一昨年北海道から參りました者などは京都は何でも安價で得られますから、暮しよいと申してをりました、それからよく京に田舍ありと、申されますが、今は田舍に京ありです、なぜかと申ますと洛東吉田町附近は帝大をはじめ高等學校府立中學などの諸學校がありまして、附近の商家は學生がおもなる得意ですから從つて雜貨店の細君は申に及ばす荒物屋の娘さん乃至車屋のおかみさんまで、江戸辯ですから、まるで東京の本郷あたりへ行つた樣な風です、だれやらを

して、「吉田通れば二階から招くしかも紺の女學生」といはじめたのも無理はございません、何しろ吉田町は一名を學生町とさへ申て澤山の下宿屋は男女學生でつまつて居ります。

△遊　覽

一たい京都へいらつしやる御方樣は多くはまあ名所見物にいらつしやる方がおもですし、又京都人士も四圍の名所を案内するのをほこりとして居ります、或人が京都は神社佛閣と遊廓とで持つて居ると申されますが、實に當地は神社佛閣の本家本元で、神社が二千八百餘佛寺が三千二百三十餘の多數です、それが一々歴付ですからたまりません、却々十日や二十日位ではとても見物しきれません、土地で生まれた私なぞまだ知らぬ所が澤山ございます、有名な所はこれまでに何度も書物や詩歌で紹介しられてをりますから、ここには申上ずにおきませう、近ごろ設置されました遊覽所は岡崎町の京都市立紀念動物園これは皆樣御存じの東宮御慶事紀念に設けられましたので、淡水ながら水族室も出來ましたし植物園もございますし園内の風景は實によろしうございます、園内の小山に上りますと北は黒谷あたりから南はずつと粟田疏水のインクラインのあたりまで一目に見えます、又兒童のためには諸種の運動器具もそなへ付てありますから、日曜大祭日などは非常な入場者で、園前には乳母車は何百臺といふほどならんで居ります、實に趣味と實益とをかねた所でございます、其外商品陳列所、圖書館、第四回の博覽會の跡には毎年春秋に全國製産品々評會が開かれますし隣の美術館では同時に新古美術品の展覽會が催されますし、春秋の岡崎公園は實に遊覽の好適地です。

△都　踊

皆樣御存じの都踊りも當地の名物ですわ、毎年四月の一日から一ヶ月間祇園新地の歌舞練場で催されますので、圓山公園の夜櫻と共に解語の花ともてはやさ

れます、踊子三十二人に地方が十一人はやし方が十人の大勢で地方の「都踊は」のころにつれて、兩花道から出て參りましてさす手引手の歸りおもしろう舞ひますので、毎年衣服から道具立、歌曲も新らしいのが出來ますので、作歌は冷泉伯がものせられて居りましたが、同伯逝去後は北小路子爵が作られます、誰方か貴賓の御來遊になりますと、すぐ都をどりを御覽に入れますが、實際よろしうございますよ、皆様櫻花期にいらつしやいましたらせひ一度御らん遊ばせおすゝめ申上ます

△花賣女

花賣女も京都特有の名物ですね、朝露ふみわけて平安神宮のほとりを散歩いたしますと、まだ朝もやのかゝつた中から、花いりまへんか、花や番茶いりまへんか」といふころで中をきゝますと、ほんとに氣がすつきりいたします、この花うり女は石で皆様御存じの、洛東愛宕郡白川村から出ますので一日四百人位ださうです、誰方かゞ眞の京都美人は白川村にありと申されましたが、まつたくですよ却々美人が澤山居ります。



△奇習

當地は二月の節分には十四五位の者まで皆髪を丸髷

に結びます、何でも早くお嫁さんに行くとか申すのでこれと反對に年寄が娘の風に化けます、殊に遊廓は一そう甚だしいので、六十位の老妓なぞが舞妓の風して地藏參りいたします、却々おもしろいですよ、それから四月の十三日には男女を問はず十三歳となれば嵯峨のこくざう樣へ智慧をもらひに參詣いたしますが、丁度嵐山の櫻花も滿開の頃ですから、非常のにぎはひです、最も以前は衣裳くらべといふ樣に雛樣が裾模樣など內の娘は何々にしようと親達は大へんなりきみ方で一寸でも外方にまけない樣にいたしましたが、只今は男子なれば洋服女子なれば木綿の紋付位になりましたこれも時代の風潮でせう。

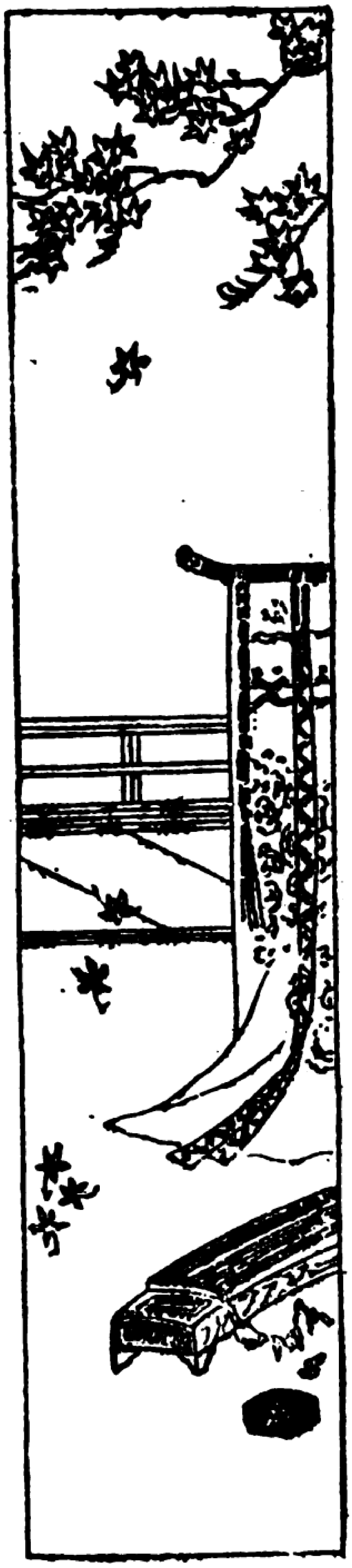
△祭典

何しろ當地に神社が澤山ございますから、隨つて祭典も少くはございませんが、多い中で有名なのは五月十五日のあほひ祭、七月十七日二十四日の祇園祭、十月二十二日の時代祭でせう、葵祭は賀茂御祖神社の祭典で、歷代の帝王崇敬したまひ、當日は勅使を遣はされ、十五日の朝舊皇居より花傘、御車、鳳輦、勅使奉幣使等隨從せられ、古代の儀式をもつて當社へ參向せられ、式典を擧げ、更に上賀茂別雷神社へも參向同じく式典を行はれますので實に古雅な祭典です、次が祇園會これより八坂神社の私祭で日本三大祭の一ださうで、實に優美と、高尙と、華麗の三ッをかねて居ります、十七日は俗に下の祭りと申ます、これは蛸藥師から以南の各家が我一と秘藏の屛風や道具をもつてかざります、神輿本社を出御、供奉には古代武者の粧ひをした行列が有まして、四條御旅町の御旅所へ幸、こゝに七日間駐輦、二十四日に前日の如く行列正しく還幸せられます、亦十七日午前は錦繡珠玉をもつて粧飾せしいとも美麗な山鉾を曳きだし、有名な祇園囃にはやし立て四條通りを東へ、寺町を南へ、松原を西へ各町へかへります、後の祇園會すなはち二十四日は一名を屛風展覽會と申ほどで、古代有名の畫伯がものせられたのが多ふございますから、現今の有名な畫

伯は申に及ばず未成畫伯などが御屏風拜見に來られます、時代祭と申は字の如く桓武天皇遷都以來千百年間の文物制度の變更いたしました時代を區別して當時の風俗を摸したる祭典で、行列は

第一　德川城使上洛式
第二　織田上洛式
第三　城南流鏑式
第四　藤原文官參朝式
第五、延暦武官の凱旋式
第六　延暦文官參朝式

と、列外に山國隊弓箭隊等ございまして、燦爛たる古代の甲冑より古雅なる衣冠整肅なる社杯さてはヒーサヤトマカセの槍奴から、藥助まで走馬燈の樣に市中の要路を行列して平安神宮に還幸、鳳輦も同じく神幸せられます、實に歴史上有益なる祭典でございます、その外四季をり〳〵の遊覽はかぞへきれぬほど、春なれば祇園、圓山、御室、嵐山の觀櫻、夏は淸瀧の河鹿に有名なる保津川の舟遊、四條河原の糺の森の納涼など秋は三尾の紅葉狩、冬は銀金閣寺の雪見などとり〳〵に趣味深うございます、何ぶん當地は商工業は發達いたしませず、と申して遊覽客に對する完全なる設備もございませんし、わずかに數ある名所をたのみとして、いや京都の山水は麗しいとか、風俗が優雅だとか仰有つていらしつて下さる御客樣をたのみにいたして居る樣な有樣です。



官吏の妻となつて發明した同僚の交際法

倭文子

廿五日、快晴。朝八時髪を結ふ、もう勉強屋が御用を聞きにくる、今日は、格別用はないよ、と云へば、では御通をといふ、オヽ、けふは月給日、それにしても午後の四時過ねば、入手せぬものを、あまりといへば現金な、高が四圓足らず、渡すに、無い事はないが、何だか癪に障り、又序にと、富やに、云はす、私等社會の夫人連中では、酉申の日と、異名を附けてある、財布の滿ちてゐるのは、今宵一夜、明日からは、又諸所へ散じ盡して、手に殘るのは、十圓か十五圓、年の寄る事も忘れて、廿五日ばかり、待ち兼ねて、ほんとに自分ながら、哀れなものだ。九時初子樣より電話かゝるけふ天氣いとよければ、こたび、御轉任の寺島夫人を訪はずやとの事に、早お晝にて、出懸く、明日お立ちの由にて、忙しさうなりしゆゑ、お玄關切りにて歸る、丁度、小母さん所へ毛皮商人が來たからといつて、秀やが呼びに來る、すぐいつて見る五圓位より百圓近く迄襟類の多き事驚くばかり、小父さん御留守ゆゑ、五六枚借りて置く、と云はるゝにぞ、妾も良人に訊いての上と、其儘歸る、夕食は珍らしく蠣の、手に、入りしかば、酢蠣と、フライにせしに、あまり御氣に、召さぬ樣にて、蠣は蠣飯が、一番好だ、との仰せ、次には炊きませう、と答へ、張り合ひなしに、食事終る、御機嫌上等でなく、ネクレットの話しも如何かと思ひしが、明日返答、聞きにくる筈故、思ひ切つてお話しす、需用殊に多き、當地の事とて、一も二もなく、御許しありて、兎も角品物を、見せよとの、仰せ、かしこみて駈りゆき、借りて、お目に懸る、あまり安きものは厭がくるとて、生れて始めて三十圓の衿卷を、買つて頂く、小母さん所へ、品物、お返しにゆきしに、梅子さん、かはるさん、「お目出度ムます、」といふ、私等の境遇にはちと過ぎたる品、今迄は何事

もお姑様次第、何一點良人にねだりし事はなかりしが今は二人切ゆゑ、仕方なしに恐る〳〵申上れば、案ずるよりは産むが安いといふ通り、矢つ張り男は思ひ切がよい。

　廿六日、大風雪、昨日の快晴に引きかへ、けふはそれは〳〵朝からの大吹雪、地上五六分積みし雪をば、一しきり〳〵の風、吹き飛ばし、一面煙の如く、一間先も見えぬ様になれるさま、物凄き事いはん方なし、日の長くるに從ひ、屋上の雪解の水は凸凹だん〳〵の亞鉛屋根の凹き、部分に流れて、軒端にて悉く氷柱となり、重なり〳〵て、みる〳〵うちに恰も大根ほどになりて列びたる様またなくみものにて、内地も殊に暖國住ひせし私等只々呆氣にとられ富やと兩人、窓の外のみ眺めて、半日を過す、室内は、ストーブ焚けばいつも攝氏二十五度位なれど戸外は零度以下二度に下る良人例刻出勤お見送りに、玄關の扉をあけるや、吹き込む雪風、息も止まるばかりあゝこんな日にも、おでましになるのは誰の爲、皆私等の爲なるぞ、少々の無理を仰有る位は當り前、それを兎や角思ふのは、ほんに勿體ない事である、夜に入り風止む、今夜は宿直とて富やをば、早く寢させ一人淋しく雜誌など繙し。十時過電話にて、何にてもよし、食事をとの御注文、今頃にどういふ譯であらう、と思ひつゝあつめ物にて折角御主人の御留守と、ぬく〳〵寢ていた馬丁を起し氣の毒だがおくり返して持たせ遣す明朝もと聞いて歸るいつも宿直の日はお辨當を、とらるゝ事とて何の用意もなし不尠閉口。

　廿七日、晴。朝食の準備もあれば、御留守だからとて朝寢もならず、六時半起床、十時頃、水野夫人來訪大連に御引越との事、此君私等のいまだ小學時代に、師範女子部に居給ひたれば、お年からいつても三そぢの坂を越えていらるゝ筈なれど、いつ見ても、あでやかに水々しる、何でも御良人が近頃めつきり御成功になつたとやら、それで何の御苦勞もないから、あんなであらうと思はれる、柄のいゝ飛びつきたい様なお召のコートを召してをられた、近頃は何誰のをみても皆

薄地な道行ばかり、私の樣な厚ボッタイ糸瓜衿なんか何處を探したつてありやしない、午後某氏夫妻を停車場まで、見送るべく先づ初子樣方にいたる、矢つ張り、十九世紀式のコートを着て出來ぬとはいへ、考へてみると餘つ程シャアックになつたものだ、これでも娘時代には、隨分流行といへば親泣かせも、したものだが……

……丁度東京から小紋だの、裾模樣などの見本が來て居た、見るは眼の毒ながら矢つ張りみたい、納戸の地色に、オモダカの白上り江戸褄、之が一番氣に入つた。



昨夜は某氏送別會をホテルに開き、二次會が某樓にあつたとやら、そして歸りがねえ、十一時過、醉つ拂つて來ましたの、見た處、ホテルばかりの醉方ではない樣だから、今迄ホテルに入らつしたのと、訊いたら、ウ、ウ、と胡魔化して寢つちまひましたからね、今朝訊きました處が、これ

これで、あの〇〇さんの奥樣ねえ、もう九時頃に旦那樣をお迎ひにお寄越しなすつたものだから皆が返すな返すなと云つて、到頭仕舞迄殘されたんですつて、いゝお年をしてあんまりですわねえ」と、ほんとに私などは隨分、馬鹿正直に朝まで寢ずに居た事もあつたが、迎ひなどはちと考へものかと思ふ、如何にも奥樣のお尻に敷かれて、ゐる樣で、人に馬鹿にされるいくら憎らしいと思つても外では、矢つ張り馬鹿には、されたくない、これが正眞の夫婦の情とでもいふのであらう

これで昨夜おそくの食事の譯も分明となる、夕食後、フトこんな句が浮び出た。

大吹雪、何所を吹くかや部屋の中

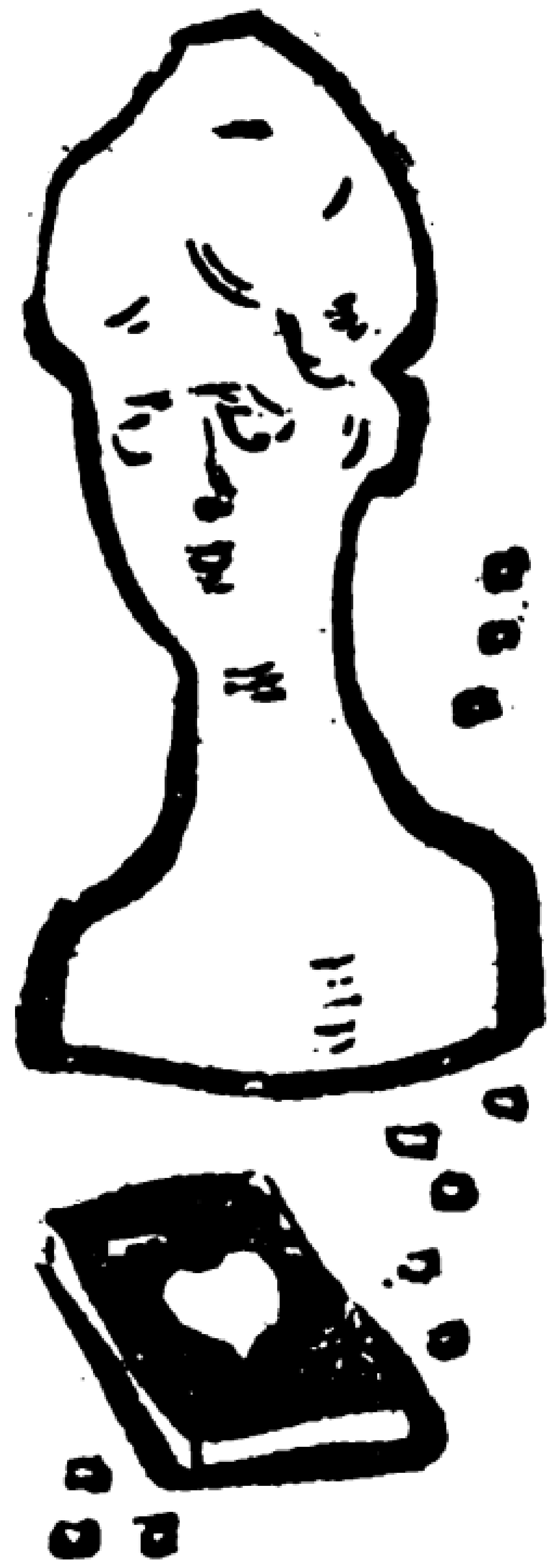
廿八日、晴れ。きのふ哈爾賓より旦那樣お歸りとて〇〇さんから、水菓子を頂く、今日は三寒四温の規則通りに風もなし、いと温かなれば、こんな日にと〇〇さんに、およろこびに行く先づ旦那樣のお悦びやら今朝の御禮やら申上ると奥樣突然に「あのねえお土產を買つて來ましたが、束髮の櫛なんですよ、實は△△さん、□□さん、など獨身の方には、金のカフス釦にしましたが、奥さんのある方には、頭のものがいゝといはねばよいのに私がいつたものだから、正直に買つちやあ來ましたが、どうも／＼拳の幅がこんなにも（手でしなをしられたのは五寸計）あつて金やら玉やらでピカ／＼してゐて、とても貴所方には不向で、内の芳枝（お孃さん）でさへ、華美でいやだといひますの、それでゐて値段は馬鹿に高く、一枚七圓の正札が入つてゐましたから妾はまあ、こんなにかけるのなら、カフス釦の方が餘つ程よかつた、貴郎私が今さしてゐる樣な無地はなかつたんですかと訊けば、そんなのはいくらもあつたが、若い方には華美なのが、いゝと思つて見立てたんだのに小言をいふのはけしからんぞと怒りましたが、いくら何だつてねえ……御目に懸けても、いゝんですけれど」……「イヽエもう拜見致しませんでも……どうしても、外國製のものは、日本人には不向でムいますからねえ」と調子を、あはせば、「全くですねえ夫に今頃、金の櫛なんか挿すのは野暮ですわ…

オツト現在、私は一帳羅の金着せを挿して居るのに、これでも綿銘仙の一反位は買へるのをよして、買つた大よそ行きだ、正可お氣の付かぬ事もあるまいに、いくら目下のものだつて、あんまり馬鹿にして入らつしやる、「家の下女二人にといつて、玉入の指環を買つて來まして、夫は二圓五十錢宛だ、といひましたが、下女なんかに金の指環は勿體ないからお金で一圓づゝもやれば澤山だと思つて、お金にしようかと聞いてみましたら矢つ張り指環が頂き度ムいます、といひますから惜しいが、呉れてやりましたの」だつて呆れて仕舞ふ何ぞの夫はお金高、大抵御心の程はわかつてる僞にもせよ、七圓の品が二三十錢の水菓子と代つたのだもの、もう〳〵一言が二言ます〳〵厭氣になりそこ〳〵に、お暇をして歸る、これが當世貴夫人氣質といふのであらうか、詐り言も大概にしないと滑稽になる、こんな方でも上官と思へば時折の御伺ひもしなければ、またいろ〳〵にけなされる、ほんに當節のお役人の奥樣も亦難い哉だ。

廿九日、快晴。けふは日曜日殊に、天氣は上等ときてゐる午後良人はこんな日に家にゐるでもないと散歩にと出掛らる此時「オイ倭文一緒にそこいら迄行かないか」と一言仰有ればどんなに嬉しいだらう、それこそ何を打ちやつといても、すぐついて行くわ、私等夫婦はどうして、こんなに舊式なんだらう尤も結婚した抑々の日から五年來お姑樣と一緒だから夫が習慣になつたのであらうけれど、今は誰憚る人もないのに折々はよさゝうなもの、もう恥かしい歳でもなし、然し私がこんな醜い顔だから、それでなのか知ら、あゝつまらない日だ、オルガンでも彈う、風琴で思ひ出した、あの當世式貴夫人のスタイルは、私でムいといはぬばかりの〇〇夫人が、いつか「オルガンは、外國では、寺院に用ゐるもので普通家庭ではピアノばかりで、西洋人はたゞ日曜日丈オルガンを彈いて、ゐますよ」と仰有つた、御自分の家にピアノがあるからでもあらうが日本の家庭にピアノの備付てある家はさう〳〵はあるまい、私等の出た學校でさへピアノの出來たのは、

三學年の時、それ迄はそんならお寺式であつたか日曜日——つまらない——お寺式……それを今彈かうとしてゐる妾、何だか妙な感じがした、夕方下役の某から旦那樣に内々で奥樣にと何だか包んだ物を持つて來た此間中、いろ〱世話をしてやつたから其返禮だらうとは思つたが、物を貰ふと叱られるから、其儘良人にお目に懸けたら案の定、馬丁を呼べこれを持つていつて返して來い……早く此氣質を皆が知つて吳れるとよいのに、其場に返すは氣の毒だし中に立つて一番私が困る。

三十日、晴れ。朝髮を結ふ、けふは廂が少と出過ぎた、こんなのを御姑樣が御覽なすつたら嘸、嫌なお顏を遊ばす事だらう、ほんとに今のハイカラ髮は顏の相恰まで變つて、しやくんだ樣にみえる、妾は大嫌いだと、よく仰有つたが今は誰も云ひ手がないから、之で我慢しよう、午後山川夫人來訪、始めての御對面お若いに似合ず、大層お辯のいゝ方、御姙娠とみえて、大分お苦しさう、あゝお羨やましい事だ、此節時々子供を貰はふかなど良人で仰有る每に身を切らるゝ樣に情ない、何故神樣は一人お授け下さらぬのであらうと勿體ない事ながら、お恨めしう思ふ、夕ぐれ東京から小包到く新海苔、鰹、足袋お煎など大好きの味噌煎餅の細々に撰じたるいと惜し、お手紙には嫂さんが經濟が下手のお料理がまずいのといろ〱な愚痴が認めてある、良人にお目に懸たら、「よく面倒なのにいろんな事をいつて來るなー」とお笑ひになる、分れてゐるとそれはそれと思ひ出さるゝものとみえる私にしても、良人よりもお姑樣の方がものがいひよい位、いつか米屋のおつ母がお養子でムますかと云つた事があつたつけ私がお仕事せつせとしてゐると、もうお八つを、開かうかとよく仰有つた、ほんにあの頃が戀しい東京を立つ時、文子さんが、今度はお二人でお樂しみと仰有つたが文子さんの旦那樣の樣な、御性質とは全然り異ふからちつともおもしろくはない、反つて淋しくて、仕樣がない、來年の今頃は御一緒に歸せるかしら、すぐ御禮狀を出さう。



清き品性を齎らして逝ける處女

花散里

誰よりも誰よりも一番の大仲好だつた從妹のお美江さんは栗の花散るさみだれの夜、十八年を一期として靜かに永久の眠りに就きました。

あの人なつかしげな大きな眼、長いまつげ、抱きしめたいほど細やかなからだ……まだあり〳〵と胸に浮んで旣に世を隔てた人とはどうしても思はれません。

園池の伯父さん(お美江さんの父)が英京へ赴任するに就てその頃まだうら若かつた伯母は生れて間もないみどり兒だけを連れて行くといふので姉のお美江さんが我家に預けられたのはたしかその三歳位の時だつたらう。

あれが末子ならまだ乳ばなれもせぬ程の幼な兒がよくまあむづかりもせなんだものよと祖母は今でも折々云ふ。

着物ならおもちやなら池の緋鯉にやる麩の數までもお對にして育てられたお美江さんと私とは五歳の春から爺やの御供で程近い華族女學校の附屬幼稚園へかよひはじめました迎への人力車で歸へると直ぐ隱居部屋を訪れて祖母から昔噺を聞かせて貰つたり日あたりの好い緣側へお鍋やらお皿やら一ぱいならべて御飯事したりするのが二人の日課、鬼ごつこよりも折り物の好きなお美江さんは御飯事をしても私女中になりますわつて小聲で云つて一人で切つたり、きざんだりそれはそれは實に靜かな兒であつた、子供同志の根も無いことから何か爭ひかける事が稀にはあつてもいつもおとなしいお美江さんの方で環さん御免なさい私が惡か

つたわつて折れて出るので喧嘩らしいことなんぞ遂ぞ一度もした覺えがない。

美江ちやんはほんとにしほらしいのね、環ちやんみたいに我儘な子は少し美江ちやんを御手本にして柔順になさいなと母は何かに付けて私を叱る。

母樣はあんまりだわ美江ちやんばつかり可愛がつて……と子供ごゝろに恨むだこともあるけれどそれも今から思へば無理ならぬ……全くしほらしい人だつたのです。

そのうちに園池の家族も歸朝したので、お美江さんも程とほからぬ永田町のその家に引とられることになつた。その時ばかりは流石すなほな、お美江さんもいやだ／＼と聞き入れないのをだましてすかして返したもの〻祖母などは掌中の玉をとられた樣に落膽する、お美江さんの方でも園池の家に歸りたい／＼と云ひ續けて毎日學校の歸途には必らず寄る、夕方書生に送らせて歸へすと直ぐまた電話がかゝつて來る、そして其の間にはふさいでばかし居るとかなので園池の伯母はあてつけがましく「美江はいつまで經つても一向なづかないで困つてしまひます、そしてどうもあの子は陰氣でね、清香（お美江さんの妹）などゝはまるで性質が反對で……」と祖母や母にまで話されたとやら。

同じ姉妹でありながら實の親にまで隔てを付けて扱はれるとはまあ何といふ可哀想なことだらう、いつそ當分こちらで預つて置けばよかつたのにと祖母は涙までこぼして云ふ。

ある夕食後の運動にと菊やとふたり園池を訪れて子供部屋へまはるとどうも樣子がたゞならぬ、お美江さんの大事に／＼して居る綠さん（人形の名）の首は引拔かれて美しい友禪の袷がズタ／＼に裂かれて室の中央には清香さんがこはい顏して立つて居る。

「お美江さんは？」ときくと

「知らないわあんな人……」斯うなのですもの、あゝまたきつといぢめられたんだわ、お美江さんもほんとに可哀想に、妹に、いぢめられてだまつてるなんて……」とあまりの口惜しさに歸へらうとすると私此所に

居るのよと云ひながら植込の中から出て來たお美江さんはあの長いまつげに涙の露を光らせて、

「私どうしても清香さんには叶はないわ」とすゝり泣く、

譯をきくと清香さんが緑さんをくれろといふからお美江さんがたゞ貸して上げるだけよと云つたので清香さんが怒つて譯もない人形をあゝまで無殘にしたのだとのこと、同年でもおませな私は姉様ぶりに、

「伯父様に申上げたらきつと清香さんを叱つて下さるわ伯母様は清香さんを御ひいきだから迚も駄目よ」



といふと、

「いゝの、我がまんするの、清香さんが叱られちやア可哀想だから」とほんとにどこまでいぢらしい人なのでせう。

幼い時から大きな聲もたて得ない程内氣で靜かだつたお美江さんは派手な友禪が矢がすりに代つてお下げ髪がマーガレットに縮まつても氣質は元のまゝでした。

學習院の園池美江子さんといへばあゝあのおとなしい優しい方……と誰でも直ぐにうなづく位だつたのです、

芝居だの、お花見だのと人の出る所へゆくのは大のきらひでいつも家族の出かける時でもお留守居ばかりして居る樣子だからと祖母は一人で心配する、ぢやア私が連れ出して見ませうと云つて今日は日比谷にでも散歩にねと誘ひにゆくと、

「さうね、でも芝公園の方が靜かでせう?」とつゝましやかに小聲でいふ。

「そんな引込思案は禁物よ、サア〳〵直ぐに出かけませうよ」と進まぬ人を促し立てゝ春の日比谷をさまよつたこともあつた、いつもの通りのおとなしさに斷りきれず鹽瀨表の重ね草履おもたげに、つまり私に對するおつとめみたいについて來たお美江さんも海軍々樂隊の奏する獅子の寐ざめの曲が終るとベンチに掛けた腰を浮かせながら、

「浪さんのおかげで久し振りにせい〳〵してよ、うちに居ちやアこんな氣の晴れることなぞ有りやアしないわ」とやゝ上氣して汗ばんだ面にゑくぼをきざんでニツコリする。

あゝうれしい、沈んだお美江さんの氣を少しでも引立たせるのは私の役だといつもこんな時思ひました。

またいつでしたか何かの事で親類中の娘達が集まつた折り、離れの隱居所で御菓子をたべながら私が、

「皆さん何の花が一番お好き?」と訊ねた事が有つた番町の金岡のは櫻、大森のとし子さんは百合、ほかの人達もめい〳〵に梅とか牡丹とか答へたのをお美江さんは、

「私なんか花のことはよくはわからないけれど、それでも月見草が大好きなのよ夕顏も好いけれど……」と云つたので、

「お美江さんは不如歸の浪さんがお好きだからそれで月見草も好きなんでせう?」左樣いへば浪さんとはお美江さんみたいな方ぢやないかと思つたことも有りますわ」と誰やらませ返した人が有つた。

お美江さん……浪さんに似て居ると云はれたお美江さんもまさかに數年後には浪さんと同じ病ひでしかも其の時、その話をし合つた室でさめぬ眠りに入らうと

は夢にも思はなかつたことで有らう。
あゝ薄命な美しい人……。
　去年の初夏、垣の卯の花ゆきと亂れてふるさみだれもわびしい頃、園池の家では再び英國へ赴くことゝなつたが既にかりそめならぬ病を得て靜養を旨として居たお美江さんだけは八重の汐路をはる〳〵と彼の國へ伴ふことは主治醫が首をかたむけたのでまたもや、我家で預ることに定つた。
　こちらでは遂ぞ一度姉らしい振舞したことも無く、却つてつれなくあたられた妹の清香さんにまで優しいお美江さんは別れを惜しんでその出立の前夜、私もませて三人が三階の露臺に出ていろ〳〵と話し合つた時
「清香さんとはもう暫く會はれないのねこの月がかけて晦夜になる時分にはお船はどの邊を航行つてゝせうか……私も病氣さへしなければ一緒に連れてつて頂けたのねえ、お歸朝の頃にはもうどんなに變つてるかわからないわ」と常に口數の少いお美江さんが珍しくこんなとを云つて袖で涙を抑へたので流石冷淡な清香さんもとう〳〵面をそむけて泣いた、氣丈な私も泣かされたがあゝそれも夢……。
　それから最早一とせに餘る。
口でこそ一年といふものゝ其の間にお美江さんは……。病勢重つてドッと床に就く樣になつてからは祖母の心勞は一方ならず。朝に夕に氏神樣にお百度ふんで病氣平癒の祈願をこめる、父母は園池の家族が出發つ際にたしかに美江さんは預つたとうけあひながら、萬一のことでも有らせたら申譯がないとてひたすら看護に盡される、殊に母には義理ある姪とて其の心配も一しほでみとり疲れの痩せさへ見える、私はまた是非もう一度もとの身體にして上げたい、ならば此の身に替へてもとまで病む人の上を氣づかつた。
「今日は氣分はどんなの？」と病室に當てゝある離室を見舞ふとゲッソリ肉の落ちた頬に淋しく笑つて、
「有り難う……ですけどね環さん、こんな病氣なんだからあなたは此室へ入らない方が可いと思ふのよ、梅澤さん（看護婦も）居て下さるしちつとも淋しいことな

んぞありませんから」

まあ嘘ばつかし……――淋しくて心細くて堪まらなくてもよろずに氣の付くお美江さんは私の身體を心配して病室内へ入れまいとする。

蔭へまはつては祖母も母も矢つ張りそれを氣遣つて「美江さんはそりやア可哀想にもがひ無いけれど環までが御相伴しちやたまらないから成る可く近よらない方が安心ですよ、殊に若い者には感染り易いといふことだから」と度々注意されて居ることとなのでお美江さんの言葉をきくたび殊に私は胸がギックリする。それを、

「そんな事が有るもんですか、それよか早く快くなる様に養生なさいな、病氣は氣の持ち様一ッですもの ねい」とまりげなく慰める辛さ――

かくて病む人の衰弱は一日〳〵と目に見えて加はつてゆく。看護婦の梅澤は私を物蔭に招いては。

「御隱居樣は何も御存じないのであゝしておみくじが當たとか占がよかつたとかおつしやいますし、それに御老人への御氣休めに主治醫も好い加減に云つてゐらつしやいますが環樣あなたはもう御覺悟なさいませよ」と云つてくれる。

「梅澤さんほんとにどうか成らないでせうか？」

「美江子樣も御いとしう御座いますわねえ」あゝ御氣の毒な……」常から優しいお美江さんは永い間のわづらひにも我儘一ッ云ひませず看護婦までもあまりのしほらしさに泣かされた程……。

あゝ思ふも忌まはしきは彼の夕よ。

今日は病人も殊の外快いゝといふのを頼みに、午後から下町へ買物に出て、それでも何と無く心せくまゝに火ともし頃車を急せて家に歸へれば早容態は變つて居た。

一室の裡には主治醫某博士、祖母、父母、看護婦と水の様に居流れて誰れの面にも云ひ難き悲痛の色はありありとよまれる。暗い冷い死の影はガスの光りに蒼白く照された病人の胸のあたりにたゞよふて居る樣、

あゝおそかつた。お美江さんは私が歸つた時には既

に昏睡に陥つて居たのでした。

枕邊に寄り添つて聲の限り「お美江さん」と呼びますとうれしやそれが通じてかすかな笑がのぼりました。そして最後のいきを靜かに吸つてお美江さんは最早黄泉の國へと旅立つたのです。

おゝまあ何といふ果敢ないわかれでせう。まして臨終の枕邊に親はらからの影も見えず遠きよみぢへ出で立つ身は、まあどんなにか心細かつたらう……。

倒さに立てめぐらした、屏風の内にその遺骸が北の枕になほされても、死花の咲いた美しい面に白い布が被はれてもまだ／＼逝つた人とは思はれません燈明皿にみあかし燃えて榊や水が供へられても、それでも歸らぬ人とは信じられません。けれども變を聞いて走せ集つて親戚の人達がその遺骸に額いて涙ながらに禮拜するのを見ては、今更ながら云ひ知らぬ悲しみが胸をついて、あゝ私も涙を止めることができませんでした

なつかしの人……お美江さんよ……

* * * * *

ゆめ心地の裡に質素ながらもおごそかな神式に依りて、その遺骸は青山に葬られ今日は最早三十日祭いま頭亡き人のみたまはいづ地さまよふことでせうか。暮れる空に星一つ、さゝやく如くまたゝきて……。



社會經濟

火災の原因と損害

（東京市の損害一ヶ年六十萬圓）

最近五年間東京市内に起りたる火事の度數は、二千九百二十七回であつて其原因を調査して見ると、內放火六百二十回原因不明のもの三百九十五回で、殘り千九百十二回即ち全數の約三分の二は、火を粗末にした過失から起つてゐる、而して右過失火の據て來る處を穿鑿して見れば、ランプを落したり轉覆したりするから起つたのが第一位を占めて三百八十八回、次ぎが取灰たき火の殘、煙草盆、火消壺、消炭から二百五十九回、自家用煙突から二百四十六回、煙草の吹灰から二百二十六回、火鉢の殘火から百六十一回、炬燵やあんかから百十回、炊事用竈及爐から百三回、其次ぎが營業用の竈から六十回蠟燭の付放しが五十七回、焜爐から同じく五十七回、自家用の風呂場から三十二回、燈用瓦斯から二十二回と云ふ順序で其他には鍛冶屋の火鑪から三十六回子供の弄火から十回、電燈の四回等がある、今試みに是等の原因を男子の不注意からと、婦人の不注意からとに分て見れば、總數の內三分の二が婦人の責任で、三分の一が男子の責任となる



火事の原因は大要前述の如くだが、火事の爲めに蒙つた損害は燒失した家屋の概價丈を計算して見ても東京市は最近五年間に約三百二十萬圓を損してゐる、是れを一年に平均すると約六十六萬圓となる、此の外に燒失家屋其他の調度附近人家の損害營業上の頓挫、敎育上の蹉跌勞力の損失等有形無形の損害を加へたらば其損害は少くとも一年百萬圓以上に上るであらう、更に進んで日本全國の分を調べて見ると、最近五年間の火災度數が約七萬五千回燒失戸數約十七萬戸此坪數三百七十萬坪、死亡者千七百九十七人と云ふ事であるから、一年の平均は度數が約千五百回同戸數が三萬四千戸燒失坪數七十二萬坪、此價格約七百萬圓で死亡したもの三百六十人となるので、實に莫大の損害である。

火災を減少する方法は火の用心が專一で、各自が少しく注意すると否とは大變な相違で、其の證據には大風の晩や大火事の有つた當座には火事が至つて少ないのを見ても分る、第二は消防設備の完成であるが、是れは度數を減ずると云ふよりも寧ろ其損害を勘少ならしむる手段である、故に火事減少の妙訣は火の用心特に婦人の注意に止めを刺すと云はればならぬ。

（土田消防課長の談）

生活費の割安な英國

（倫敦市日用品の相場）

英國の生活費は米國に次いで、世界各國中の最高位に在るは何人も知れる事實なれども、是は消費する品數も餘計にして享受する快樂も多大なるが故にして、一品一物の價格に至りては其低廉なること驚く可きものあり、今試に日常生活上の必要品中主もなるものに就き、倫敦に於ける小賣相場を擧げんに現に市内某大商社にて中流以上の顧客に日々供給しつゝある、格附け左の如し

牛肉ランプ上等（一斤）	一志三片
同ロョイント用（一斤）	十一片
同ビーフステーキ用	十片
羊上等（一斤）	八片
豚同（斤）	十一片
鷄（大一羽）	三志半乃至五志
家鴨（大一羽）（五百目以上）	三志六片
七面鳥（一斤）	十一片
食パン　ハーフローフ（約一斤）	一片半
牛乳一パイント（二合六勺餘）	二片
牛酪（一斤）	十一片
玉子一志につき六箇乃至八箇 季節によりては十箇	



鯛（一斤）	六片
鮭（一斤）	一志四片
馬鈴薯上等（一斤）	二片
同中等（一斤）	一片
玉菜（一個）	一片
茶（一斤）	一志六片
角砂糖（一斤）	二片半
カスター砂糖（一斤）	三片
ブラウン砂糖（一斤）	三片

即ち肉類の部に於て牛肉は凡て我國に比して、大に低廉なるを見るべく牛肉中の最上部分ランプが、僅かに一斤一志三片を出でず貨幣の購買力を假りに彼我同一ものと見ても、實に我六十二錢なり而して下等社會の需要する所のものに至りては、此部分にても尚も能く一斤六七片を以て舌を鳴らすに足ると云ふ、砂糖に至りては僅に我十錢を以てして、品質の優良なること我國にては殆ど見るを得ざるほどの良品を得べく、牛乳も最上一合三錢餘を出でず更に家賃に至りては、其低廉なること東京の比にあらず一年五十磅を投ぜば少しく、外廓外郊に近き地區に於ては優に紳士の住宅として恥かしからぬ應接室、食堂、寢室湯殿其他必要の設備を全ふし、總計十室以上位の家を得るに難からず（家屋の所在地如何は家賃決定標準の大要目にして家屋の大小設備の良否如何と輕重を見ず、又家賃の外に家賃を標準

として普通其四分の一位の賦課税あるべし）

而して臺所の設備に至りては石炭、瓦斯兩樣の炊事器を具へ臺所にて石炭を焼けば湯は自然に水道より導き來りある鐵管内に沸き返り湯殿其他屋内何れの部分に於ても、水口の螺旋一と捩りにて思ふ存分に之を使用し得るの仕掛けあり、其他一切の設備凡ての便利に適合し居る點、東京の借家の如きものにあらず一年五十磅と云へば日本の錢に換算して、一ケ月僅に四十餘圓なるを見るべし、斯る低廉の家賃も若し仔細に考査し來れば別に不思議はあらず、土一升金一升の流行地は地代固より高しと雖も茲に云へるが如き、家屋の存する地區の地代は左まで高からざるのみならず、英國に於ては諸事一切分業組織なれば建築一切の材料の如きも、日本の如く特別に其箇々の建築物に就て調製するにあらず、して一度に何萬何千と多數に製作し得る其上に自由貿易の國柄とて、此等の原料は世界最廉の地より最良の品質を自由に取寄するを得べく、家屋は煉瓦造りなれば子孫百年に繼續して永く其利を收むるを得て、金利も亦た甚だ低廉なり、建築費を五年間に取り返さゞるべからずと云ふが如き際物主義を取り居る東京の貸屋と、自ら其家賃の定め方に差異あるを怪むに足らず、而して此相違は獨り家賃問題のみに止まらず凡ての必要物に就て皆然りと云ふを得べし、要するに日本の產業なるものは未だ幼稚にして、國は保護主義に傾き生產





の要素潤澤ならざるのみか、消費の整正も未だ行はれ居らざれば無理もなき次第にして、此等の改善を追て國富の增進と產業社會の發達とに待つの外なけれども、一方には大戰爭の後を受けて財政の處理艱難其宜しきを得ず、遂に物價の平準を失するの勢を助長したる趣もなきにあらず、經世家の大に注目す可き要點にして我々同胞ほど、粗衣粗食に非常の代價を拂ひつゝあるもの他に其例なきの一事は國民各自の宜しく、自覺すべき所なり當地の經濟狀態を見るに贅澤と云ふものには、高價を拂はしめ、生存上の必要品は成る可く廉價ならしむるの組織整然として容易に亂す可からず鹽、醬油、石油の如きものにまでも永久的の重税を課して平然たるが如きは、當國人士の一般に了解に苦む處なり（小山完吾氏）



嫁入前のお嬢さん

桃割式部

食卓日記の一節

御両親が伊香保温泉へ湯治におでかけ遊ばしてから今日でもう丁度一週間、早くお留守になつた方が呑氣で良からうなどゝ思つたことだがもう淋しくて／＼母様！！　と叫びたい様な氣がしてならない、矢つ張り親とは有りがたいものとつく／＼思ふ。

ガラス戸をあけ放した縁に立つてながめやると秋晴の廣い花畑は今コスモスとダリアの眞つさかり、翠色の葉をつゝる緋の色が燃える様だ。チリ／＼／＼、オヤ電話と思ふと重いお尻が輕く浮いて直ぐ電話口に立つ、案の定、敏子さんだつたわ。

「あなた敏子さんはア左様よ私夕美よ、エ、まだなかなか歸京りませんの私にも伊香保へ來ないかつて手紙がきてよ、はア左様よ兄は今日お休みですから宅でノラクラしてますの、午後からお遊びにゐらつしやいなまあ左様？　ぢや御都合の好い時にね、アラ昨日歌舞伎へ？　羨しいわ、だめよ迚も私なんぞ……出られませんの、あゝ女學世界？　府立の評判記はどうしたんでせうね、あら河岡さんのこと？　まさか……可哀想よそれぢやあんまり……、でも乾度ね色の黒いバンカラな人らしいのねホヽヽ、大變だわ御兄樣によろしく」

これだけのおしやべりして漸つと切つて電話口を離れると直ぐ背後に兄樣が皮肉なウス笑ひして立つてゐらつしやる。

最後の一句を聞かれたかと思へば自づと頬の赤らむを覺えながら、

「まあ隨分だわ、他人の話をコツソリ立聞きなさるなんて……いつも口癖の紳士らしいはどう遊ばしたの？

敏子さんがね是非兄様に運動會の切符を頂いてくれつておつしやるのよ」

きまりが悪いからドギマギしてテレかくしを云ふと兄様もサル者わざととぼけて、

「フーム してみると餘程、秘密な話があつたんだね、僕は今こゝへ來たばかりなんだよ、どうした夕美さんお前の顔は……まるで火事見舞の金時よろしくぢやないか」叶はぬと見たから、

「憎らしい、知らないわ」を捨臺詞で居間へかけこんで來てしまつた、木せいがほのかに匂つて梅もどきの紅がいかにも秋を思はせる。

机の前に坐つて母様へ手紙書きかけると豊がきて御客様だと云ふ。

どなたかしら？　オヽイケ好かない此の間つからチヨイ〳〵やつて來るあの立川さんの奥様だそうな、でももう應接室へ通してしまつたといふからまさか今更斷れもしない、仕方がないからわざと肩上げの未だおろしてない銘仙引かけて一寸會つてあげた――まあゝげた位の處だらう。

「御母様は御留守で御座いますつてねえ、少しも存じませんでしたのよ伊香保ださうで……、お樂しみでゐらつしやいませうね、あなた只今、お稽古は何を遊ばして？」

「ピアノと油畫と佛蘭西語とで御座います」

「お琴やお生花は？」

「もう止しました」

「お縫物はあなたが遊ばすのでせう？　只今何ぞ？」

「きらひですから出來ません」

「あなた海軍御好きですか」

「イヽエ」

「オヤ〳〵、私好い所へお世話しやうと思つたんですけれど……學士ならお好きでせう？　お兄様も大學ですしね」

「イヽエ大きらひで御座います」

隨分ぶしつけな人もあつたものだ、何所の世界にかなじみも淺いよその令嬢にこんなことを聞く人がある

もんですか、腹が立つたから木で鼻くゝつた樣な返辭して置く。

やつとお尻が持ち上つたからお歸へりですかと云はふとすると、「御不淨場はどちらで御座いますか」……その暇に大いそぎで豊を呼んで箒木に頬かぶりさしておくれ、そして下駄にはお灸するゑてね」と口早にさゝやいて置いた。

またそれから二人は三十分も對座したらう何や彼やよくしつこくほじくり出して聞きたがる人だと呆れてしまう面倒だから「ハイ」と「イ、エ」で持ち切つておく「あすこの娘は可愛氣のない不愛想な小憎らしい女だ裁縫もできない樣子だからもう何所へも世話なんかしてやるものか」とでも思ひながら歸つて行つたことだらう、でも何だか氣味がよかつたわ

午後から兄樣は銀座を歩いて來るとおつしやるからぢやあ私もねつて云つてるとそこへ丁度赤坂から從兄の進さんが見えたので散歩はオジャンになりさうだ。

「進さんお約束どほりお甘藷は俵で取つてあります



よ」開口一番、まづ私の口を突いて出た言葉はこれ、進さんもなか〳〵敗けては居ない。

「なーる程ね、スヰートポテト以外の料理は知らないつていふ豫防線とは氣が利いてますね」

オホヽヽまあ驚いてしまつたわ、寄宿生活の効果や實に偉大なるかなとでも云ひたい位、からかはれるとまうかになつて、默つてしまふ以前の進さんとは別人の樣にすバケて來たわね。

ドレ斯うしては居られないと私は失禮して臺所に出る、何か御菓子でもと思つて、昨夜皆征伐してしまつたし進さんの好物お汁粉も今から小豆を煮ては間に合はない……オヽ左樣〳〵三河屋から新案の罐詰餡が取つてあつたわ、あれ〳〵と直ぐに罐をあけさして餡は御鍋に移し、よい程にお湯をさして火にかける、煮立つたところへ御砂糖と食鹽少々で味をつけこれも急場のまに合せに御餅代用として到來物の岡山名物吉備團子を浮すと我ながら感心する位、手早な氣の利いたお汁粉になつた。

鹽漬の紫蘇の實添へて出まして置いて、さて今度はお約束の御甘藷を何かにと思つたが生憎手帖が見つからない、仕方がないから平凡でも御煎餅ときめる。

△さつまいも煎餅

まづ大の甘藷三本を綺麗に皮をむいたのを薄く輪切にして水に放してアクを去り、さて叮嚀に布巾で水氣を切つて置く。

上等のゴマ油をフライパンで煙の立つまで煮立たせて、その中に前の甘藷を入れて少し色の着くほどにカラリと揚げ、新聞紙とつて油氣を切る。

今度は別の鍋に白砂糖百目と水少々(四勺位)入れとろ火にかけて絶えず杓子でかきまはしてると、だんだんに御砂糖が溶けて、終にはスーと糸引くほどにねばりが出たところで火からおろし、前の揚げいもを此の中に入れさせ、私は手早に箸でかきまぜるし、お松はそばから白胡麻をパラ〳〵ふりかける。

御砂糖が萬遍なくまはつたので、臺に用意させとい

た新聞紙の上にひろげて、三人がゝりで極く手早に、一枚〳〵にはなしてまはる。

○

さア御煎餅はこれで出来た、「まあ何て今日はカラリと好い按排にできましたんでせう」と無口者の松が御世辭いふくらゐだから、その骨折は一とほりぢやないが、全く上手になつたものだ、嬢はまだ新参だから、

「これはくわゐですると猶上品になるのよブリキ罐にさへ入れとけば、三月位は保つからねえ」と敎へると「そのまゝに價が引きませう」と云つて笑つて居たつけ



高麗焼の鉢にうづたかく盛つて、これは自分で持つて出る。

「今しがたピアノ彈いてらしつたのは誰？　あれおやアまるで、メチャメチャよムーンライトソナタも何もありしないわ」

お二人は一寸顔見合したが兄様がまづ。

「お汁粉の御手腕に賞與の餅を奉らうと思つたんだが止めた〳〵」

「オヤ左様？　兄様なんぞに賞められなくたつてちつとも困りやアしないことよ、今めし上つたの返して頂戴、此の御菓子だつて上げないわ、アラいやだ進さんの口のまはり……ク

ハヽヽ、ワン〳〵のあみだ樣みたいだわ」

學習院のハイカラ貴公子、大狼狽にあはてゝポケットから引出した白絹のハンカチーフで全面を雜巾がけしはじめた。

「オホヽヽ、まだ進さんは正直ねえ」と笑ひ出すと漸つと此時氣が付いた。

「とう〳〵夕美ちやんにかつがれたなア」ですつて、ホヽヽおそいわ。兄樣だつて今は最初つから雜巾がけをとぼけて見てゐらしつたくせに私一人のせいにして「こいつは口から先に生れて來たんだから始末が惡いそして惡智惠ばかりが發達して」とセッセともう御飯膳の方を漁つてゐらつしやる憎らしさ隨分だわ。

進さんは永つ尻だからどうせ晩食も出さなきやなるまい私は再び臺所にとつて返して仕度に掛る、弦齊式の未だ眞新しい料理服を身につけて甲斐〳〵しく下り立つたまではよかつたけれども、假作りのコックですもの、まだ御獻立の腹案がないから二人の參謀相手にまづ次の如く極める。

獻立

(一) 松茸の清汁、吸口そぎ柚子、
(二) 鯛の雪見蒸、
(三) 鯛のフライ附合せパセリ、
(四) さつまいものそぼろ掛け、
(五) おろし和へ、(りんご、柿)、

まづ(一)のお清汁は十月の女學世界にあき子樣のお出しになつたのを拜見してその通りやつたのだからかくまでもない、たゞ鰹節のだしと味の素との相違があるだけ。

(二)鯛の片身も取つて有たのでまづ二枚にはがし、骨と頭とは御惣菜の潮汁として殘りの肉は切身にする、その中の三切にサット一と鹽して十五分間休ませて置きそれから竹の皮の切つたのに載せて蒸籠に入れ強火で凡そ十分間ふかしてとり出し玉子の白味のよく泡立つたのを恰ど雪の積つた樣にその上にかけ再び一分間程蒸しにかけて皿にとり梅漬しやうがつけ合す。

(三)蒸しに用つた殘りの切身三ッに例の通り薄く鹽胡

椒を當てたものをメリケン粉にまぶし、次に玉子の黄味（先に白味だけは雪に用ゐたその殘り）をつけて更にパン粉下くるみ、よく煮立たせたバターで揚げる、新聞紙にとつてよく油が切れたらば皿に移し、水洗したパセリを一寸添へて。

（四）まづ鷄肉百匁を細かくたゝき、味淋、砂糖、醬油で程よく味をつけ網杓子ですくひ上げて置く、さつまいもを三分角位の拍子木に切り、胡麻油で揚げたものを此の汁の中に入れ、更に煮だし、醬油、砂糖で加減してよく煮上げたらば小鉢に盛り、上から前のそぼろふりかけて出す。

（五）は性のよい大根をおろし金で靜かにおろし、別にりんごときざ柿とはきれいに皮をむき、しんを去つたのを細かいさいの目にきざんで置く。

それから鉢に三杯酢を作り甘加減にして前の大根おろしと果物とを和へて、猪口に盛る。

○

さアこれでとも角出來上つた。食堂の花瓶にはダリアの花を折つてさし、カーテンなども程よくしぼつて御二人に御案内する樣にと云ひつけて私は一寸髮の亂れを直す。

「赤樣ちやア伯母樣が西洋料理で名高いから、わざと洋食はいたしませんのよ」と進さんに辯解して居ると、

「ナーニ私にや出來ませんと白狀した方がいゝよ、野菊さんぢやないが舌根震動のライスカレーにやア叶はないからねえ」

あらまあ私の雜誌までいつ御らんになつたんでせうこれだからうちの兄樣は可愛氣がない。

「この白いもなア何て云ふだ？」

「雪が積つたとこですわ初雪よ」

「夕美ちやんのお國ぢやもう雪が降るの？」進さん迄がませつ返すから、

「江戸ッ子ですもの何でも早いわ」とすまアして見せた、惡口云ふなら食らなきや好いのよお皿は見る／＼空しくなつて、お代りの欲しさうなお面つき、男つて隨分圖々しいものね、



お二人の間にはポートレースだのベースボールだのの話が始まつてるが兩方とも餘つ程どうかしてると見えて、時々身振がまちつたり何か、側で見てるとをかしくてならない、現金なもので食事が終るとセッセと進さんは歸り仕度にかゝるから、

「もう少し」ねと止めてみたら今夜これから目白の寄宿寮まで歸るのだといふ呑氣な人だ。

自轉車に燈火の用意して來なかつたから何でもいゝ貸して頂戴といふ。定紋付の提灯なんぞ持たして上げても此人のことだからどうせ返さないのは知れてるから、有り合せのふぐちやうちんに火を入れて、ハンドルのところにぶら下げてあげた。



活動せる淺草公園

田舍娘に化けた　覆面記者

電車の内で眞向ふに腰を下した紳士？然とした洋裝の人を見るとも無しに見て居ると之は如何な事、蚤が一疋雪よりも白いカラーの邊を探險して、更に藍地に渦卷模樣のネクタイを横斷せんとして居る、先生御存じ遊ばす筈もなく英文の書物を默讀しては、赤色鉛筆で印を附けて居られる、蚤は方向を變じて、ボタンの孔を通過して、段々と下行の有樣、

「え淺草雷門お下りの方、御忘れ物の無い樣に、」と車掌に促される迄、全く蚤の旅行に夢中になつて居たのであつた。

右に吾妻橋、並木通りを後にして、扨雷門はどこにある、團栗眼でさがしても、交番で尋ねても、無いこそ道理、無いものがあらう筈は無い。

昔は雷神と、風神の二柱の像を、祠つた堂があつたので、今に其名がとゝろいて居るのである、雷おこし、雷燒、名物に甘い物なしといへど、歸りに買ふ事にして、まづつと敷詰められた石の路、兩側にマッチ箱の樣に軒を並べた商店の、左の取付が煎豆や紅梅燒を賣つてる店。

數名の姐さんは揃ひの着物に、四つにたゝんだ手拭を頭にのせて、いつも〳〵忙がしさうな樣子、以前百美人の懸賞募集があつた時に、一等當選の榮を得たのは此家の娘、當時はずゐ分の人氣で苟しくも男子淺草觀音に歩を曲げる者は、美人を拜見旁〻此店の豆を喰はずんば、の勢であつたけれ共、今は杳として其消息を聞かぬ。

右は繪草紙、地本、稽古本、雜誌類を商ふ店。

赤いリボンの徽章を、胸に飾つた團體の田舎者、東京見物の一隊が、どや／＼と流れこむ。

「俺等が孫が、めやにち／＼まつとるべえ、ちよつくら買ていくべえ、姐さん此繪さ、なんぼしるだ、まけなさろ、」田舎者でも相場アしつとるだんべ、」と談判開始、大方晩迄かゝるんであらう。

「あんとよい新造つ子ぢやねえか、村長さんの嫁御に似とるだ、」と糠味噌漬の茄子の樣な、齒もあらはに婆さん連の批評。

水の垂る樣なみどりの黑髮、一筋みだれぬ美しさ、流行形の大丸髷に、翡翠の根掛珊瑚の五分玉は御守殿風の高島田、桃割れ、と美しいのを好む人情の弱點をうまくねらつた髷形屋の廣告、生粹の江戸つ子は、仲見世物と見向きもせまいが、一尺四錢のリボン、や撰り取り八錢の花簪は田舎へ土產によい當りもの。

三越や白木屋に行くのがおつくうな連中は、三十錢から一圓も出さば、光琳式の花模樣、東都流行の影をしたうて、手輕に一掛の半衿を得る事も出來る。

小兒を的のおもちや屋、飴屋、小間物屋、名代の唐芥子屋、漬物屋に、今川燒、並びに並んだ其軒あひに一枚三錢の半巾、二錢を一錢にまけた風船玉の達磨さん、召して居らつしやいのほゝづき屋、傳方院の邊には、人相、手相、身上判斷の賣卜者、何れも田舎芝居の公判廷に、辯護士の被る樣な變てこな帽子をのせて、扇子を笏に構へて居る、仁王門のあたりには、もうそろ／＼新栗のかうばしく、燒ける臭ひが漂よつて居る。

淺草公園の面積は、九萬六千坪で七區に別れる、さうして所謂仲見世は第二區、であるさうな、行く人歸る人、肩々相摩すの實況とは此事ならん。

△仁王門

正面の仁王門、吊された大提灯に先づ田舎者を魂消さす可く、右手の小堂久米兵內を祠るところには、奉納申歲女の小さい幟が、初秋風にひらめいて、迷信深い女性を迎へて居る。

仁王樣の御機嫌、至極斜なる御相、おゝ恐ろしやとばかりよくも見ず、門の横で廣告屋の小僧が紙片を呉れた、天下泰平淋病の妙藥、とは驚いたものなりき。

門內右方には朱塗の五重塔、居合拔の先生其前に陣取つて、能辯立板に水のごとし。

一對の燈明臺形の燈籠、たゝみ込んだ石には、天金、天虎、與平ずし、などの有名な市內の飲食屋が同盟した奉獻物、最上にヱビスビールとは、なかなか拔目の無い取合せなり。



敷石の兩側には、赤い大傘に日を除けて、吉原被りの婆さんが、鳩を得意の豆商賣、扱いよ〳〵觀音堂、朱塗の大伽藍巍々としてそびえ立つ、此大堂內に鎮座まします、主人公の尊體一寸八分とは、眞か僞か知らぬが佛、鰯の頭も信心柄、先づ難有や、勿體無や、天下泰平、家內安全、商賣繁盛、心願成就、無病息災と柏手打つて拜する人、詣づる人、此堂內に同居してござる地藏樣にも、お序を以てお辭儀して行く人少なから

す、線香の煙細く長く、かしこゝに棚引く、地獄の里も金次第、守護札、觀音像、並製上製お好みに應じて拂ひ下げ申べくと、恰も勸工場の番頭の樣に御勞役千萬いつも〳〵苦い顏してござる、お守りは並が二錢、上が五錢、繪卷物は十錢以上、五十錢、と切口上でにつこりとも遊ばさらぬ。

金網の内を恐る〳〵のぞいて見ると、金色燦然として、とぼる燭臺も勿體らしく、蓮の花に鳩のとまるなどは、どうしても滑稽な取合せなり。

仰いで天井を、拜見すると、美しい繪馬のかず〳〵、その中でも賴政の鵺退治（崇谷筆）、惡婆の刄を揮ふ（國芳）堀川夜討（容齋）、は三逸品として有名なもの故、眞心して見給へ、と注意されたる故、其心して見たれども、頭痛くて餘りに趣味を感せず。

昔うて畫ける馬が飛び出したる、珍事ありしとか古き繪馬に金網を張りしもあり。

草木も眠る丑滿つ時、淺草金龍寺の鐘は陰にこもつて、などゝ噺家にやらせると、一寸恐ろしい樣なれと、兎に角四六時中參詣者の絶え間なく、數萬人の善男善女の下駄や雪駄に、御供をして來た砂も、積つて見れば馬鹿に出來ず、衛生上の儀は特別として、千客萬來の花と柳の社會では、其砂買ふて延喜を取るとか、妙な商賣も東京にはあればあるもの、驚くの外なし。

此觀音堂附近が即第一區にて、堂の後方には公孫樹多く、紅葉してひらり〳〵と落ちる有樣、何となく風趣あり、故郷の鎭守の社を聯想す。

龍頭觀音の頭の天邊より、迸出する水夕日をうけて、彩然として美しく、赤毛布の一隊が、おつたまげての土産話しに、よい材料となるべし、其邊の口小盥も夏ならば席を爭うて、涼しくなつて水の側は、難有くないと見え、立寄る人も多からず、人はどこ〳〵迄も勝手なものなり。

其右手に朱塗の祠殿、巴の紋散し淺草神社と讀まれた、三所權現とも云ふ、何でも觀音の像を海中から拾ひ上た、主從三人を祀るとか、神佛雜居の不審も茲に至つて氷解して、胡麻鹽ひげに黑袴白衣の神官に、[illegible]

鏡越しの一瞥を頂戴して後ろに廻る。

　これは又東京名物のお稲荷さん、御苗字は狩宮稲荷、杉丸太の細い鳥居が、其廻りに澤山寄せてある、田舎娘は、今迄稲荷の鳥居は、赤いに極つたものと思つたに、當時の流行語を借用して、新レコードを作つた、と云つて置かんかな。

　奉納の硝子燈には所柄とて、千代菊とか豆子とか物騒千萬な名が、記されて居る。

萬盛庵の手打そばは、



常磐の夫婦豆腐は、風味もせず六地藏、藥師堂に歩を移す、風雷の二神は目下此堂に同居してござるとかや、榮枯盛衰は人間界のみならず、と思召せ。

　瓜生岩子刀自の銅像を見て、古人の篤行を偲び、軒を並べた寫眞屋の前を通れば、妙な男が世辭笑ひ、聞もしないに扇子で以て、此板で早取二十五錢、此邊で三十錢、尤も大勉强大車輪と、一人でしやべつて居る、お止しなさい、なんぼ私達が

田舍娘でも、寫眞なら小川か丸木で取るわ、と云つてやりたく思ふ、勅使河原と云ふ寫眞屋あり、まさか華族樣でもあるまいに、一寸目につく苗字かなと思ふ。

　奥山で有名な料理店、市直を右に睨らんで、左の方に行くと、白馬を繋ぐところあり、此馬毎早朝觀音堂をぐる〳〵三廻りして歸り來るものと云ふ、馬糞の臭氣除りよいものでなし、

　汚ない腫物だらけの、男兒を連れたお神さん來りて、馬の番人、婆さんと二言三言話すと見る間に、馬桶は男兒の頭に冠せられた、老婆は其底をこつ〳〵と叩いて何やら、ぐしや〳〵と唱ふ、終つて一皿の大豆の受取り、紙に包んで腫物をなでる眞似す、老婆受取つて馬桶に投ずれば、馬は蹄を鳴らして一口にぺろりとやる。

　これは如何な事と、田舍娘老婆に問へば、腫物出物何でも豆でこすつて、馬桶でまじなへば、此御馬が身代りに病んで下さる、勿體ない事でと云ふ、なる程、癩病どころに平癒疑ひ無くんば、合邦辻の俊德丸に於ける、玉手御前の生血の樣なもの、わしも眞ならお獻さみ、といや罰の當ること申まじ〳〵。

　公園第三區は仁王門より傳方院のあたり、第四は水族館附近の公園らしく、少しばかりの立木のあるところ、五區は孃ちやん坊ちやん御なじみの花屋敷、兵隊さんや書生さんのしつてござる矢場の櫛比するところ、六區はブーカ〳〵ドン〳〵の集合點として七區は區役所のあたり馬屋のさきなりとぞ。

△花屋敷凌雲閣

　さてもやさしい名に、釣り込まれて、大枚十錢を出して行けば、花の盛りは何所にあるやら。

　いたづら者の猿公、自然木に登つたり下りたり、時時首をむき出して、子供達をおどろかせる、足の板に付かぬ操人形、舌切雀が呼物ときく、山雀の藝當可憐なもの、よくもあれ程に仕込んだもの、なまじつかな人間よりよつぽど利口なもの、象が人の言語を聞き分けて喇叭を吹く、蛇も居れば、虎も居る、珍鳥奇獸

大日本帝國政府
佛國共和國
專賣特許
東京帝國大學教授
池田博士發明

食道樂著者 村井弦齋先生
宮内省大膳寮厨司 赤堀吉松先生
割烹界の泰斗 石井泰次郎先生
其他食味界諸大家
賞贊愛用



理想的

手數を除き時間を省き輕便迅速にあらゆる飲食物の味をよくする事鰹節昆布に數十倍するは實に本品の特色なり

味の素（あぢのもと）

調味料

家庭料理の最高原料にして又旅行の好侶伴たると共に滋養に富む事牛乳鷄卵に數倍するはまた本品の特色なり

定價

新小瓶 二十五錢
小瓶 四十錢
中瓶 七[illegible]
大瓶 二圓四十錢
罐入 四圓六十錢
（送料八錢）

發賣元
東京丸の内
鈴木商店
電本三三五五
振替 壹六八四壹

女(なのこ)

一等國

太陽第十五卷第十五號增刊

●一等國の列に在る諸國は世界の運命を司配す。

●世界的と言へば即ち一等諸國の形勢に冠する形容詞なり。

●吾が國は東洋に於ける唯一の一等國にして、歐米の一等國と文明の大競爭を試みんとす。

●統計書を通じて彼れを知らむとするは恰も玄關に立ちて他人の家内を覗はんとするに異らず。其の實質實狀は知るべからざる也

●本誌は統計書以外に立ちて世界の一等國を紹介す

●政治外交の舞臺、社會の狀態、學海文藝の現況其の他百般の形勢は、悉く本誌上に明記せらる。



十一月十五日發行

洋裝四六判二倍大
紙數二百六十頁
寫眞版如例豐富
正價金三十錢
郵稅（本號に限）八錢

女、その二）

文章世界

秋風號

▼第四巻第十四號▲

全一册洋装菊判
紙數二百四十頁
正價金貳拾錢
郵税金貳錢

十一月一日發行

▲現文壇各方面の月旦……小説、劇、評論、長詩、短歌、俳句の諸方面に對する誠實にして忌憚なき月旦也。

▲新聞記者月旦……諸新聞の記者を主としておのづから各新聞の現状に及べる月旦也。

▲雜誌記者月旦……これ亦新聞記者月旦と同じく記者を主として雜誌そのものに及べる月旦也。

▲繪畫界月旦……月旦子自ら曰く、これが爲めに多少なりとも今の畫界に刺戟を與へることが出來れば我が望足ると。誠實なる一種の忠言也。

▲名流の文界雜誌談……▲記者の文章講壇……▲應募小品十數篇……

▲小説 孫の巡禮…(小山内薫)新居…(田村松魚)

▲インキ壺……(田山花袋)

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

文(その三)

養畜手引

十一月廿日發行

洋裝菊判 紙數二百四十頁

口繪三色版石版寫眞版豐富

正價金貳拾錢

郵稅（本號限リ）六錢

東京本町 博文館

大家畜は農家に勞力と乳肉とを給し、小家畜は以て副産的收入を擧げしむるも、飼養管理の宜きを得ざれば成功の域に達す可らず、本書は之に就き如何にせば最も易く畜力を得、如何にせば畜産の收入を大ならしむるを得べきかの方法を、極めて平易に親切に且つ實行し得らるゝやう詳述し、其內容の豐富にして有益廉價なる農界未曾有の好著述なるを確信す、營利に念ある農業家は是非一本を座右に備ふるの要あらん其內容左の如し。

△牛、馬、羊、山羊、豚、兎、蜂の種類、飼養、蕃殖、取扱、利用、治療法

△燻肉、煉乳、牛酪、乾酪、粉乳等五畜産の製法販賣

△牧草の種類、栽培、調製、貯藏

△副業的飼畜と牧畜業の經營



博文館編輯局編

講談 忠臣藏

忠芳義烈、千歳の下、鬼神を泣かしめ、上は帝王の貴きより、下は傖夫野人の卑しきに至るまで、欣慕措く能はざらしむるものは、『忠臣藏』の名によりて直ちに其れとうなづかる、赤穗義士復讐の事蹟にあらずや、世に忠臣義士は多きも、斯の如くに感化力の偉大なるものは古來曾て有らざるなり、傳へ曰ふ、我邦が近く曠古の大戰に遭逢して連戰連勝、環視の列國をして其勇武に舌を捲かしめたるものは、義人傑士の傳を講ずる、所謂講談師の功の沒すべからざるものあると、倘し之をして眞ならしめば、赤穗義士復讐の事蹟の如きは、確に其功の大半を割取すべきものたり、而して、本館が今之を上梓發刊する所以のものは、亦聊か風敎の爲に貢獻せんとの微衷に出づ、現下滔々たる惰弱の風を拯ひ、忠君愛國の念を涵養せんには、之を措て他に求むべからざるなり、日本國民たるものは、少くも家庭に一本を備へざるべからざるなり。

洋裝四六判上製
紙數四百三十頁
精巧木版口繪入
正價五拾五錢
郵税八錢

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

・博文館中學世界・

日本學生の歌 懸賞募集

「日本學生の歌」を、日本の青年學生諸君の間に募る。
「日本學生の歌」は、光明の歌、勇氣の歌、向上の歌である。
我等は日本の學生――この自負と意氣と責任と、華やかなる情調とを顯はして欲しい。
吾等は校歌と云ふものを知つて居る。けれど、日本の學生を代表した世界的の歌には、まだ接しない。
これ、中學世界に此の計畫ある所以である。

▼句數……四句又は六句を一節とし、六十句以内。
▼調……隨意とす。七五調、五七調、七七調、八六調其他
▼締切……十一月二十日。

賞金
一等（一名）……金五十圓　四等（五名）……金五圓宛
二等（一名）……金三十圓　五等（十名）……金三圓宛
三等（一名）……金二十圓

倘詳細の應募規定は十月、十一月の中學世界誌上にあり

選者
第一高等學校長農法學博士 新渡戸稲藏君　島崎藤村君
文科大學教授文學博士 芳賀矢一君　大町桂月君

・博文館中學世界・

少年世界 第十五卷第十五號 定期增刊

十五卷紀念號

本文百三十六頁 口繪寫眞版豐富

((十一月十五日發行))

正價金十錢 郵税壹錢五厘

少年世界生れて滿十五年の歳月を經たり、天下に少年雜誌多しと雖、本誌の如く長壽にして而も年は一年毎に發展進歩するもの他にありや、之本誌が天下に向つて大いに誇とする所、玆に第十五卷紀念の微意を表する爲め、一部特殊の增刊を企てしもの、又多年愛讀の諸君が厚顧に酬ゐんと欲するのみ、乞ふ左記の目次を一閲して其内容を判じ給へ。

本文目次

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

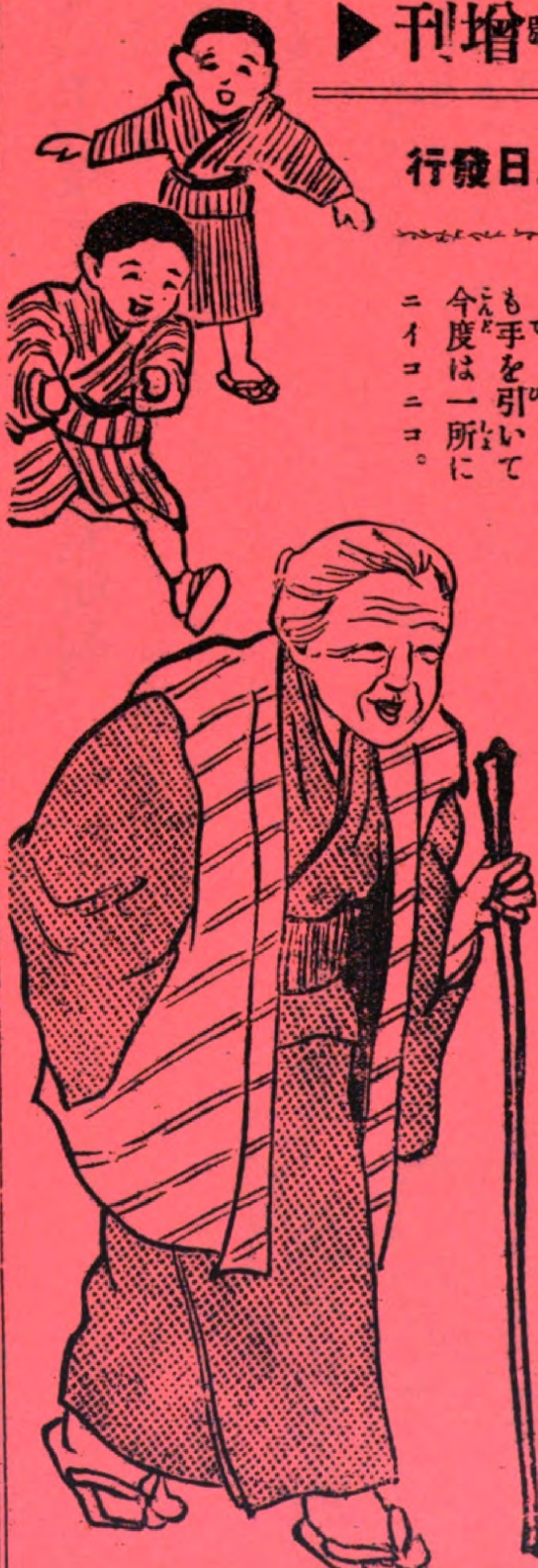
十 五 卷 紀 念 號

女(その六)

◀幼年畫報第四卷第拾五號増刊▶

十一月十五日發行

ニコ〱婆さん



さゞなみ作　三郎畫

ニコ〱婆さんよい婆さん、いつでも笑つているばかり、ニコ〱ニコ〱ニイコニコ、ついぞや怒つた事がない、悲しい時でも笑つてる、太郎や次郎わ婆さんを、どうにかたくんで怒らせよ、腹立つ所が見たいとて、手をかえ品をつくしたが、婆さんやつぱし笑つてる、ニコ〱婆さん怒らない、悲しい時にも笑い顔、嬉しい時にわ猶の事ニコ〱ニコ〱ニイコニコ、これでわ仕様がないわいと、太郎も次郎も手を引いて
今度は一所に
ニイコニコ。

菊判美麗畫本
石版極彩色刷……十六頁
活版二色刷……十六頁
光澤寫眞版……四頁

正價一册金拾錢
郵税一册五厘

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

女（その八）

を社に飾るて、小劇場の場をなす、[illegible]の箱は[illegible]鰻、飾りに檻をめぐらして、大小の孔を開け茲から見る樣にしてある、すゐ分と滑稽な見ものならずや。

忠臣藏の役者の似顔、鶴ケ岡八幡社前と、雪夜の討入とは、外から見える所に置かれてある。

顔世御前の裲襠には、大分鼠がかゝつた樣なり、拂つて上る、忠義者は居らぬにや。

松の御殿刃傷の場は、十錢出さねば見る事出來ずと御承知あるべく、妹背山の御殿場、田舎娘のおみわ、戀に狂して小田巻の此糸が、切れくさつたばつかりにと、懟く、白衣に緋袴の官女におだてられる、昔も今も變らぬは、自然主義者の成の果なるべし。



ついお隣の凌雲閣、十二階ともいふ、最上層より見下せば、東京全市は足の下、千里の眺望面白く、御景物には百美人の寫眞が掲げてある、去年から華厳瀧の支店となつて、自殺者を出して以來、一人者には、[illegible]人が尾行して來るさうな。

五區から六區へ掛けて矢場といふ特別の社會が現出して居る、[illegible]噫彼れも人の子[illegible]ひ。

潰し島田に赤い襷、甲斐々々しく、白粉の香に黄色の弊をしぼり上て、書生さん兵隊さんを陥落の淵に案内する、との噂さ後世恐る可し〳〵。

△所謂六區

先づ瓢簞池の成立を尋ねて見ると、今を去る事廿五六年前はまるで田圃。

今でこそ一連一錢の麩を投げて、手を叩けば、眞鯉、緋鯉、群をなして浮び出で、中央の噴水夏の暑さを慰め顔なれど、此池を掘る時には、此世の地獄、赤い着物着た人々が、ずゐ分長い時日をかけて、汗水濡らしてやつたもの。

今では晴天白日の身、可愛い孫の手を引てのそゝろあるきに、昔を偲ぶ人もあらう。

其頃の巡査の服裝は、冬は黑、夏は白の小倉服いかめしいサーベルに引換へて、三尺位の樫の棒を小脇にかゝへ、帽子には黄色の筋段々と多くなるほどずゐ分巾を利かしたものであつたとか、見世物といつても、變化の無い幼稚なもの、地獄極樂の活人形、五百羅漢、といつたものそれが時移り世紀代つて、雷鳴樣を手先に使つた、イルミネーション、名物の粟餅屋よりも、バタ臭い西洋料理とは、實に今昔の感にたへぬわけなり。

池の端に並びに並んだ小商人の、顏觸れは、衛生輕便ゴム枕、即席の印板屋、十錢均一の安眼鏡、煎りたて豆屋、いらつしやい〳〵千兩役者がたつた二錢、團十郎丈に音羽屋さん、と小さい紙貼りの人形を二十ばかり、飾つた店はランプの光もうす暗く、一層哀れを覺ゆるも、どこやらに氣品のある老婆のものごし、人の感情は妙なもの、吾輩は普通の大道商人に非らず某私立大學の生徒なれど、學費にこまつて云々の前置き、理化學應用硝子つぎの藥、危い世渡りをする人もあればあるもの。

一寸人目を引くのは、長春峰といふ苗字のうすあばたの支那人が、菓子を燒て賣て居る、扇を開たりたゝんだり、手を上て見たり下したり、まるで煙草屋の看板見た様な、身振澤山、たゞで與れても食べて見る氣はせず。

南京豆は落花生大安賣、袋物撰り取り九錢五厘、よ

リンス製の四季袋、綿入のリボン、羽織紐、どこもかしこもこれだけの大小商人が煙を立てゝ行く事の出來るも、皆大悲大慈の觀世音樣の御情け、難有しとも忝じけなき事なるべし。

つい此頃迄あつた娘玉乘、肉色の襯衣に曲線の肉體美を現はして、居たのが今は空家。娘手踊、源氏節、大神樂に底拔けの大笑ひ、世の仲を何の糸瓜とも思はぬ連中がぶらりとしても暮せぬと見えて、馬鹿氣切つた大さわぎして、無邪氣なお客を集めたものも、今は活動寫眞の電氣館に併呑されてしまつたし、女芝居も今はいづこ、いよいよ六區は活動寫眞の全盛時代、否たゞ淺草に限らぬ、市内で餘り客足の無い勸工場は、皆活動と早換り、高等學校の選拔試驗に、きつと時事問題が出るであらう、と活動寫眞の熟語を特に諳誦した學生もあつたとか、何所も同じ秋の夕暮を、ブーカ〳〵ドン〳〵の大陽氣。

電氣館、三友館、大勝館、オペラ館、と寫眞の番組に新を競ひ奇を爭ひ、義太夫長唄鳴物入、聲色付でお芝居も見える。

說明辯士は燕尾服、フロック、金緣の眼鏡、



田舍の郡長さんよりも立派な旦那、と感心して居る婆さんもあつたとは、まんざらうそでもあるまじと思はれる。

不如歸、女夫波、乳姉妹、黒潮、金色夜叉、の新派物、曾我の夜討、妹脊山、切れお富、平井權八、飲ムトフートヲ、美顔術の喜劇、歴史、世話物、いろ〳〵とりかへて御景物として、胡蝶ダンス、電氣踊、オペラダンス、と實物が出て來て跳ねたり飛んだり、それで各館何れも、大入叶、滿員に付暫時客止めの札を下げても、ワツシヨ〳〵押しかける。

いつ迄此有様がつゞくものやら。

先日の新聞に、西郷南洲と、僧月照の薩摩潟に於ける船上の述懐、悲憤慷慨の涙留めもあへず、遂に月照は、海水に飛び込む、直ぐに引上ぐ可く用意して控へて居た、船子が餘り見とれて、忘れて居た爲、哀れ僧月照に扮した俳優は、鹽水を大量に飲んで死ぬる活るの大騒ぎ、やつと醫師の出張で、此世の者となつたのは、つい先月大磯の濱の出來事であつたと報じて居る。

自然の山水を背景にする熱心はよけれども、ずゐ分と命懸けの危險な仕事、これも人氣に投ずる商略の極みか。

試みに五錢を出して切符を買へばひさし髪に改良服を着た女が、こちらへ居らつしやいと遠慮もなく、人の二の腕引ッつかんで、薄暗いところへ案内する、更に五錢を追加すれば特等として二階へ上る、平民的でよいか知らねど、若い娘や女學生などは、しつかりした監督者なしに、餘りに好んで來る可き所でなしと思はる。

常磐座に降つた觀覧車は、東洋唯一の評あれども、又此次と乘つても見ず。

そば屋、すし屋、天ぷら屋、しるこ屋、撒き水に門鹽で、延喜とり〳〵客を迎へて居る。

梅園のしるこ

とかく甘好きの田舍娘、音に名高いしるこ屋に一寸立寄つて見る。

此家の主人は伊勢白子の人、却々の商賣上手で金儲

けも下手でない、勘定場にはカッシユ、レヂスターが備へ付てある。

掲げてある扁形の額に

　來る人もきて行く人も福の神

　　今日も一日これで安樂

とあつた右と左の席をはさんで一坪ばかりの池。鯉や金魚が泳いで居る、形ばかりの噴水もある、御立寄の嬢ちやん坊ちやんにも、あぶなげ無しのよい遊び場。

　二階に登る所に、大理石の洗面場、正面の大鏡、クラブ洗粉石鹸迄備付てある、然し萬人環視の眞中で、化粧する人もあるのかしら。

　廊下に吊された梅花形の燈籠、掃除の行屆いた點は氣持よけれど、椀と箸とはもつとどうにかならぬものにやいつそ、杉割箸にして欲しいものなり、十歳から十五歳位迄の小娘が、揃ひの筒袖にメリンスの帶で、片手に盆の五六枚も載せて、それで一滴も漏さず、お待遠樣をやつて居る、熟練とは味なものなり。

マイド、オカエリ、などゝ誰に云ふとも無く聲を揃へて悠長に云つて居る、幼稚園生徒が音階の練習でもして居る樣に聞えるもをかし。

　とにもかくにも東京の四大公園の一、俗は俗でもまた趣のある淺草公園、大阪の千日前、京都の京極と、兄たり弟たるものであるとの評はあれど、此附近幾萬の住民は、一寸八分の觀音樣を中心として生活をして居るに非らずや、と田舍娘の氣焔は特別、これも社會觀察の一興なるべし、吾妻橋からは一錢蒸汽船、今は一錢でなく三錢言問迄を乘り切つて、百花園や小松島に秋の景を探るも妙ならん、歸りては竹屋の渡しこれこそ一錢の渡し賃。

　夕ぐれに眺め見渡す隅田川帆揚げた船が見ゆるぞへ。

の唄の味は、ゆられ〳〵て對岸に着くやに、しみ〴〵と思はれる、待乳の山は雪に名高く關東第一の聖天樣に詣づるもよし、名物の今戸燒を土産に、片道五錢の電車も今日ばかりは氣の毒と思ふ運轉手の名が長五郎車掌が長吉、と並べられた名刺を見て、物好きな田舍娘おもはずにつこり、知らぬ人は、油斷の出來ぬヒステリーと、氣味の惡く思ひし事ならん。



最近十五年間に於ける 東京女學生風俗の變遷

曙女史

◎三つの官立女學校

今でこそ山奥でも女學生といふ詞が用ゐられて居ますが、十五年も前は此んな詞はありませんでした。其の代り年頃を過ぎてなほ學校にある者を女書生と申してゐました。女學校と云ふても官立では華族女學校に御茶の水、府立では今の第一高等女學校が、たゞ府立高等女學校と云ふて一つあつたぎり、あとは職業學校女學館、跡見學校、其の他に二三の宗敎學校が少數の女生徒を收容して居つたばかりです。

私は十二の時、其の府立高等女學校の一年級に入學いたしましたが、當時は一級僅かに三十人ばかりで、然かも無試驗入學でした。場所は神田橋の一角、今も和强學堂の隣りにある二階建が其れで、其の頃は和强學堂の所が三角形の空地をなして居て、そこが唯一の運動場でした。

◎黒つぽい唐棧の縞物

茲に集つた女生徒は皆一樣にお太皷の日本髷。大抵服裝は唐棧の縞物で、今の樣に十二三の頃を唐ちり、紬の友禪に華美を競ふ樣ななりふりは三大節と雖見る事が出來なかつた位です。新銘仙とやら紡績とやらいふまがひの織物は、其の頃の東京市中には未だ生れて居なかつた樣でした。此んな風で一二年級は襦袢の衿は赤衿、帶は唐ちりめんに限られて居ました。一人や二人繻子を用ゐたものがないでもありませんでしたが

大かたは、唐縮緬の赤の板じめとか、何とか總べて紅地の華美なものが歡迎されました。其れを黑つぽい縞の唐棧の上にもつていつて胸高にしめ、ぶあつのしよい揚げで、ちんと高く背中一ぱいに結んでゐました。

◎吃驚する程無造作な髪

髪はといへば束髪に結ふて居る人は數ふるばかりの少數。其の束髪といふのも今のハイカラさん達に見せたら吃驚する程奇想天外のもので、前髪で候の髷で候のと三つも四つも毛すぢでわけるといふ事はなく、ぐつと一そくに引つめてぐる〳〵つとたゞ一巻。眼がつれる位に結つた横顔つたら、餘程の美人でもよくは見られませんでした。で多數は油こつてりの桃割れで、上級の人には高島田もちよい〳〵見受けました。前髪は寶珠形といつて、前を細くわけめが合ふ樣にとり、後を圓く大きくしたもので、鬢は今の樣に窓をあけずに上を思ひきりつめて下を張らせたものでした。髱は極くつめて、髷の恰好は舌を思ひきり長く出し、輪が大きく頭一ぱいに擴がつてさへ居ればよいとしましたそして大抵は眞白の厚化粧で、中にはありもしない襟足を書いて、黑い生地を遠慮なく出してる連中もありました。其んな風姿ですから、女生徒が三時の鈴に校門から散る處は今から思へば隨分妙なものでした。

◎肩掛が歩いて行く

冬ならば大きなショールの、擴ければ一間四方も在らうかといふのを二つ折にしてぐる〳〵とまきつけ、お荷物も何もその中にかゝへ込んでしまふ、何の事はないショールの柱の行列の樣。さもない者は海老茶か何かの黑つぽい毛糸のやゝ小さい手編みの肩掛。其れ以上の華美を競つたものはありません。又夏になると一樣に白地の浴衣に黑い洋傘をかざし、赤い帶を暑くるしさうに脊負て校門を出て來る其の野暮さ加減たらありませんでした。洋傘と云つても其の頃は平べつたい今なら屑やがさゝうといふ代物。絹の深張なぞさしてるものはとんとなかつた位。其の深張も輪でとめる

オールド式で、今の樣に金紋ゴム輪をつらねて歸る樣な華美〳〵しい光景は夢にも見る事が出來ませんでした無論電車はない昔の事、二里や三里の通學は何とも思ひはしませんでした。

◎優しくおとなしき女學生

斯うすべての風姿が娘風である樣に氣風も亦娘風で菫の、星の、紳士のと云ふ詞は未だ知りませんでした。英語はないではなかつたが、それも只教室限り。たまには鬼ごつこ、柱とりなぞするものもありましたが、其れ等は極めて少數で、此の時分の女生徒はおとなしく優しくと育てられ、娘風をくづさず、くづすまいと心掛けて居りました。冬、雨の降る日などは教場の左右におかれてある大火鉢を圍んで雜談にふけるが、中には上草履のまゝべた〳〵と横坐りになる人もあると言つた風、要するに隨分無邪氣なものでした。

◎女學熱の勃興

丁度三十年頃、やうやく女學熱が勃興して來て女學生なる語が新聞紙にも見え出す樣になりましたが、此の年に入學志願者が急激増加して一級三十何人の上に更に百五十何人の増員となりました。ちらほらおばけが歡迎されて來ましたのは此の頃からです。それは洗髮を前髮だけ兩方の耳側から取つて、ふくらしもせずに上の方で無要娟に結へたのを、巾、五分位のリボンで結んで、あとはぶつ散らしにしたもので、華族女學校から流行して來たものでした。束髮も追々改良されて貴婦人髷やあげまき等が、そろ〳〵頭を持あげました。然かし、唐人髷や桃割の勢力はまだなか〳〵大したものでした。尤も上級生の島田はそろ〳〵減つて來ました。と同時に白粉を粧ふものゝ數もへり、幾分か薄化粧になつて來て、最近に至てクリームとか紅とかいふ物を使つてこつてりづくりをする樣になる迄は暫らく薄化粧の白粉なしが持續したやうでした。

◎島田髷の縄飛び

服裝は此の頃から追々華美になつて來ましたが、それでも銘仙を着たものは半分しかありませんでした。そしてまがひの新織、新銘仙と云ふ様なものが此の頃から女子の虚榮心を挑發せしむべく製出され、又西洋遊戯のピンポンや輪投げテニス等がはやり出しましたで島田がなは飛びをする桃割が羽根をつく、さうして市樂が何かのお召に鼠縮緬の羽織をはをつた丸髷の先生が唐桟の縞物に赤のお太鼓を負た生徒を相手に三間四間と間をおいて輪投げをした風つきは今ならば恐らくバアク物でせう。殊にをかしかつたのは舞踏が科目に加はつた事で、雨でも降るとお太鼓姿が作法室の疊の上でばた／＼跳ね廻はつたものでした。また、百人一首が大流行で、お互ひの机をくつゝけて並べて其の上で雨の日は大抵歌留多をしたものです。



◎海老茶袴の突貫

生徒の數が急に殖えて、先生の管理が行屆かなくなりすべて外面がこんな風に亂れたと同時に、彼等が心裏にも亦大なる革命を起しました おとなしかれと抑へつけられて居た心は、其手が緩むと共にのこ／＼頭をもたげました。八木屋の造花やリボンが賣れ出して、おばけの頭は美しくかざられ、三

十二年頃からは女生徒の島田は皆無となり、同時に色物の襟は廢れて白襟となり、貴婦人卷や揚卷は衰へて前髪を出した束髪が音樂學校から流行だしました。前髪を出した束髪と云つても、前から見てこそ今日の廂髪に似て居ますが、後はぐんと引つまつて髱なぞ樂にしたくもありません。從つて三つ様も坊主様も一見して解りました。髷は唯だやたらにぐる／＼と蛇のとぐろを卷いた様、まるめてさへあればいゝとしました。海老茶袴が猛烈な勢でお太鼓の女學生界に突貫を試みたのは丁度此の頃です。此れ迄は袴は華族女學校の海老茶、跡見の輩に限られて他に見る事が出來ませんでした。此の袴の流行と共に、一間四方のショールは廢れて、四角形のフラシテンが流行だしました。それから間もなく私立高等女學校が方々に出來、續いて府立が二つになつて神田橋を第一と云ひ竹早町を第二と呼ぶ様になつた頃は到る處に海老茶袴の影を見る様になりました。然かしまだ履物迄は改良されてないで、良い方と言つても相變らず高い木履をぽく／＼いはせお粗末なのになると歯なしの日和をからころさせて居りました。

◎ハイカラ風の吹く下地

私が高等女學校を卒業したのは三十三年の春ですが卒業式の寫眞は半分は袴、半分は帶つき、先生は全部帶つきの四人程は日本髪といふことに雜然たるものでした。

此の前後からハイカラ風の吹き荒む下地として女學生間に非常に音樂が流行して來ました。三十二年に音樂學校が分教場を一ッ橋に開いて學校歸りの音樂熱心者を收容したのですが、茲にお茶の水、跡見、府立と三校の生徒が集つて、新式スタイルの競走をしました。此れ等が後の女學生風の生るゝ遠因でしたらう。けれども今のハイカラ、其の頃のスースー、いはゞ粹の粹とも云はれる此の姫達は、何所からともなく押しよせたかの袴なるものを餘り好みはしなかつた様で、試演會でもあると、演奏にあらはれる姫達は多くはお太鼓

に日本髷か、さなくば、おさげに立矢の字といふ風でした。

◎若溪第一の美人

若溪第一の美人が其の頃其所の流行の中心となつて居ましたが、其の風姿と云へば、髮は無論日本髮、前髮は極く細くこいて形に取て鬢はつまつた方、髱は思ひ切つて長く出した縮つた唐人髷に造花の白薔薇一輪。紫の矢絣に紅入友禪の無垢を重ねた厚袍の褄を、しとやかに五枚草履の先にさばいて、帯は朱地の厚板、心持巾のせまいのを薄いしよい揚げで、きつちりしめた



胸つきのよさ。それでバイオリンを抱へて、少し伏眼に壇上にあらはれる花の様な姿には、女も男も拍手せずには居られませんでした。

◎新に現はれた流行の中心

三十四年の春からは立つは〳〵雨後の筍の如く私立女學校は立ちました。從て地方の女學生が數知れず都に入り込むで茲に女學生といふ一種輕蔑の意味を含んだ詞が生れて來ました。其れ迄は女學生界に流行の中心なぞいふものは無かつたのですが、斯く一時に多數の人が入り込んで騷

然、雜然、たる所へ女子大學が城西、目白の里に建てられて、此の入り亂れた女學生界に一道の光明を投げかけ、それより此の學校が東京女學生界の風俗の中心となりました。尤も其の創立時代の女子大學生の風姿は隨分可笑なものでした。四方八方から寄り集つた人達で、年と云へば、三十何歳もあれば、十八歳位のものもあつて、此の親子の樣な人達が、各々別々の目的を以て同級生として一堂の下に集るのですから、無論其の風姿の一致しよう筈がありません。そして北は北海道、南は琉球の果から遙々と笈を負ふて來た人の中には十何年もが間一郷の女先生としてうやまはれ質素素朴なる風姿をくづさずに經來つた人も在れば、或は宗教學校の寄宿舍の窓ふかくたれこめて世の風潮、流行の如何を知らずたゞ神の外に何物もなく送り來つた老嬢もあり、かと思ふと、十六七から、嫁にやられて世路の辛苦を具さになめつくした揚句、可愛い子供をつれて不緣となり、長い年月を悶えの中に過した身の女子大學の門に眼をさまされて匆忙として集り來つた人もあれば、順風に帆を揚げて世の憂さ辛さを夢にも知らず、學校專一と大學まで順よく來られた令孃もあつて、十人十色實に千差萬別で御座いました。

♀十年間の風俗を一堂に見る

其の中には業成らん曉に錦を故山に飾り天晴れの師と郷黨に仰がれようと遙々來た人もあつたでせうし又獨身生活の代を得んが爲めに集ひ來た人もあつたでせう。或はらちもなう最高學府の名に浮かされてふらふらと迷ひ入つた人も在つたであらうし、又は眞に學に忠なる心から集り來つた眞面目な人もあつたでせうそれ故服裝は極めて雜多で、十年も前の樣なぐる／＼卷の頭もあれば、貴婦人卷もあり、唐人髷もあれば、極めてハイカッた羅馬卷S卷などもあり、衣物はといふと手織木綿のゴツ／＼したのもあれば、黄八丈、紫矢絣の華美な長袖もあり、お太鼓姿もあれば、艶袴に袴姿の連中もあつて、殆ど十何年間の女學生風俗を一堂に集めて見る樣で御座いました。こんなゴッちや

な風姿氣風のものが熱誠なる成瀬校長の下に養成せらるゝ事前後三年、第一回の卒業生の出る頃には校風も出來、風姿も略出來て參りました。

◎袴の色合と穿方

袴と靴とを殆んど用ゐない學校はない樣になつたのは卅五年頃からですが、此の袴に就ての變遷を言つて見れば、始は海老茶一點張りでしたが、三十六年頃から紫、薄小豆、三十九年頃から藤鼠、銀鼠等が流行し出しました。此れも女子大學生に依て始められたもので、其の頃、色の配合と云ふ事が頻に同級生の間に唱道されたのが動機でした。其のはき方なども、女子大學の或る先生が、袴は下の開いた方が美學の原則に適つてゐると云はれたのが改良の端緒で其迄は袴をつけるのに大きな帶を然かもしよいあげ迄して、其の上に袴腰を据ゑた人が多かつたが、此の時から帶を狹くし、しよいあげをせずにつける樣になりました。又其頃から廿歳を越したものは後を心持地に引き、十二三歳の人も膝きりの短かさにつけて心もち袴ごしを下げて胸をゆるくする風が流行し出して、今ではハイカツた者は是非此のはき方でなければ巾が利かなくなつて居ります。



◎羅馬卷と人格卷

肩掛は三十三年頃に始つたフラシテン四角形のは漸

く廢れて、三十六年頃には羽衣織がはやりだしました。三十七年頃にはたてふ糸で織んだ白の細長いのが歡迎され、四十年頃からポーアがそろ〳〵流行はじめた事は世間一般と變りありません。傘も亦、世間一般と變りなく深張りが廢れて細卷の色物が流行だし、近頃では少し深張りの薄色が歡迎されます。髮の結ひ樣は三十五年頃に日本髮が全く廢れて了つて、束髮の髷が大變に長くなり、三十七年頃には花月卷や二百三高地が流行りはじめ、それがやがてS卷となり、三十九年頃からマガレットや今の廂が流行出しました。而して羅馬卷、人格卷などは最新流行に屬するものでせう。

◎銘仙は普通の着物

女子大學の服裝は一致しませんが、そこが又此の校の誇で、御座いませう。山奥の母樣から秋立つとては冬來るとては遙々送られた手織木綿を大事に着て居る人もあれば、華族の姫樣のハイカツた洋服姿もあり、銘仙を着る人、新銘仙をまとふ人など實に樣々です。

分に安せよ、人と比するな、我れはたゞ昨日の我れよりも人格に於て勝れ居らば幸なりとの言を常に守て居る女子大學生に服裝の流行のないのは誠に結構な事で御座います。

◎運動會の影響

女子大學始て茲に九星霜、其間、如何なる影響を女學生間に與へたでせうか。其の創立の當時頻りに自治を唱道しました。此れが盛んに女學生界に擴められたのは例へ形式だけにせよ嬉しい事です。各女學校の運動會に於て、今迄は小使が撒いた水も、競爭演技の間々を見て生徒が如露で迅速に撒く、觀覽人を案內する、此れ等も皆女子大學の運動會に依て流行したものです。然して此の開放された運動會へ各女學校の生徒が會する其の度に、氣風風俗と云ふものが混合され同化されて美しい方に〳〵と向ふて來た事は、保守の保守の華族女學校が學習院と改稱されて以來、卒業式の寫眞に一人のお振袖を見なくなつた事でも解ります。

教師から商家へ嫁いでまご〳〵した私の經驗

松　崎　順　子

松崎女史は高等師範の出身の、文筆も達者なお方氏で、著述なども數冊ありますが、今は松崎英太郎に嫁がれて淺草に商店を置かれ日々多忙を極めて居られます。

▲實際に見たスヰートホーム

私は高等師範を出てから盛岡へ行きまして、二年餘り教鞭を取つて居りましたが、一體が女教師を餘り好まない方で、學校に出て居ります間も、どうか其の風に染まない樣にと始終心がけて居りましたし、かつまた自分が家庭に入つた曉は、立派に務をして見せるといふやうな事を私かに考へて居つたので御座いますが、さて實際になつて見るとなか〳〵思ふて居た樣に參りませんので、色々困つた事も御座いました。教師といふ單純な生活から、非常に多忙な商人の家庭へ入つたのですから、隨分まごつきました。まあ一寸した話が少しばかりのお金の勘定をするのさへもよく間違へますし、早く〳〵などゝせかれると、なほのぼせて了つてわからなくなりました。或は、私共が日頃家庭に就いて理想として居た處はと言へば、所謂スヰートホームで、まあ一家の團欒といふやうな事を主に考へて居たので御座いますが、家庭と事務所とが一緒ではスヰートホームどころか食事の時さへも皆で落ち付て頂いて居る譯には參らぬので吃驚いたす樣な事もありました。尤も支配人とか事務員とかいふものが大勢あつて、家の者は別に店の事に氣をつけないでも濟むといふやうな大きい店は格別ですが、私共のやうに家內丈で店の事を行つて居るのでは氣を配る事が多くて、迚もゆツくりはして居られません。召使などでも、私共が日頃考へて居つたのはたゞ女中といふ側ばかりで小僧とか職工とかいふ者に就ては些とも考へて居なか

つたのですから、これらの者への注意といふ事も私には一つの新しい仕事でした。それに以前學校で時間的に何事もして居たものですから、どうも時間に制限がなくて無益に費える樣な氣がしてなりませんでした。

▲當年の意氣、思ひ出して獨りで笑ふ

此家へ嫁いだ當時の事を考へると又色々可笑しい事があります。何時でしたかまだ婚姻しない前に私共の集つた席上で、結婚についての理想話が起りました。其時、何うせ私達はもう老嬢であるから、家庭にでも入るとなれば、まあ子供でもある所へ往かなくッちやなるまいといふやうな話が出て、一體嫁ぐ先に子供のあるのと舅の居るのとでは何方がよからうといふ事が問題となりました。之れは大抵の方は子供のある方が贊成で、既に家庭を持つた人達迄が、それは無論子供のある方がいゝ、私達はお互に先生として生徒を教へた身分だから、家庭に入つて舅姑の前に頭を下げるといふ事は餘程六づかしい事だと言はれました。其後私は舅のある家庭にはいつて、幸ひ兩親共極く善い人達で、今日迄無事に暮して居ますが、却々盛んな意氣であつたものだと今でも思ひ出しては獨りで笑ふ事があります。

▲情ない事だ、何うしたのだらう

私がまだ獨身で居ります時分には、學校では隨分よく勉强した方でも、家庭にお入りになると全然今迄の學問を打捨つて、朝から晩まで家の中の事にばかり追はれて入らつしやるのを見て誠に情ない事だと思ひました。さてはお米とお味噌の御話より外出來ないといふ風になつてお了ひなさる、何うしたのだらう、私達は家庭に入つてもどうかあんな風にはなり度くないものだといつも考へて居りましたが、それに就いても可笑しい話が御座います。嫁いで參つて間もなくの事、主人と色々話しました序に、「私は家庭の人となりてもそのやうにお米やお味噌の話ばかりして居るのは嫌ですから、暇があつたら本も讀まして頂きますよ」と申しました處、主人は「アヽ、幾らでもお讀みなさい」と申して居りましたが、暫くしてから「一體お味噌やお米

のお話が出來るのかな」といはれたのには實に赤面いたしました。實際考へて見ますと、お米やお味噌のお話でも、それを本當にしやうとなればなか〳〵容易な事ではありません。

▲仕事に貴賤を別つ癖

これも敎師をして居つた故かも知れません。私はどうも仕事に貴賤をつける癖があつていけません。例へば廣告の原稿でも書いて置けといひつけられますと、何となく張り合があつて、少し位心持が惡くつても



喜んで取りかゝりますが女中にでも出來るといふ一寸した事ですと、直ぐ、こんなつまらない事より自分はもつて値のある事をしやう、しなければならないといふやうな事になつて、つひ其一寸した事を等閑にするといふ傾きが御座います。何も其れよりも値のある仕事が目の前にさしかゝつて居るのでもないのに、空しく手をあけて時間を過して了ひます。習慣といふのは、實に恐しいもので御座います。

催眠術でお產が樂に出來る法

成女高等女學校講師　津川宗立

編者曰く催眠術に就ては世間既に定論あり、若し此の術を應用して眞に分娩時の苦痛を輕易する事を得ば婦人の爲めに一大福音なりといふべし實際の効力如何は更に該術者の經驗談を聞取りたる上にて確證すべし

△無痛分娩に對する攻擊

催眠術者が、お產をさせるといふと、產科醫も產婆も躍氣となつて攻擊します、それは一應御尤のことで、素人考から申しても、催眠術でお產をさせる？どうも不思議だそんな事が出來るものかと思はれまづ其攻擊の第一は催眠術者に產科の知識がない、知識のないものが、產科の事をやるのは非常な危險であるといふ事、第二は、催眠術が分娩時に於いて陣痛を止めると云ふが果して然らば、危險此上なしで、陣痛がなければ、分娩が出來ないのだと云ふ事であります。これは素人考へでは、至極御尤にきこえますが、私共催眠術者の立場としては、如何にも見當違ひの、攻擊だとおもひます。

およそ催眠術によつて、無痛分娩をすると云ふ事には、動かすべからざる根據があります。而して產婦は此によりて眞に無痛分娩が出來且つ其結果は無害安全であるのです以下少しく其理由を申ませう。

△五官に對する暗示の力

催眠施術によつて暗示の結果、被術者の五官の感覺を自由に動かす事が出來るのは、多少催眠知識のある人の知つてる事でありますが、まづお話の順序として、實驗上の事實を申しませう。

◎催眠狀態にある被術者に對して觸覺の實驗をします。「あなたの右の指が痒くなつた」と云ひますと、被術者は無暗に之れを掻きます。「左の手がしびれた」と云つて針を以つて其皮下に出血する程つき刺しても、更に平氣でゐます。「痛いか」と聞きますと「少しも痛くない」と申します。

◎次に嗅覺の實驗をします、被術者に向つて、「あなたの鼻はもう少しも臭はない」と暗示して强い匂ひの香水を其鼻にあてゝも、更に匂はないです。「今、非常に嗅覺はたしかになつた」と暗示すると、其香水を三間以上距つた所に置いても十分に嗅ぐ事が出來るのであります。或る被術者は二枚の繪葉書を嗅ぎわけたのさへあります。

◎此度は味覺の實驗です。淸水をコップに盛つて、「今甘い砂糖水を飲ませる」と云ひますと、被術者は非常に甘さを感じます。次にそのおなじ水をそのまゝで「此度の水は非常に苦い」と云ひますと被術者は實にいやな顏付をして一口飲んで其コップを押やりました。そんな譯で其水を酒だと云へば酒と感じ、酢だと云へば酸味を感じます。

◎又聽覺の實驗に就て「あなたは私の聲の外は何物をも聞えなくなりました」と云つて、他の人に其人の名を大聲に呼ばせましても、更に聞えないか、平氣でゐます。「今度はあなたの耳は非常によく聞える」と暗示して試みに懷中時計を一間位の距離に置いて聞きますのに實に明に聞き取る事が出來るのであります。更にこれを三尺を離しましたが矢張り聞き取りました通常人は決してかゝる距離に於て聞き得るものではありません。

◎視覺の實驗においては、更に驚くべきものがあります。十枚の新しい葉書を以つて其中の一枚を取りだし裏面に被術者の知れぬやうにちよつと印をつけ、表を見せて、十分にこれを記憶しておくべく暗示しておき、覺醒後に其十枚中より選び出さしめましたが、決して誤りませんでした。更にその十枚の葉書に極めて秘密にその裏面に一二三の番號を附け、其順序を追ふてその表面のみを被術者に見せておきます。それから覺醒後裏面を見る事を禁じて、先きに見たる順序を追うて机上に列べさせますと、それさへ一つもあやまりませんでした。かやうな事は到底催眠術の暗示によらねば出來ない事です

五官の實驗はまづ此位にして、今一つお話致したい

のは、不隨意筋を暗示によつて動かす事が出來ることです。例へば胃痙攣の猛烈な發作に對して、一言の暗示でこれを止め、便秘した患者に對して、「便通ある」との暗示をすると、忽ち便通を催すのであります。

△無痛分娩の實例

で今こゝに催眠術によつて無痛分娩をした實例の一二を擧げて何の位の程度まで無痛であるかの事實をお話いたしませう。

一、二十五歳の婦人、以前第一回の分娩の時は、陣痛が起つてから十四時間後に漸く分娩した。第二回の分娩は十一時間を要したと云ふ事、今度はその第三回目でした。

この人は四回の豫備施術催眠術を四度かけた事によりて、暗示は悉く行はれるやうになりました。その内に分娩の時期が來たので、術者の暗示は直に行はれました、すると苦痛の狀態もなく、煩悶の有樣も見えず。極めて靜かなる姿勢で六時四十分後においてめでたく玉のやうな男子を分娩する事が出來ました、産の事了つて後、産婆に聞かれて、「たゞもう善い心もちでした」と云ひましたさうです。實際何等の苦痛もなかつたやうであります。此の人などは眞に理想的に成効したる實例であります。

二、十九歳の婦人、初産、豫備施術五回いたして、其分娩時期の來るのを待つてゐました。しかるに術者が不在のために其時期が到來したるに係らず、其場に臨んで施術する事が出來ませんでしたが、しかし豫備施術中に與へておいた暗示の力によつて極めて平穩に甚だしき苦痛を感せずに、分娩しました。初産なるに係らず、烈しい苦痛を感じなかつたのは、確に暗示の力である事を信じます。

三、二十八歳の婦人。これはもう既に男女一人づゝの子を産んで今度は其第三回目の分娩でしたが、豫備施術はよく成効しまして、暗示は甚だよく行はれました。術者の見込みによれば全たく理想的に成効すべき筈でありましたが、分娩の時期の今來やうとする時に、

産婆は、非常に反對して、そんな事をすると、其子は片輪になるとか、親が眠つたまゝ覺めないやうな事がある」などゝ、非常に催眠術を攻撃した爲め、被術者の信仰を破壊された爲め遂に無痛分娩は甚だ不成功に了りましたのは、極めて遺憾でした。

△醫師と産婆の誤解

産婦に對しては、産科醫も産婆も必要です。しかし陣痛の起る時その苦痛を止めて、産婦をして平和なる狀態を保たしめる事は、産科醫産婆では出來ない。催眠術者はそれを無害安全にして平和なる狀態におく事が出來るのであります。

要するに分娩時期に際して、苦痛を感ぜしめないやうにするだけの事で、産科醫は産婆の補助をなすと云ふ意味に外ならないのであります。

△婦人の一大福音

分娩時の苦痛より烈しい苦痛はないと云ふ事は、一度經驗したる婦人の知るところであります。催眠術に於て此苦痛を感ぜざるは勿論、更に極樂境にゐて、分娩する事を得たら、婦人としての幸福は何ものなし此れに上越すものはないと思ひます。其他産婦が受ける分娩當時の利益は、凡そ左の通りであります。

一、比較的安全なる事。無痛なるを以つて、平和なる姿勢を保つ事が出來まする隨つて産科醫及産婆はその必要なる手當を比較的完全になす事が出來る。

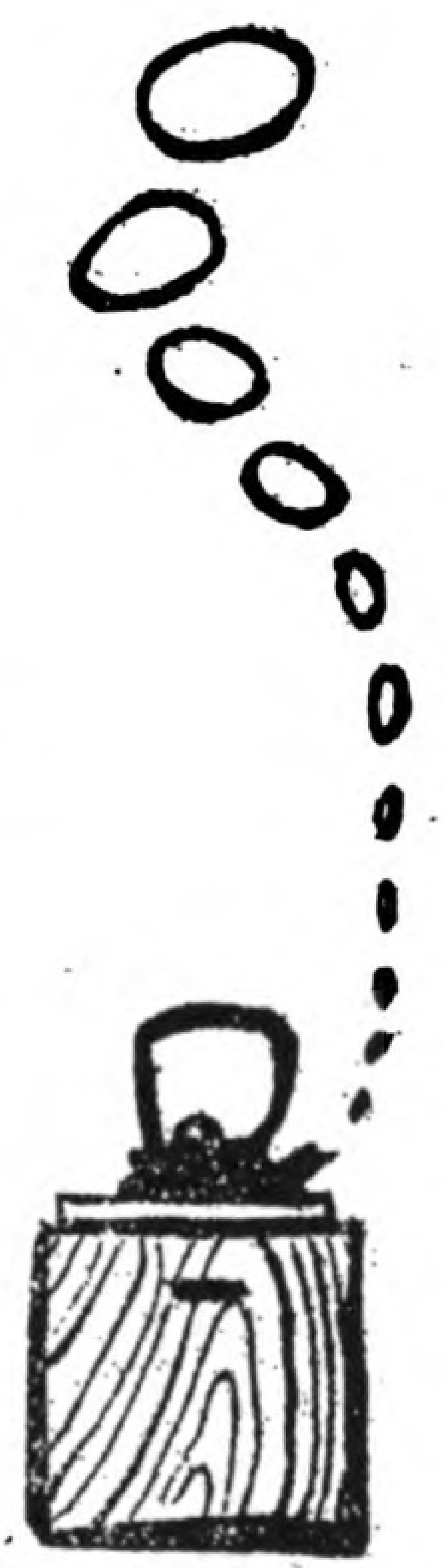
二、産婦はその身心ともに疲勞せざる事、故に如何なる難産の場合でも、元氣旺盛ならしめる事が出來るために長時間の産に堪へて平氣なる事。

三、暗示の力は不隨意筋を自由に動かし得るもの故子宮の收縮を盛にする事。隨がつて比較的短時間に於いて分娩し得る事。

△産婦の注意

催眠術治療を受けようとする者の大いに注意すべきは、信任すべき術者を選ぶ事であります。市井の淵醫分如何はしい催眠術者によつて、施術を濫用したり、又相當なる催眠學の素養なくして、施術するのに、往々實驗の素養なくして醫者たるの危險と同じでありまする、けれども人格高き、高潔なる催眠術者によれば、無害安全にして効果の著しい事は、申すまでもありません。

術者を選ぶ外に、産婦は、其分娩時期の來らざる前に數回の豫備施術をするの必要あるものであります。豫備施術をせずして、陣痛の起つたとき施術をして時として不結果に了る事がありますから、此事に極めて肝要な注意であります。尚催眠術に就ての質問は新宿北矢町．〇二番地へ御照會あれ。



一週間の献立

みどり

△月曜日

朝晩は大分寒くなつて來た、ほんとに此頃の日の短いこと、やう／＼美和子の被布も縫ひ上つた、どれ夕飯の仕度にかゝりませう。

(一)鯵二色やき　附合林檎甘煮　(二)松茸胡麻酢和　(三)松茸小口切り海老糸三つ葉清汁

(一)鯵を三枚におろし妻折りとて尾の方を折りて金串にさし片身は鹽に片身は附燒となす
附合林檎は皮をむき暫く水につけ置き（赤くならぬ様）適宜四ッ位に切りて心を去り一個につき砂糖十匁の割にて水少々と共に文火で煮立たぬ様煮る（煮立たせると形がくづれる）

(二)松茸の石附を去り鹽水にて洗ひ手にて細かく劏きて煠でる鍋を火よりおろす時酢をひた／＼位に入れてさまし置く
白胡麻を洗ひ布巾に取り水氣を去り焦げつかぬ様煎りて擂り鹽砂糖にて味をつけ前の松茸をざつと搾りてませる

(三)一度湯でたる海老を小口切りとなし鹽水にて洗ひ薄切りしたる松茸と共に煮出の中に入れさつと煮立たらば燒鹽と醬油とにて味をつけ椀に盛る時ざつと煠でたる三つ葉を入れ松葉に切りたる柚子を吸口となす

△火曜日

魚屋が來た今日は何にしやうかと出て見ると生鮭の新しいのがあつたからローストフイッシュにと取つて置く青森から貰つた林檎が未だあるからさらだにして

天火のついでもあるし、何か肉類を今一色と今日は西洋料理ばかりにして置く。

(一)ローストフイツシユ　オランダソース

(二)フーカデン　附合ボイルドポテトー

(三)アツプルサラダ　マイナイズソース

(一)生鮭の皮をひき一人前づゝ切り身にして鹽胡椒をふり置く深皿に人參玉葱等有合の野菜適宜に切りたるを下に敷き其上に切り身をならべぜリ酒又は白葡萄酒をかぶる程に入れ一時間程浸し置き（時々裏返す）天パンにラード又はバタをひき野菜を廻りに置き上に處々バタをのせ四十分程天火にて燒く中途に一度先のぜリ酒をかける

オランダソースは玉葱一個を細かく刻みバタ十匁にてよくいため更にメリケン粉大匙三杯を加へ焦げつかぬ樣强からぬ火にていため牛乳三合を徐々に加へレモン汁少々と別に煠でたる松茸薄切り人參花形等入れとろ／＼に煮て前のフイツシユにかけて出す

(二)挽肉（一人前十匁乃至十五匁割）百目に豚肉三分の一加へよく叩き細かく刻みたる玉葱一個と半斤のパン柔き分を細かくちぎりて水に搾りたるを交せ鹽と胡椒にて味をつけ煠で玉子を中に包みてかまぼこ形となし天パンにバタ或はラードをひき上にも又バタをのせ人參、玉葱、等野菜の有合あらば前と同じく廻りに置き天火に入れて四十分程燒く其中間にぜリ酒又は白葡萄酒大匙二杯振りかけ又時々天パンを傾むけ其肉汁を匙に掬ひて上に振りかけて燒き暖きうちに庖丁して皿に盛り別に小さき馬鈴薯丸のまゝ皮をむき煠でゝ粉ふきとなし鹽加減したるものを附合て出す

(三)林檎の皮をむき水に入れてあくを拔き適宜薄く切りマイナイズソースをかけ其上に湯で玉子の黄味を裏漉になし白味を霰に切りてパラ／＼とかけて出す

マイナイズソ！スは芥子一杯砂糖山盛一杯鹽半杯を玉子の黄味一個と共によくまぜサラダオイル少しづつ入れて練り西洋酢にてどろ／＼にとく

△水曜日

今朝の澄み渡つたよい天氣袷の袂輕く郊外散歩は嘸よい事であらう併し子供の多い者はそんな呑氣な事も言つて居られぬ女中に手傳つて澤山の洗濯をした、あゝこれで氣が清々とした、晝飯後秋子を寢かせ附けながら私の讀書時間は何時も此時と女學世界を讀んで居ると變り安きは秋の空とはいひながら急にパラパラ降つて來た、それほし物、それ幼稚園の迎ひ學校へも雨具を持たせてやる。



らねばならず其忙しさ一人の女中ではかういふ時眞實に困るもう一人置かうかと思はぬではないがいや〳〵少し位忙しくともなければない樣にやつて行かれる其費用で副食物の方を充分にしませうこんな事考へて居る間に秋子はすや〳〵と可愛らしい顏して寢てしまつた其柔い頬にそつとキッスして子供の三時でもこしらへてやりませうと立ち上つた、お月見團子の上新粉が殘つて居たから餡はさらしあんを使つてそば饅頭をこしらへにかゝ

先づ上新粉五合につき砂糖五十目ほど加へ長芋三四寸長さのものを少しづゝ何度にも摺り入れては交ぜよく加減の柔かさになりたらば手にて丸め中に餡を包みせいろに入れて蒸すさて今日の献立は

(一)鯔　代々酢　(二)鰯つみ入れ　清汁　(三)栗きんとん
　笹打茗荷の子　短冊大根
　花生姜

(一)鯔を三枚におろし、くるみ鹽とてすつかり鹽にまぶし一時間程へて水にて洗ひ布巾に包み水氣を去り酢の中へ又一時間程漬み置き身のしまりたる頃皮をひき作り身となす茗荷の子を笹打となし水に漬け置きせんに打たる大根と共に皿に盛り合せ花形に切り水に漬け置たる生姜を作り、身の上に散らし橙子酢をかける、橙子酢は橙子一個の搾り汁に倍位の酢を加へ砂糖醤油を加味したるもの

(二)鰯十尾はらを去り水に洗ひて指の先にて背骨及び頭を取り皮をひき擂鉢に入れてすり鹽少々味噌少々加へ又よく擂り裏漉にかけ適宜の大さに摘み取りて沸湯の中に入れて煠でる別に煮出を作り味をつけ短冊に切りて柔く煠でたる大根と共に摘み入れを入れさつと煮立て柚子を吸口とし椀に盛る

(三)栗きんとんは栗三合の外皮澁皮共に庖丁にてむき湯の中に入れて一寸色づきたる時水に取りて洗ひ更に水より文火にかけて煮る大方柔くなりたらば砂糖七十目程加へ其汁の中へ別に五十目の薩摩芋の煠でて裏漉にかけたるを徐々に入れ鍋を手に持ちまはす様にして煮上る

△木曜日

長男が遠足に行くので朝未だきよりお辨當で大騒ぎサンドウイッチやら海苔卷やら湯で玉子に焼栗ジャム入りケーキやら水菓子やらそんなに澤山持つていつて如何するつもりとても一人で喰べられるものかといつても聞かないお友達に上るのだからと背負ひ切れぬ程持つて湯ざまし水筒に草鞋がけ喜び勇んで出掛ていつ

た喜愉快でおらうるて今日の献立は
(一)ハムエッグ　(二)オイスターミルクスチウ
(三)略式フイツシユコロツケー

(一)今朝のお辨當の殘りのハムを一度煠でゝ薄く大切りになし皿に盛り其上に玉子を湯の中に一寸落し白味の固まりたるを度とし其まゝそつと掬ひ取りてハムの上に盛り鹽胡椒をふりて出す

(二)牡蠣を目笊に入れ鹽をぱら／＼と振り手に持ちて振り交せ水にてよく洗ひ水氣を切りバタにて痛め皿に取り置く深鍋に細かく刻みたる玉葱一個メリケン粉大匙二杯を焦げつかぬ程バタにていためて牛乳三合を加へ其中へ馬鈴薯人參適宜に切りて入れ文火にて煮る野菜の柔くなりたる時前の牡蠣も入れ鹽胡椒にて味をつける

(三)小鯵の腹を去り一度湯煮して肉を手にてぱら／＼に取ほぐし鹽胡椒をふり裏漉にしたる薩摩芋の中へメリケン粉少々鹽胡椒を加へたるものとよく交せ合せ饅頭大に丸めメリケン粉の中にころがし玉子の黄味とパン粉をつけラードで揚げる

△金　曜　日

遠足の休みで長男が宅に居る近所からお友達が二三人遊びに來る小さい妹等も共に賑やかだ事、何かお菓子をこしらへてやりたい、材料が掛からないで子供等の好なものは先づパン位幸ひメリケン粉やベーキングパウダはあるし玉子も未だ二つばかり有つた筈だから牛乳丈け買ひにやる先づバタ大匙一杯砂糖二杯に玉子の黄味一個（白味は別にとつて置く）を大丼に入れよくまぜ合せ小匙半分の鹽と一合五勺の牛乳を加へ四合のメリケン粉に小匙三杯のベーキングパウダを加へたるものをふるひに入れ輕くまぜ先の白味をよく泡立てそつと入れてまぜる天パンに油をひき大匙に一杯づつ落して三十分位燒く序にビスケツトも燒て置く

メリケン粉百目につきバタ大匙三杯を加へよくまぜる其中へベーキングパウダ小匙二杯程入れ輕くまぜ別に牛乳五勺に砂糖五十目を加へたるものを共にまぜ合

せ廣き板の上にて、のべ棒にて一分厚さにのばしビスケット形にて打拔きラードを引きたる天パンに入れて燒く燒き上りたらば白砂糖を玉子の白味にてとき半分に別け片々を又半分に別け食紅とチョコレートにて色をつけ刷毛にてビスケットの上に塗りさまして固まらすと美しき菓子となつた、やゝ甘味い臭がする母様何何と出來上るのを待ち兼ねて子供等大喜びこんな事して一日をつい暮れてしまふ、今日は餘り手のかゝらぬものにして置く、

（一）鯖鹽やき（二）ぎせいどうふ（三）かぶの芥子酢和へ

筆生姜

（一）鯖ば一人前づゝ切り身となし鹽をふり置く一時間程へて水にて洗ひ串に通しバタ〳〵と化粧鹽を振りて燒く

生姜を一個づゝ筆の形に皮をむき沸湯の中に入れ鹽少々加へたる酢の中に一時間ほど漬け置て附合となす

（二）豆腐二丁に玉子五個の割合にて先づ豆腐を布巾に包み壓をかけ置き水氣なき鐵鍋の中へ入れ箸三本ほど持ちてはら〳〵に煎り砂糖みりん醤油にて味をつけさまし置き玉子をまぜて上の火を強く下の火を弱くして燒く

（三）かぶの皮をむき薄切りとなし鹽をふり置き暫く立て〻水にて洗ひ布巾に包み水氣を去り酢の中に漬け置く花形に切りたる人參林檎などあらばまぜ合して美しくなる砂糖鹽、芥子をまぜ酢にてとき前のかぶをざつと搾りてませる

△土　曜　日

一週間の中で皆の待ち兼ねるはサタデーの晩餐旦那様も早くお歸り各々の好な御馳走が一品づゝは必ずある、前の土曜日は散らし五目であつたから今日は皆の好な略式チッキンライス口取らしいものは子供の好物それに今日魚屋が割合にかくかうな小鯛を持つて來たから珍らしくけんちん蒸をこしらへる事にす、きつと旦那樣のおよろこびばかりでなく皆も大好物食後の御菓

子は馬鈴薯羊羹にバナナ、今日は皆おいしいものばかり

(一)口取　林檎玉子
　栗ふくめに
　菊花にかぶ
(二)小鯛けんちん蒸
(三)略式チッキンライス

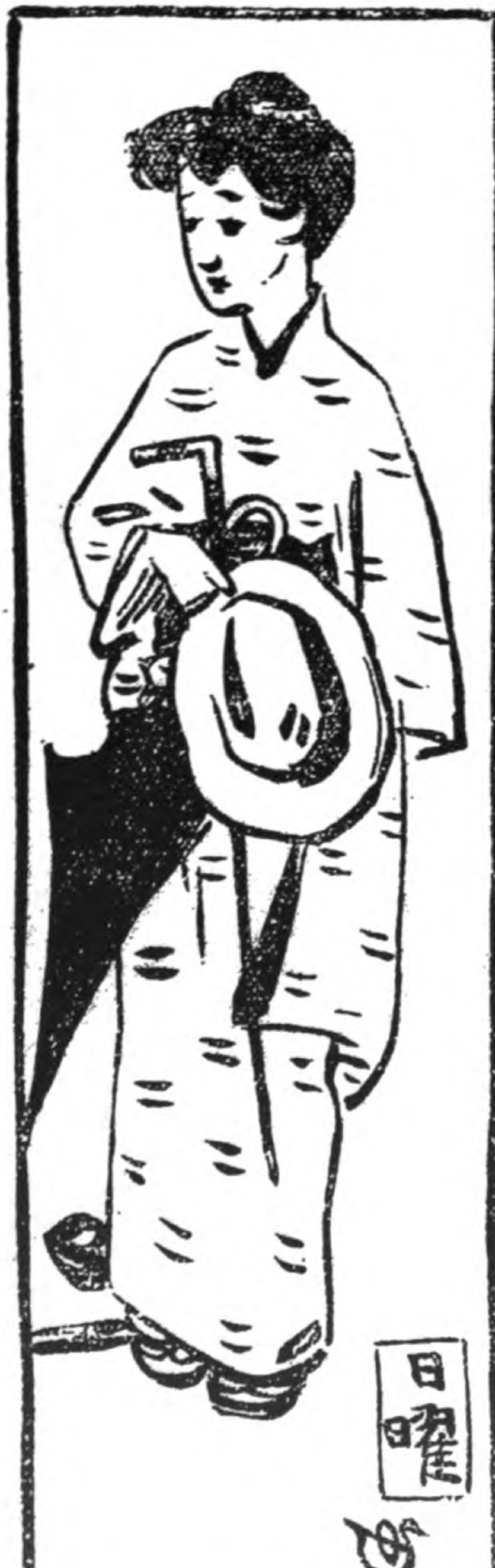
(一)玉子一個一人前割當にて煠で冷ぬ内に一つづゝ布巾に包み母指にて眞中を押へつゝソロ〳〵と平たく丸め林檎の形をつけ始め食用繪具の黄色を塗り其上に食用紅をつけ眞中へ一寸木の枝を折てさす



栗ふくめ煮はきんとんの煮方と同じことたゞ煮立ぬ様注意すること

菊花こかぶはこかぶの皮をむき爼板の上へに杉箸二本を置き其間にはさみて庖丁が下まで達せぬ様縦横に細かく切り鹽をふり置き柔くなりたらば水にて洗ひ水氣をよく切り酢の中に漬け置く暫くして皿に取り手にて擴げ砂糖を上にかけ猶く小菊の葉を洗ひて下に敷き心の部へ赤唐芥子を輪切にして一つづゝ置くと美しき白菊の花となる

(二)小鯛の鱗をさり背を開きて背骨及びはらを去り水に洗ひて鹽をふり置く別に煎り豆腐の中へ人參椎茸等入れ味つけたるものを玉子一個まぜ合してつな



ぎとなし小鯛の中に適宜つめ込みて竹の皮を切りて臺となしせいろに入れて蒸す

(三)雞肉百目程よく切りて鹽胡椒をふりバタにていため置く深き鐵鍋に細かく切りたる人參、玉葱、松茸をバタにていためスープ或は水と鹽胡椒にて加減し先の雞肉をも加へ强めに煮たる御飯を人數見計ひ適宜加へて焦げつかぬ様よくまぜて御飯が暖くなりたらばゼリ形或は小丼に盛り更に西洋皿の上に伏せてはつと小丼を取る形も美しく味もよく冬など來客の時パラ〳〵になりたる冷飯を利用して大に重寶中に入れる野菜も季節に應じて筍、青味等を好み用ふ

馬鈴薯ようかんは角天一本を水にて洗ひ二合五勺の水にて煮百目の砂糖を加へ裏漉にかけ又煮る又中へ百目の芋を煠で裏漉にしたるものをブツ〳〵にならぬ様よくまぜながら煮て火よりおろし流し箱に入れて冷し置く

さあこれですつかり用意が出來た先づ安心明日はサンデーで例の通り三食共パン火のついでに冷肉ボイルドのポークを煠でゝ醬油につけて置く樣女中にいひつけて八疊の間に食卓をはこぶ(みどりさんの御台所が何……)

神經衰弱豫防法（諷刺文）

女奇人

Lより

正七時を過る〻こと十分毎に天井一人前奢るべしとの約定につきつら〳〵と慮み候處、何分にも、他人樣の御腹に落ち付くものにまで金出すは癪の至なり且はか〻ることの孫子の代まで習慣となりてはとも心を配られ候ひしま〻二人とは無き姉の、半年振りにこの會合に、永うとは云はぬ今暫しと、とんだ時姫をきめこみ候を餘所にして、早くも片足は蹴込みに乘せながら、梅吉の背をポンと一つ打ちざまに、急いでおくれよとほ〻ゑんでつかはし申候、何の呪と問はせ給はば野暮に候、車夫とはいへど男には相違なき彼の魂を、きはどい折ながら脱殼にして、懸命車上の人に細脚を捧げしめむの妙案にこれあり、クレオパトラはここにもと反身になりて本郷通りを走らせ申し候。

三十日に候へば掛取らしき小僧の後姿など眺めつ〻お茶の水橋にか〻り候處、若溪のあたり夕霞たなびいて、空にはいと淡き星の影さへあらはれ申候。思ひ切り派手なる絞りに羽二重の白地胸高に結びたる我が姿の、何とやら繪にありさうなと自惚れ候も決して無理とはおぼし給ふべからず。さりながら例の前額の相變らず突出狀態を續け居り候を、撫てみつ叩いてみつどうかならぬものかと長大息致し候間に、梶棒下されハッとして我れに歸りたることに御座候。

神田郵便局前を待合として無斷借用の件は、御身樣の御考案に候ひしを、何に祟られて肋膜再發などの憂目を見たまふやらむ。Lが心づくしの冷飯斷ち、澤庵の尻尾斷ち、其他時に應じての食物斷ちも其のかひなかりしとは、恐らく掛りの神樣を定め盃かざりし手拔りにて、取扱上不都合を來せしものと推せられ申候

さるにても、去ぬる彌生の末つかた、花にそむきて六つの袂をわかち候てより、かたみに偲びかねたるなつかしの想を、たゞの一夜にはるけむの計畫にて、旅枕二日路をはる〳〵の都上りも三人そろへばこそに候

を、御身樣なくてはと、Kさんとふたり電報握りしめては、廂の下なる二つの穴より盛に水を湧かせ申候。

この夜、Kさんは更けての用心にとて一高のAさんを警護に頼み、私より一秒の四分の一ほど先きに來て居たとの云ひ條、天井の十分一の其又四分の一を奢れとて諾き申さず、御身樣戀うての涙の中より、いつそ十分遲れざりし身の不運をかこち候心根不憫とおぼしたまはりたく候。

M樣、Aさんは御頭の恰好がいゝのみならず義俠心もある御仁と見うけ申候。天井の四十分一の苦しい瀬戸際にて、僕は洋食がいゝなどの罪のないやうな一言は、全く私の命の親とも相成り、近いのを我慢にして、兎も角も實亭を賑はし申候。

それより當の目的なる若竹にとくりこみ申候。さしづめAさまを桂庵に見たて候て、二人はあとよりぞろぞろとついて參り候。柏葉の帽子聊か右に傾きたる後姿を、瓦斯燈の光にて見候時、ふと「春」の岸本さんを思ひ出し申候、殊に、此頃は谷中のお寺にて鐘の音に耳を清め、香の匂ひに俗念をたちて、ひたすら勉強に餘念なきよし、いよ〳〵うれしき青年に御座候。

さて、例の綺麗首の語り候ものは、千代萩に日吉丸就中、お染久松が氣に入り申候、歸途の汽車にてソレ富士がと人々の騷ぎ立ち候時にも、Lのみは悠然として、小聲に、コレ久松さんとうなり居り候ひき。

中途ながら唯今勝手の方よりゆで栗の香漾ひ參り候て、筆とり居るも邪魔くさく相成り候次第、これにて惜しき名殘を致すべく候。

別便にて心入れたるシャツ一枚御送り申上候。着の上はかねて拜し上げ候御肌――二の腕に植疱瘡の跟大小四つと、背と腹のあたりとにふき出ものゝ名殘の少少ながら存在せる――を御つゝみ下されたく、Lは朝夕前述べ候如きかず〳〵の斷物して、御平癒のほどを祈り居り候。蔭の話だ、あてになるものかなどおぼしめさむかとあやぶまれ候へども、眞僞のほどは何卒今日樣に御伺ひ下されたく候。早々

M樣まゐる

「姉さん縫針はどうして造るのでせう」

（家庭工藝夜話の一）

石井研堂

長火鉢の側に、圓くなつて雜談してました三人は、姉妹の秋子さんに冬子さんと、そのおッかさんとでした。

學校の成績のことなど、話してますと、冬子さんが、急に思ひ出した樣に、姉さん縫物をします針は、どうして造りますのでせう」と、秋子さんに問はれました。

「さうですね……。」と答につまりました姉さんは「針がどうかして……」と不審顏。冬子さんは『先生が、何でも目の前の物で、知らないことは、人に尋ねて究めるものですよ。その心掛を怠らなければ、永い間に、澤山の智識を得らるゝものですから……と、常に申されてますが、私は、始終使つてます針のことを存じませんもの……」と、其の理由を説明されますと、至極尤のことゝは思ひながらも、姉さんはそれに答へるだけの智識を有ちませんでしたので、更に之をおッかさんに尋ねました。

問はれましたおッかさんは、少し笑を含んで、「さうね、此の前に、菱藤さんの針工場を見せて頂いたことがありますから、貴方は分ッてますが、昔の樣に、鐵線を切ッて、一本づゝ砥石や鑢で尖らし、轆轤で孔を明ける樣な手輕いものでなく、込入ッた精巧な機械で製ッてますから、お話だけでは分りますまいよ」と、話しても無駄なことを答へられました。が、秋子さんも冬子さんも、「分りませんでもようございますから、是非……」とたッて望みましたので、「それなら話しませう」と、話し出されました。

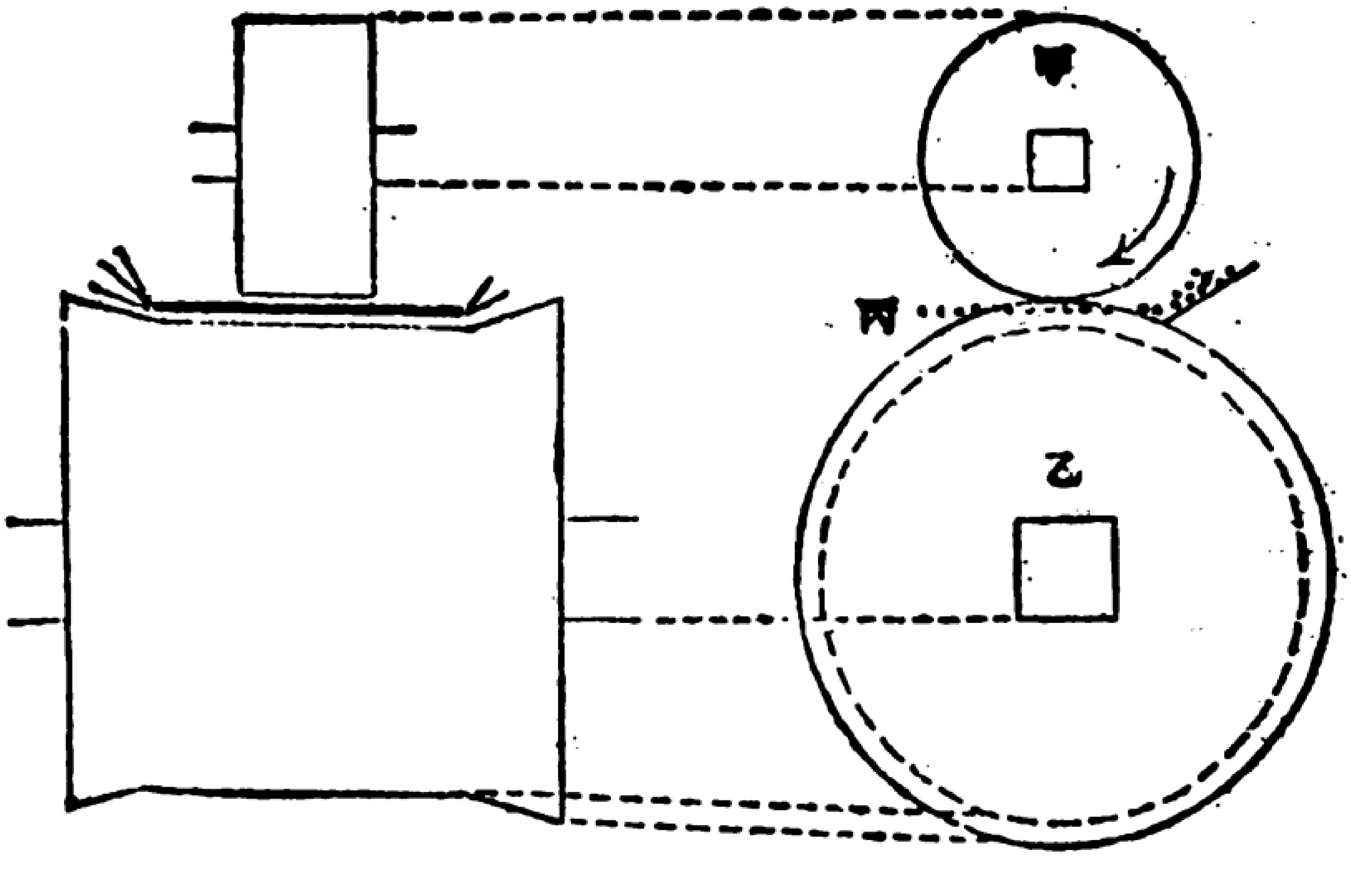
——鐵線——……○

「鐵線から申しますと、鋼の鐵線を引き延ばす機械がありまして、望みの太さに引きます。これが絹針木綿針刺繍針、色々の針の原料になります。

次は、其の鐵線を、定めの寸に切ります。自働

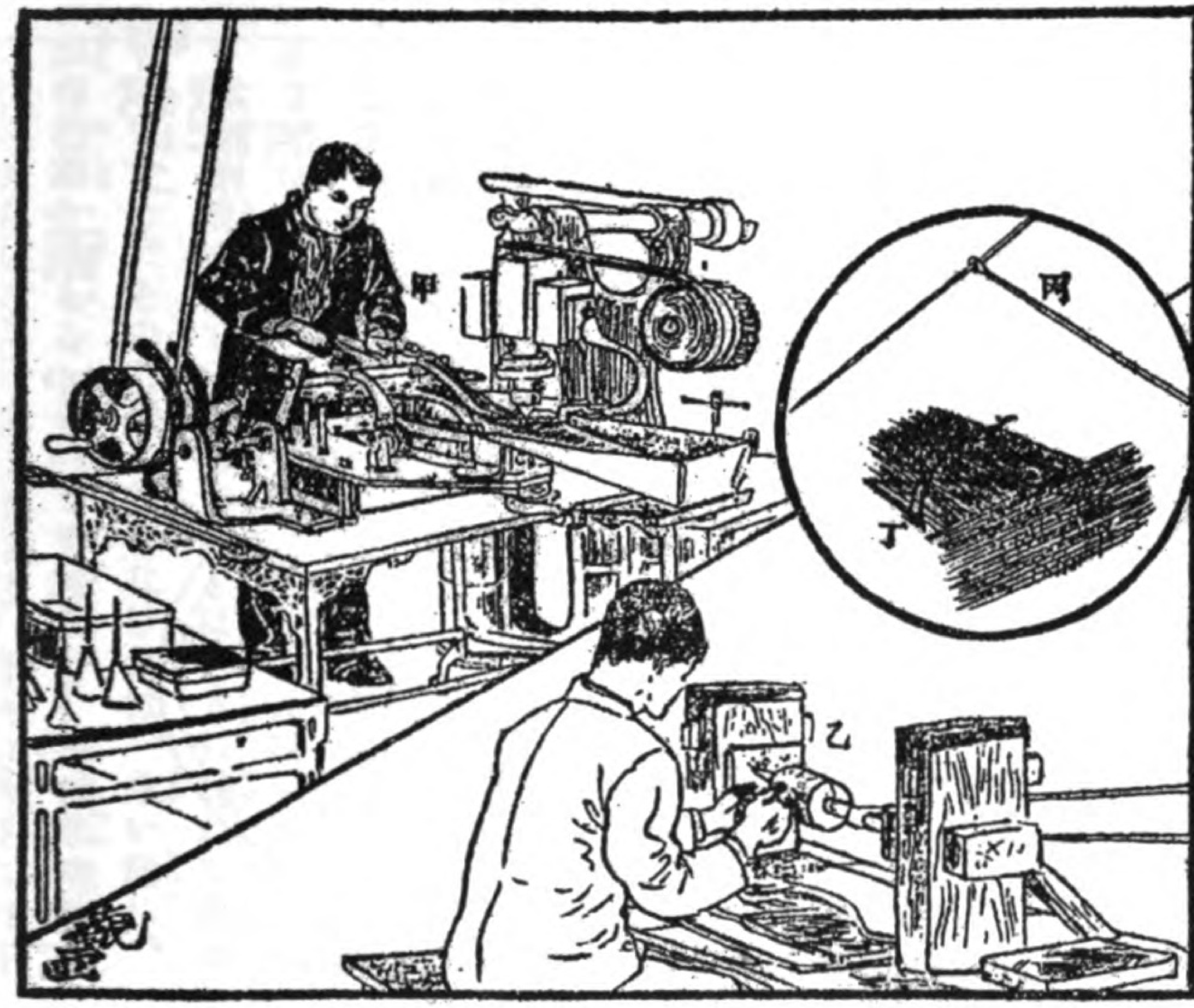
式の機械がくわい出しますと、上からナイフが下りて、二筋づゝ切ります。すべて、手間の經濟上針は二本續けて作りますから、鐵線の長さは二本ぶりに取ッてます。

切ッた鐵線は、曲ッてますから眞直に揃めるため、又硬さを生して仕事を易くするため、一度火に入れます。獨楽の鐵輪の樣な輪(第三圖甲)二つに、鐵線をぎッしり挿しまして束(同圖乙)にし、それを紅くなるまで燒きましたものを、鐵板の上に挾み出し、鑢(同丙)といふ弓なりの鐵器で、ごし〳〵壓しつけて前後に轉ばします。すると、友摺の爲めに、鐵線は眞直になります。



(第一圖ははりがねの兩はしをとがらす機械の要部)

次は、この鐵線の兩端を尖らす仕事でありますが、この機械は、簡單でそして大層便利に出來て居ります。肉厚の金剛砂の砥(乙)車が廻ッてまして、其の上に小さいゴム輪の車(甲)が反對の向きに廻ッてます。一方にどッさりおきます鐵線はゴム車に送り込まれて、一本並びになッて、此の二車の間を自轉しながら、他方(丙)へ送られます、處が、砥車の兩線は、稍高くなッてますので、鐵線の兩端は之に觸れて磨れ、線香花火以上の火花を散らし、見る〳〵間にすッかり尖ります荒い砥車から、段々きめの細かい砥車に、四遍ば



第二圖針の孔あける機械甲と針の耳をする機械乙を示す丙は耳すりする針をはりがねにさしたるもの丙は多くさしたるを來れたるものなりこの内一つを取りて乙の如く砥にかけする

かり同じ事をくり返しますので、針さきはすッかり出來上ります。思ッたよりは樂に。

これから、鐵線の中程四五分の間を、又前の尖頭機に似ました砥車にかけて、すり細めますが、これが後に針の頭となるのであります。

次は、鐵線の眞中に、孔打の下拵をいたします。即ち、機械の働きで、鐵線が一本づゝ送り出され、其の眞中を撃たれます。これの濟みましたのを見ますと、後ちに折り離す筋と、孔の點二つと、刻印打ッた樣になり、いよ〳〵針らしい形になッてきます。

次が、肝腎な孔打の仕事で、この機械(甲)が、針製造中、一等巧妙な働きをいたします。其の大體は螺旋の卷かッてます二本の鐵棒が横に渡つてまして、そ

穿孔

れが起りますので、その螺旋の山におされ、鐵線は、二三分おきに綺麗に並び、徐に進んで出ます纖繊の小人島の橋でもあるかと思はれます程美しく見えます。その出て來ますのを待ッてゝ、錐がドシッ／＼下りて孔を二つ宛あけますのは、人の手でやりますのと、少しも違ひません。其の働きの靈妙さ、此の機械を發明された方の苦心思ひやられます。

耳摺

　孔の明きましたのを、手さきで折りますと、今まで繋がッてましたのが各〻一本の針となり、もう形狀はできました。たゞ、頭が、いや耳がまだ折りばなしですから、之を摺ッて滑々にしなければなりません。細い鐵線で二三十本の孔を通しますと、(丙、丁)お角力さんの『サガリ』に似たものになります。それを、指さきに持ち、急に廻ッてます金剛砥にちよッ、ちよッと三四度觸れますと(乙)火花を出して磨かれ、すッかり滑らかになります。これで、先づ針は出來ました。

硬化

　耳摺の濟みましたのは、又火に入れて性を硬くいたします。炭の粉などを塗りつけ、前の焔直の時と同じく、鐵輪に挿して(甲、乙)眞紅に燒きます。其の頃合を見計らッて挾み出し、火の子の盛んに飛びますのを、鐵板上(丁)にころばして曲りをため、直之をわきなる鯨油の內へ入れます其の時、パッと火をあげて燃え立ち、如何にも勇ましく見えます。

　針の燒きの甘くて、飴の樣になりますのや、堅すぎてぽき／＼折れますのなどは、皆この火入の加減で中々熟練がいるさうであります。

　硬化がすめば、あとは磨きや、えりわけだけの仕事で、金剛砂と一緒に布に包み、大きな洗濯板樣の板の上で、ロールにかけて大磨きを仕ましたり、革のブラシに金剛砂をつけて板の上で磨きましたり、同じ様なことを幾たびもくり返して、即ち大研磨――精撰――耳研――仕上研磨――手工研磨――本精撰を經て――紙包みとなり、始めて市上に



第三圖やきを入れるかま場 甲は鐵輪乙は鐵輪にさしたる針丙はやすりとて直ぐにためる鐵器丁は鐵板戊はかま

出るのであります。

彼樣に、込み入ッた手數をかけたものが、よく一本一厘や二厘で賣られたものでありませんか。それにしても、型の定ッた、良い針を、お安く供給することの出來ます樣に、微妙の機械を發明して、世界の幾百萬人に便利を與へてます人、又之をわが國に輸入して率先して此の工業を起された方々に對して、始終針を用ゐてゐます私どもは、大に感謝しなければならぬことであります。せめては、汗や鹽氣のある手で、針を持たぬやうに、又針を使ひました後は、屹度拭きぬいて藏めておく位の注意は機械の發明者に對して盡さなければならぬ義務といふものであります』

と、製造の大體から、機械發明者の功績までお話をなされました。

冬子さんは、大に滿足しまして、『おッかさんは、何でも知ッてらッしやるのネ』

兒童の性癖について

みよ子

▲子供は哲學者

子供は先の先まで根掘り葉掘り問ひ詰めるもので、桃太郎さんが寶物を取つて歸つて、其寶物を如何したのでせうとか、お猿や兎が何故口を利くのでせうかとか、よく質問致します。これは本當に口を利いたのでは無い、喩のおはなしです位に答へては置きますが、お伽噺の說明には實際困る事もありまして、子供は實に哲學者だと感ずるのでございます。庭園の植物や昆蟲などに就ての質問を子供に解り易いやうに正しく答へますのには、餘程博物學の修養がなければなりません。

大人と異つて他に何等の屈托もなく、唯だ新奇な智識を求めるに掛り切つてる幼兒の質問は千種萬樣極りなく、却々說き明しが六づかしいものでありますが、これが又私共には非常に興味ある事と思ふのでございます。

▲高等學校の生徒から禮手紙

何時でも一群の大將株になつて統御の力ある兒、忍耐強くて對手とあらそはぬ兒。強い者を恐れて何でも從つて居る兒。其他無心に遊んで居らるゝお子達を種々の點から善く注意して觀察して居りますと、將來どんな方になられるかと云ふ鑑定が、ざつと付くやうでございます。さうして前にお世話申し上げた御子さんが今頃は如何して居らつしやるか知らんと、始終考へてお目にかゝつて見たいと思つて居りますが、何時ぞやも思ひ寄らず高等學校の學生から「私も腕白で先生によく御厄介を掛けました」と懷舊の情の籠つた手紙を寄越されたので、實に懷かしく嬉しく思ひました。

▲友達と子守

幼い中は周圍に感染れる事が實に早いもので、飲酒客の多い家のお子さんは醉漢の眞似などして遊びま

す。又お友達によつて直に容子が變りますから、昨日は何様な子供と遊ばれたと云ふ事が善く判るのでございます。それですから御友達には餘程注意しなければなりません。それからお守の女中は大層感化を與へるものですから、私方へ附いて來られる女中方には時々忠告致すので、流行唄なぞ唄つて居るのを聞きますと、御子さんの前では謹んで下さいと頼んで居りますが、實際保育の心得のある女中は却々得られぬものでございます。それゆゑ女教員方のお子さんに往々殘念な感化を受けて居られるお子さんのあるのを見受けます。お子さんのある御婦人は事情の許す限り、お宅に於て御自身お世話なさるに越した事はないと存じます。縦令朝晩や休日に御注意なすつても、お子さん方の心持は時々刻々に變化するものですから、無責任な女中の監督に任せて置いては不安心でございます。

△最新二萬句　　今井柏浦編

これは日本流即ち子規派に屬する新派俳人の作二萬句を精選したるものなり、部門を時候、人事、天文、地理、動物、植物、雑と春、夏、秋、冬に分つ、抑も新派といふはいづれも舊習に泥まず、月並に囚はれざる一種の特調を以て俳壇を開拓したる天下群雄の詞藻なれば、其意氣豪邁、その辭又卓落にして、神飛魂躍の態捕捉しべからざるものなり。最新の二字尤もこの句集の題に適す定價七十錢博文館發行。

△北米の花　　田村松魚著

久しく文壇を遁して北米の曠野に其の客氣を馳せ、多年廣漠の天地に其の詩腸を洗ひたる田村松魚氏は爰に再び操觚の人となつて才筆を揮ふの時期に際會せり、「北米の花」一巻は即ち氏が新らしく開かんとする運命の征途を飾るの花環たるべし、收むるところ「野調」「出世間」「新知人」「野花」等あり、氏自から稱して滯米七年間放浪生活中にあつて筆を取りたるものなりといふ、これを一見するに元より今日の實際生活とは關係少く、隨つて思想の交渉に乏しき感なきにあらずといへども、型に囚はれたる如き當今の作物に對して、この種の異調を見るは何となく眼界の一轉したる如き心地して又別種の味を感ずるものあり、文の妙と事の奇なるは流石に七年前文界の流行兒として聲名ありし其人の面影を更に大陸的にし更らに一段活達せしめたるものあるがごとし。定價一圓十錢博文館發行。



和歌山の風俗

附和歌の浦の勝景

すみれ女

帝國商業の中心點、一名また呼吸器病の源泉地とも申されますほど、幾千幾百と數へられぬ煙突から、日夜吐き出す黒煙は、高く空にまひ上りて、いつも曇つたお天氣の樣、誰でも一種不快の念を起しますその煙の都を跡にし、汽笛一聲難波驛を發しますれば、幾分もたゝぬ間に、景色は忽ち展開して、松青く砂白き海岸に出づるで御座いませう此南海鐵道線路を、更に南へ〳〵と二時間走り、永いトンネルを出た時には、はるかに天主閣が見えまして、やがて和歌山市驛に着します。こゝが即ちむかしの五十五萬五千石、御三家の一として、嘗て世に時めきし紀州藩の城下和歌山市なのであります。

△地勢と氣候

吉野川の末流紀の川は市の北部を流れて多くの灌漑や水運の便を與へ、水清き河中にすむ鮎は中々美味で御座います東は遠く紀州富士を望み、其間は悉く肥えたる田畑で、作物よくみのります南の方一里ゆけば有名なる和歌浦に接し、西は僅の村落をへだてゝ太平洋の一部と面してあります。

氣候は冬だからとて雪のつもることは二三回、それも大抵五寸位で日があたれば直に消えてしまひます程に暖く、夏は海岸ですからその作用でとてもたえられぬ程暑いと申すことは御座いませぬまづ四季共に温和なる土地で御座います。

△言語

言語は一種獨特の和歌山詞なるものがあつて、他國の人には中々別りにくう御座いますが、其純粹の和歌山詞を使用する人は今は極めて僅かで、學校の生徒などは大抵東京辯の出來損ひのやうな、詞を使用して居ますから、別段九州あたりのやうに不自由することは御座いませぬ。大阪に近い所だから大阪詞によく似て居るだらうと思ひますがどうして少しも似ては居りませぬ。東京であのね、どうしてね、といひ大阪であのな、どうしてな、と申す所當地ではあのう、どうしてのうといふ之は尤も上等の詞です。又居ると在るとの別ちは少しもなく、物でも雜品でもこゝに居りましたと申ます。併し奥州などの人のやうに妙な發音は致しませぬ比較的正しい音を出しますから、曾て他國から來られた學校の先生が、講義の時に壓制經驗と申された處、生徒にアツセーケートケンではなくアツセイ、ケイケンではありませぬかときも不思議さうに申したので、此種の癖のある毎に先生は非常に苦しまれたと申すことです。一寸方言を申ますれば

一冗談	おどけ
一何々頂戴	何々いたあ
一下さい	いたあかして
一小僧さん	まいがめさん
一御免なさい	どいされませ
一今晩は	おしまい
一だしちやこ	いりなご
一歩む	しやるく
一始に	はなに
一高下駄	ぼつくり
一落ちる	こかりおちる
一難有う	おゝきありがつと
一お暑う御座いますね	おあつをりますのし
一さうですね	さうやのし
一お出になりましたか	お出でたかのし
一ハイまゐりました	ハイゐたのよし

先づ此位にして置きませう。

△風俗人情

其昔は紀州武士と世にうたはれて馬鹿でも何でも士族でさへあれば中々いばつたさうですが、維新の改革と共に是等士族の子弟も安閑と遊んで居る譯にもゆかずなり、或は學藝に志し或は商業に從事し、今は士族も平民も少しも別らなくなりました。併し學に志した人は成功して居りますが商業に從事した人は大抵失敗で、やはり當地の主なる實業家は士族の子弟ではありませぬ。何故か當地は兵亂も大火もなき割合に



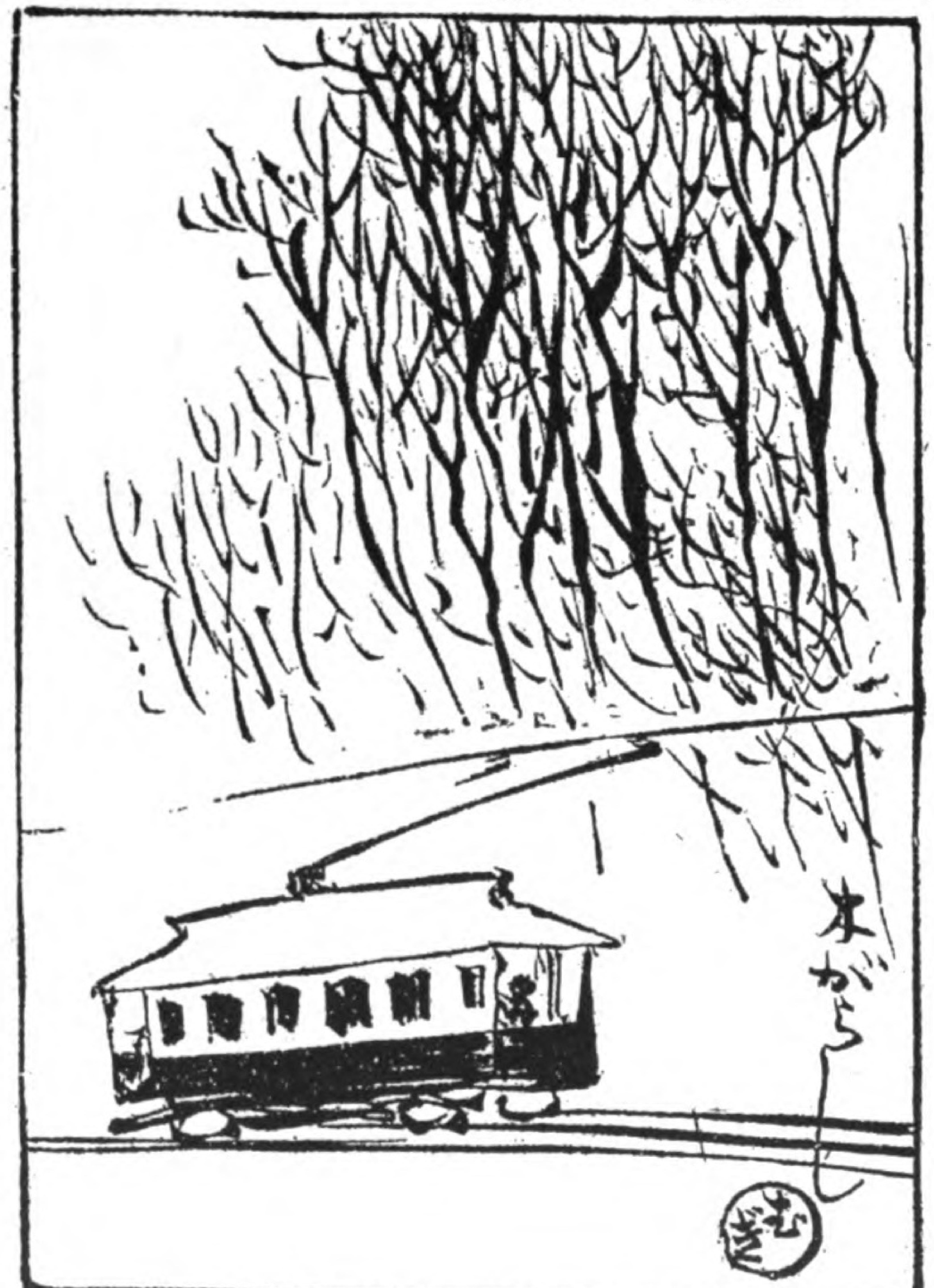
昔の屋敷の殘つたのは少う御座います。

當地の人は一般に學問を好み、尚武の氣象に富み、大抵義務教育丈では止めぬやうです。借金してゞも中學校丈は入れてやりたいといひ、子供もまたお嫁入の支度はいらないから高等女學校丈は是非卒業さしてほしいと申風です。だから志願者が多くよほど成績もよく體格もよくなければ土地の學校には入られないさうです、ずつと前のことですが曾て高等小學卒業前の生徒に向て、先生は卒業後の目的を尋ねました處一生徒は紙屑買になると申たさうです、之は全く紙屑

屋の子供であつたるうですが、屑屋のやうな者でもやはり高等小學を卒業させたのでせう、だから先輩としては多くの學者や、名士、陸海の將校達、隨分澤山御座います、其中でも故陸奥宗光、川口武定、節木翠照・外松繁太郎の諸氏などは主なる方で御座いませう、是等多くの先輩諸氏が打よりまして、或る會を組織し成績がよくて學資のない人に貸費生として勉強させる機關もあるさうで御座います、それ故當地では家計があまり豐でない割合に、高等の學校を卒へ、立派な地位にある人も多う御座います、併し之は上等の部の風俗で、更に眼を轉じて下層社會を見ましたならば、和歌山の價値も半落ちはてるでせう、先づ下層社會の人の心にして着實に働くといふ考は御座いません、彼等の第一の目的は何と尋ねますれば、すぐ娘の成長と答へるでせう、あゝ何故にかく娘の成長をたのしみまつでせうか、尤も世の親たるもの子の成長をまつのに何の不思議も御座いませぬが、是等の人はそのような淸い考をもつのではありません、舊の誰さんは實に甲斐性者だ、僅か十八歳位で毎月親に十圓づゝもくれるむかへの誰は今度何百圓に買はれて親はあのような安樂をして居ると、さも羨しさうに話します、又聞かされる人も普通の事としてあまりつまはじきもしませぬ、はては出精奉公などゝ自分で勝手な名をつけて居ますから、かの大阪の松島などは紀州女が六分まであると申されましても、どうも致し方は御座いませぬ、さして榮えぬ港といふでもなく、古い都會といふでもないのに、どうしてかくもいまはしい風習の存するのでせうか、實に呆れざるを得ませぬ。されば年頃の娘で下女奉公など着實に務める者は逸樂的でないとは申されませぬが、まづないと申てもよい位です、容貌のいゝ者は前申たようですし、みにくい者は紡績の職工となつて月に七八圓から十三四圓もまうけます、其紡績でも今少し風儀に注意して夜學校のやうなものでもたてゝかく修身の談のはしでも聞かせてやつたならば、少しは人たるの道も別るでせうが、そんな設備もないらしく、朝夕に通ふ道すがらの談を聞いた丈でも、ぞつと致します。

△名所舊蹟

虎伏山のいたゞきに高く、そびゆる天主閣に上りますれば、名所も舊蹟も皆一望の中に見られます、東も西も南も北も見渡す限りひろ〲と足もとがゆらゆらするばかり、遠く海原を眺めます心地は何とも申されませぬ、こゝも十年以前迄は陸軍省の所屬地で、入口の門は堅くとざされて、草ぼう〲と生ひ茂り、夕刻など此近邊を通るを恐ろしがりました位でしたが、其後公園として開放され、今は二錢さへ出せば誰でも天主閣に上れるようになりました。



天妃山と申ます丘は、殆んど全部岩石で組立られ、岡公園として有名で御座います、このやうな大きな岩がどうして山の上に上つたかと誰でも不思議がりますが、こゝはずつと昔し海の中であつたと申ことです、大阪の公園などゝ比べましたならば幾倍かほこるに足るだらうと存じます、さぎの森御坊は昔し顯如上人が織田信長の爲にせめられた時、籠城せられたとて名高う御座います

南へ一里まゐりますとあの名高い和歌の浦で御座います、こゝは今更申さずとも既に皆様御承知だらうと存じますが、併し和歌浦は只干潮の時に御覧になつた丈では少しも價値は御座いません、ほんとの景色は滿潮の時にあるので、殊に夏の夕暮など新らしい魚で夕食をすませ、ゆあみして輕きゆかたの袂を吹く風になぶらせつゝ、潮のみてる不老橋あたり散歩しますれば、實に身は仙境にある心地が致します、又多くの見物の方は只平地をぐる〳〵まはつて歸られますが、眞の和歌浦全體の景色は玉津島神社の後に高くそびゆる朧山にのぼつて見なければなりませぬ、此山に上りますと和歌浦一面丁度ゑのやうで、平地で見るのとはすつかり別で御座います、本年からは電車がしかれまして市驛からたえず往復して居りますから、よほど便利になりました。對岸には有名なる紀三井寺が御座います。

△寄　習

十日ゑびすと申せば大阪などでもずゐ分にぎはしう御座いますが、當地にも市の北部にゑびす様が御座いまして、一月十日には中々のにぎはひです、又其時にはキッキョと稱して笹の先に俵だのこばんだの小い形にこさへたものをつるしましたのと、のしあめと稱して丁度のし形にあめを作りおすまうの時の柱のやうに白と赤できれいにそめたものとを賣りますが、これはおまゐりの歸りには是非買はねばならぬ習慣なので御座います、當地では殊に迄のし〳〵と申ますから、此のしあめにも亦何かかやうな關係があるのかもしれませぬがよくは別りませぬ、又嫁様を貰ひました初めての十日ゑびすにはおかたあめとて丁度くさしかけた木のやうに中のかす〳〵した白いあめ、巾は一寸長五六寸位のものを此日の朝町の子供にやらねばなりませぬ、だから十日ゑびすの前になると今年はどことどことへあめを貰ひにゆくのだと子供はたのしんでまつて居ります、尤も良家の子供は其列には加はりませぬが中等以下の家では子供ばかりでなく親までもさわぎ出します、さうして其時の朝は。

アーメクレーアメクレ
アーメクレナハシンボテイエタテ、
ホーラクーチヨデピンポセー

と申して押しかけて來ますそれ故大抵の家では五百とか六百とかを作つて置きます尤も之は嫁の里から持つてくるので又別に同じ種類の形の大きな物を作りお重に入れて花嫁の土產として親戚にくばるのであります。

又五月の十七日には和歌祭とて和歌浦で權現様のお祭りがあつて見事な渡御式が御座いますもちつきおぞり、だとか、さゝらすりだとか、ほろまはしだとか、なぎなたふりだとか百面だとかと色々さま〴〵の姿をしてそれ〴〵藝を演じつゝ渡るので御座います

ずつと昔徳川時代には何しろ家康公のお祭ですから、いつも殿様が御上覽になつて中々大層なお祭であつたさうですが、之も明治になつてからすたりかけて居ましたのを近頃また再興してぼつ〴〵と昔のおもかげを思ふようになりました、和歌山市では此日小學校は臨時休業いたします



△生活程度

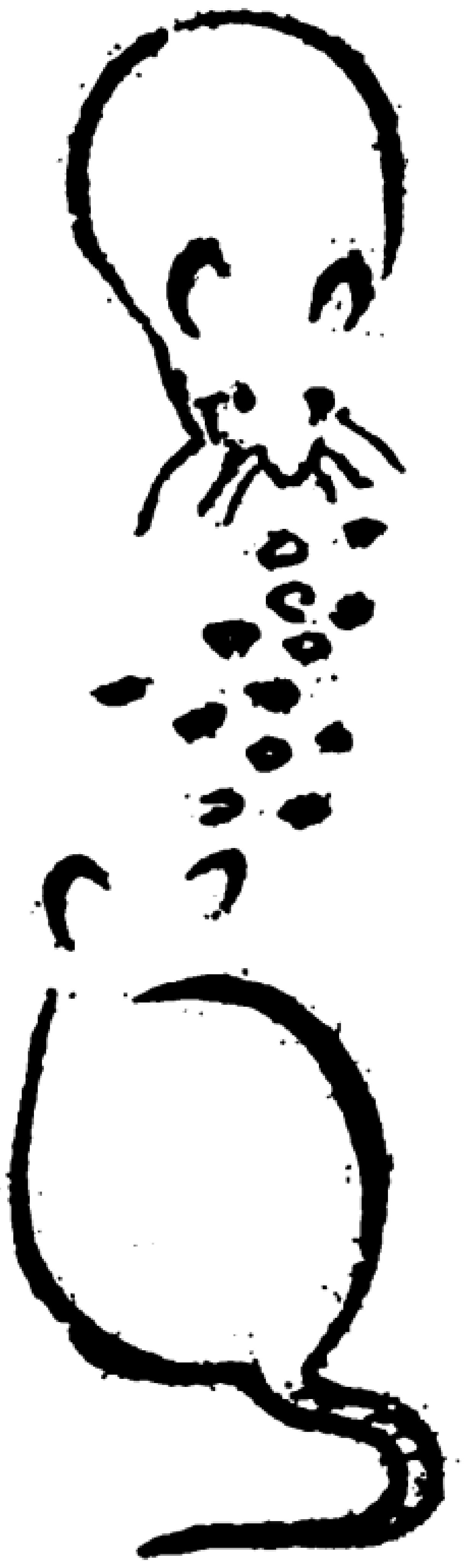
西は海に面し三方豐肥なる田畑ですから新鮮なる魚も新らしき野菜も心のまゝに得られます且氣候温和で空氣清く水潔らかで生活するには誠に申分のない土地で御座います、十年前まではまだ鐵道が出來

ず僅かに商船會社の船によりて大阪と交通致して居りましたから、物價も誠にお安く此南海の一孤市は病氣の保養地として實によろしく、且は赴任せられた官吏の方まで永住の目的をたてられる方も多う御座いましたが、其後南海鐵道の全通となつて僅か二時間で大阪にゆけるようになり、公園を設け、學校を增築し、電話がかゝり、電燈が出來、電車迄開通して今は殆ど昔日のおもかげがなくなりました、かく十年の間に長足の進歩發達をとげました市は、今迄のように物價も安らず魚など澤山とれましても汽車でどし／＼つみ出してしまひますから、今日では大阪とあまり價は變りませぬ、家賃なども比較的高う御座います、併し其代り借家人は戶數割も戶別割もいりませぬ、皆家屋稅の內に含まれてますから、諸土地のやうに家賃は易いけれど、戶數割とか何とか稱へて殆ど家賃と同額のもの幾回も出すには及びませぬ、物價とても高いと申ましてもやはりもとは田舍ですもの、東京や大阪のやうな事はありませぬ、現時米上等一圓六十五錢酒は一升六十錢より五十錢四十錢と申す所です。

△物產と宗敎

今迄は綿フランネルを第一に記しましたが之も近頃は京都や其他にやゝその聲價をうばゝれ、一手に製造した昔のような事はありませぬ、何と申ましても蜜柑は紀州は本場でせうが、之は十里ばかり南の有田郡から主に出るので御座います、當地の產はたしかに他地方にほこる價はあらうと思ひます。

眞宗は中々盛で、其內でも西本願寺別院などは日每に參詣の人はたえませぬ、クリスト敎も御座いますが、まだ／＼當地では勢力はありませぬ、要するに和歌山市は如何なる種類の人にまれ功なり名とげて後老後安樂なる生活をいとなむには尤も適當な土地だらうと存じます。



こゝろの日記

旅館の娘

コバルト色の空高う晴れてゐるけれど、颯とふく風に頬を打たれては秋のあはれがしみ〴〵と身にしむ。内庭の柘榴はルビーの玉を集めた様に美しい、學校から妹が歸つたらちぎつて遣らう、でもあれが猫王山の山奥で人の血汐を根に注いで培つた吉祥果と聞いては慄とする。お祖父さまの念入りの唐鉢の菊は今五日したら御自慢の鼻が動くのだらう――私は畑のを思ひきつて鋏を入れて玄關の大花瓶に投げざしに挿す、露を含んだ花のしろかね、葉のみどり、勿體ない程尊い、どうしても菊は白菊に限ると私は思ふた。さう〳〵机の上にも一輪さゝう。

朝の間のひつそりした事――、幸ひとお琴出して、「いざさらば空行く雁にことゝはむ、戀しき方へ玉章を送るよすがもありやなしや」よりも、「今はつてだに朧夜の月日ばかりはめぐりきて」の殘月の方がすき。朝明貧乏と云はれるけれど、繁忙のつかれを癒すには斯様して心靜かにひとり樂しむより道はない、之も私の爲には清興である。此間惜しい仲秋無月のあくる宵に、螢の様に電燈の火を後にさけて、十六夜の月を池の水にうつした離室で、矢張りひとり月あかりで、千鳥の曲を彈いた折の嬉しかつた事、白う光つた緣に寫つた庭の木の葉の、かすかな風にゆられて動いて見えたのは、いまだに目にちらついて居る。あの夜は、松の木にさげた金網籠の鈴蟲がよう啼いた様だつた。

おゝかすかに菊の香りがする。机の前に坐つて昨夜屆いた小夜さんの手紙を讀む、いくら家庭が面白くないにもせよ、無理に好んであんな田舍の白川校なんか

へ勤めずともすんだらうに?、ようまあ奮發が出來たもの、でも淋しいだらう、「思ふまいと思ふ過去は生憎目前にちらつき候、心の奥から思ふだけ云ひ、からだの限り狂じ候はゞ、定めて愉快ならむと覺え候、不完全なる小夜には人のすることなすこと不平の種に候」とある。多くの人にもまれてはあの勝氣が却て邪魔するのだらう、不完全と自分をさとつたらば、立派な教育ある身だもの、完全に近づけて不用な不平は起さぬともよからうに、なぜ小夜さんはひねくれて呉れたらうか、でも單純な學校教育を受けて浪風荒い社會につき出されては、誰しも人生に苦悶する、私は人一倍反抗の片意地だから、凡ての競爭心を制して超然と澄してゐたので、蔭では云ふに云はれぬ程過去の出來事を追懷して、悔恨懊惱の涙を流したり、未來の事を夢想してあこがれの笑を漏したりした。思ふことの千分の一も成らずに、斯樣して自家で營業からお客樣にお愛想申せば、立派な紳士の體面にも愧ぢずに、つまらぬ饒談を云ふ人もある。理非曲直の區別のわからぬ輩ある雇人を指揮しては、腹が立つやら悲しいやら、何や彼や思ひ合せてあゝつまらぬ、厭だ、殘念だと思はぬ日は無かつたが、社會は一條道のものではない、考へが淺い、心が弱いと自分をしかつて見れば、我が身を大きう、世を狹う見てゐる事も思ひ當つて、丁度迯の雲が晴れて自覺の道のいさゝか知れた樣な氣がして、淸濁併せ呑むと云ふ意味がうなづかれるふしもあつた。

正直な單純な頭で複雜な社會を考へれば、丁度ごみ、だめの内に這入り込んだ樣で、正直なだけ悲憤の念がはげしく起る。今小夜さんが不平に悶えてゐられるのは、あの秀いでた才と學と直な心とが强い刺戟を與へて居るのであらう、將に美しう自覺の機が來て、立派な人格が出來るのだらう、人は場合によつてはひねくれるのも藥かも知れぬ。とえらさうな事ばかし考へてうら愧かしう思ふてゐる所へ、「おむらさま、野菜屋が參りました」と千鶴に呼ばれて勝手へ立つ。

今日は珍らしうも、バナナを澤山持つて來て居る、當地では一ポンド十二錢位で上等のが得られるが、東

京では左様はゆかぬさうな、御世話になつた村田未亡人樣と、棚橋先生の學校の三好先生とに贈り度いけれど、幸便が全くないので折角の思も水泡になつてしまふ。お客用のを五斤だけ買つて置く、頭の黑い鼠がさぞ引いて行くだらう。

七時九分のスタンプ附の在京靜さんの消息が着いた。國元から學費の支給も絶えて都合もつかず學校も退校して、或る知名の畫伯の所で世話になつて勉強して居ると、さうして日光行の繪を書いたり、コマ繪を書いたりで少しも暇が無い上につまらぬ繪ばかしで眞の研究が出來ぬので困ると、あんな天才を其まゝ朽ちさせるのは惜しい、私が何も彼も家事を一切任せられてゐるなら、毎月いくらかの補助は出來るのだけれど、まだ親がかりだから仕方がない。だが小遣のたまりが少々あるから、繪具の料に明日爲替に組まう。

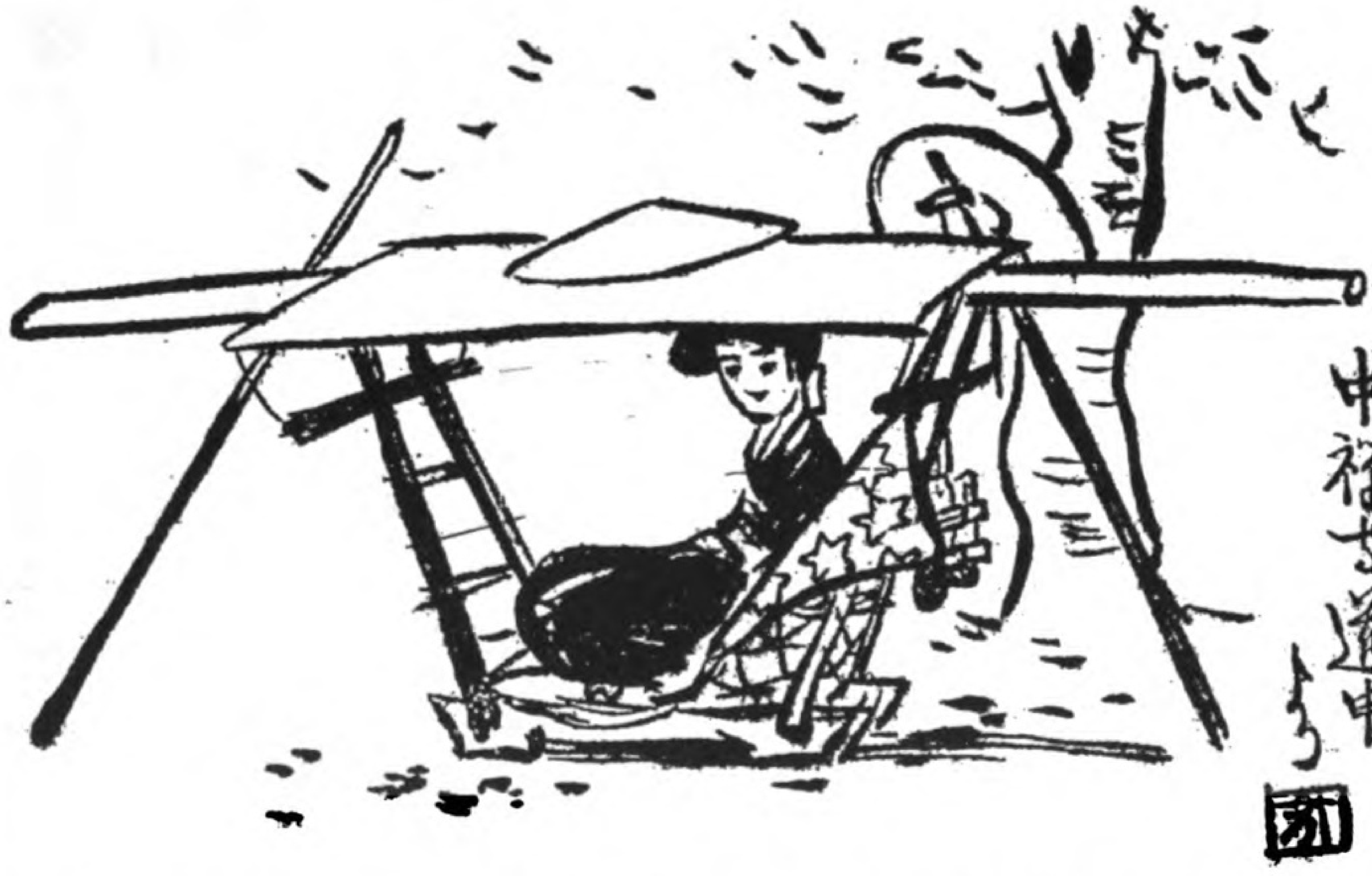


同窓會からも案内狀が來た、ともかく出席と決した。卒業して見れば母校のなつかしさは一しほである、斯樣して自家に在つては事を處理するのに導いて呉れる人もなく、唯自分の良心の敎へに從ふばかしで間違つてゐる事も多いと思ふ、春秋の會に出席すれば情厚い諸先生は叮嚀に色々と敎訓して下さる、着物がどうの、帶がどうのと云ふ

違はない。行く度ごとに大きくなつて居る運動場の隅のサボテンにも逢つて來よう。三年生の時、すまさんや、くにさんやと一緒に植ゑた事を思ふと、苦もなう面白がつたあの時分がなつかしい。すまさんはお母様となつて、くにさんは去年の今頃、西窓に淋しう落ちた梧桐と共に黄泉の客となつた。やさしかつた山路先生もまだ三十にもならずに痛ましい結核で逝去遊ばした。

先生で思ひ出した。二階の六號室に泊つてる人は英國人と共同で鑛山事業に着手するのだと。大きい風を吹かせてゐるが、つい半年前までは學校の書記だつたとか、髪を綺麗に分けてチックで光らせた鼻の高い背せぎすのいやに氣取つた才子風の男だ。女中代りに時折膳をはこんだり茶を出したりすると變な言を云ふ、昨日の晝だつた「女學校の○○の先生を知つてゐますか白翠出身の才女を」と聞かれたので、「ようは存じませぬが御姓名は存じて居ります」と答へると、ニヤッと笑つて、「先生は僕と關係があるんです」なんて聞くも汚はしい言を憚りもなく云ふ、私は決して吃驚はせず、其亂暴な言葉を打ち消した。常識を以て考へればわかる話しだもの、成瀬校長は教壇に立つては熱心のあまり卒倒なさるゝ位だと聞いた、左樣云ふ所を卒業なさつて、其上クリスチャンでよく寮室で天國とか神とかおつしやつて、生徒をお諭しなさるさうな、それに何の、指一本でもさゝれる樣なことがと確心してゐる、私のように男女の出入の繁しい所に居ればだけれど、先生方にそんな噂があつて堪るものかと却てをかしかつた。「そんなに疑ふなら證據を見せる」と水莖の跡うるはしい女文字の手紙數通をつき出した。がつかりしてもう手に取る勇氣もなく、しばしは言葉も出ず默してしまつたが、「左樣で勿れと思ひ直して讀んで見ると、「昨日は白翠園で失禮した」とか何とか彼とか書いてある、校用以外に用のあらう筈の無い先生が、何で白翠園の寂しい場所でお會ひなさるのだらうか、それだけでも充分誤解される價値はあるのに、「さあどうですまだ疑ひますか」と云はれた時には涙が出た「ネ

ーもう唯の身では無いのです、だから國へ歸りましたよ、だから結婚し樣と云へば僕の妻子のあるのを知つて厭だと云ひますから、それなら立派に離別してと云つても、今になつて私には許婚の人があるからと、面白いでせう」と笑つてゐる、聞きもせねば答もせずに直ぐ膳を持つて下へくだつた。火のなき所に烟は立たずと聞くけれど、でも「○○先生は病氣でお國へお歸りになつた、先生はよう病氣する方」と妹が云つたのが妙に氣にかゝる。が私は飽くまでも非認する、しかし萬々一事實であるとすれば、今の女性が無暗に高い理想を持つてゐると、世



はさけぶけれども、理想の低いのも考へものだ、イヤ却て恐ろしい、今日位厭な話を聞かされた日はない、思ひ出してはつまらぬ想像をめぐらして、猶馬鹿を見る、それよりも、縫いかけた妹の天長節着の紋附を一生懸命に仕立上て、耳のけがれをすつかり洗ふて忘れてしまはう。

水野領事夫人の交際ぶり

在米實業團婦人部の消息

これは「デーリーニユース」の記者が水野夫人に會ふた對面の記事である

日本實業家の團體と一緒に廻つて當地（ミネアポリス）へ來られた水野總領事の夫人を一寸茲に御紹介致しませう。

記者（ゼ、デーリーニユース記者）は本日（九月二十日）ウエストホテルに於て夫人に逢ひました。身には鼠糸織のくすんだ着物をつけ、上に鼠、黒、金糸などで刺繍をした帶を締めて繪の如うに美しく着飾り、其の長く垂れた袖に淡紅色の裏を心持ち外に現はして挨拶されたところは、上品にも又異様に見えました。履物は之れも日本風の寛るき草履で、其の黒々とした髪毛は、梳いてひさしに結ばれてあります。

斯んな風姿をされた小柄な婦人ですから、記者は夫人から十一歳の令息と四歳に六歳の二人の令嬢の母親であると聞く迄は、全く娘さんだとばかり思つて居ました。

夫人は亞米利加には既う一年半程も居られるのだらうで、破格乍らも英語は明白に語られ、美しく發音されるから、談話は容易く聽き取る事ができます。尤も「L」と「R」との遣ひ方は、どうも旨くはゆかない様でした。

「私は紐育の邸宅に居る時には亞米利加の服裝をして居ります、誠に Prockticker ですから……。」

記者は其の Prockticker といふ語が解せられないので、けゞんな顏をして居りますと、夫人は Practical（實用的）と綴つて聞かせて、又言葉を續けられた。

「……實に實用的です、着るにも出入にも非常に便利ですから……。」

夫人は靴を穿く事は、好きだけれども、帽子は被るのが面倒で、餘り好まないと言つて居られます。

又椅子を用ゐる事に就ては、以前は矢張り日本で見る様に床の上に坐らなければ工合が惡るかつたさうで

すけれども、今はもう慣れてしまつて、却つて此の方がよいと言つて居られる。そして令嬢達迄も只今では椅子を喜んで用ゐられるといふ事です。

「亞米利加人に就て貴女は如何なお考をお持ちになりますか」と尋ねると、夫人は、

「私の見ます處では、御國の方は大層禮儀正しくて親切でございます、尤も風俗は日本などゝは全然異つて居ります」と言ひつゝ、一寸襟を正して、色々異つた點を話された。

更に「亞米利加人の生活は非常に多忙に見えませぬか」と尋ねますと、

「否、日本にも隨分忙はしい所が御座います」と言はれました。

夫人は京都で教育を受けたと言はれたから、

「それではお子樣方を矢張り日本で御教育なさいますか、それとも亞米利加でなさいますか」と尋ねると、

夫人は直ちに、

「ハイ、日本で……、日本の紳士とするには其の方が宜しうございます」と答へられたが、又語を繼いで、

「けれども亞米利加の學校は大層結構で御座いますね」と、却々おじやうず在らつしる。

夫人はそれより亞米利加の料理や其の飾つた工合、或は其の仕方などの非常に氣に入つた事、又日本の婦人は慣れないからどうも上手にゆかないといふ事、其他色々趣味ある事を話された。

夫人は十分それを英語で話す事は出來なんだが、能く分かる世界共通の心の用語でよどみなく述べられたから、意味は明かでした。

又「女事務員といふ者は貴女には不思議に見えませぬか、或は私共が日本に於ては女子は世間へ出ては些とも仕事をして居ないものと思ふてゐるのが誤りでせうか」と尋ねますと、夫人は

「いゝえ、日本でも娘達が郵便局にも、電話交換局にも、鐵道の出札係にも、其の外色々の所に働いて居りますので、御國と全く同じで御座います」云々。

同行の六人の日本婦人は、一樣に自國の服裝をして同じホテルに居りましたが、孰れも非常に樂しさうに見えました。



女學校評判記　八

府立 第三高等女學校

河岡潮風

△士族の多い學校

仰ぐ千代田の　宮居近く
靈の跡しく　麻布の丘に
櫻ひめ松　榮ゆる園生
眞金白玉　よそへる文の屋
　慕ひて集へる　われ等の友よ
色香は匂へる　さくらに類ひ
みさをは緑の　松にも競へ
　松と櫻よ　まことの栞
眞金と鍛へて　家をも守り
玉とも磨きて　世をも照せ
玉よまがねよ　望みの光
　光よ譽よ　吾等の命ぞ

右は府立第三高等女學校の校歌であつて、千家男爵の作歌と稱せらるゝもの、この校の懐抱する主義主張は一片の歌に盛れてゐるのだ。

場所は麻布區日ヶ窪町、電車からは少し遠いが高燥な地六千餘坪を占めて、甍をならぶる數棟の木造洋館がそれで或點に於てはお茶の水、虎の門などゝならべられるのである。

歌の中に「櫻、ひめ松」といひ「眞金、白玉」とあるは即ち本校の理想なので、櫻は色ゆかしくて散りやすいもの。松は冴々しくないが操正しきもの。眞金はひくつけくとも大丈夫で、白玉は脆いが透明である。この四種の長所を採つて、身に體したら、小町も顔色を失ひ、常盤も恥ぢ、板額凹み、清少納言も三舍を避けるであらう。本校の主義とする處はざつとかうである。

現校長小林氏は開校以來引き續き校務を見てゐる人で生徒の信頼も厚いさうだ。何しろ場所が場所であるか

ら、學生の父兄は、文官、武官、醫師、實業家などが多く、族籍別にすると、全校六百のうちで士族、平民殆んど相半ばし、年度によつては士族の方が多い事もあるさうな。第一や第二と異る點は、主にこれらの事情を中心として生ずるのである。縣別にすると府下及近縣、及校長の郷國たる長野縣が多く區別にすると麻布、芝、赤坂、麹町などが優勢ださうな。入學志望者は年々募集人員の二倍に上るといふ。

教授の方針は、「習ふよりは慣はすし」と云ふのが目的で、地理にしろ、歴史にしろ、若干進めば進んだゞけの知識を應用さして色々の成績品を作らす。生徒に點數の競爭をさすのは禁物だが、實物の優劣につき、自分で發憤の念をおこす樣に持らかけてゆく事は惡くないとて、特別に成績品陳列所が設けてある。なほ別室に進歩成績陳列所があつて、兎にも角にもその當人に取つて從前の作物よりすぐれてゐたら揭げてやつて、奬勵するなどの工夫も凝してある。理科の標本室などもなか〳〵整頓してゐて、しかも三分の一は同校の製作に成ると云ふ事。參觀人の目を歡ばすのは市内の三校の内、こゝの右に出づるはない。なほ、ボールドが漆塗で、雑巾で拭く樣になつてゐる事や、机に大小がこしらへてある事。椅子のこしかける所が、前方より後方が心もち低くなつてゐて、小さからぬ尻も乘りがよい樣にしてある事など詳細は省くとしても、項目だけでもあげておかずばなるまい。

△級長なんか居らぬ

生徒の氣質は概して云へば活潑な樣である。學校の方でも放課時間は戸外運動を奬勵してゐるから、鐘が鳴るが早いか。三々五々、手を携へて、小さな靴の足どり輕く、グラウンドに飛むで行く。運動圓木の搖れ搖れするのを危ふく渡る少女もあり。ブランコはどれもどれも輕からぬ身體を載せて働いてゐる。丘へ馳けて上るもの。池の緋鯉をのぞくもの。花壇に蝶を追ふもの。紫、紅、青、黄、あひ亂れて夫れは〳〵御旺だ。なほ一組が一週に一時間づゝ放課後戸外遊戲をやる時

など、バスケツトボールも出れば、自分達の頭より大きいフートボールも飛び出す。キヤツキヤと騒いで跳ねて、額の汗を手の甲でなすりながら。

『あゝ私汗かいてよ』

と。行動ざつとかくの如し。

ハイカラなは、校門を入つた取附の下駄棚の横にある告示板で、お互に利用してよい事になつてゐる。いつか退校時刻の頃にこんな字が記してあつた。

はる子おさきに

五六寸左に、

近藤あい子様
大澤靜子様　お先へ

落花　○○子



一寸利のきいたやり方ではないか。

此校の主義として、自分の事を自分で始末をつけると規定されてゐるから、生徒には級長なんぞ不用なのである。その代り一週交代の約で、當番といふものを四人づゝ定め、當番が責任を負ふて、一級の整理をする。放課後に殘つて、教室を掃いたり拭いたりするのである。紅顏の少女が、ほつれ髮かき上げながら、身の丈より長いブルームを縦横に操つて、お掃除に餘念なき様の如何に心地よいか窓にチヨンと腰かけて朱唇をゆがめて、頻りに硝子窓を拭ふ姿の如何に熱心さうであるか。は、實況を見ぬものには想像がつくまい。ハイカラにも色々種類があつて目茶々々にお化粧するのもあるし、テキパキ用を足す

ばかりか、身だしなみのよいのもある。一概に云つたものではないかとも思ふ。何は兎もあれ、本校はよく働き、よく遊ぶ積極主義に近いのである。

（尤もズット前には次の樣な事もあつたといふ。「史筆は枉ぐべからず」の規定に從ひ、好ましくないが一寸書いておく。）

△レスビアン、ラブ

鴨長明の方丈記の云ひ草ではないが「行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず」學校の生徒だつて同じ事だ。落第なんかしてウロついてゐなければ、心太の押し出し流儀で以て、順々に去つてゆく。だからもう時効にかゝつたとしてオメについて述べさしてもらう。すでに御承知の方もあるだらうが、世には女性同志の戀と云ふ事がないでもない。けれども從來我國では、特別の名はなかつた。西洋では神武天皇御在世の頃の女詩人、サッフォーが遺したよりして、ソフフヒズム、又はレスビアン、ラブ（レスボスの愛）などの語である。オメとは是に當る言葉だ。昨年一月九日發行の日本新聞は言ふ。

「此事實は女學校の寄宿舍から始まつたことは確かでオメと云ふ事を始めた名譽（？）が麻布なる府立第三高等女學校に歸すべきことも確かである。驚くべき流行の結果として、他日日本の辭書に、オメと云ふ新語が加へられたとき該女學校學生の名は長へに傳はるであらう云々」

越えて十一日にはアービングの「ブロークン、ハート」の一句で「戀は青春のオーナメントである」と云ふよりして、オメの語が成り立つたのだと書いてゐる。何は兎もあれ「下の級の者と特別に仲よく仕合ふ」風習は、一としきり、本校に行はれたのであつた。

「病ひを知れば癒るに近し」

もうけふ日では此の風も絶滅した事であらうと思ひたい昔はかゝる習ひもありけり、とのみしるしておく。早や人妻になりし出身者の中にはこの文を見て、思ひ出にたへぬ人もあるであらう！

△女心の好實例？

女學校の頃はどこでも四月に初つて三月に終かゝるのである。本校では三月二十四日卒業生送別の式をする。

　これが中學などであつて御覧うじ、送る者も送らるゝ者も、儀式一遍で、鼻くそほせくりつゝ校長の訓辭を聞いてゐる所であるが、流石にやさしい女性たちは、如何にも勿體よつた送別式をあげるのである。



御なつかしき師の君。へだてなう睦み交り給ひし友君たちの愛。こよなううれしけれど。いざさらばわが學び舍よ。と云ふ風な惜緒纏綿とした文字を縦横に綴り込りだる送別の辭、さては答辭はよみ上げられるのである。感に迫つては明眸に露を宿すもあんめり。イヤなか〳〵の事である。

しかも三年と經ち。五年と過ぎればいかに、校友會に寄り來るは多くは得意の人にして、失意の人、肩はばせまき人は、いつとなく遠ざかりて仕舞ふ。是を中學卒業生の、當時冷淡なる如くして、後々までも永續して、成功せると失敗せるとに論なく集ふに較べればいかに。こゝが男心と女心の強さ弱さではあるまいか？

統計によれば、卒業生は九割迄が所謂、良妻賢母となるので、五分が更に高等教育に進み、五分は自活の道を求めるさうな。嫁ぐ人の先方は大抵御自分と似つたり、よつたり、軍人、學士、醫師、農商工と、いろいろ、さまざま校友會報の會員消息にあらはれるのである。

▲中村桂子さん。……餘暇には養鷄を遊ばさるゝとか。何と趣味深き御生活ではございませぬか。

▲小浦トキさん（舊姓永谷）當五月お產の筈。

▲和泉飲さん……相變らず元氣で大層肥られ、電車で狹い席をゆづられた時には閉口するとの御話。

などゝ云ふ調子だ。さうかと思へば壯俳的口調で、只一人この世の消息を報道する事が出來ない、……植村八重さんへ……唯今は何所に……唯今はどこへ。仰いで呼べども天應ぜず、伏して呼べども地答へず。若し夫れ君の在所を知らんと欲せば、本芝のあたり、靑春おわす所、松風蕭々、鬼哭啾々の裡を訪へ。

などゝ名文の弔詞もある！

△梅櫻桃李の四校

虎と豚とは鬪ふ事はない。鶴と鷄とは較べものにならぬ、虎は龍と相爭つて風雲生じ、鶴は孔雀を得て優劣を品評されべきものだ。イザコザはつねに同じ様な二者の間におこる。本校の目ざすのは虎の門女學館であるさうな。

成程第一の近所には宗敎の學校が一二ある。けれども流違ひだ。山脇は本校で溢れた生徒が行くと云はれてゐる。實踐は遠すぎて話にならぬ。似たりよつたりの學校は虎の門ばかりである。この氣、發しては種々の陰口となる！虎の門は曰く

「こちらなんかは第一の様に燒芋屋のお孃樣なんかき

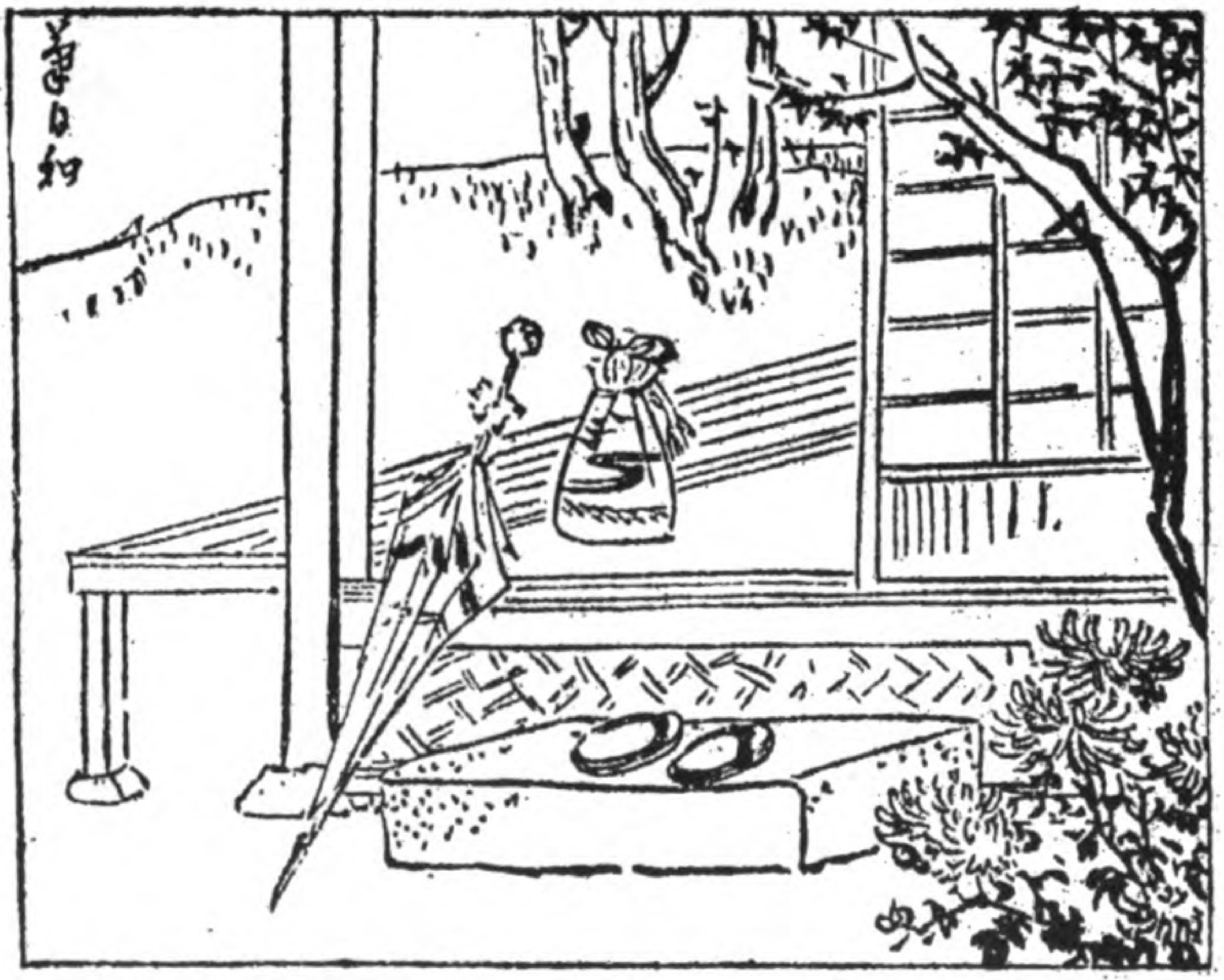
てやしないことよ」

負けぬ氣になつて第一は曰く、

「よござんす。けれどもそちらは私立でお氣の毒さまね」

喧嘩は相方に理があり、而して極のあるもの。今こゝに俄かにどちらの肩も持つわけに行かぬが、內々この反目はすさまじいものであるといふ事だけは、明白に書いておく。

大體、こゝの校長の小林氏は敎育者としては有數の人であるが、まだ年も比較的若く、頗る自由、自治を奬勵する人だ。生徒を愛するの念深いが爲、時あつて禍を爲す事ありと云へども、これが爲めに、どれだけ快活にして端正な生徒を養成してゐるか知れぬ。もし第一高女が良妻賢母主義で、女大學的であり第二高女が實質主義世話女房的であると假りに斷定すれば、本校は二十世紀的活動婦人を養成すると云つてよい。第四高女は創設、日未だ淺く未知數であるがこれにも早晩主義が出來やう。同じ府下に生ひ立つこの姉妹が櫻桃梅梨、さま〴〵に咲亂るるは面白い現象であるどれにケチのつけ樣もなからう。皆な健全なる發達を囑望にたへぬ次第である



東京府女子師範學校
府立第二高等女學校

△十月十四日の朝

東京府立第二高等女學校は小石川區竹早町、傳通院電車の終點から三町と隔つて居らぬ。三十三年二月東京府女子師範學校を設くるにあたつて併置されたものである。是と彼とは姉妹――いや二タ兒である。

いろ／＼小面倒な沿革を經て今日に及んだので、今では敷地五千三百坪餘、建坪二千坪にあまり、各三百人に近き學生がゐる譯だ。外に附屬小學、幼稚園もある。

創立以來校長の職にあつた老練の林吾一氏は、多病激職にたへず、辭職をして、去る九日、京都の女子師範から鈴木愛光氏が來任した。今迄林校長によつて練り上げられたる質素な校風がどう變化するかは注目すべき事であらうこれだけそこの兩校に有せる全部の知識として、十月十四日の朝僕は此校の玄關の呼鈴を押したのである。風變りな評判の仕方もあつてよいと思つたから、わざと見た儘、聞いた儘を列記しておく。師範學校の事も無論含まして置いた。

△本を落して飛んで行つた

「ハヽア貴所が河岡さんで……どうかおかけ下さい！生憎校長が新任披露で出かけて居りますので、御面會出來ませぬ」と主任教諭の堀田要三郎氏は氣の毒さうな面もちだ、避け得られぬ五六件の問題よろしくあつて、二人は校内めぐりに立つ。

「どうも汚ない校舍で近頃續々出來る新校舍を御覽になつた目では變でせう。實は今、青山にゐる男子の師範校であつて、さん／＼荒らし拔いた跡なんです」

成程夫れで汚ない證明が立つた。兄さんが住み穢い古部屋を妹がゆづりうけた格だ。お友達へ肩身の廣からぬ次第である。東京府も攻學心に乏しい八王子へ四商を造る金がある位なら、もう少し本校などへ都合してやればよさゝうなものだと思ふ。

『この建物が高等女學校の部です。一級一組よりありませぬから、これだけの教室で濟んでゐます。』

折ふし始業の鐘が鳴る。賑やかに教室へ入ると反對に、二年級は體操が何があると見え、教室にゐた二三人はバタ／＼駈け出して行く。最終の可愛らしい小娘は、袂を机の角に引つかけ輕く、引いたハヅミに青い表紙の本が二冊と、表に草花を書いたノートブックと、朱ぬりの筆入れが、机の中から辷り落ちた。一寸振り向いたが、片づけ樣ともせず、ピヨン／＼飛んで行つて仕舞つた。

もしこんな主婦があつたらどうだらう？

二階の廊下の隅に、雜誌の口繪めいたものを額に作つて懸けてある。學校から作つたのだらうが紐のつけ加減が、どれも／＼ゆがんでゐる。堀田教諭しきりに、氣にして居られた樣だが、桿の鉾、取つて還して階下へ來た時、女小使に

「二階の額はゆがんでゐていかん！あれは○先生の係りだから、あとでさう云つておけ！」

とか云つてゐる。難有い係りもあればあるもの！

別の棟に裁縫教室を覗き、遊戯教室を見て二階へ上る。こゝは六十四疊敷の作法教室にて、家事用具陳列棚もあり、整つたもの教諭の自慢も無理でなし。



今度は師範學校の教室に志ざす。

こゝで一寸師範科の入學方法を云つておくが、最近の制度では、志願者を二種に區別し、第一種は、豫め

入學せしむべき生徒數を各部市に割あて、身體檢査及び國語、習字、算術、口答試問を行ふて選拔し、その數が生徒配當數に滿たなかつた時は、直接學校に志望したものを試驗して入れる。入學の後は第一種に限り本科の四年間を通じ、諸雜費を支給するのである。

あまり明るから廊下をへて二人はとある室の前に立つた。

「これが理科の標本室です。標本類の製造も進歩しましたが直段が高うて――このさんごの模型などでも二十圓もするのです。一年に大した金をつかひます。吾吾の勉强した時代とは大變な違ひと云はんければなりません。その癖、出來は昔より惡い事もありますが。」

敎諭の言は呟やきに終つた。

屋内體操場にダンスの練習を見て、裏に出れば、廣いグラウンドに幼稚園生徒が丸く二重の環を作り、男が中、女が外で、オルガンのまに／＼跳ねてゐる。人間といふものは靈妙なものだアンな。豆の樣なものでもよく複雜な事を覺えるわい。と感じて見惚れてると、敎諭はせき込むだ調子で

「これからが寄宿です。綺麗でせう！　本校は奥へ行くほど美しくなるですよ」といふ。

「それが所謂「奥ゆかしい」のでせう。」

△燒け太りの寄宿舍

踏み込んで見ると成程立派だ。新築の順天堂病院の内部みた樣だ。違ふ所は起居してゐる人が、一は半死の患者、一は國家有用の敎育者と云ふにあるばかり

とりつきの部屋のドアを開けると、これは整然としたもの。芝居の書割と云はふか。一絲亂れずとお世辭を奉らうか。二人づゝ向ひあふ机四臺はチヤント置かれ、書籍、筆立、座蒲團みなその位置を守つてゐる壁には三色版をはめ込んだ額が懸り、ガラス窓には雪の樣に白いカーテンが、ふんわり垂れてゐる。

「恐ろしく片づいてゐますねえエ。」

敎諭は答へはなかつたが、滿足の色を眼にあらはしつゝ、次の部屋にうつる。こゝもよく整頓してゐる。

妾の解も、またその次も……。

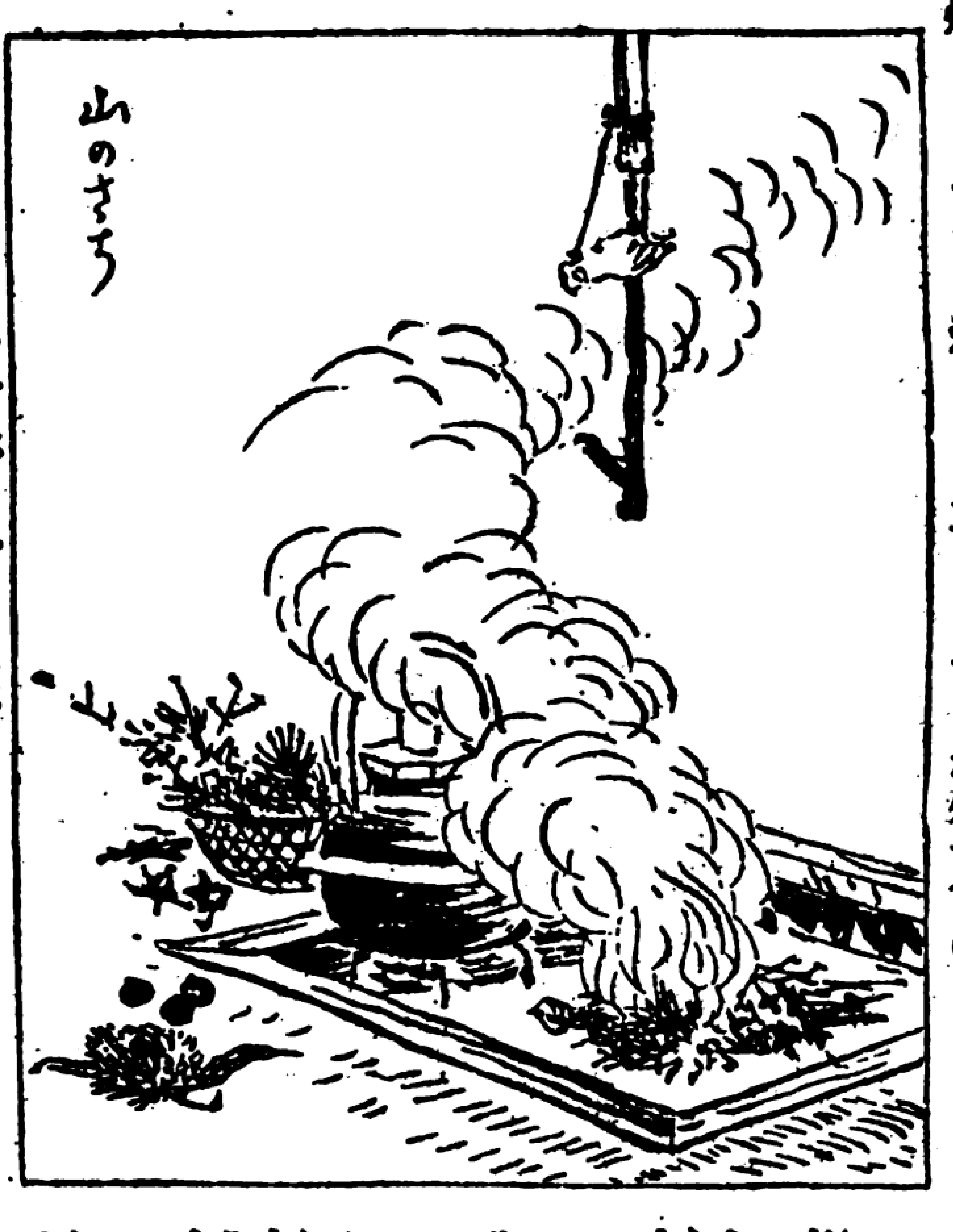
「男子の新築ならこの様には到底も行きませんが――それにこゝは三十八年に焼きましてな。新らしく立てたもんですから、皆は美しいんです。」

「失火ですか。」

「左様――イヤ私の申し様が不完全でした。焼いたのでない、焼けたのです。」

と、わかり切つた事であるが、流石に敎諭である。自動詞を他動詞に云ひかへる。焼いたのでなくて焼けたのでも何でもから立派になれは結構だ。いつその此他の古校舍も「焼けて」仕舞へはよからう。

「こゝが舍監室です。」



西洋式に椅子テーブルが置かれて、花瓶の花も、舍監室だけに澤山よい花が溢れてゐる。三人のうち一人たけが殘つてゐる。

「この方は女學世界の記者の方――」

など、紹介が濟む、二人でペコリと頭を下げる

「どうも何やらキタなう御座いまして。」

と謙遜される。何がキタないものか。これだけ立派なら威張たつて大丈夫だ。

「イヤ大いに立派です、中々大いに感心してゐる處です。」

と云つた。

「先年焼けちまひまして。」

「さうださうですな。焼け太りは結構です。」

三人同様に笑つて、まだ長廊下をコツ／＼。

「全くこの寄宿は立派過ぎます。將來國民教育をしてもらうといふ保證があるので、これだけの設備になつてゐるものゝ吾々でもゲナリイですよ。」

と教師は打笑つた。

△一食五錢の賄

洗濯所豆腐所、浴室を見て炊事場に行く。黄ろい皺くちや婆さんが、自身の顔の様な澤庵を刻んでゐる。教室と背中あはせに割烹教室のあるのは凝つてゐる。食堂の隅にはオルガンがあつて、何やら心得が書いてある樣子一方に鶏の繪が掛れるは「一鳴天下」とか何とかの暗示ではあるまいか。

食費は一日十五錢の由「莫迦に安いですな」と云つたら「澤山ですから」との答だ本郷邊一高等學校なんか六百人もゐて日額二十錢以上の筈であつた。あまり嬉しいので、献立表をもらつた。（これはあとで受取つたのだが、序故いま掲げておく）

	朝	晝	夕
日	さつま芋 みそ汁	鯛めし 胡麻鹽	菜ひたし のつぺい汁
月	澤庵 からし茄子	あつま芋 あんかけ	かき玉子
火	麩みそ	じやがいも 麩、しやうが煮	柿二ッ

成程少しお粗末な様な、尤も大勢で、ツナ／＼稼ぎ込んだら甘味いに違ひはない。潮風生も賄のマヅい飯を天下の美味と心得た時代もあつた。

寄宿から廊下を下ると、附屬小學校の二階だ。こゝは地が馬鹿に低く寄宿の階下が二階よりも高いさうな理窟はわかつてゐても一寸驚く、こゝは先生の外に師範生が教生となつて來る事になつてるのだ。

幼稚園もある。この二階から乾の方を眺めわたすと、本郷一帯手にとる如く、一高の時計臺のあたりに鳶が輪になつて飛んでゐるのも見えるかも知れない。

「昔はよう御座んした。後藤牧太さんの時の櫻が目の下にありましてな。花時分は坐ながらにして觀櫻の宴

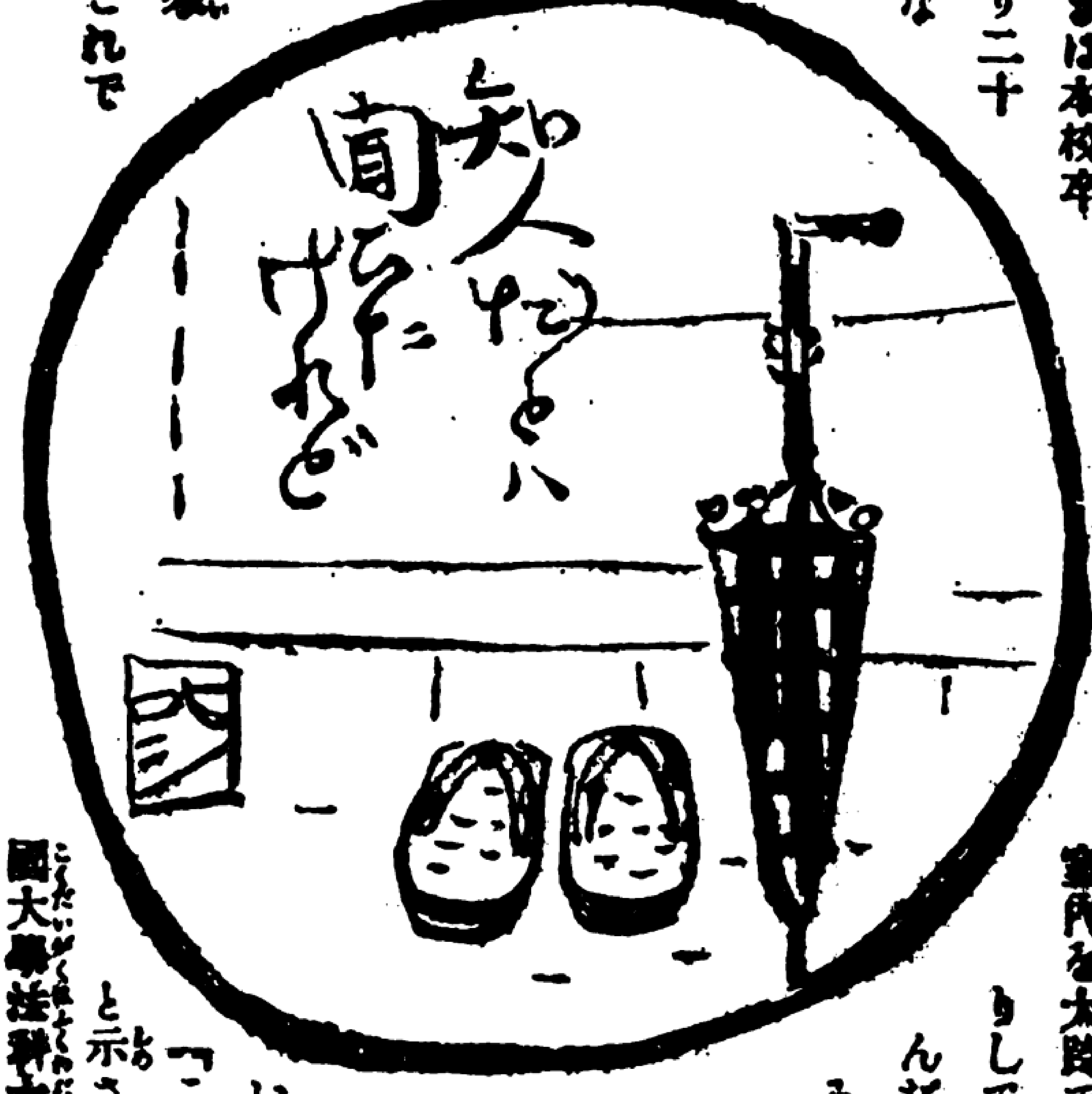
「を借りましたつけ。」

くる／＼くる／＼廻つて寄宿へ戻り、階上の各室をめぐつた。その間に特筆すべきは本校卒業生舎監の月給は十七圓位より二十圓止り、五六年に三十圓にはなれませうと云ふ事だけであつた。

一めぐり廻ればウンザリした。應接室に近づいた時給仕が一葉の名刺を手にして來るに會ふ。

「この方が……」と囁く様である。　の手から法學博士の四字が眼底に映じた。來客ありと見てとつた自分は、これで失禮する由を云へば、

「まァ今度の献立表が今に出來ますから、どうぞ[illegible]暫時でゝも御待つくり。」



との事。夫れも成程、先の間へ戻れば、半白の老人あり。但、なか／＼元氣にて、動物園の北極熊の様に室内を大股でいら／＼しく行つたりきたりしてゐる。大方これが博士殿なんだらう。

その時堀田氏が入つて來た。粹をきかして座を外し、生徒の往來するを眺めてゐると十分あまりゴチャ／＼話して歸つて行つた。と同時に献立表も整つた。

「今のは何人ですか。」と聞いて見る。

「この人です。」

と示されたのは先の名刺「東京帝國大學法科大學教授、法學博士、――」

おつと此あとを書くと恨まれるから預つておかう。名前は五字であつた。

「こゝの娘さんがこの間○○女學校から本校へ轉校して來たのですが、英語の成績が非常に善くないので、お父さんが心配して見えたのです。」

「へゝ――、博士の娘の癖にいけないんですか。オヤヂさんの智慧の百分の一でもあればよいんですが。」

「世の中は思ふ樣に行かなくて困ります。」

「それで平均が取れるのでせう。ハヽハヽヽ。いや、飛んだ御邪魔をかけました。失禮します!」

「さうですか、失禮!」

そこで校門を出たと書けば、記事は怒つてもよいがその足で、直ちに向ケ岡の第一高等學校へ行き、自治寮の谷山生徒監にあひ、第二高女の話をすると、

「ハアさうでしたか。私の聞き及んでゐる處では、第二が地理上の關係や、師範と併置された具合があると見え成績がよいさうです。」

と言明のあつたのを書き添えておく。信用ある學校の信用ある人のこの一句は、本校の聲價に裏書したものと云つてもよからう。姫樣主義の○○女學校から移つた△△博士令嬢が閉口するも尤も千萬ではないか!

府立第一高等女學校

△最も景氣よき學園

古くして益々値打の出てくるものは、ボルドウの酒と骨董品ばかりではない。府立第一高等女學校も御多分に洩れぬ。

府内に公立の女學校は四つあるが、みな明治三十年以後の創立であるに、本校獨り二十一年の創立である六百の現在生と、千二百にあまる卒業生とを有し、每學年の始めには募集人員の五六倍の志望者がある位。古くして聲價益々加はるは目出度い事だ。

淺草區七軒町の裏通りに三千三百坪の地を領して、敎室の數二十五、これならば第二高等女學校の樣にどの室も〳〵引つきり幕なしに使ふなどの心配もいらぬ。處が商業區だけあつて、ゴク大まかな建て方になつてゐる。

修業年限は五年、その間に敎へる學課は、修身、國語、英語、歷史、地理、數學、理科、圖畫、家事、裁縫、音樂、體操で、一週二十八時間づゝである。尤もこれは府立各女學校共通の點だ。故に此のあとには省略しておく敎職員は三十六人、校長は至極無事な人であるから主席敎諭が、實務を切つてまはしてゐるといふ噂がある。生徒は士族百七十八人。



平民三百九十五人、華族は一人もない。最年長者が二十年三ヶ月、最年少者が十三年一ヶ月だそうな。

△事勿れ主義が理想、生徒の居所は下谷、本郷、淺草、最も多く日本橋、本所、京橋、深川これにつぎ、その餘は少數である。父兄の職業は、商人百五十九人、銀行會社員七十八人。官公吏六十三人、工業五十

八人を筆頭とし、どうしても一派の聲勢が下町風でもる。更に學校でもこれを奨勵し、事勿れ主義の、平穏主義の教育を施してゐる。試みに校歌の第一節を見るに。

「都の中にいちはやく、ひらけそめつる我校の――」

と御自慢に始まり、かつ、

「ほまれを高く世にあげて、めでたく匂へ女郎花」と

ある。[illegible]第二節に

「み雪に霜に色變へぬ松の操をためしにて、[illegible]でも[illegible]き智をも増し」とあるから、女郎花の様になよ〳〵ぐにや〳〵するばかりが目的でない事がわからう。が、何かの二タ口目には「女の分を守れ」と訓へるは事實で、生徒が文藝會風のものを催すのに干渉するなんかみなこの主義が具體的に現はれたのだ。新聞や雜誌に澤山書くとお困りのさうだから多少書くべき材料があつても書く氣になれぬ。左に參考の爲めに、本校が算定した各學年學資概算表を擧げて、この記事の筆を擱く。

	一年級	二年級	三年級	四年級	五年級
教科書	四,七〇	五,六〇	[illegible]	[illegible]	四,[illegible]
運動着及成績簿	,一〇	—	—	—	—
裁縫具	[illegible]	,一〇	,一〇	[illegible]	[illegible]
圖畫用具	,八〇	,四〇	,三〇	—	[illegible]
[illegible]	三,〇〇	三,〇〇	—	[illegible]	[illegible]
靴	四,〇〇	三,五〇	五,〇〇	[illegible]	[illegible]
圖書[illegible]費	一,[illegible]	一,[illegible]	一,[illegible]	[illegible]	[illegible]
割烹[illegible]及用具	—				
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
習字　習畫[illegible]用紙	一,[illegible]	[illegible]	一,[illegible]	[illegible]	[illegible]
ペン軸ペン先	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]紙類	二,[illegible]	二,[illegible]	二,[illegible]	[illegible]	一,[illegible]
鉛筆、墨、インキ、繪具、[illegible]	,八〇	一,[illegible]	[illegible]	[illegible]	一,[illegible]
[illegible]記帳	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
靴下	二,[illegible]	二,[illegible]	一,[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]糸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
授業料	二七,五〇	二七,五〇	二七,[illegible]	[illegible]	[illegible]
割烹實費	—	—	—	—	[illegible]
積立金	一,〇〇	一,〇〇	[illegible]	一,[illegible]	一,[illegible]
合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

平均一學年につき五十二圓四十六錢也

（積立金は囑會付の費用に充つ）



地方婦人界の消息

本誌特派部　久留島武彥

編輯記者足下、秋雨わびしき神戸の埠頭を離れたるは既に二時間の前に候、晝ならば認められべき鐵枴ヶ峰も、闇には空と一色のそれともわかず、鹽屋垂水の漁家の燈火も、ふりそゝぐ雨に見えて亦隱れ、やがてこれが遙になりては、こゝ暫くは播磨灘の靜寂に包まるゝ吾が船の、客は早くも寢ね、ボーイも亦部屋にしりぞきて、サルーンは今野生獨占の閑天地と相成申候この暇を利し、野生は女學世界記者として最近臨席の婦人會一二の狀況、御報申上置き度く先づ其の第一は

横濱母の會

より始め可申候、此の母の會と申すは創立既に一旬年、毎會市内西戸部山王山の私立愛隣女學校講堂に開かるるが例となり居り候、會員數目下二百二十餘名、甚だ盛大と申す婦人會には無之候も、此の會合の發起者にして、此の學校の設立出來者として知られたるサイモンス女史の冥々の力は、終始一貫、これが繼承者に好指導と好鼓舞を與へ、幾多の婦人會の興りては倒れ創められては解るゝが中に、年々質實の活動を續け、よく横濱婦人精神界の明星となり居る事歎服に價すべき事と存候。

そも此のサイモンス女史と申すは、米國派遣の宣教師にて、横濱に渡來以來大に吾が邦婦人の美德他邦のこれに異るに驚歎すると共に、愈〻此の涵養に努力せん事を身の任とし、その目的を達せんには理想的の女學校を創立して、且つ養ひ且つ研かざるべからずと思立ち、次の便船に歸國の旅裝をとゝのへ、一船早く歸國する友人の行を送らんと、艀にて税關棧橋前を離れ候が意ひも懸けず吾邦との永き訣別と相成候ものに御座候。

聞けば他の婦人と共に舷頭に立ちて、既に乘組める友のエンプレッス號が黑煙を渦巻き立つるに氣をいらち、それのみ一心に見詰め居る時、不意に側面より小蒸汽顯れ、あはやと云ふ間も無く其の舳先に強く胸部を衝かれ候が最後にて、その儘絕命致され候ものゝ由不幸とも災難とも申すべき言葉なき咄嗟の間の出來事とて、女史を知れると知らざるに論なく、何れも事變に對する同情深く、米本國の家族の人々も、これこそ永く女史が魂を日本の邦土にとゞめしむべき皇天の攝

理なるべしと、女史が遺志たる女學校創立の資は、求めずして家族始め八方より醵出され、斯くして「愛隣」の名によりて此の西戸部の校舎は設立され、次で此の母の會は興されしものに候とか。

現在校長は山崎花子女史にて、母の會は日本郵船會社横濱支店員鷲野氏夫人勇子女史身に任じて經營の衝に當り、毎月第一木曜日午後を定日とし、四方の名士を招聘して講師に精神の涵養に努め、廣く會員外の人にも聽講の自由を許し居り候。

野生が臨席致し候本月第一木曜日は、定例として來る一年間月次會合の豫定講師並に講習等の發表を致し候事となり居る由にて、野生が知るところにては、婦人會にして全く男子の力を借らず、尚來るべき一年間の豫定まで發表し得る婦人會は他に多く類例を見ず、或は全く無しと申すも不可なるにあらずやと存居候事に御座候。

當日玄關口にて案内を乞ひ候處、どうぞ此方へと校長室に案内せられ候儘、その扉を排して室に入り候に先づ目につきたるは、正面の金言日牌に記されたる

吾が口に門衛を置き
吾が舌を守らせ玉へ
（詩百三十一篇）

と云ふ大文字に候、講師もこれには大に考へざるを得ざる次第に候、生は先づ此の暗示に會して大に襟を正さゞるべからざるの必要を感じ候が、幸に生が此の日の「小さき價値」と申す二時間弱の講演は、鷲野幹事長の御挨拶によりて、始て門衛の置かれたる舌と口の滿足なる助力を得たるを知り、安堵致したる事に御座候

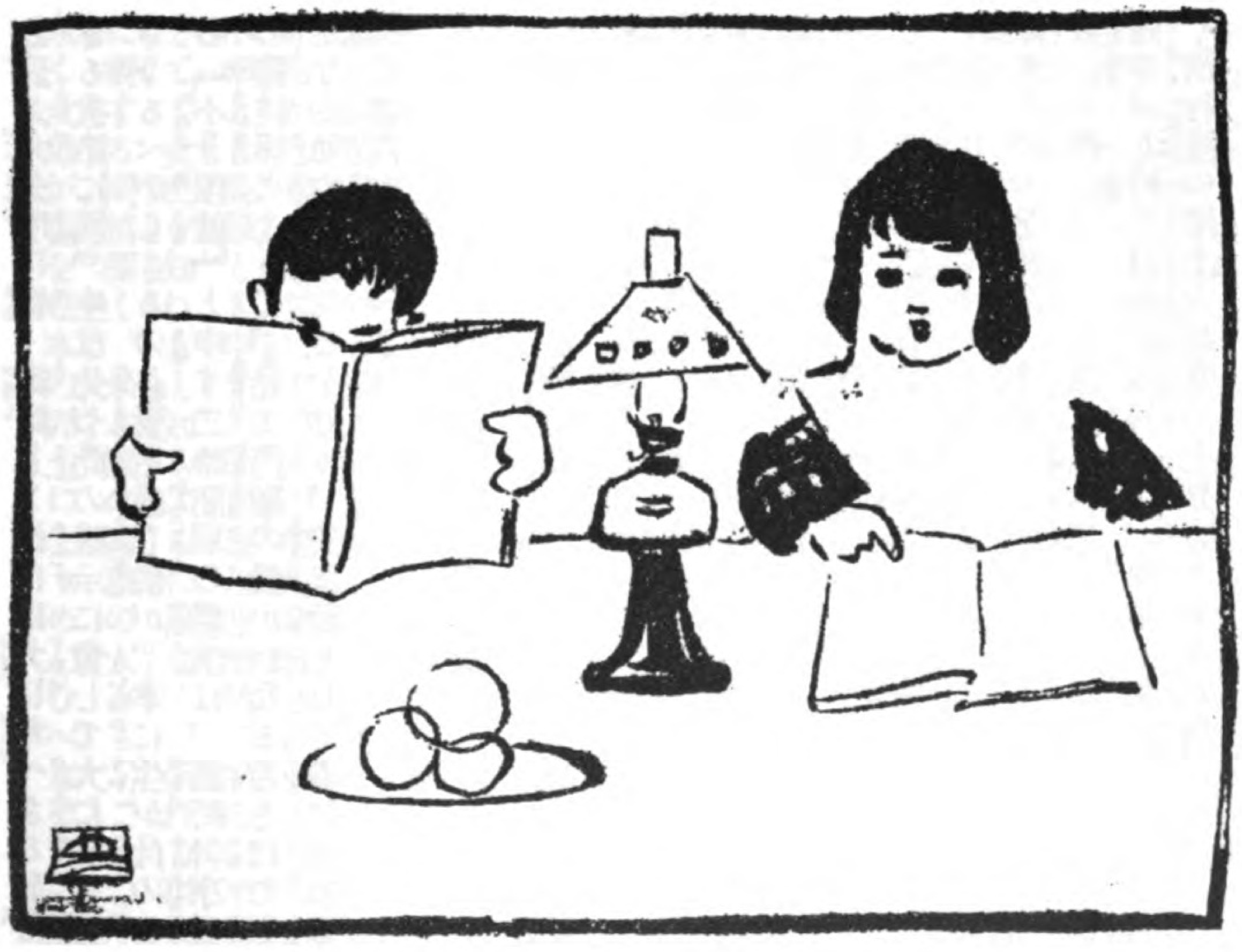
次に御報申上ぐべきは

小倉將校婦人會

小倉と申すは豐前の小倉にて、乃ち第十二師團所在地に御座候、師團長淺田中將婦人會長として、專ら將校婦人の團結と、軍人家庭の向上敎育に努め、會員數現在百二十餘名、他の將校婦人會に比較しては創立の日淺きだけ員數の成績尚充分ならざるもの有之やに聞及び候へ共、會員中二三の熱心なる先覺者ありそれに師團高級副官某氏本務より此の方面に其の精力を注ぐにはあらずやと幕僚連より戯言さるゝ迄、精神誠意の助力を試み、半歳ならずして七十名の平均出席數より百二三十名の確定出席者を得るに至り、野生が臨席せし時には特に成績よく、兒童を加へて三百名近く偕行社の階上大講堂の七分通りを占め居り候。

少年少女諸君に對しては例によつてお伽噺を試み、これを前庭に解散せしめし後、夫人達に對しては『將校婦人會の負ふべき責任範圍』と云ふが如き意味のものにて一時間餘講話致し候、聽講者は老たるあり若きあり、その良人の階級によりて服裝等も元より一樣なるべき筈無之候らへ共、幸に此の婦人會は早く本部にて規定せる一定の被服を採用し居り、淺田夫人始め何れも縹色藍のそれなれば、婦人會に有勝ちの弊も少く大に集會にも簡易なるより、近來は將校團内の祝儀不祝儀等にも申合せによりてこれを使用なし居り候由、野生の講話の後東山小園の『源藏德利の別れ』あり、これにて閉會に候ひしが、此の日は近來に無き好會合なりしとかにて鄭重なる挨拶を受け、野生の紹介者たりし小倉聯隊區司令官澤崎大佐夫人は、爲に甚しく面目を施したりと迄の褒詞を寄られしは、反て恐縮に覺え候事に御座候。

こゝ迄認め候時、上甲板に汽笛響き、船の高松に近きたるを報じ居り候、やがて此のサルーンは再び混雜のサルーンなるべく、これにて一先づ擱筆仕候敬具





和歌

佐々木信綱選

一等 ○ 豊後 熊谷ゆき子

夕ざれば柱にもたれはかな氣に雲など見るがくせなりし兄

評 兄のうせたる事をいはで、言外に失せにし兄を偲ぶ意よくあらはれたり。殊更につくりたるあとなく、調にも句にも無理なく女子の歌としてふさはしき作なり。

二等 ○ 京都 藤田あきら

うつくしう夢にほゝゑむをさな子に手枕かして歌思ふわれ

評 やさしき若き母の面影うかび出でゝよき歌。

二等 ○ 下總 岩瀬不二野

ゆた〳〵と麥の穗黄なる夕暗にみづうみ青き總の國かな

評 霞が浦もしくは印旛沼のあたり、湖畔初夏の光景、寫し出でゝ畫の如し。

三等 ○ 伊勢 岩本淑子

その頃の君が若さをこの頃の我がおとろへをしづかに思ふ

評 胸の底にひゞく歌なり。佳作。

三等 ○ 丹後 小橋つる子

追憶の果實をさはに拾ひてよとやうに秋は我が前に來ぬ

評 「てよ」の用ゐざまいかゞとは思へども想の清新なるをもて採る。

三等 ○ 伊賀 淺沼花子

旅にして故鄕思ひ君を懷ひやみてふす夜をこほろぎのなく

評 こほろぎの聲たえ〴〵に。燈火くらき旅宿の秋の夜さこそと思ひやられて。

秀逸

○ 岩代　結城子
木の實など君にそなへて野の宮にまゝごとの時妻なりしかな
評　野の宮は、闇の奥嵯峨よりいへば、齋宮の籠りいましゝ所をいへどこゝは野邊の社の意に用ゐしなるべし。

○ 阿波　大久保八千代
木犀の香は徒らに寂寥の靈ゆるがして流れゆくかな

○ 長崎　天野泰子
千鳥なく加茂の川原にたゝずめばなつかしけれど少し淋しき
評　なつかしげなる歌なれど、少しいひたらずとやいはむ。

○ 信濃　吉川多美子
黄昏はいと靜かに秋草の花の白きを匂はして來ぬ

○ 麹町　淺井ゆき子
あな淋し黄昏窓に落ち葉を數へてゐればなみだ流るゝ
評　二句いまだし。

○ 淡路　和田てい子
縫鍼もてかたくつながれわが心暗きひとやにすゝり泣きすも

○ 富山　朱雀ちか子
野の胸に秋の雨ふり七草の花の香うせてさひれゆくかな

○ 攝津　和久かつ子
月草の花に露ふる磯のみち君としゆけば薄月さしぬ
評　うつくしき歌なれど露ふるの句少しいかゞ。

○ 大阪　田中豐子
杜鵑被衣の人のしのび行く嵯峨野のおくの三日月のかげ

○ 信州　吉池ふみ子
くろかみに沙匂はせて眞砂路を素足して行く島の少女は

佳作

○ 山口　石田つる子
今いつらちゝとなくなる蟲の音なひとりし聞くは淋しとつけむに

○ 岐阜　坂井政子
華やかにのたまふ言をひとつ一つすれても見たきこの夜頃かな

○ 四坂島　渡邊梅子
豐き秋のみ入りうれしむ農人の畔と畔との高話かな

○ 下總　小澤櫻子
わが前を言葉ひそめて君とほるゆふ庭おもほゆ木犀の花

○ 神戸　柏原みつゑ

君がこゝろうつろふよりも黒髪のあせゆくことを悲しむわれは
○　岡山　下野静江
秋は来ぬ寒蟬こして秋はきぬ白き紫苑に涙こぼれちる
○　長野　石上麗子
あけぼのやひがし白めばわが若き日を讃むことも嬉よろこぶ
○　下総　小島保花子
思ふ事かたらず共に木犀のよき香をかぎてあかざりしかな
○　三越　藤崎常子
眼を閉ぢて心静かにいゝ一人ぬる君思ふ閑のあまきかなしみ
○　常陸　大久保豊子
置く霜にうつろひはてし百草を片えみ顔の白菊の花
○　隠岐　春山とく子
やはらかに夕日はてりぬ悲しみに泣きぬれにたる心の上に
○　豊後　是永古満子
終日なかりくらしつゝえし幸の味いとよろし母のおはすは
○　千葉　萩野露子
うちわたす稲田はたけの末遠くむらさきにほふ富士の嶺見る
○　近江　大角末子
わびしさや君をまつ夜は秋雨の音をきゝつゝ琴ひきてゐぬ
○　下野　片岡濱子
ひやゝかに秋の雨降るよもすがら一人日記書く旅籠の宿
○　牛込　塚原けん子
三すぢほど黒髪落ちぬ手枕に痩せたる身にはいたましきかな
○　秋田　宮館志磨子
朝風にしろき霧ふく湖の汀にたゝば君忘れえむ
○　四谷　味方てい子
待つとなく七日相見ぬまぼろしにおもかげ匂ふ木犀のはな
○　小田原　白露子
笛の音は森のかなたに聞え来ぬ月にさなますみやび男や誰
○　下総　小島保子
君恋ふる心も失せぬ物なべて得がたきまゝに秋の雨ふる
○　牛込　琴子
君がかもす胸の美酒汲みしより罪深き身と我はなりぬる
○　長野　小林静子
ほろ／＼に心の壁のくづれゆく音もまじれり雨つたふ軒
○　上総　きしま
日の光静かに照りて木犀咲くあまきかをりに君を思ひぬ
○　奈良　英華子
なまなこをしかといだきてつま思ふ淋しきねやに月かげのさす
○　酒田　寧園いつ子
水ひきの花にまじりて鳳仙さく秋の一夜や水の音すも
○　京都　大野たれ子
聞く人の心々にまかせ置きて月に訴へる虫のこゑ／＼
○　大阪　長谷川ゑん子
菊のせて四條を渡る女若し櫛の鼈甲珠に霜白き朝
○　兵庫　山岡真子
その昔君と語りし絵馬堂に今日も寂しう時雨するかな
○　山梨　小々舟
おもひわびまどろれつめたきさむしろにとも音をなくか夜半のまつ虫
○　大阪　辻村百合子

つかれてはしばしやすらふ岩角になぐさめ顔の白百合の花

○　　能登　高　橋　蘭

今夜又月にきえゆくことの音はたがかきならすしらべなるらん

○　　大阪　靜　波

消るとしもなくて手折りしみちの邊の野菊の一枝かざしにはせむ

○　　下總　小澤　さゆみ子

夢にみし乳色の花あまた咲く野の末にひとり疲れよゝと泣く

○　　金澤　吉川たつを

青空や菜種白き木の下に薔薇を摘る眼ざしして見ぬ

○　　今治　平塚白百合

秋霧の夜の夢千人の老女來てわが血を吸ふとをびえさめけり

○　　今治　玉明いつ

さよふけてうきねのゆめやさえぬらん濱のむら鳥こゑたえずなく

○　　相模　しら藤

君このむ萩の水かげをさまよひてうつゝ心にありし日おもひぬ

○　　豐後　島よし子

傾ける檐にたれたる蔦がらに秋風そよぐ夕ぐれの村

○　　紀伊　田中富美子

あまぢふの小徑をたどれば草の中にましろき花を二つ見出しぬ

○　　中河内　もと子

吹きすさむ風の音しなか〳〵に友なきわれの友となりぬる

○　　岡林　文子

待つ君は終に來まさで月入りぬ曉鳥鳴く森の奥に

○　　大阪　春子

雲の峯の夜や何はん君きまさばまてまにすめる十六夜の月

曇なく三星の枯野霜さえて隈なく照す秋の夜の月

○　　福島　鳳子まつ

秋きぬコスモス咲きぬ垣によりて衣しのばるゝ夕ばえの雲

○　　紀伊　靜子

待つ夫は歸り來まさで吹きすさぶ木がらし寒く日は暮れにけり

○　　越後　五十嵐すが子

戸によりて君まち居れば入合のかねも聞えて蟲なき出でぬ

○　　信濃　前島節子

何となくよべ見しゆめのかなしさに都のあねに文を送りぬ

○　　大阪　波奈子

あはれ〳〵旅なる人はたが里に今宵の月を思ひいつらむ

○　　下澁谷　平原千代子

云ひ知らぬ胸の悲しさ覺えたりひとり野中に蟲を聞く時

○　　佐渡　吉藤いえ子

君とふたり名なし川べりさまよひて月に語りしかの日たのしも

○　　大阪　名もなき花

今日をしも指輪得ていとも嬉しげにまばゆくばかり飾れる君よ

○　　米國　村越光子

野に出でゝ亡き友の上思ひをれば雨となりけり逝く秋の空

○　　小石川　高橋ちか子

蟲の音のあはれに野路は暮はてゝ月澄む空に雁泣き渡る

○　　佐世保　吉川しま

あたらしき御墓のほとり萩散りて夕風かなしこほろぎのなく

○　　飛驒　船坂深山子

○　　豐後　菅原尾花子

見がへれば君も見るなけ入千草の花みだれちる秋風の路

○　秋田　波　泉子

露しげき草のほそ道ふみわけてたどるもかなし君が奥津城

○　上總　太田　春江

君といふ寫眞を胸にとりつけるひゝきにものを思ふたそがれ

○　大阪　晴　子

淋しさは秋のならひと思へども夕べ身にしむ遊守い館

○　神戸　西尾　紅涙

言ひ出でむ言葉も知らずいたづらに君と別れぬうすやみの宵

○　大阪　眞野　光子

逝きし子はいづくの空に眠れして今宵の月をいかに見るらん

○　東京　中村　千代子

訪ふ人もなき黄昏の野づかさに誰こふらんかまつ蟲の聲

○　東京　萩　枝

思ふ人ある身はうたて針箱を己がつとめの一とはなしぬ

○　岡山　下野　靜江

衣縫ふ手もおのづからたゆたひぬ月にさえゆく玉琴の音に

○　相州　中田　靜江

御社の庭にゆかしき白菊の白きは神のこゝろなるらん

○　麹町　牧野　銀杏庵

はら〳〵と銀杏落葉してこのかみの人を思へばしづ心地なし

○　中河内　西村　千賀子

大空にうき世の塵をよそにして心清く〳〵すめる月かな

○　周防　櫻井　しらつゆ

旅に病む身を慰めん友もあらずあはれ今年も秋くれんとす

○　神戸　大塚　千代子

まがつびの夢繰り返し秋の夜を女心に人怨じつる

○　茨城　越ヶ谷　くに子

夕まぐれ故郷の空眺めやる窓にはら〳〵村雨そゝぐ

○　丹波　近藤　滋子

うら淋しかゝる夜寺によもすがらひたなく蟲と世をかこつらん

○　清津　櫻井　かた子

山風の草葉の露に月更けて鳴く鹿の聲の哀れに聞こゆ

○　岐阜　井川　松枝

病む妹をたすけ起してえん近く清けき秋の月を見るかな

○　豐後　菅原　芳子

うれひきて秋の野原によゝと泣くわが襟にちる白萩の花

○　山形　華園　いつ子

なつかしきみ影消えゆく萩の野を風よなよらにわが聲おくに

○　兵庫　玉島　英子

たらちねの親の心をこゝろにてゆめ我が心われにゆるすな

○　麹町　牧野　にん子

見渡せば今白菊のあまた來て闘ふ如し秋の夕ぞ

○　伊勢　ひ　さ子

月もよし蟲の音もよし七草の色しこぼるゝ野路の一つ家

○　福井　よ　し子

西さす夕陽は梢にかゝりつゝ渓間の茶屋に紅葉ちりけり

○　東京　小島　甲斐子

あゝ淋しわが窓かこむ青き葉の黄ばむが如きわが胸の裡

○　備後　桑田　まちよ

秋の夜の閑なき月になく虫の聲うら悲し芭蕉葉の影
○　牛込　平塚つゆ子

のき先に奈良人形ほす草屋根の棗の實はぜる秋日閑かな
○　相模　はる子

嵯峨ゆけば日は斜なり仁和寺の丹塗の扉に紅葉かつ散る
○　千葉　萩野露子

雲をよぶ龍のうづらのこゑさびし萩のみだれのいとおもき夕
○　宇都宮　野川しみぢ

この一筋涼しき慕ふ人に似てたとへ給はむ君と思はず
○　神戸　大塚千代子

村時雨朽葉の匂身しみて錆びたる鐘は又二つなる
○　麹町　湯川多美子

橋詰に立ちて見送る其の人のかげは今宵の夢のあるじか
○　播磨　美知子

草枕疲れの空をながむれば雁なき渡る秋の夕暮
○　對馬　林きみ子

尼ひとりさびしく暮す荒庵の庭の糸萩秋雨にちる
○　攝津　平井トク子

木枯の吹き拂ふ冬の夜の空にさえたる月の寒けさ
○　廣島　花郷

さまざまにふしをもしろくなく虫の聲にひかるゝ野べの糸萩
○　常陸　櫻木廣子

朝風に露ちるのきのわかかへでこがるゝ色にたが染めつらむ
○　横濱　小豆澤楢野

秋の夜の月かげふみて野をゆけばあはれ身にしむ虫の聲かな
○　神戸　波多野廣子

思ひ出て若かりし日のいたづらを泣くにいとよき秋は來にけり
○　攝津　郡敏子

野の寺に夕鐘なりてはらはらと銀杏紅葉の絶えず散るかな
○　韓國　有岡千代子

共にさへなぐさめかれし山里の秋を今年は一人すぐすか
○　播磨　多龜

櫻貝拾ひつゝ行く海邊ひの果てに待つらん逝きしいとし子
○　大阪　藤花

みたらしの水のかたみに匂ふかなるよしもなき藤なみの花
○　廣島　阪本菫園

いと白うおけるあしたの初霜に紅葉散るこそまたなかしけれ
○　紀伊　佐田柳子

こほろぎのむくろ哀れに殘りけり風に破れし芭蕉葉のかげ
○　靜岡　ゆかり子

たぐへくる砧のひゞき身にしみて衣手さむし小山田の里
○　京都　京子

花召せのやさしきこゑは曉のもやより出てゝもやに消え行く
○　兵庫　松尾りつ子

亡き姉のかへりきましゝ夢さめて燈火くらし雨の音する
○　千葉　土屋夫佐子

露しげき姉の奥津城草ぬればつゞれの衣よ萩こぼれ散る
○　大阪　石井よし子

むしの音も千草もかれて野邊はたゞしものはなのみさえわたるかな
○　札幌　富習好子

よもすがら讀書のまとに月さしてうつる木の葉のちるも淋しき
○　東筑　千枝子
小春日や小かご手に持ち少女らが唱歌うたひてわがかどすぎぬ
○　廣島　伊達まさ代
島原に夕日の射して一つ一つ寒げに見ゆる秋の山畑
○　四坂島　渡邊梅子
秋日和わらやの門の子らの群れむれにましりて鷄あそぶ
○　愛媛　森川小萩
じなり戸は水ひき車にむすばれて主留守なる秋日和かな
○　岡山　榊原君子
旅の夜の小窓に獨りわれよれば聲もあはれに秋の蟲なく
○　岡山　掛谷かめを
蟲の聲淋しく聞きぬ旅の夜を時雨するなり君の戀しき
○　東京　佐久間さだ子
旅館ともし火ふけし秋の夜をたゞ風の音たゞ蟲の聲
○　四谷　味方こう子
かげもなきひとりを胸に描きつゝやさしき君をうとみそめける
○　大阪　稻澤靜子
亡き父はかゝる夜めでぬ秋雨のうらかなしげにそぼ降りつゞく
○　兵庫　山崎八重子
蟲の音もしどろもどろに聞ゆなり野分の風のふきすさむ夜は
○　大阪　はな
なつかしき君はいかにとわづらひぬ文のたよりもたえしこのごろ
○　岩代　城田和子
なつかしき人に逢はるゝ心地して晴れゆく空を仰ぎみるかな
○　兵庫　河中あさ子
なかに吹け野に咲く花もこゝろ豐の君もかよわし秋の夕風
○　三河　鈴木まゆみ
さらでだに淋しき宵の獨り寐に物思はする秋の雨かな
○　埼玉　荻野くに子
朝きりのたえま〳〵にほの見ゆる千草は秋の錦なりけり
○　群馬　林きみ
嵐の音も落葉のおとも身にしみて夕べ淋しき秋の山里
○　埼玉　荻野くに子
おばしまに身を持たせつゝ高殿に月を友にて笛をふく哉
○　青森　佐藤廣
絹燈のほかげゆらめく小書院にひとりほゝゑむ少女美し
○　讃岐　金井澄子
煙突の黒き烟は家々のいからん狙ひの木枯の夜
○　三越　藤掛常子
偽りなまことめかしゝ親しきを笑くしと云ふなの子をいとふ
○　本郷　妹背たか子
百舌鳥なきて秋の家路日に暮れぬふたりの影を長くのこして
○　和泉　井上登美子
絶え〳〵に鳴く蟲の音はよみの府にさそはれてゆく心地するかな
○　大阪　西澤かつ子
來ませ君何はなくとも山里にたゞほこりたき白菊の園
○　大阪　ちどり
うつくしう思ひたてよと何者かさゝやく如も日はくれにけり
○　愛媛　紫苑
乳の如白きさぎりのほの邊に芙蓉の色のそとみゆる哉



短文

（甲）去年の秋

鹿兒島　若葉

もう〳〵丁度去年の此頃でしたわね、貴方と眞人と私と三人で、下町に出掛けての歸りに、あのホラ下駄屋へおはいりでしたでせう、お姉さんに既に小僧も二人が居ましたわ、貴方はソカ〳〵と入つてゐらしやるとむかうはよい御客樣と聞き直つて 急に顔をつけながら火鉢をすゝめると貴方が……あゝをかしい、ホヽヽホヽヽヽ、袂から敷島を出してつけるなり有難うとも何とも仰言らずに すましこんでフイと出ておしまひなさるんだもの、私はほんとうにびつくりしましたよ、私よりもあの下駄屋の人の顔つたら、ホヽヽヽ、思ひ出してもをかしいわ、今ではまさか彼んな事もなさらんでせう?。

（乙）小波亂

オ分　ゆかり

小春日のあか〳〵と照るお椽に、うつとりとして居ると、生垣の根にガサ〳〵と音がする、見ると雪のやうに眞白い子猫が緋がのこの首玉をして目を丸くして私を見て居る、呼ぶと恐がりもせず小さい鈴の音を立てゝお椽に上つて來る、何處かの飼ひ猫だらうと思つたけれども、餘りの可愛さに鰹節を持つて來てやつてると、裏からうちのジヨンが歸つて來た、が私のそばに猫が居るのでけたまゝしく吠へ立てる、猫も驚いて小さい背をまん丸く立てた、いやなジヨンだと思つて猫を抱いて立つと、柱にかゝつてる籠の目白がびつくりしてバタ〳〵さわぐ、猫はねらひを定めて今にも飛びつきさう、私はハツと思つて急いで猫を垣の外になげ出した。

（丙）暮れがた

麹町　淺井ゆき子

襷をかけてお米を磨がうと思つて裏へ出た、雨上りなので道の惡いことおびたゞしい、裾を上げて漸く共同水道の所へ來ると、垣根に白菊が四五輪開いてゐる、『美しへに匂ふ御籬や菊の花』といふ誰かの句を思出した、何時見ても優しい花だ、花の命のある中此處にそつと置きたいが又長屋の惡戯子にもがれて了ふだらうと思ひ乍ら栓を捻すと、透明な美しい水が桶の中にさあ〳〵とそゝぐ、お米はくる〳〵廻つて眞白になる手をつけると冷々として身にしみる、やつと磨ぎあげて又ぬかるみを三足程行くと、ちよろつと鼠が行先を横切つて石の間にはいつた。

（以下十選秀逸）

藍ちやん

相州 鶴見き代子

家の片時も忘れないのは、今年五歳になる可愛いゝ丸顔の、目のパッチリした、まつげの長い、其上に利口で、快活な、妹の藍ちやんです、誰一人として藍ちやんをほめぬ者はありません、或時御緣側でハサミをチヨキ／＼やつて居りますので、何して居るのかとおもひ、一寸のぞいて見ましたら、マア如何でせう紅葉の様な手で、自分の着て居るフランネルを膝下の裏あたりから斜にズタ／＼に切りこまざいて居りました、餘りの事に小言もいへず「藍ちやんそれ如何するの」ときゝましたら「切符こしらへるの」とニコ／＼して居りました、そして自分でも少しおかしくなつたと見えて、やがて大きな姿見の前に立つて眺めて居りましたが一寸舌を出し頭を引込めて大急ぎでどいてしまひました、その無邪氣なのには實に可愛くなりました、あゝいつまでも藍ちやんの様なうるはしい正直な心でありたい。

人情の變化

姫路 桔梗

十何年ぶりで伯母さんが歸られた、なつかしさにおひざにすがつて泣いたが、さて冷淡なもの、大層成人きくなつたれとたつた一言、ニツコリともなさらない、母さんがつもる話のかず／＼に涙ぐまれても一こう平氣ですましてゐらつしやる、これが一家の花だなんて云はれてゐらつしやつた人だらうか、これが情の満ち充ちたあの手紙を下さつた伯母だらうか餘りのにとに母さんに云ふと、ほんとに歸りものといふものはあゝまで變るものだらうかれと又さめ／＼と泣かれた。

呉服店行

中河内 西村千代子

今日はお天氣もいゝから年物の賣出しを見に行きませうと姉様と二人で心齋橋通りへくると、しうどの呉服店の前も人が一ぱいで軒の吊り切れは右左から引張られてくる／＼廻つて居る、お三どんらしいのが化粧を塗つてふり返りながら切れと人とを見くらべてゆく、眞紅のリボンをました十七八の娘さんは下駄屋の前を通つて硝子にうつた自分・姿を見て後へ手をやつて一寸帯をなほして又次の呉服店の前へ立つ、こんなのを見ながらずん／＼通つて高島屋へ入る、姉様は二三反お求めなすつた、お召しのいゝのがあつたから欲しかつたが止めにした、外へ出ると二人とも顔はほてつて眞赤になつてゐる、歸つてから今日は何の爲に行つたのだらうと思つていやになつた。

宿場の夕暮

中込 平塚白百合

紫色の夕もやが山から出て、小さい宿場をかくしてしまふと、御定宿と墨太に書いた掛行燈はゆら／＼と火影を亂して二つ三つ見え出した、行燈の横に乗りすてられた馬は、手綱をなが／＼と地に引いて、折々たかる蚊を尻尾を振つては追ひ／＼してゐる。うすくらいランプの帳場には、馬方が煙草をスパ／＼ふかしてゐる、やがて駄賃を貰ふたと見えて、手に握つてゐた豆しぼりの手拭を無造作にかぶつて、田路の方を指して馬を引いてゆく、まだ山の頂上に夕ばえの色がのこつて、村はづれの火の見が一きわ高く空にぬけてゐる。

活動寫眞

東京 夕ほし

祖母様は、ほんに不思議ね、山の中の景色の時など、木の葉が風に揺いたり、水の中へ人が入ると水煙の立つのが本物のやうにうつるのだもの、ほんに不思議だ」と、七不思議より多く不思議をいふ、祖母さんそれより海の中を軍艦が走る所の方がいゝとぢやないのねえお父様」「ウム、ウム」「あれを見ますと、西洋の生活の有様が歴々と目の前へ浮びますのね、矢張り私、西洋物の方がいゝと思ひますわ」、「私もあれ許りは西洋の方がいゝわね」、「僕もよ」、「まあ娘坊もだつてねゝ」、「だつて僕は祖母さんの好きなものは何でもすきなんだもの」「ぢやまた時々行つて見ませうよ」「おらもう十時でございますよ、さあお母様お休み遊ばせ、おくたびれでございましたでせう」。

十五夜

四谷 櫻子

朝から日本晴の小春日和、今日のお月見は大丈夫と思ふと嬉しくつて堪らない、午後から皆の役割がきまる、母様と姉様は臺所、妹は今夜御招きする人の處に手紙をもつて行く役、私は弟と原へいつて薄をとつてくる事になつた、早速三時頃より出かける、廣々とした秋の野に、おいで〳〵をしてゐる様風にうなづく薄の中に 二三本ひようと立つた松の木がいかにもせいが高く見える、澤山とつた薄を弟にかつがせて歸つてくると、妹ももうかへつてゐた、松田さんは、毎度ゆくと云ふお返事、嬉しい、今夜こそは御得意の小督を是非倒はなくちやといそいでお琴の塵を拂つておく、五時頃臺所もかたづいたので、臺を縁側にもち出して、薄にさした薄を供へ、傍には白木のお三寶ににのせてまつしろなお團子とやはらかいおいも、御座敷に座ぶとんをしいてすつかり支度ができ上つた、門にでて、いらつしやる人をまつてゐると、暮色は次第に深くなつて向ふの森も段々やみに包まれて行く。

樂しき夕

芝 平子

母上がお手づからお採り遊ばしたものとて 殊更に送つて下すつた松茸は、誠によい香りで、叔母様も一方ならず御満足遊ばし、香りの脱けない中にと晩は早速其の御飯をお炊きになつた、丁度土曜日なので、向が岡の従兄様も五時頃お歸りになり、支度が出來て皆様のお席が定まる、叔父様は僅かの御酒に陶然と遊ばして、昔茸狩の御自慢やら御説明やら叔父様は始終ほゝ笑んで聞いていらしやる、妹の無邪氣なお手柄話を従兄様にまぜつかへす、美しい夕餉を頂いた。

二人の奥さん

近江 みぎは

私の心易くしてゐる二人の奥さんがある、どちらも中學教師の奥さんだが、一人の方は女學校を出ると直ぐ結婚して、翌年には早や赤さんが出來、それからは未だうら若い身空ながら、いつも粗末なお衣をして、子供を背に一日ぱた〳〵と洗濯やら風呂焚までして居られる、今一人の奥さんは、故あつて一生オールドミスで暮す積りであつたのが、どういふ譯か三十にもなつてから結婚されて、以來七年にもなるのに、まだお子さんがなく、小ぢわのある顔を白粉で塗りかくして、一日机に向つて讀書三昧、裁縫や洗濯は、皆人に頼まれるとか。

不運な母子

千葉　山口秋子

大きなお腹を抱へて、つい一週間前旦那様に逝かれた玉さんから、出産の知らせが有つた、私は早速青晴に車を飛ばせた、途方に迷ふ玉さんの事を案じ作ら…… 玉さんは私の姿を見ると嬉れしなきにくゝり枕に涙をほろ〳〵と落された「オヤ、男の子！、一日旦那様……」と私は慰める積りで言つたが、然し其れは玉さんの涙の種にすぎなかつた。

晩秋

麹町　山吹

こうろぎは哀れな聲で鳴く、日一日と寒さに近よる、二三日前から縫始めた綿入も襟をくけたからもうぢきに出來るとは思ひながらも、今夜はいつになくれむい、人力車が音を立てゝ通る、表通りにパン屋のきいろい聲がパンパアーンと聞へる、若い女の身で夜までかせぐ人もあるものに、家の内で針仕事ぐらい何んでもないと氣を持ち直して綿入は漸く出來上つた。

小間使の日記

麹町　錦子

今晩二人で藥かうと思つて餅菓子を内所で買つて、奥の買物と一所に包んで、何の氣なく臺所の戸をがちりとあけると、折惡しく奥様がそこにお被在る、さて包をあける事もできず、後にあけるのにしてどこぞにおかうかしら、でも奥様が買物をお出しと仰有ると困る、こんな事なら買つてこなければよかつたと思つても後の祭り、色々と考へた末、とう〳〵又外へ出て、其のお菓子丈を入口に置いて來た。

京の秋色

京都　松井秀子

今日此の頃の朝裕の心地よさ、京の秋色は東都の春にもまして、なか〳〵にあかぬ眺めなり、衣笠山さては嵯峨吉田山の風情、松茸狩もおもしろし、月の廿二日には平安神宮のまつり有り、霜月にもなれば花見小路六波羅などの菊人形又よく人を呼ぶ、ものふりたる杉檜木などのひまより黄に紅に見ゆる糺の森の紅葉は、神代ながらの色見えて、いとたふとし。

梅は匂ひて

大阪　田中房子

離れの緣で兄様の御得意の琵琶につれて自分も「梅は匂ひて櫻は色よ……」と歌ひ出した、妙なる音に廣い果樹園も森とする、圓い月は色づきかけた柿の枝にかゝつてゐる、兄様はフト手をやめて空を見た、ザン〳〵と棕梠の葉づれが聞える。

朝

伊豆　加藤爲子

箒と拂塵を片手に持つて、客間の障子を開けると、中庭を隔てた離れの緣で、姉様は髮を解いて被在る、なんて好い御髮だらう、白魚の様な手がスースーと漆の様な髮の上を滑ると、此度は何やら壜から出して上の手に二三滴落してつけられる。最一度解かして、根の具合をみるのだらう、一寸緩めて鏡を覗かれたが、よかつたのか、そのまゝ打ち組でゆは

へ、すとんと落して襟髪を両方に垂し、髪を撫つて左手へ昇へながら器用に巻かれるもう出来上つた。ほつれ毛を掻きあげて、前と後にまた櫛を差された。たぼはふつくりとして恰好がよい、私も一つ真似してみようかしら、おゝまぶしいまあ朝日が鏡から反射したのだ、つとからだを外らして、障子を締めようとするとたん、ふと真白い顔がこちらを向いた。

明月日記

岩代　岡　美都子

九月廿九日、今夜は名月だから、早く糸をとりあげて、姉様のお手助を仕様と朝から楽しんで、せつせと励んだので、しまつたのは恰度三時であつた、お月様への御馳走は、露を留めた様な大きな團子に、父が丹精の野菜一籠、母の里から送つて下された真黒い大粒の葡萄に芝栗、花瓶に插けた秋草は、自分のむつくりしてある。お夕飯は初茸のお摘汁に、南瓜とさゝげのお皿、嬉しい狐色よくついた茄子のお鴫で、一家こぞつておいしくいたゞいた。夕食後は曇つて月は見えなかつたけれど、優しくすだく虫の音に耳をかたむけつゝ、香りのよい枝豆のまどいをひらき、とり〲に面白いお話で時をうつした、毎年今夜の月の宿る青桐の梢の面の方を拝んで床についたのは、十二時近くであつた。

父の面影

京都　い　く

さらでだに春の遊びに兄が形見の将校帽を戴き、玩具の軍刀ふりかざし戦ごつこに餘念なき美ちやんを見て、幾度か胸もはりさく思ひするに、ましてこ度は陸軍の御賞なさへ會せられたのです。

やがて先着の將校が奥に這入り玉へば、美ちやんツカ〱と入り来りて紅葉の様な両手をつき、嬉し気なる顔するに、將校もにつことして、こなたへと手招し玉へば、イソ〱と進み、遠慮気もなくお膝にすがり、ツメとゝ、御顔の造り見守り居る、あゝ美ちやん……、矢張お父さんのお姿は覚えて居るのか……、矢張お父様が懐しいか。私は我れ知らず咽せきこみました。

牧場

攝津　都地喜代子

だし〲と赤い夕陽が沈んで行く、空に浮いてゐた白い雲は金色にかはり、彼方の山や杜や此の小高い丘は落日の光をあびて、金色に溶けそうである、此の丘の牧場には牛が群つてゐる、芽や雑草の間をノソ〱とあんでゐるもの、柔かい夕陽をあびて寝てゐるもの。

何處からか笛の音がして、だん〱近付いてくる、見ると長い鞭を持つた牧童である。牧童は丘の中央へ来て、ホーホーと高く呼んで、鞭をふつた、すると彼方此方に居た牛がゾロ〱集つて来る、やがて牧童は牛を連れて丘を下つて行く、もう金色の雲も色が褪せて、丘の下の家から夕餉の煙が淡く立上る。

雨後の街

静岡　新村基子

雨はすつかり歇んだ、うす墨色の雲が北へ〱と足早く流れる、雲間から、麗しい蒼天が見えて、電車のベル迄が晴れやかに聞える。何處の軒燈にも火が這入つて、何時になく鮮やかに輝く、高足駄に番傘かついだ小倉袴や、素顔の銘の目ざましさも懐まし気に掲げた裾を来たの、

響を立つた熱湯を入れた如雨露な桶に爪立て作ら電車に駈け付くお嬢さんだので漏りは無闇を極めてゐる。

蚕むしろ

山口柳房子

かひこむしろの掃除にかゝろうとすると、後の方でお蚕様が「いくらくるしいたつて、中途でとび出したら承知せんよ」と云ひ〳〵四方を立きつて居られる、蚕ははなと口とを布でしばりながら「はい」とこたえて掃除事に着した、かた〳〵と運す事数分時。フォルマリンの烈気にはしばつた布を通して、用捨なくのんどをおそふので、今にも息か止りさう、おまけにせきが出る、もうくるしくて〳〵今出ようか〳〵と思ひながらもお蚕の言葉をくり返してはしばらくじつとして居たが、堪らなくなつたので、ものをも云はずとび出すと、お蚕様もたまらん」と云ひさま外へとび出した。

新婚の友に

飛騨　堀　木

つきぬ名残りに袖ぬらし候ひしも、すでに〳〵三月の昔と相成り候、其後は如何に過させ給ふや、初々しき赤き手柄の御すがたに、ゑび茶袴のすそみだかき昔にくらべて、いかに美しうおはすらんと御なつかしさも一層に候、君恩ひの友をあはれとおぼしめし、御近影一葉是非恵ませ給ひてよ。

神の使

京都　華　子

岡倉様としいへばツットして顔をそむけ度い位に、都の人は思し召されるでしようが、お美といふはこの村さつての好い娘で、紺頬かぶりの手拭の下からにつこりと艶なるゑくぼを頬に見せる處など、それは〳〵可愛くて美しい、木綿衣の裾高くかゝげ、腰辨に白き脛をつゝみ、丈なす黒髪を櫛巻に結んで、紅の襷甲斐〳〵しく大きな牛のつなとつて朝に立てる姿の静々しさ、都の人に一め見せたう御座ります。

花壇の夕景

金澤　越上美登里

姉さんの花氣帯狀の跡を踏みながら菊花壇の中を歎つてついて行く。黒繻の紋羽二重から、くつきり白い〳〵お衿が抜け出しさう、晴染のお襟を軽く掬いてつと左へ折れると、蝶散らしの帯がお背一杯に暮色に映える、両側の白菊がほんのり赤らんだ端に、襟れが低く見ゆる、姉様の水々しい文金の高島田をかすめて赤蜻蛉がすーと飛んだ。

母　校

伊勢　水谷靜子

久々に母校に一寸寄て見た、本科一年生らしい、プロチードの演奏中、音楽室には、ピヤノの音華やかに、霧笛の夢の曲を、花壇の方へ廻つて見ると、卒業前に、植置きし白菊、あゝなつかしい、あの花下でしたしき友と、空想を語り合つた事もあつた。おゝもう一度たのしかつた、あの時代になりたい。

愛ちやん

下　妻　芳　子

「母さん御飯にして頂戴」と妹の愛ちやんが下駄をとばして駈け込む、「未だ早いのよ」と言つても仲々きかない、仕方なしに、御膳立をして皆で食卓をかこむ、不意に御ばあさんが今日から生徒さんは冬服なんだれと仰有と「ウム御隣の兄ちやんも黒いのを着てゝよ、だけど静ちやんの兄さんは白いの、此度さめたんだわネ」つて、可愛いこと、皆で大笑ひした。

忠告

大森 もみじ

「れーみいさん、家を繼ぐのは嫌や、嫁に行くのも嫌や、……そんな我儘な事云つて居て、両親に濟むと思ふかれ、此度のも僕は此上なしだと思つてわざ〳〵東京から來たんだよ、両親もぜひ僕から勸めてくれとくれ〴〵と御たのみなすつたんで、只嫌ぢやあ解りやあしないよ、れーみいさんよく幼さい時私はほんとの 兄様がいゝから兄様をほんとの兄様と思ふなぞいつて手紙をよこしたぢやあないか、兄様にみいさんの心を聞かせてくれないか、……もう二十……二……、一かへ？ 決して早い方ぢやあないよ、僕の妻なぞも非常に眞様だつて云つとるんだ」、

初島田

四谷 宮本やす子

母様に無理に強いられて結つた高島田が大層重い、緋紗綾の袋を拂つて十三弦の琴を置く、爪をはめて、ちんとすまして見る、何となくくすぐられる様な氣がする懐中鏡を出して姿を寫して見る、初めてにしては上出來だと思つた、いつの間にか兄さんが襖を明けて、立つてお居でなさる、まあお人の悪い、それでも私はなぜかうれしくて仕様がない。

歸途

三河 鈴木まゆみ

夕焼の空が薄らいで行くと、四隣はだん〳〵うす闇に閉ざされる、サア歸らうと刈り取れた薪を貰つて歸途につく、道に散りしいてゐる落葉をカサコソと踏みしめ乍ら、丸木橋まで來ると、水面は銀の波が漂はしてゐる、ま丶きれいと東を仰ぎ見る、十五夜の月は、錦の様な栗林の間から凄い光を投げてゐる、家に着くと内に妹の笑ひ聲も聞える。

秋日和

山形 物河鈴子

空はカラツと晴れて寒い風が秋を吹く、紅葉は赤くなつて見える、萩はもう散つた、シオンには白い蝶が舞つてゐる、小供等はトンボとりに餘念がない、アラ〳〵と云ふうちに栗の下で子守してゐたハゲ頭の童にハラリと栗の實が落ちた。

中秋の一日

長野 淺輪久子

白い雲は紺碧の空高くとぶ、地には優しい秋草がしつとり朝露を含んでいつになく美しく見える、鈴子さんは縁に出て色白の顔にこぼるゝ様な笑を浮べて、鐵森に向つた、冷かな風は桐の葉を淋しげに吹いてゐる。

てんてこ舞

京都 京子

すみ渡つた空から眞晝の光が赤々と前の縁に當つてる、食後二時間を費

暮するが常で、例によつて雑誌部近くで雑誌を見る、何ともいへぬよい心地、よく見ると短文の所に自分の名がある、今朝さがした時には出無つたのに、はて見違ひか知らと改めて見たが、自分の名に違ひない、嬉しさの餘りにてんてこ舞をした。

失策

札幌　伊佐敷清子

秋子さんはどうなさつたのかしら、もう入らしやりさうなものだわ、めつたに時間を違へた事のない方なのにと、いひながら時計をにらんで居ると、御免遊ばせと、静かに格子戸が開いた、秋子さんそんなに綺麗で暮したつて、わかつて居るわ、さつきから散々待たせてあんまりね、と文句言ひ〳〵障子を開けると、秋子さんではなかつたので、大にまごまごした。

秋日和

能登　栗倉一子

日當りのよい縁側へ裁縫箱と座布團とを持ち出すと、「では私の番だが」と、お姑様はお座りになツた、「イーエ何う致たしまして」と云ひながら前掛を胸高にしめて先づフケを落す、大分上手になツた、「お痛くはございませんか」と言へどお答がない、ソツト顔を見るとこれは〳〵眠ッたお顔と自分の顔とが寫つてゐる。

木せいの香

下野　山茶花

姉様と二人で張つた障子をかけ干にして縁に腰を下すと、木せいがプンとはなを打つ、草をむしつてはき清めたので庭木が一層はえて見える、セキレイが石燈籠と楓の枝を飛んでゐる、秋の日は座敷まで照りこんで心地がよい、百日紅の枝へかけわたした竿にほしてある矢絣と中形とが何んだか嬉しさうに見える。

夜の物語

神田　三堀まつ子

秋雨の淋しく哀れなるまゝに、共に物語などせんと思へど、一人も問ひ來れば、夜更くるまで書讀むに、鳴くこほろぎの聲のみしげし、思へば去年の斯る夜なりき、親しき友と興ある物語しつゝ打暮らしゝが、あゝ彼の君はいかになしつるか。

工場の歸途

三重　近藤幸子

今しも工場の汽笛は白煙をはいてポーと響いた、終日汗水流して働いて居る職工の耳には神の御聲とも聞えるだろう、やがて汚ないシャツを着た職工が二三人、其後から垢染んだ單衣をはしをつたまだ若い女工がぞろ〳〵と橋を渡つて行く。

空想

熊本　花陵女

毎日白き臥床の上によこたはつて、無意義に貴重な時を空費してゐるどうかして此の境遇をぬけ出で働からんと思ふけれどそれに耐ふる能力がない、心は矢竹にはやれども不治の病をもつ身にはとても成功はおぼつかない、もう希望も何も消えてうせて、たゞ空想があるばかり、あ

る。

秋雨

豐後　加納登代子

病みて何慰むる事もなき身は、寂寞として軒端に秋の雨のかゝる折こそ又なう侘しけれ、枕元に置きにし瓶の菊の香さむう、床の秋海棠の匂ひ冷めたし、切開せし傷口は恰も針もて刺すらん如く、五分十分と刻をおきて痛み、何とはなしに心安からぬある者に包まれたらんごとき心地のして、晩秋のもの哀れもひとしほ身に沁みてぞおぼゆる。

風一しきり強くしぶきて、横雨は小さく窓にささやきぬ、室内のくらき影は更にひろごれり、そも今は何時やらん、未だ黄昏の頃にもあるまじきに。

明月の夜

豐前　草野たづ子

「三日月の頃より待ちし今宵なるに、憎らしうも雨の降りて、相へだてし我等に一入物思はせんとにや、さるにても／＼互の友情のかくうるほへるものありやと嬉れしくも又悲しく覚へ申候、只今十時」、私は約して居た時刻にかう書き終つた、あゝ何といふ夜だらう、共に眺を眺せんと約してた明月なのに、又雨が降り出した、家の人は皆寝静まつてしまつたが、私はひとりおきて書簡の不平なんどを日記に書きつく、時計のセコンドを刻む音と自分のペンの走る音がよく耳に響く、あゝかうして今としの明月の夜を過した。

小　寒

日本橋　木村歌

暖き日鮮かな庭に一片二片木の葉が散つて居る、新らしく張られた障子に飛ぶ様な蝿がブンといつて時々ポツ／＼と音をさせる、柱時計が十一時を打つた、豆腐屋のラッパの音が高く聞える、縫ひかけの袷に附いた糸屑を左手にとつてコテの挿さつた火鉢に燻べると、糸の香がプンとした。

里子

青山　菅野廣子

夕暮、田舎風のお内儀さんが麹町區の停留場の脇に佇ほれて居ると、天のような女の児が懐しく駈け寄つて、「お母さん」と言つて泣き出した。「あれッ」と、お内儀さんは驚きつゝ、「お、こまつたもんだナア、お奥さまにはやすみましねえだが、……お久ッ子、イヤ、お、お嬢さまや、あんだツてへやこんな所まで追ッかけて御座ッたよ、あのお屋敷はお前さまが生れましつた家だがね、な、泣かねえで、へーか帰つて下つせえの」、と云も切れ／＼に、太き溜息ついてしつかと其子を抱き締めた、向ひの横丁から二人の女が走つて来て、お嬢さま、母様が御菓子を下さるつて……、サアお帰り遊ばせ、れ、お嬢様……。

移り變り

北海道　石山富士子

水々しかつた高島田の私も、今はすでに人目恥かしき身となつた、またこん春にはもう母となるのであらうか、ほんに月日のたつのは早いものあの日あたりのいゝお庭へ花むしろを敷いて　姉さんと人形いぢつて遊んだのも昨日のやうにおもはれるに。

笑　話

○小供の無邪氣　　相模　愛子

花ちやんは時々おいたをして御父さんに御目玉を頂戴するものですから、或時御祖母さんと御母さんにむかひ、「御父さんがおむこさんに入らつしやらなければあたいと御祖母さんと御母さんと三人で面白く暮らせるのだに」、（秀逸）

○嫌はれた時の用意　　信州　富鶴紅

「兄様、いやよ、やつぱりシスメーだと云つて居いて下さればいゝのに、僕はあれのヘスだよなんて」、「なぜだ」、「なぜつて兄様にきらはれた時のにげばに困るぢやありませんか」、（秀逸）

○奥様の妙な仰せ　　根室　夕月

太つた下女が奥様の御晝寢していらつしやる側をドン／＼通ると、奥様「鍋や御前の足音ははんとにつよいね、ねてゐると大變ひゞくよ、うそと思ふならねてゝきいて御覧」、（秀逸）

○名醫の治療法　　京都　神谷都子

醫師「御案じなさる事はありません、御風氣ですから、皮膚の壯健になる様に明日から冷水摩擦をなさい」、患者「先生私はもう拾年程前から毎日かゝさずやつて居りますが」、醫師「さうですか、それぢや明日から御よしなさい」、

○意外の大心配　　本郷　まゆり子

「御母様東洋銀行ネ、眞ちやんの、學校の前の……愈々つぶれるんですつて……、大變な噂ですわ」、母「何でもそんな噂だよ」、娘「マア……、さて私もう明日から學校へ行かないわ、あの大きな銀行でもつぶれて、私たち其の下にでもなると大變だから」、

○如才なき夫　　岐阜　田中白葉

若夫婦伴れで市中を散歩中、細君寶石屋の店先に止り、「御覧なさい、この指輪の美しいこと」、「さうだね」「妾に似合ひさうだわ」「さうだね」「何程でしよう？」、「知らないね」「欲しいわ」「さうかな」、「買つて下さい」、「嫌やだね」、

○鳥の進歩　　富山　峰崎鐵子

ある耳の遠い祖母さん、孫に向つて、「世の中が文明になると鳥までが文明になるよ」、孫は不思議に思ひまして「なぜなの」、祖母「だつておまへ私等若い時は烏はかあーかあーと鳴いたのが、今は、だまつて居るぢやないか」、

○滑稽な中學生　　盛岡　村瀬つれ子

一人の中學生、教科書を見ながらいそぎ足で來たが、やがて電信柱に頭をゴンとうつた、先生柱と知らないでか、調子はずれの高聲で、「ヤー失敬ー」

○子供の外交術　　兵庫　河中あさ子

子「お母さん話しを聞くのがお好き？」、母「アヽ眞實の御話しなら」、子「眞實は〳〵だが餘り短い話してすから」、母「短くても好いから早くお話しな」、子「ぢやア話しますが、まづ或る所に茶碗がありました」、母「それから……」、子「それを今日わたしがこわしたんですが、もうこれからそんないたづらは致しません」、（秀逸）

○困つた番人　　大阪　野口たつ子

母「御まへねあの魚を猫が喰ふから見ておいでよ」といつて子供に魚の番をさせて用をたしに出た、歸つて來ると、魚は骨ばかり殘つてゐる、母「魚はどうしたえ」、子「猫が食ふのを見てゐたら皆たべてしまひました」

○田舍者の同情　　京都　木村絹子

或る田舍者の老夫婦が活動寫眞の瀑布を見て、嫗「爺さん前に見て居る人は、しばぶかかるだよ、氣の毒な事だんべい」

讀者倶樂部

▲神に救はれつゝある哀れなる姉妹の話を讀んで私は泣きました、私にもあんなお姉様があつたらいゝかう申しては失禮ですが、今頃のお若い方はたゞ衣服と虚榮にばかりあくせくしていらしやるやうに見えますのに、只の一人でもあんな氣高い方があつたかと思ひますと、嬉しくてうれしくつてたまりません「神様は我慢のしきれぬ程の運命は作り給はぬものですよ、忍べぬ運命はないものです、私共の運命ばかり斯る風や雪の多いのではありません、之が普通の運命でせう、神様が私共に忍耐力を與へ給はんために困難をさせて下さるのでせう、」あゝ何といふ美しい言葉でせう、私は早速書抜いて硯箱のふたに張りつけて反省の友としてゐます、これをよむと如何なる悪覺も何所かへ消えていつてしまうような心地がします、(岡山下野靜江)

▲最後の深山百合子様、紅茶の飲用法を申し上げます、先づ御湯を煮立ておき、別に土瓶に紅茶を小匙に二三杯入れ、それに今の湯を注ぎ(紅茶の要る量より少々多目に、)手早く振りまはして湯を皆捨て、更に湯玉のあがれる御湯を一杯入れ、暫時そのまゝに致しおけば濃き色に成ますから、各々御茶碗につぎわけ、其上に御湯を加へて風味を加減し(色あざやかになりニガミなき位を度とす、)好みのまゝに牛乳砂糖を加へてあつき内に出します、一、最初一度湯にてながす事一、湯玉のあがれる御湯を用ふる事右の二ケ條に注意して、色をにごりなくあざやかに出さなければほんとによい味がありません、コヽアの方はあまり經驗が御座いませんから失禮致します、(鎌倉の里にて樂しみ女)

▲本誌十月號靜岡芳子様が斜視眼治療につきての御投書に接し、同情禁ずる能はず筆とり申し候、同患なりし妾は、去る四十年一月(當時十八歳、)本縣立千葉病院にて醫學博士荻生錄造氏の手術に依り、奇妙にも全癒するを得て、只今にては毫も差支なく立派なる正視と相成り候條御住所お知らせ下さらば委細必要の事々お知らせ申すべく候、(千葉の百合子)

▲最後の百合子さん、紅茶コヽアの飲用法を御知らせ申します、紅茶大匙一杯に沸湯一合入れ、二十分間程鍋中にて煮め、能く溶して其お湯に五勺の牛乳を入れ、又一寸煮め、砂糖を適宜に加へて用ゐます、又コヽアは粉小匙一杯を少しの水にてよくゝ解き、五勺の沸湯を注ぎ入れ、十分間程鍋中にて煮め、後貝々の牛乳を入れて又一寸煮め、砂糖をやはり適宜に入れます、之には御一名の分量で御座います、(長府伊藤みつじ)

▲今月(十月)の女學世界の中で最も痛切に私の近頃嬉しみも悦びも真に感じない心を稍要の如く刺戟した名文がありました、それは「神に救はれつゝある哀れなる姉妹のはなし」であります、是を讀みました時、私は本を抱いたまゝ聲を放つて泣きくづれました、嗚々世の中には斯く美はしき斯くも優しき愛の爲めに苦しみを受けつゝある方がお出で遊ばすかと思へば、何とも申して宜いか……今の世には實に珍らしい事と存じました(大久保松岡花明子)

▲前號に毛髪に付いて投書いたしました處、深山御賛同下さいまして、私も滿足に存じます、付きましては愛讀諸姉様の内、何病にかゝはらず病氣で御困りの御方様は、東京牛込區市ヶ谷谷町五十一番地に設置されて居ります化學的食養會へ御入會あそばせ、その會は讀んで字の如く平生の食物を化學的に配合して病氣を治療いたされるので、陸軍藥劑官從四位勳五等石塚左玄先生を顧問に頂いて、先生の指導をうけて正食いたすのです、(京都神谷郁子)

▲石川百合子様、私も北米のモンテシノ市に入らつしやる米國人の女學生方と御交際願ひ度っ存じますが、直接御尋ね申上度き事が御座いま

すから、何卒御暇御知らせ下さいまし、倚今後ともよろしく御交際願ひ申上ます、私は大阪府北河内郡大和田村大字北島米田菊江です。

▲私は高等女學校を卒業致したもので、東京音樂學校の聲樂に入學致し度い者へですが、女學校卒業者も入學試驗があるのでせうか、若しあるとすればその準備として如何なる學課をしらべればよいでせうか、御存じの方は何とぞ此の誌上で御敎へ下さいませ、(鹿島角田直子)

▲女學世界第九卷第拾壹號に出て居ります、西尾すゞ子樣と仰る方の御住所を御存知の方は御しらせを願ひます、私は二回も通信いたし、返事が欲しくて困つてますので、どうぞ御しらせ下さいまし(月子)

▲記者樣、誠に〳〵御手數では御座いますが、女の事をぜひ〳〵女學世界の讀者倶樂部でお敎へ下さいませ、

投書致します和歌は一首限りでございますか、又葉書にかぎらず葉書大の洋紙でもよろしう御座いませうか、それを二三枚同封書に入れてもよろしうございますか、(成田てい子)

▲記者樣、日記等の投書にはすべて振り假名を附けますか、用紙は原稿紙ですか、何行何字詰ですか、本誌の讀者倶樂部でお敎下さい、(角田千代子)

▲以上三通の樣な問題を讀者倶樂部へ持ち出されては、他の人が迷惑しますから今後此の種の事柄は總て往復端書を以つて記者に御問合せありたし、但今度丈は答へて置きます、(一)西尾すゞ子さんは麴町區飯田町六丁目十六番地、(二)和歌は數首にてもよろし、其他は孰れも差支なし、(三)可成に振り假名を附けてあれば最も妙なり、十行二十字詰の原稿用紙に楷書で認めあれば取扱に好都合なれど、他の紙を用ゐても差支なし(記者)

▲私誠に御恥かしいのですが、小學校を出ましてから何所へも參らず、活花・茶の湯・琴、裁縫を稽古いたし、又家事を手傳ふて五六年も過し、今日も同じ事をして居りますが、實に無學育なのが御恥かしく、又心ぐるしくてなりません故何とかして知識を得たいと雜誌など〻色々見ますが其内でも女學世界が大々好きで七八年此方片時も手ばなした事がございません、皆樣方何卒〳〵無學育者よと思し召して有益な事を誌上にて御知らせ下さいませ、(橫濱芙蓉花)

▲牛蒡は皆樣も御存知の通り軟かでありませんから、老人どもにはむきませんが、之をゆでる時にお米のヌカを少し入れますと、それは〳〵軟かくなり、又眞白になつてみばえもします、(川越さゆり)

▲私は父樣より汝も女子とはいへ最早十六歳を越えたの故、獨立して金をもうけなせよと日はれて、サナダクミを一ヶ月程して見ましたが、不成功なので、蠶を養ひましたら皆死にました、私は何故何になしても成功せぬのでせう、近頃は靈の先生があるさうですが、ほんとですか、御はづかしい事ながら、私は學校へ行つた事のない山中に住んで居る山女で、たゞ女學世界に依りて學んで居る者ですが、何かよい女子獨立の方法が御座いますまいか、(岡山石田みつの)

▲大塚明壽子樣、田代糸子樣、竹内敏子樣の御三方樣へ申上ます、貴姉樣の御作歌を「わかば」誌上にていつも樂しく拜見いたして居ります、私も下手の橫好とやらおこがましくも若菜歌會の末席を汚して居りまする者、何卒會友のよしみにて御交際をねがひます、(京都師谷都子)

▲私は各地方の方言を集めて居ます、御同志の方は下名まで御知らせ下さい、一寸下の樣なものをケナルイ(羨ゝしい)、トロクサイ(馬鹿らしい)、スカタラン、(うるさい)、チョーカ(下さい)、オキャーセ(打捨おけの意)、(名古屋井出千草)

▲大分の加納とよ子樣、あなたはもしや仙臺の木町通小學校においでになつた事はありませんか、お名を拜見しておなつかしくぞんじまして御伺ひ申上ます(仙臺米倉たよ子)

新刊紹介

△子寶　三越呉服店發行

美麗なる子供成育の參考書類

この書類は今回三越呉服店が兒童博覽會の紀念として二百部限り出版したものである、子供の誕生から從學期即ち滿六歳に至るまでの間の重なる出來事　誕生、命名、七夜、宮參り、誕生、玩具、初節句、喰初め、運初め、遊戲、種痘、其外子供を紀念すべき事項數十件を書き留めて置く爲めの書類で、歐米諸國では善く行はれてゐるが日本で出版したものはこれが初めてであるらしい、何にしても非常なハイカラ的のもので又美術を蒐めた美術的書類であるかね、意匠の奇抜、新書の美麗、裝釘の精巧、流石は流行界の先驅者たる三越の創案たるに背かぬ一大參考書類である。著者は巖谷小波氏、畫家杉浦非水氏著者畫家共に滿身の精力を籠めて意匠されただけに頗る振つたものである定價五圓。

△新案福引　中村青江著

世が進むと共に人間の諸種趣味も段々と繁らしくなるもので新年福引の趣向も最早古いものでは滿足が出來なくなつたから、こゝには新案の福引が出來たのである、この福引は景品に供する品物即ち衣類、小間物、菓子、食料品、乾物、玩具等の日用品から考へてこれに題をつけたものでその數凡そ七八百、頗る奇抜なそしてハイカラな解き方がしてあるから一見抱腹絶倒誠に滑稽の妙をつくしたものである、卷頭には地口百番の趣向あり、又室内遊戲の方法數十番を添へてあるからこの本一册で隨分とおもしろい遊びが出來るのである博文館發行價十八錢

△心理學道德講話　同文館發行

元良博士を始め教育界の名士が心理學上に關する諸説を集めたるもの、倉橋文學士の「子供の嘘言」高島平三郎氏の「嫁と姑」など家庭教育上の參考となるべき所説少からず定價卅五錢。

△名曲新集　小松玉巖編

本書は西歐諸國の音樂大家の作品にし汎く世人に愛唱せらるゝものゝ内、我國樂界の程度に適當なるものを集輯したるものゝ由にて、作曲者は古今に渉り十五家の多きに及び、其樂曲を揭ぐると共に、別に原歌邦譯歌、及び其の略傳等を附したり、專門家の參考とし、宜しく又初學者の爲には好個の指針たるべく、此の種のものにては近來稀に見る良著ならん、定價金八拾錢、京橋區銀座四丁目松本樂器合資會社發行

△古流米心菴生花大會

日本橋區本銀町米心菴の生花大會は、去月十日淺草傳法院に於て、門弟米松菴　月（伊藤登美子）、松心菴千鳳（新吾綠松）兩氏の立机披露を兼ねて開きたり、折柄秋雨そぼ降りて參觀には甚だ雜踏を極めたるも、集りし同好の千餘名に達し頗る盛會なりき。

△分娩用輕便蒸氣消毒器

麻布區東區二丁目二番地田中官子女史は、東京產科婦人科病院出身の熟練なる助產婦なるが、此の如き器械を發明して望みの者に頒つ由、產褥中之に用ゆる器具、布片、腹帶、下帶等を其中に入れ火鉢にかけて容易く消毒する器械にして、非常に便利なるものなり、實費一圓五十錢。

△梅香女塾の塾生募集

木村貞子女史主宰なる小石川區原町百十一番地同塾にては昨年來講師を聘して英語の教授を開始せしところ、結果頗る良好なりし由にて、今年夏期休暇後新に桑原藤藏氏（前の外國語學校出身、英、露、清等の語に堪能なる人）を聘して毎週三回午後より教授を爲し居り、志望者は隨時入學を許すといふ、其他家事、裁縫、料理、國語、漢文等をも修むる事を得、寄宿生は全く家族的に監督せられ、希望に依りては他の學校へ通學する事を得、寄宿生の費用は第一部が十七圓、第二部が十三圓なり。

讀者文藝 懸賞募集（〆切十一月十五日）

▲こゝろの日記

▲様々の社會觀察

▲才媛筆蹟（書翰文體の一節）

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話▲短文▲和歌

▲讀者倶樂部

投稿規則◎笑話、和歌、短文、讀者倶樂部は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は書簡文の一節を示す事◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、△和歌、短文、笑話、——甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢、秀逸參拾錢

△社會觀察△こゝろの日記△風俗記事△食卓日記の四種は孰れも特賞拾圓甲賞五圓乙賞參圓

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅 一册 二錢

廣告料

	廿四字詰一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓半	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十二年十月二十六日印刷納本　第九卷第拾四號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百十三番・三千百十八番・二千六百二十番・二千六百二十三番・二千二百九十番

（後付の一）

懷中日記

博文館發行

（懷中日記定價）

新形（舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入細長形携帶至便）
▲正價金貳拾錢　郵稅貳錢

上製（舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入紙數三百〇六頁）
▲正價金拾八錢　郵稅貳錢

並製（舶來洋紙模クロース表紙 金文字入美本紙數三百六頁）
▲正價金拾貳錢　郵稅貳錢

趣向體裁

懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挿みを設く

附錄（紙數各三百〇六頁）

◎雜錄◎統計表◎和子早見表◎諸稅規則摘要◎郵便諸規則◎徵兵規則大要◎年齡早見表

附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、某醫學博士の衛生心得及び内外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり。

（當用日記）……日々欄には過去同月日の重要歴史、七曜、干支及び詩歌俳句等を上欄に錄し天氣、寒暖、發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す倚各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、毎日記入欄には細部を附し秩序ある記錄たらしむ

（懷中日記）　毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覧案内等を掲げ日々の上下欄に内外名家の格言を掲げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を附記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸規則及最新重要の統計表等百頁を附す

▲**取次希望**の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候▲

本町三丁目　**博文館**

振替貯金口座　東京二百四十番

文（後付の三）

新案紳士淑女用

明治四十三年
ポケット日記
▽甲
▽乙……二種



甲種……（厚形）
洋装 總革製三方金緣 舶來紙薄手美本 紙數四百四十頁（日々記入欄一日一頁宛）
正價五拾五錢　郵税四錢

乙種……（薄形）
洋装 總革製三方金緣 舶來紙薄手美本 紙數二百二十頁（日々記入欄一日半頁宛）
正價四拾五錢　郵税四錢

特色

●本日記の特長は何れも特製總革を用ゆ其手當りの滑かにして三方金緣を附したる、共に見ざる逸品たり。又製本の堅牢なる、日常携帶に至便なる紳士、淑女諸氏用として優美高尚なる日記なり。

●本日記は何れも薄手の舶來用紙を用ゐ、ポケット用として携帶至便なり、尚前記二種を調製し發賣せり。

●附錄＝金錢收支表、郵便規則、税法、年齢表、補遺記事欄等の如きは日常座右缺くべからざるものなり。

（女、後付の四）

發兌元　東京日本橋

販賣用電話　本局二六二〇番

女（後付の五）

恰も各紳士の所望せられし懷中日記

考案者三島醫學博士曰く『此日記は其骨骼を歐米流行の型で作り之に最も發達した日本式の筋肉を著けたのだから小形だけれど能力は十分だヨ』と

明治四十三年

紳士用

懷中日記

總革製金字入

一冊貳拾五錢　郵税貳錢

大さ……丈三寸五分幅二寸。かど丸。柔軟。携帶至便。

外裝……最上質の總色革製。三方金緣。金字入。高尚優美。

紙質……英國特製。精良なるレターペーパー。

內容　一ヶ年間毎日の記入欄に加ふるに失念し易き事項。番號手控。諸期限覺。一月より十二月迄毎月一頁づゝに區劃せる七曜。內外國の大祭祝日。晴雨寒暖。豫定欄。出納略記。覺書、宿所の各記入欄及東京主要官廳所在町名等百八十頁に涉る。印刷罫線頗る鮮麗

製造
發賣元

東京神田區錦町一丁目
(博) 文運堂
振替口座東京一九七〇〇番

大阪市東區瓦町二丁目
(博) 文運堂支店
振替口座大阪八三六五番

東京市日本橋區本町
(博) 博文館
振替口座東京二四〇番

東京市日本橋區駿河町
(越) 三越呉服店
振替口座東京三〇〇番

女(後付の七)

最新發明 肺病肋膜 新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平醫學博士（醫事週報二一七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥應用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を増進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病途に末期重症の **兩肺結核** に陷り咳嗽たん盜汗動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某卅一歲男 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸痛み食不振身體倦怠盜汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歷を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
籠谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず本劑は元藥一ポンド六十圓の高價藥なるに關らず一週貳圓二週參圓九十錢參週五圓七拾錢四週七圓貳拾錢に經濟の許す限りの藥價を以て分藥する者にて利益專一の賣藥に非ず又効力多大にして從來の醫藥賣藥の如き長き服藥無しにて全治す殊に **喀血** と其豫防に可驚効あり又他藥と混服害なき故醫藥の傍ら服用妙ならん本藥入用患者は東京神田壁大工町十三番地療養院製藥所 **村尾明治堂**（振替口座東京壹四參壹九番）へ右料金添へ申込あらば至急送藥す吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むると共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す

●又服藥希望なき患者も遠慮なく送料郵券二錢添申込あらば新治療法の書を無代貰ひ受け是非一讀あれ益する處多からん

衞生改良酢發賣

貳合入壜詰 一本金二十錢 送料十二錢



本品二合は普通の二升六合に當る

在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを菜肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして殊に **衞生酢** と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

東京日本橋區本町三丁目

藥種貿易商 合資會社 **博愛堂**

電話本局長二八六番
振替口座東京八八一三番

女（後付の八）

女學世界
第九卷第拾四號
（明治四十二年十一月一日發行 毎月一回一日發行）
（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

黄金は積んで山をなし

身には錦を纏ふとも、病持つ身の苦しさは、花見遊山や芝居見や人の喜び樂も樂みとては更になく況て兒女なき病婦の悲しさ限りなからん

●中將湯は是れ等不幸なる病婦を救濟して子寶多き圓滿の家庭を作るべく發賣す

左の容體にて苦しむ婦人は

早く中將湯を服して無病の幸福を得給へ

定價	
四日分	卅五錢
一週間分	六十錢
二週間分	一圓十錢
三週間分	一圓六十錢
五週間分	二圓五十錢



中將湯

●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く、たゞれ又下腹腰足の引つり痛人
●婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠ざる人
●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人
●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫
●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人
●白血赤血滯下多く顏色蒼白き人●冷症にて難産流産の癖ある人
●産前何となく常ならざる人、嘔吐、産後古血の滯り或は日立惡く
●此外子宮血の道月經不順に起因する諸症にてぶら〳〵と惡き人

（東京市日本橋區本町三丁目博文館發行）
No.14

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版⑦
明治42年10月(第9巻第13号)、11月(第9巻第14号)

2009年12月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3736-7　C3321